

---

# 金の王 銀の姫

tara

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金の王 銀の姫

### 【Nコード】

N8027N

### 【作者名】

t a r a

### 【あらすじ】

王都で噂の美少年冒険者として名を上げている魔術師エイジャは、実は忌まわしい過去からの因縁のために自らの性別を偽った女の子。王宮からの特別依頼を受けたエイジャのパートナーとなった男は、王族と同じ色の深紅の瞳を持つ美貌の剣士ルチアだった。いつしかルチアはエイジャに対して特別な想いを抱き始めるが？。冒険譚の形を借りたラブストーリー。あるいは男装美少女に振り回され悶える金髪美形の苦勞話。

(B LでもG Lでもありませんが、話の流れ上そういう雰囲気にな

る事もあります（

10月9日「」50（隠し事のできない相手」更新しました

## (1) 噂の冒険者

泣き叫ぶ声。

逃げ惑う人々。

村のあちこちに付けられた火は激しさを増し、もう逃げる場所もない。

でも、恐ろしいものを見ないように、頭の後ろに大きな手を添えて、強く抱きしめてくれている腕があるから、大丈夫。怖くない。

……だが突然、その束縛は解かれた。

驚いて、優しい瞳を見上げる。

「……父さん？」

「行け、お前だけでも……生き残らねばならん。死ぬな」

「やだよ！無理だよ……！父さんも、いっしょに行こう！」

「私は行けない。足が動かないんだ……」

お前なら必ず逃げ延びる事ができる。大丈夫だ」

父さんのすぐ後ろにまで迫っている炎が見える。その勢いに恐怖し、視線を下に下げれば、崩れ落ちた床柱に巻き込まれた父さんの右足が目映る。

父さんは今までしっかりと包み守ってくれていた腕で、下半身に力が入らずにいる自分を立たせ、背中をどんっ……と強く、押した。その衝撃にもんどりうって転び、泣きべそをかきながら振り返った目の前に、炎に焼かれて支えを失った梁が、轟音を響かせて落ちてきた。

炎の向こうに目を凝らしても、もう父さんの姿は見えなかった。

「父さん！父さん！やだよ！一人にしないで……父さん！」

何もできず、泣き叫ぶだけ。その声も、燃え盛る炎にかき消される。燃え落ちた屋根の隙間に見える夜空の向こうから、幾筋もの青白い光が自分に向かって飛んでくるのを、ただ呆然と眺めていた。

洞窟探索の旅から帰って、昨日はひさしぶりにベッドで眠った。

無事に依頼を済ませた事で気が抜けたのか、ひさしぶりに昔の夢を見てうなされたが、なんとか、体の疲れはとれたようだ。

併設された食堂の、いつもの席……カウンターの一番右端に腰を下ろす。何も注文しなくても、よく知った店主がパンとチーズ、野菜を煮込んだスープを、カウンターの上に並べる。

「エイジャ、貼り出し見たか？ 招集がかかっている。組合に顔出せよ」  
パンにかぶりついた所に声をかけられ、ぐっと喉を詰まらせそうになった。

慌てて水でパンを流し込んで、知らせを持ってきた顔なじみの男に向き直る。

「昨日の今日だぞ……。もう少し休みたかったのになあ……」

「いい事じゃないか。この王都中にどれだけの冒険者がいると思ってる？ 仕事があるだけ有難いと思え」

カウンターの向こうから、すっかり口癖になったセリフを投げかけてくる店主をちらと一瞥する。

「分かっているよ」

知らせてくれたお礼がわりの銅貨を一枚男に寄越す。冒険者達の間  
の礼儀だ。

男はそのまま横の席に腰を落とした。その銅貨で一杯飲むつもりなんだろう。まだ日が高いというのに。

「そうだが、エイジャ。まったくうらやましいよなあ、引く手あまたの売れっ子冒険者。」

俺なんてもう1ヶ月仕事待ちだったのに。秘訣を教えてくださいよ。組

合の女事務員でもたらしこんでんのかよ？色男」

このまま戯れ言に付き合ってやる気もない。食事をかきこみ、立ち上がる。

「ちゃんと仕事をやってるだけだ。オヤジ、勘定」

「ほい、15デール」

「ごちそうさん」

銅貨を3枚カウンターに置き、店を出た。

砂漠にほど近いここ王都に暮らす人々には、色よく日焼けした肌が多い。その中で、エイジャの真っ白な肌はそれだけで珍しいものだ。細身の体にすらりと伸びた手足。18の男にしては小柄な方と言えるが、姿勢良く歩く姿は街の雑踏の中でも目を引く。

肩辺りまでを緩く編み込み、背中まで伸ばした艶やかな髪は漆黒。

そして、碧玉の如く深い青緑をたたえた大きな瞳に影を落とす、長い睫毛。

精巧に作られたガラス細工のような顔立ちの中で、桜色に色づいた唇だけが少しぼつてりとあどけなさを残している。

つば広の帽子でそれらを隠してはいても、最近活躍目覚ましい「美少年冒険者」はこの王都城下町でちよつとした噂になっている。

エイジャとしてはただ与えられた仕事を律儀にこなしてきただけなのだが、どうもおもしろおかしく尾ひれを付けて語っているやつがいるらしい。

自分を主人公にした絵物語のようなものまで出回っているという噂は果たして本当なのだろうか、確認するのも気が滅入る。

冒険者組合の建物の前にある掲示板で、貼り出しを確認する。

『エイジャⅡキュラビオ、新規案件あり、早急に組合へ』

そのまま扉を開き、馴染みの受付嬢に声を掛ける。

「呼び出しがあったって聞いたんだけど」

「ああエイジャ、ごめんなさいね。帰ってきたばかりでまた仕事

だなんて」

「いいよ、君のせいじゃないだろ？」

笑顔を見せたエイジャに、受付嬢はさつと頬を染めると、名簿をめくり、声を潜めて説明する。

「また王宮からの案件なの。いつも通り、詳細は王宮に来てから直々に話があるって」

「ああ……分かった」

大陸アイサルを三分する一つ、アストニエル王国。

その王宮を中心に配し、多くの貴族が居を構えるここ王都は、言うまでもなくこの国で一番の都市であり、同時に仕事を求める冒険者達が数多く集まる場所でもある。

特定の貴族に仕える者もいるが、多くはエイジャのようにどこにも属さないフリーの冒険者であり、冒険者組合へ登録して依頼を受け、生計を立てていた。

王宮にもお抱えの優れた冒険者達がいるが、身分制限や身辺調査が厳しく、求められる能力が相当に高いせいで、その数は多くないらしい。

仕事が増れ彼等だけでこなしきれなくなると、それほど重要でないと判断された案件は、こうして冒険者組合に回ってくる。

それでも他の案件に比べれば秘密厳守、普通は依頼内容や報酬を先に組合に明らかにした上で仕事が入ってくるものだが、王宮案件についてはその全てが「詳しくは王宮で」となっている。

そうした「特別案件」を組合から振られるのは、所属する冒険者達の中でもわずか一握りだ。

エイジャはこれまで上げてきた成果や誠実な人柄から組合での信頼も厚い為、王宮案件を受ける事もこれで何度目かになる。

王宮の方も案件毎に新しい人間がやってくるよりも、何度か無事に仕事をこなしてきて信頼の置ける人物を使いたがる。

今回も王宮側からエイジャを指名してきたのだと受付嬢は語った。

「かなり急ぎらしいの。今、エイジャを探しに人をやろうとしていた所だったのよ。できればすぐに王宮へ上がってほしいんだけど……、いつものように、裏口からね」

「分かった。すぐに行くよ」

チップを渡そうと懐を探り、思い直したように腰に付けた鞆に手を入れる。

「お礼。こういうの方がいいよね」

それは先の仕事で訪れた魔物の洞窟で見つけた、乳白色に輝く小さな石。女性の間でアクセサリーに加工して身につけるのが流行っている。

「まあ、エイジャ……本当に？もらってもいいの？こんな……」

「俺が持つても仕方がないからね。良ければ」

「嬉しい！大事にするわ。でも、エイジャにもらったなんて言ったら、街の女の子達に殺されそうよ」

「あはは、オーバーだな。じゃ、行ってくるよ」

ひらひらと手を振って出ていくエイジャに微笑みを返しながら、あながちオーバーじゃないんだけどなー、と受付嬢はつぶやいて、大切そうに石を引き出しに仕舞った。



## (2) ロープの男

王宮裏門を守る番兵に組合からの紹介状を見せ、正門に比べればこじんまりとした、だが一般の貴族の家の正門よりも余程大きな扉を開いてもらい、中に控えていた兵に案内されて廊下を進む。

いつも依頼を受ける控え室の前を通り過ぎ、その先の階段を上がる。通された部屋は身分の高い人物の執務室といった趣きで、エイジャは「今回の案件は、いつもとはちよつと勝手が違うらしい」と気づいた。

程なくして、依頼主であるう男性がローブ姿の人物を伴って現れ、その場に膝をついて礼を執る。

「エイジャ キュラビオだな。良い、顔を上げよ」

「はい」

許されて顔を上げる。

細身だが威厳のある、壮年の男性。身なりからして王宮の宰相あたりではないかと察しを付ける。

隣に佇むローブ姿の人物は、顔をすっぽりとフードで隠しており面立ちを知る事はできないが、小柄とはいえない宰相よりも頭一つ分以上は背が高く、おそらくこちら男性だろう。

「急いで呼び立ててすまぬな。いつも王宮からの依頼を如才なくこなしているとか。その腕を見込んで頼みたい仕事がある」

「過分なご評価、恐れ入ります。俺……いや、私でお役に立てるものであれば、何なりと」

「ふむ、今回は少し長旅になる。彼にシアル公国大公家へ書簡を届けてもらう、その任に付き従ってほしい。名はルチアという」  
そういつてローブ姿の男、ルチアを紹介した。

「シアル……公国……大公家!？」

告げられた目的地に驚いて思わずそのままを返してしまい、慌てて謝罪を口にする。

「驚くのも無理からぬ事。このような案件、本来なら王宮抱えの冒険者に任せる物……色々と事情があつてな。お前は口が固く、王宮への忠義も厚いと聞いている。特例ではあるが、この依頼引き受けてくれるか」

「……精一杯勤めさせて頂きます」  
そう絞り出すのがやっとだった。

今すぐに出発してほしいと依頼人に告げられ、エイジヤはそのままルチアと連れ立って王宮裏門を出た。

「馬はどこに」

街への道を足早に歩きながら、初めてルチアが口を開く。  
低いが艶のある、高貴ささえ感じさせる若い男の声。

やはりただの王宮抱えの冒険者というような感じではないな、とエイジヤは考える。

「ああ……街の外れの馬小屋に世話を頼んで……マス。ええと、ルチア様は、馬は？」

「俺に対しては敬語はいらぬ。呼び名もルチアでいい。俺の馬は街門の外に準備させている」

「えっ、あ、そうなんですか？……っと。じゃあ、ルチア。えーとお聞きだと思っけど、俺はエイジヤ。魔術師。補助が得意。武術は全然ダメ。よろしく」

共に旅する冒険者として最低限の自己紹介をし、にこりと微笑んで見せる。

魔獣や野盗との戦いに巻き込まれる事もある為、まずはお互いの戦い方がある程度明かしておく事は無事に旅をすすめるのに必要不可欠だ。

「俺は魔術は使えない。剣士だ」

ルチアの返答に、エイジヤは驚いて目を瞬かせる。

「へえ、そうなんだ。その姿、魔術師なのかと思っただ」

ルチアが深々と着込んでいるローブは、普通は魔術師が着るものだ。「訳あって、この街の中では顔を出せない。まずは馬を飛ばし、隣のユズールで宿を取ってから詳しい話を聞かせる」

淡々と簡潔に告げられる言葉。いかにも訳あり案件……本当にこれまでのものとは違う。気を引き締めて掛からないと……とエイジヤは唇を引き結んだ。

第一、シアル公国大公家への書簡など、普通はどんな案件よりも最優先されて、王宮選りすぐりの冒険者をその任に当てるはずだ。

それが、この街の中では顔を出す事もできないと語る謎の男と、一介のフリーの冒険者に託されるなど……考えられない事だ。

アストニエル王国の東に位置するシアル公国とは、もう千年近く前大陸を三分する大戦を経て不可侵の条約を結び、うまく共存してきた。長い時の中で、時には関係に緊張が走る事もあったが、三すくみの状態があるからこそ戦争に至る事はなく、何とか平和が続いてきた。

だが、シアル公国現大公の代になってから何かときな臭い噂を聞く野心に溢れ、領土拡大に息巻く大公が、不可侵条約を破棄してアストニエル王国に攻め込んでくるのではという憶測が、これまで何度も持ち上がったっては消えてきた。

(戦争が……始まるのか？アストニエル王はどうお考えなのか……) 暗い考えに支配されそうになるのを、ぶん、と頭を振って切り替える。

(今は、とにかく依頼を無事に完遂する事を考えよう……書簡の中心は、俺には伺い知る事はできないんだし)

エイジヤの愛馬を馬小屋から連れ出し、ルチアも王都街門の外で待機していた兵から馬を受け取って、ひたすら隣町ユズールへと馬を走らせる。

半刻ほど走った頃、ずっと黙っていたルチアがちらと後ろを見やっ  
た。

「……付けられていたか……」

「えっ？」

「エイジャ、追っ手だ。俺が切る。守りを頼む。お前も顔を隠せ」  
言い終わらない内に馬から飛び降りたルチアに驚き、慌ててエイジ  
ヤも馬を止める。言われた通り、襟元に巻いていたスカーフを口元  
の上まで引き上げ、目だけを残して顔を隠す。

敵の姿は見えない。が、ローブの下から剣を抜いたルチアには確信  
があるようだ。エイジャも詠唱を開始した。

ルチアと自分に守りを施し、神経を研ぎすませて敵の気配を探る。

確かに近づいてくる。数は……？

敵は突然目の前に姿を見せ、切り込んできた。ルチアが気づいてい  
なければ不意をつかれて命を落としていたかもしれない。

エイジャが張った守りの術にはじかれ、敵が一度距離を取る。人数  
は5人。顔は覆面で覆われて見えない。現れ方からいって、姿を隠  
す術を操る魔術師がいるはずだ。

大剣を手にしたりーダーらしき男がルチアに切り掛かる。守りの術  
が不必要なほど、軽々と大剣をかわして後ろを取る。背中への一撃  
を受け、男が倒れ込む。

剣を手にしているのは残り3人、1人は少し下がった所で詠唱を始  
めた。あれが魔術師。

エイジャも更に詠唱を繋ぐ。敵の魔術師の施そうとしている魔術を  
探り、それを相殺する。火には水を。闇には光を。

二人の魔術師の間で、目には見えない一見地味な応酬が続く。だが  
空間がビリビリと魔力で震える。敵の魔術を打ち消しながら、隙間  
を縫って攻撃魔術を練る。

その間にルチアは2人を片付けて、剣を持つ残り一人を標的に定め  
た。

が、深く被ったフードの視界の悪さに、今しがた倒した男が起き上

がり、剣を振りかぶったのに気づくのが遅れた。

その時、詠唱へ没頭するエイジャの漆黒の髪が、魔力を受けてフワリとたなびき、攻撃魔法の準備を完了する。

「デ・トルナド・ゲベルト」

静かに発動を命じる。次の瞬間、襲撃者の体が次々と、突風を受けたように空に舞い上がった。

空中で一瞬静止した後、ルチアの目の前に、猛スピードで落下してきた五人の体が叩き付けられた。

到底立ち上がれない程のダメージを受けて呻く姿に、ルチアが声を掛ける。

「……その様子で、口が聞けるか？首謀者を話してほしいんだがな」  
だが、5人は一瞬にして姿を消した。

「えっ、うそっ……空間転移術……!?!」

人や物を、別の空間へ瞬間的に移動させる空間転移術。

古代には徳の高い魔術師が操っていたという話も聞くが、今ではその術の習得の難しさ、必要な魔力の膨大さから廃れてしまった秘術。王宮の魔術研究所で研究が行われているらしい、という噂を伝え聞くぐらいで、実際に目にした事などない。

そんなものを行使できるなんて、一体今の襲撃者達の正体はなんなんだ。

自分が関わりうとしている世界の、想像以上の危険さに戸惑うエイジャを、ルチアが振り返った。

「いい、どうせ口を割らない連中だ。追うよりも先を急ぐ」

3人と切り結んだとは思えないほど、全く息切れもせず、告げた。

「助かった。ありがとうな、エイジャ」

### (3) ルチア

日が落ちるまでに何とかユズールの街へ到着し、馬小屋を併設した宿屋を見つけて部屋を取る。

部屋に入ったその足でエイジヤは部屋の四隅に触媒を配し、内鍵を掛けた扉にも自身の髪の毛を一本巻き付けて、短い詠唱を終えた。キーン、と澄み渡った小さな音が部屋に響き渡る。

「部屋に結界を張った。これで話し声を盗み聞きされる事もないし、窓から覗き見される事もないよ」

淡々と行われた行為を見守っていたルチアが、「そうか」と返事してローブを脱いだ。

……最初に目に入ったのは、眩いばかりの金髪。

まるで一本一本が光をたたえているかのように輝く髪を、ぞんざいに左手でかきあげて頭を振るった。

「……あぁー、やっと脱げた。鬱陶しい」

そう呟いてエイジヤの方に向き直ったルチアの顔を見て、エイジヤは文字通り、凍り付いた。

(な……なんだ！？この人！？)

すらりと通った鼻筋と優美な曲線を描く唇、引き締まった輪郭。

切れ長の瞳は、男性にしては長過ぎる睫毛に縁取られている。

まるで神話の挿絵に描かれた女神図のような、神がかりとも呼べるほどの絶対的な美貌。

そしてその瞳の、燃えるような深い紅色は……

「その瞳……お、王族っ!？」

今度こそ、エイジヤは絶句した。

広い大陸アイサルには、様々な瞳の色をした人種がいる。

だが深紅の瞳は、アストニエル王国の王族にしか遺伝しないというのは、貴族はもちろん、ある程度の教養をつんだ人間なら皆知っている。

エイジャも話に聞いた事があるだけで、実際に見たのは初めてだが。「ああ……、遠い親族というだけだ。何代も前に降嫁した血筋の末裔でな。今は王族でもなんでもない」

「え、そうなの？そういうもんなの？？」

いまだに混乱状態にあるエイジャは、とりあえず落ち着くために、ルチアの言葉をその通りに受け取ってみる。

それにしてもこの美貌は……

「た、旅しにくい！」

「なんだ、それは」

「だからっ、超極秘の使命を受けて旅をするのに、目立ちすぎ！」  
エイジャ自身も、肌の色が周りと違うからか（自分の容姿にあまり自覚のないエイジャとしてはそう考えているのだが）人々の注目を集めがちな事は自覚している。

秘密裏に進めたい仕事が多いエイジャのような職業では、それがほとんどの場合足を引っ張る要因になってしまうのだ。

いつにもまして慎重さが求められるこの旅で、こんな絶世の美形、しかも王族と同じ瞳の人間が一緒では、「さあ皆さんご注目！」と珍獣を連れて歩くようなものだ。

「まあ、貴族の多い王都ではこの目の色は何かと鬱陶しいがな。この町まで来ればそれもないだろう」

「そっ、そんなわけにいかないよ！そりゃ、その目の色が王族縁のものだっていうのは、普通の町民や農民は知らないけど……っついていうかそれ以前に、その金髪も顔も人目を引きすぎるの！」

（この人、自分の容姿が尋常じゃなく目を引くって自覚がないわけ？まあ、王宮の麗人達の間では目立たなかつたんだらうけど……いやいや、王宮の中でも目立つたらうこれ！？）

頭を掻きむしるエイジャを、ルチアは不思議そうな目で見る。

「できればずっとロープを被ってほしいけど……それ、剣士にとってはずつごく動きにくいよね？」

先程の戦闘で、深く被ったフードに邪魔されて、立ち上がった敵に気づくのが一瞬遅れていた事を思い出す。

「ああ、動きを制限されるし視界が狭くなる。さっきはお前に助けられたからな……相手方も次はもっと腕の立つものを寄越してくるだろうし」

さっきの相手。

そこで、エイジャの頭がすつと冷える。

普通の魔術師では不可能な、空間転移の術を使って姿を消した襲撃者達。

「あれって……やっぱ、王宮関係のやつらなの？」

「聡いな。まあ、そういう事だ」

「だって、空間転移なんて、王宮の研究所で研究されてるらしいって噂で聞くぐらいで、普通はお目にかかる機会もないもん……」  
不安に駆られて押し黙る。

「だが、お前まったく押し負けていなかったじゃないか。むしろ相手の術を全て打ち消して、その上で攻撃魔法をぶっぱなして」

「魔術使いでは負けてなかったよ。でも空間転移なんて、伝説の秘術を使ってくるような連中を相手にした事、なかった……」

柄にもない。未知の力に、腰が引けるなんて。

悔しくて唇を噛んだエイジャに、ルチアが暢気に声をかけた。

「大丈夫だ、ま、秘術つつたつてあれぐらいのもんだろ。他に怪しげな研究をしてたって話も聞いてないしな」

「……なんかすつごく身内の話、語ってるような素振りだね……っというか、あっちも王宮関係者なんだから、身内同士って事か」

「ん……、ま、ざつくり話すと、俺や、お前に話をしたヤツは、さる方から内々に命を受けて動いてる。でも、王宮内にもいろんな人間がいるからな。俺の主とは正反対の考えを持つてる奴らは、俺達に、書簡を届けてほしくないと思ってる」



「王宮お抱えの冒険者を使わなかったのも、それで？」

「そうだ。身内を動かすと、すぐに足が付くからな」

ルチアの口調はやけに軽い。

「奴らの裏をかいて出発したつもりだったが、どこから付けられてたんだろうなあ……。ま、俺もお前も人相は割れてないし、背格好しかバレてないんだから、身なりを変えてしまえばしばらくは見つからないだろう」

エイジャは思わず、ため息をついた。

灯りを落とした部屋の中で、ルチアは腕を頭の後ろに組んだ格好でベッドに仰向けになり、窓から入る月の光に照らされた天井を、ぼんやり眺めていた。

あの後、宿屋併設の食堂で夕食をとろうと部屋を出ようとしたら、「食事は持つてくるから、部屋を出るな」とエイジャにたしなめられた。

ルチアの容姿が人目を引きすぎるといふのだ。かといってロープは襲撃者達の返り血でひどく汚れており、その姿で食堂に現れていらぬ警戒心をもたれるのははばかられた。

「ロープの代わりは、明日何とかするから。とりあえず今晚は部屋から出ないでよ」

エイジャは薫製肉やチーズを挟んだパンと野菜のスープ、葡萄酒を差し入れると、隣にもう一部屋をとり、自室にひきあげていった。男同士、別に同室でも構わなかったのだが、というか、だいたい民間の冒険者は旅費節約のために一部屋を分け合う事が多いはずだが、何でもエイジャの一族はたとえ家族でも寝室は別にするのが常識なのだとかで、そこだけは長年の習慣もあり譲れないのだと言っていた。

（まあ……その方がいいかもなあ……同室の男が睡眠不足に陥りそ

うだ、あれは)

今回の計画がもちあがり、今日明日にでも出発した方が良いという話になった時、供に連れる人選に困った。

王宮抱えの冒険者達や王宮兵隊にも信頼できる者はいたが、敵対する勢力に勘づかれずにその者達を動かす事は難しかった。

最近、王宮からの案件を度々引き受けている腕の良いフリーの冒険者が冒険者組合にいと聞いて王宮に呼んだが、部屋で膝をつき礼を執っていたその人物が顔を上げたのを見て、ルチアは言葉を失った。

……女の子じゃないか。

しかも、とびきり可愛い……

だが彼は、自分の事を「俺」と言った。慌てたように「私」と丁寧に言い直してはいたが。しかしその声は男の声にしては高く、甘やかに聞こえた。

王都を出発してからもしくはらくは疑わしい気持ちでいっばいだったが、襲撃者達との戦闘での振る舞いは、やはり女の子とは思えない堂々としたものだった。

元々アストニエル王国は移民に寛大で、様々な民族が入り乱れて暮らしている国。肌の色や容姿から言って、エイジャも異民族からの移入者であるのだろう。遙か遠方には、男女で見た目がほとんど変わらない、エルフのような一族もいるという。きっと、エイジャの一族もそういう類に違いない。

それならば、いくら見た目があんなでも、ちゃんと男扱いしてやらなきゃな。とルチアは思う。彼自身、幼少の頃は「女の子みたいだ」と散々言われて、面白くない思いをしてきたのだ。例えばそれが好意

をもって寄せられる言葉だったとしても、まっとうな男ならば、「女の子みたいで可愛い」と言われて嬉しいわけではない。

それにしても、自己紹介をしてきた時に見せた、花が開くような笑顔。襲撃者達の使った空間転移術に戸惑って、不安を見せた時の憂いを帯びた表情。王宮の内情を聞かせた時の、ため息をつく横顔……いや、あれは可愛い過ぎるだろう！どうしたって！

ただでさえ困難になるだろうこの旅が、何やら別の意味でも気苦労の絶えないものになるのではないかという予感に、ルチアは頭を抱えたまま目を閉じた。

#### (4) エイジャの秘密

食堂で調達してきた簡単な夕食を済ませ、エイジャは寝る準備を始めた。

上着を壁に備え付けられたハンガーに掛け、シャツを脱ぐ。上半身に何重にも巻いたサラシを、ぐるぐると外していく。胸を押し潰し、細い腰をごまかす為に巻かれた白い布。寝間着に着替えてベッドに倒れ込むと、やっと人心地がつく。

どんな貧乏旅でも、必ず同伴者とは別に一部屋を取る理由がこれだ。エイジャは女性だった。11の頃から性別を偽り、もう7年になる。

初めのうちこそ、男装するだけでもごまかしが効いたが、15を迎えた辺りから体つきはどんどんと女らしさを増し、体型を隠すためのサラシは必須となった。

髪の毛を短くすればもう少し男らしさが出るのかもしれないが、エイジャの一族は魔術を使うとき、髪に魔力をのせて増幅させる。武術が得意でなく、魔術で戦うしか術のないエイジャにとって、髪の毛を切る事は自殺行為と言えた。

王都を拠点にして冒険者稼業で身を立て始めてからは、実績を積みにしたがって「女のように見えるが、男だ」という認識が定着していった。

そのうち、エイジャの性別を疑う者がいると、エイジャを慕う女性達の猛烈な反感を買うようになり、結果的に秘密はそういった女性達に守られる形となっていた。

だからこそ、彼女達への心遣いは忘れないようにしていた。探索で入った洞窟で女性の好きそうな宝石を見つける事があれば、金に変えるより土産として持ち帰る。

思い詰めたように恋心をしたためた手紙を人づてに寄越してくる少女。

人目もはばからず頼にキスしてくる酒場の女主人。

冒険者組合に大金を払い、数時間の話し相手を依頼してくる伯爵夫人。

店に寄れば必ず果物をおまけしてくれる商店の一人娘からは、以前本当に好きなのだと言われた事がある。

丁寧に断つてからも、想い続けてくれていた彼女。他にも多くの女性達が、エイジャを慕って優しくしてくれる。

彼女達を騙している事はエイジャにとって気が重く、優しさに触れる度に罪の意識にさいなまれていた。

誰の想いも受け入れてあげることができないからこそ、彼女達の理想の男でい続ける事しか、してあげられる事がないと感じていた。

いつか宿願を果たす為、王都を去るその日までは。

その日は何年も、もしかしたら何十年も先の事になるだろうと考えていた。

思いがけず、因縁の相手に近づく機会を得た事に、エイジャは困惑していた。

まだ、まだ、自分の力は未熟だ。近づいても、きっと何もできない。どうすればいいんだろう、どうすれば……。

ルチアが携えている書簡の内容は分からないが、王宮内の反対勢力に命を狙われる程、アストニエル王国にとって大きな意味を持つものである事は間違いない。

自分の宿願と今回の案件を一緒くたに考えていては、大事な所で選択を誤るかもしれない。

まずはこの依頼を完遂する事を考えよう。これまでの案件とは比べ物にならないほど、危険な旅になる。

今日の戦闘を見る限り、ルチアはかなりの剣の使い手であるようだ。ローブを着込んでいる時には分からなかったが、細身ながら鍛えて絞り込まれた体付き。

王宮の中でも身分の高そうな主にかなり近い存在である事がうかがえたし、王宮騎士団に所属する騎士か、もしかしたら王族の近衛を務めているのかもしれない。

だが視界を遮り、動きを制限するローブを着た状態では、その本領を發揮できていないようだった。

出し惜しみをしている場合じゃない。使える物は全て使わなきゃ。

エイジャは決心して、鞆に手を伸ばした。

翌朝。

身支度を整えたエイジャは、隣室の扉をノックした。

「起きてる？朝食の前にちょっと中に入れてほしいんだけど」  
扉の向こうに声を掛ける。

程なくして、ギィィ、と扉が内向きを開き、寝起きでも豪勢な美人が顔を覗かせる。

いや寝起きだからこそ、乱れた髪や虚ろな瞳がまるで女達が読む絵物語の主人公みたいだなあ、などと考えていたエイジャに、眠そうにルチアが声を掛ける。

「朝食は食堂で食べていいの？」

「いいよ。その前に準備があるから、ちょっと部屋に入れてほしいんだけど」

「あー、んー」

朝が弱いのだろうか、ぼうつとした様子でエイジャを部屋に招き入

れる。

エイジャは扉に結界を貼り直して振り返り、ぎよっとして凍り付いた。

「なっ、何っ！ストップ！」

「へ？何が？」

さつきは確かに寝間着らしきシャツを着ていたはずなのに、すっかり脱ぎ捨てて上半身を晒している。

「だから着替えストップ！部屋出てるから！着替え終わったら呼んで！」

ルチアの方を見ないように注意しながら、慌てて部屋を出た。

「……あのー、着替え済みでしたけどー」

扉を開き、廊下に立っていたエイジャに声を掛ける。

「あ、ハイ」

そそくさと部屋に入ってくるエイジャ。

何だよさつきの態度。

昨夜はこいつに対して「男扱いしてやんなきゃな！」と決心した所だったのに。

まるつきり乙女みたいな態度じゃないか。

「お前の一族じゃ、他人の着替えを見るのは非常識なのか？」

「えっ！？あ、そう。そうなんだ、あはは……」

慌てたように答える。しかし色々ややっこしい一族だなあ、とルチアは呆れを通り越して感心する。

実はエイジャだって長年冒険者稼業をしていれば、同伴者の上半身裸を見る事だつてよくあつたし、何も狼狽える事でもなかったのだ。だがルチアのような美人の着替えを目にするのは、どうも神様の裸を見てしまうようで耐えられなかったのだ。

「で？準備って？」

「あ、これ。ちょっと掛けてみて」

そう言つて、エイジャがルチアに手渡したのは、黒縁の古めかしい眼鏡だった。

「眼鏡？俺、目は悪くないけど」

「度は入ってないよ。まあ、変装道具っていうか。とりあえず、掛けて鏡を見てみてよ」

言われた通りに眼鏡を掛け、壁に備え付けられた鏡を覗き込んだ。

「えっ？うわ、何だ、これ」

鏡にうつつたルチアの瞳の色は、深紅からありふれたアンバーに変化していた。

眼鏡を外すと、やはり深紅。

「眼鏡に、瞳の色を変えて見せる幻視の術を固定させたんだ。これで瞳の色は変えられるし、眼鏡一つでも顔の雰囲気変わるだろ。あと、ちょっとその椅子座つて」

ルチアが言われた通りに椅子に腰掛けると、エイジャは背中に戻った。

起きてから軽く手櫛を入れただけだったルチアの髪を取り、櫛を入れる。

緩いウェーブの掛かった輝く金髪を、首の後ろの辺りで結つて紐で縛り、目を閉じて短く詠唱した。

「はい、出来上がり」

ルチアは立ち上がり、再度鏡を確認する。

鏡の中には、落ち着いた栗毛を緩くまとめ、黒縁の眼鏡を掛けた男がうつつていた。一見、学術をおさめる文官にでも見えそうな雰囲気だ。

「へえ、すごいな、別人みたいだ。髪の色も変えられるのか。こんな魔術は初めて見た」

「眼鏡と結び紐は、魔道具なんだ。俺のじいちゃんが作ったんだけ



ど、それだけしか作ってないから。よそで目にする事はないと思う」  
ちよつとだけ明かした、自分の過去。

形見でもある眼鏡は、今まで人に預けた事はない。じいちゃんの想いが詰まった、魔術的にも貴重な品。

人に貸すような事はこれまでなかったが、打てる手は全て打たなければ今回の依頼は完遂できないと考えた。

「うん、これなら剣も存分に振るえるな。ありがとうな、エイジャふいにエイジャの頭の上に手が添えられて、くしゃくしゃと頭を撫でられた。

突然の行動に戸惑って、言葉の出てこないまま口をパクパクさせているエイジャを見下ろして、ルチアはふつと顔を崩した。

「なんだその表情。おもしろいな、おまえ」

そう言うと、ルチアはどこか満足そうに、機嫌良く食堂への階段を降りて行く。

エイジャは何となく気持ちの置き場所が見つからないまま、無然とした表情でその後続いた。

## (5) 魔獣の森

食堂の壁側のテーブルに席を取り、朝食をとりながら、今日の予定を確認していく。

食事を済ませたらすぐに出発するのだろうかと考えていたエイジャだったが、ルチアは「いや、急がなくていい。昼頃に出発しよう」と言う。

「えっ、でも次の町まで行くには、魔獣の森を通らなきゃいけないだろ？あそこは、明るいうちに抜けないと……」

それは多少旅慣れた人間なら、誰でも知っている事実。

ユズールからさらに東へ進むと、南北に伸びる高く険しい山脈がある。

東に向かうにはその谷間に広がる森を抜けなければいけない。

だがこの森には、血を求める獰猛な魔獣が住み着いており、魔獣達の活動時間である夕刻から夜の間はこの森に足を踏み入れれば、生きて出る事はできないと言われている。

だからこそ、日が落ち始める前に森を突破するために、ユズールから東に向かう旅人は、朝食を済ませるとすぐに出発するのだ。

「ちよつと訳ありでな。日が傾いてから森に入らなきゃダメなんだ」

「……その訳は今聞かせてくれないんだ？」

「怖いかな？」

ニヤツと笑う顔を、エイジャはふてくされた表情で睨みつける。

「怖くなんか。でも自分の守りで精一杯だからね。ルチアは自分の身は自分で守ってよね」

「冷たいな。俺にも守りの術かけてくれよ、ちゃんと、エイジャの分も切つて切つて切りまくってやるから」

あいかわらず口調は軽いが、遊びで来ているわけではない。

ただ考えなしに夜の魔獣の森に突っ込もうとしているわけではないのだという事は分かっている。

「手が空いたらルチアにもかけてあげるけど」  
「よし。じゃ、さつさと装備を固めるか」

旅人の宿場町として発展しているユズールには、王都ほどではないもののそれなりに装備品が揃う店が並んでいた。

昨日の襲撃者達に身なりを情報として持ち帰られているので、全身新しい服に買い替える事にし、旅装束を扱う店に入る。

エイジャのいつもの貧乏旅では入る事のない高級店だ。

王宮から経費として出すから遠慮せず選べとルチアは言うが、普段は専ら古着を着ているエイジャは、素材も仕立ても良い商品にかつに手を出せず、値札を見ては悲鳴をあげる。

そのうち、ルチアとエイジャに「一目惚れ」したと言う店の女主人が出てきて散々あれこれと試着させた挙げ句、「一般の客には出さない」とっておき」だという服を奥から引つ張りだしてきた。

ルチアには、濃紺色のロングジャケットのスーツ。黒縁の眼鏡と相俟って、文官にでも見えそうな知的な雰囲気を漂わせている。

だが実は剣士用に作られたもので、動きやすく、軽量だが少々刃物を通さないよう加工されている。

エイジャには黒のレザーパンツに、黒のレースアップブーツ。オリブグリーンのコートは高襟で、エイジャの細い首をすっきり隠している。

「男らしくしたい」と繰り返し注文を付けた結果だった。

「ま、こういうのもストイックな感じで逆にいいわよね」と上機嫌の店主は、次に来た時にはもっと完璧な品を用意すると言って二人の全身のサイズを測り、「絶対絶対、帰り道にも寄って頂戴よ！」と約束させられて店を出た。

太陽が真上に上った頃、旅の準備を整えたエイジャとルチアは魔獣の森を目指してユズールを発った。

しばらくは襲撃はないだろうというルチアの読みもあり、周辺に気を配りながらも、王都からユズールへ向かった時よりも随分なごやかに、話をしながら馬を進める。

ルチアはエイジャの冒険者稼業に興味があるらしく、エイジャも守秘義務に関わる部分をぼかしながら話した。

貴族の裏側を垣間みるような体験もしてきているし、命がいくつあっても足りないような危険な依頼もこなしてきた。

魔宝石の発掘の依頼で登った山。例によって、街の女達への土産に綺麗な花を摘んで帰ったら、それが実はものすごく貴重な品種で、依頼品の魔宝石よりも高値で取引された事。

またある時は、探索の依頼で訪れた洞窟に住み着いていた魔獣に懐かれてしまい、依頼期限ギリギリまで世話をしてやった事もあった。スパイの依頼を受け、女装して女中として潜り込んだ貴族の家で、主に妙に気に入られてしまい、ペラペラと聞く必要のない秘密まで明かされてしまった事。

相棒として組んだもう一人の冒険者が、夜どうしても一人で寝れないというので同部屋で寝たら、夜中に寝ぼけて襲いかかってきたので、魔術を叩き込んで窓から放り出してやった話。（この話の時にルチアが何とも言いようなない表情をしていたのがエイジャには不思議だった）

基本的に一人で、様々な依頼をこなしてきたエイジャの仕事が、王宮仕えのルチアにとっては新鮮に映るようだった。

「俺の仕事はいつも味方が大勢動くからな。自分一人だけで全ての責任を背負って動くのは心細くないのか？」

魔術能力は十分、身のこなしも良く、経験も豊富。勝手な心配は余計なお世話なのだろうとは分かっているけど、その身を案じずにはいられない。

こんな女のように細い、頼りない身体で、たった一人で危険な依頼をこなすエイジャの姿を想うと、落ち着かない気分になるのはどうしてだろうか。

「そんな事ないよ。……逆に、一人の方が気楽でいい。たくさん人が関わると、皆の想いを背負わなくちゃいけないだろ？その方が……つらいよ」

ぼつりとこぼした呟きに耳にして、ルチアはエイジャの横顔を見る。静かに、密かに、何かに耐えるような表情。

ふと、ルチアは心臓の上あたりを強く抑えられたような息苦しさを感じて、視線を前方に逸らせた。

太陽が地平線に近づく頃、魔獣の森の入り口に到着する。

ここから先はこの時間、足を踏み入れたが最後、血に餓えた魔獣との戦闘が待ち構えている。

ルチアは荷物から、豪勢な装飾が施されたランタンを取り出して火を灯した。

「行くぞ。いいか、絶対に俺から離れるな。何があっても俺の後ろに付いてこいよ」

ごくくり、と緊張に喉が鳴る。

「大丈夫だ、怖がるな。策はちゃんとあるから」と表情を崩したルチアを見て、エイジャは少し緊張を緩めた。

「……な、に、が、大丈夫だってえー！ー！ー！っ！ー！ー！」

全速力で馬が駆ける足音に混じって、エイジャの絶叫が森に響き渡る。

とにかく、ルチアの後ろ姿を見失わないよう、次々に襲いかかってくる魔獣達を守りの術を繰り返しかけ直して防ぎつつ、合間で攻撃魔術を放つ。

前を走るルチアも、休みなく剣で魔獣を薙ぎ払っているが、全く切りがない襲撃に、少し疲れが出てきているようだ。

走り続けてもう一刻近くたつだろうか。

森の終わりはまだまだ果てがないし、夜闇が深まるにつれて魔獣達の動きはさらに激しく、数も増えているような気がする。

夜にこの森に足を踏み入れる命知らずなど、滅多にいない。こんなおいしい獲物を逃すわけもなく、森中の魔獣が集まってきているのではないかという考えさえ浮かぶ。

（策はちゃんとあるだって！？ただの強行突破じゃないか、こんなのかっ！）

心の中で先程のルチア的笑顔に悪態をつきつつ、視界にうつる背中を睨みつける。

ぼんやりとしたランタンの光は妙に青白く、頼りない。

だが突然、その光が明るさを増した。

ルチアが手綱を引き、大きく右へ馬を迂回させる。

突然の進路変更に慌ててエイジヤも後に続く。

進路は深い藪に包まれているが……

「……なん、だ、これ……！」

ランタンの光で照らされた藪が、まるで蒸発するかのように姿を消していくのだ。

エイジヤは信じられない気持ちで、ルチアの後に必死で付いて行った。

やがて藪を抜け、ぽっかりと空いた空間が現れた。

魔獣の襲撃もいつのまにかなくなっていた。先程までの喧噪が嘘のような静かな闇の中に建っている、一軒の邸宅。

王都にある貴族の館ほどではないが、貴族の別邸というような雰囲気だ。

館の裏には馬小屋があり、そこに馬を繋ぐ。

エイジヤは驚きのあまり言葉も出さず、きよろきよろと辺りを見回していた。

その姿を振り返って、ルチアがにやりと笑う。

「ちゃんと策はあるって言ったろ？」

「……いや、策ってこれ！？先に言ってくれば良かったじゃん、一晩中あの全力疾走が続くのかと思ったよ！」

「ああ、悪かったな。ちよっと驚かせてやろうと思ったんだが」

「驚かせすぎだよ！そういう心配りいらさないから！」

サプライズには命懸けすぎる。エイジャはクタクタになった身体を引きずるように、ルチアの後に続いた。

## (6) 魔術師フェルダの館

「この家は王宮所有の別邸でな。こういった任務の時に使われるのみで、王宮の人間でも知っている者はほとんどいない。」

普段はここへの道は藪に隠されていて、このランタンの光でないと道を見つける事はできん。だから明るいうちには来れないんだ」

「そのランタンって魔道具だよな？」

好奇心に満ちた瞳で、エイジャがルチアの手元を覗き込む。魔道具に無条件で心惹かれてしまうのは、魔術師の性だ。

「ああ、戦前から王宮に伝わっている物だ。かなりの年代物だな」扉には鍵がかかっていたが、ランタンの光をかざすとカチャリ、と小さな金属音が響いた。

ルチアが扉を開き、中に足を踏み入れる。

やはり王宮所有というだけあって、邸内は立派な装飾品で飾られ、隅々まで掃除が行き届いている。

こんな寂しい場所に仕える使用人は大変だなあ、とエイジャは考えて、そういえば、誰も迎えに出てこない事を不思議に思った。

「……あの、執事さんとか女中さんとかは？」

「ああ、ここにはそういう人間は雇ってない。まともな人間が住める周辺環境じゃないからな」

(それは、そうなんだけど。でも管理はしっかりされてるみたいだし?)

「やだ!どこのハンサムな文官が迷い込んだのかと思ったら、ルチアなの!？」

なぐに、雰囲気変わったちゃって!」

きよろきよろと辺りを見回していたエイジャの頭上から声がした。

見上げると、紫色のドレスを身に纏った貴族風の女性が、螺旋階段



の手すりに肘を付いてこちらを見下ろしている。

「フェルダ。待たせたか？」

女性は階段を優雅な足取りで降りてきて、二人の前に立った。

綺麗にカールした腰まである髪はローズレッド。濡れたように輝く唇と長い睫毛が目を惹く。妖艶な雰囲気的美女だ。

「瞳の色まで変わってるじゃない！やるわね〜！」

「ああ、こいつの魔術だ。大した腕だろ」

ルチアが隣のエイジャを指し示す。

「へ〜っ、おもしろい術使うのね！な〜に、この子。かわいいじゃないの〜」

真っ赤なネイルが塗られ、爪先まで美しく整えられた指をエイジャの顎に添えて、どこかうつとりとした表情でエイジャの顔を眺める。

「エイジャだ。冒険者組合に依頼したんだ。おい、触るな」

ルチアがエイジャの顎に添えられた指を外した。

「あ、あの、エイジャです……。初めまして……。どきまぎしながらエイジャが自己紹介すると、女性はふふっと笑った。

「フェルダよ。王宮仕えの魔術師。よろしくね、可愛いこちゃん  
そう言つてエイジャの手を取った。

「よ、よろしく願います」

「あのむさつくるしい冒険者組合にこんなお嬢さんがいるなんてびっくり〜。きれいな顔ね〜。アタシ、きれいなもの大好きなの」

「フェルダ。エイジャは男だ。これでも」

「え〜っ？？そうなんだあ〜？？ざ〜んねんだったわねえ、ルチア  
！」

「うるさい。とにかくお前、こいつには手を出すなよ」

「え〜っ、いいじゃない！エイジャ、年上のお姉さんは嫌い〜？  
ウインクされてエイジャは戸惑う。

「あ、あの……」

「何がお姉さんだ。お前もういい年のオッサンだろう」

「ちょっと！聞き捨てならないわね！そういう事言うわけ！？」  
瞬間、態度を豹変させ恐ろしい形相でルチアを睨みつけるフェルダ。  
「お、おっさん……？」

話についていけないエイジャに、ルチアが言う。

「ああ、こいつも男だ。これでも」

……世の中には、色々な人がいるものだ。エイジャは自分を棚に上げてそう思った。

この館が建てられたのは、千年以上前。戦前、古代魔法を使って巧妙に存在を隠され、今はこのフェルダが管理しているらしい。

だがフェルダもいつもここにいるわけではないらしく、今回もルチアの依頼の為にしばらく館を離れていたようだった。

三人で食事を取るには広すぎる食堂で、フェルダの手料理だという夕食を囲みながら話を聞く。

「フェルダにはシアル国内で諜報に当たってもらっていたんだ。……」

……で、どうだった？シアル国内は」

「思った以上に緊張してるわ。戦争が近いつていう雰囲気かぶんぶんしてる……。旅人も、入国を制限されてるから、簡単には入れないわよ」

「戦争が近いつて……。噂は本当だったんですか？シアル大公は……アストニエルに攻め入るつもりなんですか？」

黙って話を聞いていたエイジャが、思い切ったように口を開いた。

「自分から不可侵条約を破棄するわけにはいかないからね。条約を破棄すればキバライ帝国も敵に回す事になる。シアルにとってリスクが大きすぎるわ」

アイスル大陸を三分する、アストニエル王国、シアル公国、キバライ帝国。

千年前の戦争の後に結ばれた不可侵条約は、相互に戦争を仕掛けない事、もしもいずれかの国が条約を破棄して他国に攻め入った場合、破棄した国に対して他の二国は結託してこれを退ける事を宣言している。

つまり、もしもシアルがアストニエルに攻め込んだ場合は、キバライはアストニエルに加担するし、逆にアストニエルがシアルに攻め込めば、キバライはシアルに加担する。

三国間が千年もの間、緊張状態に陥っても戦争に至らずにきた理由は、「先に条約を破棄すると二国を敵に回す」という絶対的なりスクがブレーキになってきた事に他ならない。

「何とかして先にアストニエルに条約を破棄させたいって所だろうな、シアル大公としては」

「でも、アストニエル王にはそんなお考えはないんだよね？アストニエルは、戦争を放棄したはずだろ？」

エイジャが訴える。ルチアが、苦笑して答えた。

「ああ、そうだ。そのはずなんだがな……」

含みを持たせたような言い方に、エイジャは嫌な予感を覚える。

「そのはずって………どういう事？ルチアの持つてる書簡に、関係してるんだよね？」

ルチアとフェルダは顔を見合わせる。

今回の旅の目的。

確信に迫れば迫るほど、エイジャは危険に近づく事になる。

だが、すでに王宮の反対勢力による襲撃を受けている。この先も、いつかはルチアとエイジャが使者である事を突き止めて、追いついてくるだろう。

「どこまで話すかは、ルチアが決めればいいわよ」

フェルダの言葉に、ルチアは意を決した。

もうすでにエイジャはこの旅の運命共同体なのだ。できる範囲で真実を知らせる事が、エイジャに対しての誠意ではないかと考えた。

「アストニエルにも、戦争をしたがってる奴らがいるって事だ。そいつらが、シアルで嘘の噂を振りまいてるらしい。アストニエルはシアルに攻め込むつもりだったな」

エイジャが信じられない物を見るかのような目つきで、ルチアに顔を向けた。ルチアは言葉を続ける。

「俺の主は……アストニエルの第一王位継承者、カルニアス王子だ。王子はもちろん、戦争には反対していらっしやるよ。」

現王である父君はお体の具合が悪くてもう退位が近いから、王子の意思が実質、国の意思となる。

今回届ける書簡には、アストニエル側には開戦の意思はない、っていう事が書かれてるんだ」

「じゃあ誰が……戦争をしたがってるの？なんで？たくさん人が死ぬのに……良い事なんて、何一つないのに」

「そうだな、エイジャの言う通りだ」  
ルチアが微笑む。だがその笑顔はいつもの屈託ないものではなく、どこか寂しげだ。

「カルニアス王子には、お姉様がいらっしやる。それは知ってるよな？」

「うん、ウイスタリア王女だね？女性だから、お姉様だけど王位継承は第二位だって……」  
そこでエイジャは言葉を失う。

「……ウイスタリア王女が……戦争を望んでるって言うの？」

「正確には王女がではなくて、王女に王位を継承させたがってる奴らが……って事だな。王女は、利用されているに過ぎない。」

王女の取り巻き達は、ここ数十年中に爵位を得た貴族が中心だ。彼等は新興だから領地が少ないし、アストニエルの領地にも限界がある。

そこでシアル公国の領地を得たいと考えたってわけだ」

「まあ、領地の問題はもう何百年も前からある事よ。でも、千年前

の戦争を教訓にしていたから、また戦争をしようなんて考えは起きなかった。

それが具体的に領地問題を解決する手段として上がりだしたのは、やっぱりシアル大公の姿勢がきっかけよね。大公は戦争する気満々だもの」

フェルダの言葉を受け、ルチアが話を続ける。

「ここ10年ほどのシアル大公のやり方は、何なら二国を敵に回す事になっても構わないと言わんばかりだが……」。

そうは言っても、実際にアストニエルとキバライを同時に相手にするのは避けたいはずだ。

俺達は、大公が何らかの手を使って、アストニエルの方から先に条約を破棄したように工作してくるんじゃないかというのを警戒してる。

そんな事態になる前に、はっきりとアストニエルの意思を示す。

できれば、キバライを加えて、条約を再確認する意味で三国会議を開きたい……王子は、そう考えてらっしゃる」

ルチアの言葉に、エイジャは息を飲んだ。

すでにそこまでの緊張状態に陥っていたなんて。

この依頼の完遂が、アストニエル王国一国どころか、大陸の未来を左右するのだ。

## (7) 月下の決心

何度目かの寝返りを打ち、エイジヤはため息をついた。

……眠れない。

慣れない上質な手触りの寝具のせいもあるだろうが、やはり夕食の席で聞いた話が頭を離れない。

アストニエルの王宮内にも戦争肯定派がいるとは思ひもしなかった。領地を広げたいという欲に目がくらんだ愚かな貴族達。

シアル大公がどれだけ領土拡大に息巻いても、戦争放棄を宣言したアストニエルは相手にしない。だから大丈夫だと考えていたのに。

必ず、書簡を届けなきゃ。

シアル大公に、戦争を起こさせる隙を与えちゃいけない。

それが自分の使命。今、自分が生きている意味。

考えれば考えるほど、怒りと焦燥に駆られて眠りが遠ざかって行く。少し外の空気を吸って、熱くなった頭を冷やして来ようと、エイジヤは体を起こした。

エイジヤにあてがわれた部屋は、何部屋もある客室のうちの二室。

他の客室に人は泊まっていないはずだが、なんとなく足音を忍ばせて廊下を歩く。

広い邸内にはやはり一人の使用人もおらず、フェルダが魔術で管理しているという話だった。

王宮お抱えだけあって、エイジヤには想像もつかないような魔術の知識があるようだ。

料理だけは魔術ではなく、ちゃんと手を動かして作ってるんだと言っていたが。

静かに玄関の鍵を外し、館の外に出る。

ひっそりと静まり返った森は、ここに着くまでの死闘が夢であったかのように、今は虫の音が微かに聞こえるだけだ。

……子供の時も、こんなだったな。

ふと、思い出す遠い日の記憶。

魔術の練習が思うように進まないのが悔しくて、ベッドに入っても寝付けなかった夜。

こっそりと家を抜け出して村外れまで歩き、丘に座ってぼんやりと月を眺めていた、幼い自分。

やがて眠くなり、そのままそこで横になってしまった。

目が覚めたら、ちゃんと自室のベッドで寝ていた。

あれは父さんがこっそりついて来てくれていたんだって、何年もたってから母さんに教えられた。

でももう、ここで寝ちゃっても、父さんは迎えに来てくれないんだ。

その事実を今更ながら自覚した時、ぼろっ、と頬を涙が伝った。

嫌だ。涙なんて。

ぐっと目に力を入れてこらえる。こんな所で泣いている場合じゃないんだ。

自分のやるべき事をやらなくちゃいけない。

もう幼い女の子じゃない。強い冒険者の男、エイジャなんだから。

「何してるんだ、そんな所で」

突然後ろから掛けられた声に、心臓が止まりそうな程驚いて振り返

った。

腕を組んだルチアが、少し離れた所からこちらを見ている。ルチアももう部屋で寛いでいたのだらう、眼鏡を外し、髪を下ろして、本来の瞳と髪の色に戻っている。

月明かりに照らされて輝く金髪。闇の中でも存在感を示す、深紅の瞳。

夜の森では、ますます人間離れして見える。まるで神か悪魔だな、とエイジャは独り言ちた。

「びっくりした。どうしたの？」

「何となく寝付きが悪くてな。窓から外を見ていたら、お前が見えた」

横に並んだルチアに気づかれないよう、さっと頬の水滴を指で払う。「俺もなんか、寝付けなくて。ちょっと外の空気吸いに出てきたんだ」

「ああ……。おもしろくもない話を聞かせたからな。……悪かったな」

謝ってきたルチアに、エイジャは勢い良く首を横に振った。

「悪くなんてないよ！話してくれて嬉しかった。

トップシークレット級の話なのに、それって俺を信頼してくれてるって事だろ？」

「まあな」

ルチアが頷く。

「今回の任務が、ここまで責任の重いものだったのには驚いたけど……。

でも、俺、絶対戦争は起きてほしくないんだ。

その為に、反対勢力に負けしないで頑張ってるカルニアス王子を誇りに思う。

もしも、王宮の人がみんな敵に回る事があっても、俺は絶対に王子の味方だよ。

書簡は絶対に、シアルに届ける。決意が固くなったよ。



だから、話してくれて本当に良かった」

ルチアは、両手を握りしめて熱弁を振るうエイジャに気圧されていたが、

話が終わると、本当に嬉しそうに笑った。

「ありがとうな。……なんだか、酷く嬉しい」

その笑顔はやはり、破壊力抜群で。

エイジャは数秒間思考が停止し、（カルニアス王子も、この笑顔に殺られたりするのかなあ……）等と、不敬な事を思ったりした。

ルチアに自分の決意を話した事で少し気持ちが落ち着き、部屋に戻る事にしたエイジャは、階段の下でルチアと別れて廊下を進んだ。

ルチアは上の階にいつも使っている自室があると言う。

（そういえば聞くの忘れてたけど、ルチアってカルニアス王子の近衛なのかな？「俺の主」って言うってたし……かなり近い存在だよ）  
王宮でも存在を知られていないこの館を使っているのだから、かなりの権限を与えられているのは間違いない。

（けっこう偉い人だったりして。敬語はいらなくて言われたから全然気にせずに喋ってるけど、身分を知ったら話しくくなりそうだよなあ）

そこらへんは何となく適当にしておいた方が良さそうだ、などと考えながら、客室の扉を開けた。

「おかえりなさい」

誰もいないはずの部屋の中から声が出て、また心臓が止まる程驚く目を凝らすと出窓の前に、月明かりに照らされてフェルダが立っていた。

「……びっくりした……フェルダさん」

「ごめんなさいねー、勝手に部屋に入って。驚いた？ちょっと話があったくて」

フェルダはネグリジエ姿だ。本当に男なのだろうか？自分よりも数  
百倍女らしいな、とエイジャは思う。

「話ってなんですか？」

「……アタシ、妙に勘がいいって言われるのよ」

唐突な言い方に、エイジャは少し面食らう。

「はあ」

「エイジャ。さっきの話を聞いている時ね、あなたシアル大公に対  
して個人的な想いがあるんじゃないかとアタシは思ったの。違うか  
しら？」

エイジャは答えられなかった。

「その沈黙が答えね。嘘の付けない子。いい子ね」

フェルダは微笑む。優しい笑顔。だが、エイジャは微笑みを返せな  
い。

「でも、さっきの話はあなたにとっては本当に初耳だったんでしょ  
う。アタシ、他人の嘘はよく分かるのよ。

あなたの過去に何があったのかは分からないけど、その事と今回  
の件を一緒くたに考えちゃいけないと思って混乱してるのね。

だから眠れずに外に出た。違う？」

何も言い返せない。なぜそんな事が分かるのだろうか？これもフェル  
ダの魔術なのだろうか？

「……確かに、当たってます。でも、自分の事は、ちゃんと今回の  
依頼を完遂するまで、とりあえず置いておきます。

戦争を止める事、それが一番俺に取って大事な事ですから。書簡  
を絶対に届けます」

「そう、安心したわ」

フェルダはエイジャの頬に優しく手を添えた。

「一番大事な事を間違えなければ、選択を誤る事はないはずよ。

でも、もしこの先選択に迷った時は、一人で悩んで結論を出さな  
いで。必ず相談してちょうだい」

さっき、一粒の涙が濡らした頬を、指でなぞる。

「たまには、溜め込まないで思い切り泣いた方がいいわよ。美容にも良くないわ」

「えっ……」

「じゃあ、また明日ね。おやすみなさい」

言葉に詰まっているエイジャを残し、フェルダは部屋を出た。

自室に向かって廊下を歩きながら、フェルダはシアルで諜報に当たっていた中で耳にした話を思い出していた。

もう10年近く前の事。シアル国内のとある村に暮らしていた一族が、シアル大公自らの率いる軍によって滅ぼされたというのだ。

元々外部との交流がほとんどない一族。村人は一人残らず皆殺しにされ、大公軍によってその事実完全に伏せられた。

フェルダにその話を売った情報屋も、滅ぼされた理由は全く分からないという事だった。

ただ、とても美しい魔術師の一族だったらしいという話が、きれいなものに目がないフェルダの琴線に引つかかっていたのだった。

エイジャは戦争を止める事が一番大事だと言いきった。それは、過去に戦で大事なものを失った事のある者の決意のように思えた。

（エイジャがその一族の生き残りと考えるのは、短絡的かしらね……）

情報屋は、村人は皆殺しになり、生き残った者はいないと言っていたが。

どちらにせよ、エイジャがシアル大公に対して抱いている私怨は、

「戦争を止める事が一番」だと言う言葉に嘘がなければ、計画の遂行を妨げるものではない。

だが、無事シアルに辿り着き、大公への面会がかなった時。

「依頼を完遂するため、自分の事はとりあえず置いておく」とエイジャは言っていたが、実際に顔を合わせた時、憎しみに駆られて我

を忘れるような事にはならないか。

(面会時には、エイジャには席を外させた方がいいかもね……まあ、そのへんはこの先のエイジャの様子を見て決めましょう)

ルチアはすっかりエイジャを信頼しているようだし、自分がしつかりしなくては、とフェルダは思ったが。

(まあ、アタシもあの子気に入っちゃったけどね)

協力してやりたい、役に立ちたい、と思わせるような、不思議な魅力を持つ子だ。

容姿や所作の美しさだけではない。何か特別なものを持っているように、自然と目を引きつけ、心惹かれる。ただの冒険者とは思えない。

(ま、あの子の事情も気になる所ではあるけど、自分から話す気になるまでは、下手に探る事もないか)

そう、フェルダは結論付けた。

(もう一つの方の秘密も……ね)

他人の嘘はよく分かる。

ふふっ、と小さく笑って、フェルダは楽しそうに階段を上っていった。

(7) 月下の決心(後書き)

いつも読んで下さっている方々、ありがとうございます。  
頑張っ更新しますので、感想などを頂けると嬉しいです。

(8) 旅は道連れ、世は情け - 1

「えっ、フェルダさんは馬は使わないんですか？」

エイジャが驚いてフェルダを振り返った。

「馬に乗っているとガニ股になるからイヤ」

キツパリと言い切ったフェルダは、これからまた旅に戻るとは思えないような裾の長いドレスを纏っている。

「じゃあ、どうやって……？」

また自分の知らない魔術や魔道具を使うのだろうかと、エイジャの魔術師としての好奇心が疼いたが、その横からルチアが口を挟む。

「フェルダの移動手段は聞いても教えてくれない。あきらめろ。一旦別れて、次の町で合流する」

「そうなんですか……じゃあ、しばらくお別れですね」

「寂しそうな顔しないの。一緒に連れて行ってあげたくなくなっちゃうじゃないの」

「おい、じゃ、俺はどうするんだ」

「一人で馬に乗っていけば？」

フェルダの冷たい言葉に、ルチアがぐりと肩を落とした。

「お前の中で、すでに俺よりもエイジャの方が優先順位が上になってないか？」

「だあって、ルチアったら、ちっとも誘いにも乗ってくれないし、おもしろくないんだもの。」

アタシだっていつまでも振られっぱなしじゃ、他に心が動いちゃうわよ」

「だからお前、オッサ……」

「そういう事言うところが一番キライ！」

ギロリと凄まじい気迫でルチアを一睨みすると、フェルダはエイジャを振り返って微笑んだ。

「一緒に連れて行ってあげたい所だけど、ルチア一人で旅させるの

も心配だから、付いて行つてあげてちょうだいね」

「はい、分かつてます。それが俺の仕事ですから」

エイジャが姿勢を正す。昨夜のフェルダとの会話を思い出した。そんなエイジャに、フェルダは優しい表情を向ける。

「じゃあ、またね」

館の前で手を振るフェルダに手を振り返し、ルチアとエイジャは馬を出発させた。

森を抜けた後は、延々と続く荒地があるばかりだ。

植物の育ちにくい地質らしく、人の手の入っていない風景が続く。

北の方角に向かえば、確か小さな村があったはずだが、今回は目的地の方角からは大きく外れている。

「日が落ちる直前までは馬を進めよう。できるだけ距離を稼ぎたい」  
フェルダと落ち合う約束の街までかなりの距離があるので、しばらくは野宿になる予定だった。

食料や燃料は、館に備蓄されていたものを馬に積んである。

エイジャの方は、いつもの探索依頼では宿などないような場所を廻る事も多く、野宿はお手の物だが……

「ルチア、野宿って似合わないよね」

「そうか？」

「うん。王子様が寝るような、こーんな天蓋付きのベッドで寝てるイメージだよ。」

それか、神話に出てくる空の上の神殿の、祭壇みたいなベッドとか？アハハッ」

身振り手振りで説明しながら、想像して笑い転げているエイジャを、ルチアが軽く睨む。

「勝手に想像して笑うなよ……」

「フフツ、ごめんごめん。でも本当に野宿なんてした事もないよう

なイメージだからさ」

「しばらくしてないが、昔は騎士団にいたからな。魔獣討伐で遠出する事も多かったし、しょっちゅう野宿だったぞ」

「へー……やつぱり王宮騎士団にいたんだ」

思った通りだなあ、とエイジヤは心の中で納得する。

王宮騎士団に所属するのは、王宮兵の中でも一握りの精鋭だけ。

貴族の子息達の花形職だが、完全な実力主義で、どれだけ力のある貴族でも縁故で入団させる事はできないという話だった。

「昔は、つて事は、今はもう退団したの？」

「……ああ、今はカルニアス王子の近衛みたいな事をやってる」

(わーっ、やつぱりー!!)

昨夜考えた通りだ。

近衛といえば、王宮騎士団の騎士の中でも更に選りすぐり。少なくとも、騎士団で一、二を争うぐらいの剣の腕が必要な上、王族の相談役としての役目もある為、しっかりとした身分と高い教養が求められる。

「……き、聞かない方が良かったかも」

「なぜ」

「だってなんか……そんな偉い人だと思つと、喋りにくくなつちゃうし。タメグチもどうかと」

「態度を変える必要なんてない。敬語はいらないっていうのは最初に言っただろう。」

正直、貴族のまわりもつた話し方は性に合わない。騎士団なんて言ってもそんなお上品なやつらの集まりじゃないんだぞ」

「フーン……」

確かに、騎士団には平民出身の剣の達人もいるし、町の酒場で飲んでいる騎士団の様子は、そこいらの男達と変わらないものだった。中には地位を傘に着て横柄な態度を取る輩もいたが、総じて気のいい連中という印象だ。

「ルチアがいつて言うんだから、気にしなくていいか」



「そつだ。お前に敬語で喋られると、こつちが落ち着かん。お前は自分の好きなように振る舞え」

ルチアの言い様は、自分の今の立場に居心地の悪さを感じているようにも思えた。

「でも、カルニアス王子の近衛として、立派な服を着て王宮に仕えている姿は、すごく似合うと思うな。

この任務を無事に終えたら、ご褒美に一回だけでいいからその姿を見せてよ」

ニコニコと無邪気に笑いながら言うエイジャに、ルチアは一瞬表情を強ばらせた。

「……そんな事で褒美になるなら、いくらでも見せてやるが」

「ほんと？ やったつ。楽しみだな」

きつと、カルニアス王子に負けないぐらい、キラキラに輝く高貴な姿が見られるはずだ。

(街の女達にも話してやるつ。カルニアス王子には、神様みたいにきれいな近衛がいらっしやるんだよつて)

妙に楽しそうなエイジャを横目に、ルチアはエイジャの言葉の意味を反芻し、きつと何の意味もないのだからと結論付けてため息をついた。

太陽が真上を通り過ぎ、少し日が落ちかけた頃、進行方向に人影を見つけた。

「何だ……？ 馬も連れないで」

人影は小さい。女のように見えた。

「倒れてる。どうしたんだらう」

馬を速めようとしたエイジャを、ルチアが静止する。

「一応、警戒しろ。ゆっくり近づくんた。お前は守りの術を頼む」  
カチリと、ルチアが剣を抜く音がする。エイジャも、自分とルチア

に守りの術を施す為詠唱した。

静かに近づく。やはり女だった。俯せに倒れているので顔は見えないが、服装から成人前の少女に見えた。

エイジャとルチアは顔を合わせる。「俺が行く」とエイジャが目で合図し、ルチアが頷いた。

「どうかされたんですか。お怪我は？」

馬から降りたエイジャが女に近づき、声を掛けた。

返事はない。生きているのかも分からない。エイジャはゆっくりと少女を仰向けに起こした。

肩にかかる黒鷲色の髪は土ぼこりで汚れ、目を閉じた顔には血の気がない。だが、耳を寄せると確かに息はあった。

「大丈夫、生きてるよ。気を失ってるだけみたい。でも……」

身体のおちこちにできた擦り傷、衣服もところどころが破れている。まるでどこかから、着の身着のまままで逃げ出してきたかのようだった。

その様子が、まるでかつての自分の姿を見るようで。

エイジャは、馬上のルチアを見上げる。

先を急ぐ旅で、厄介者に関わるなど、ルチアは言うだろうか。できるだけ距離を稼ぎたいと、さっき言われたばかりなのに。

何も言わなくても、表情からエイジャの言いたい事を察したらしい。

「そんな顔するな。もう少しいけば少し陰があるだろう。連れて行って介抱してやるわ」

ルチアの言葉に、エイジャはほっと胸を撫で下ろした。

岩陰に少女を横たえ、エイジャは水筒から水を手に取り、少女の唇に含ませた。

カラカラに乾いていた唇に水分が触れると、程なくしてうっすらと腫が開いた。

「……あ……」

何か言おうとする少女に、エイジャは怖がらせないよう微笑んで見せた。

「大丈夫、ゆっくり水を飲んで？焦らないで」

目線の定まらない様子の少女に、少しずつ水を飲ませる。少女は朦朧としながらも、必死で水を喉に送り込む。きつと何日も水分を摂れていなかったのだろう。

少女はいくらか意識がはつきりしたようだった。エイジャの顔を、不思議そうに見ている。

「あの……あなたは……？」

「俺は、エイジャ。東に向かう旅の途中なんだ。こっちは、相棒のルチア」

横で様子を見守っていたルチアを紹介する。

「君は？どこから来たの？どうしてあんな所に倒れていたのか、分かる？」

「……わ、わたし……」

問われて、少女は突然記憶が戻ったようだった。

「私、村の外で野盗に攫われて……アジトに運ばれて監禁されていたけど、隙について逃げてきたんです……！」

ダムが決壊したように、少女の両眼から涙が溢れ出した。

「ずっと走って……ここまで来れたけど、何日も食べてなくて……気を失ってしまったみたいで……」

「そうだったのか……辛かったね。もう大丈夫だよ。村はどこなの？」

「トープ村です」

「ああ、確かここから北にある村だったか。訪ねた事はないが……」ルチアが答える。

「そこはここからだいぶ遠いの？」

エイジャがルチアに尋ねる。言いたい事は分かっていた。

「馬で行けば半日程だろう。行くぞ」

ルチアの返事に、エイジャが表情を綻ばせた。

(8) 旅は道連れ、世は情け - 1 (後書き)

最後の最後に人名を打ち間違えるというミスをしていました(汗)  
その周辺をちょこつと修正しました。(9月26日)

(8) 旅は道連れ、世は情け - 2

少女は、名前をベルと言った。

年の頃は15、6だろうか、まだ幼さの残る顔立ちに、蜂蜜色のつぶらな瞳が愛らしい。

エイジャがベルの背中を後ろから抱く形で馬に乗せ、手綱を取る。

「すみません……。旅をお急ぎなのに」

申し訳なさそうに肩を落とすベルの小さな頭を間近に見ながら、エイジャはできるだけ優しく声を掛ける。

「気にしないで。こんな傷だらけの女の子を荒野に一人で放り出すなんて、そんな奴は男じゃないよ。」

それより、身体が辛かったら言っただけよ。」

ベルは少しエイジャを振り返り、思った以上に顔が近かった事に驚いたのか、勢い良く前に向き直って、身体を固くした。

「だい、大丈夫です……」

「ベル、君を襲った野盗はどんな集団だったんだ？規模は大きいのか？アジトから君が倒れていた場所まで、どのくらい離れているか分かるか？」

ルチアは騎士団時代の癖なのか、野盗の様子が気になるらしく、ベルに質問を投げ掛ける。

「すみません……。気が動転していたので、あまり詳しい事は分からなくて……」

ただ……。私と同じくらいの女の子が他にも5人位いました。皆、別の場所から連れてこられたみたいで……

見張りがいたので、どこから来たのか、とか、話す事はできなかつたんですけど」

「人攫いの集団か……。若い女ばかりを狙う集団があるって話は聞いた事があるが……」

「もう、ルチア。ベルは辛い目にあってやっと逃げ出してきたんだ

よ、今はそんな事思い出すのもきついんだから！そういう事は後にしてあげなよ」

エイジャがルチアを一睨みする。

ベルはますます身体を小さくして、「すみません」と俯いた。

「ごめんね、ベル。」

この人、見た目はこんなんだけど、あんまり女の子の扱いが分かってみたいなんだ」

「おい……」

突っ込みつつ、ルチアは確かにこのエイジャの女性の扱い方には敵わないな、と納得する。

どうやらベルはすっかりエイジャに心を掴まれてしまったようで、エイジャの話に答える類はうっすら赤く染まっている。

エイジャが先日、王都に住む女性達は皆とても優しく親切で、良くしてくれる人ばかりだ、という話をしていたが、それは対エイジャ限定の話なのではないか？と今更ながらに気付く。

この容姿に、どこまでも女性に優しい物腰。

女性にモテないはずがない。

こう見えて、王都には彼女の一人や二人はいるのかも……

「……………よね、ルチア？」

「えっ？……………何だ？」

「もう、何ボーツとしてるのさ。ベルが、村に着く頃には日暮れになるから、今日は村に泊まって行かないかって。」

せっかくだから、お世話になる？」

「そうだな、わざわざ村の外で野宿する事もないか……………」

「良かった、命の恩人ですもの。大したおもてなしはできませんけど、うちに泊まって行って下さい」

ベルからは野盗の話をもう少し詳しく聞きたいと思っていた所だ。村に送り届けて彼女の気持ちが悪く落ち着いたら、話が聞けるだろう。ルチアはそう考えていた。

人の手の入っていない荒れ地が続いていた景色も、トープ村に近づくにしたがって次第に木の数が増えてきた。

冒険者としてアストニエル国内各地を旅してきたエイジャも、この周辺を訪れる機会は今までなく、トープ村というのも初めて聞く名前だ。

ルチアはさすがにカルニアス王子の側近として国内の事は把握しているのだろう、訪れた事はなくとも名前と場所だけは知っていたらしい。

ベルの先導で馬を進めるうち、ぽつ、ぽつと民家が現れ始めた。

一軒の民家から体格の良い男が出てきたのを見て、ベルが声を上げる。

「……父さん！」

エイジャは馬を降り、ベルが降りるのを手助けしてやった。

「ベル！」

呼ばれた男は振り返り、走ってきたベルを腕に抱き止めた。

突然姿を消した娘が帰ってきたのだ、どんなにか嬉しいだろう。

ニコニコとその姿を見守っていたエイジャをベルが振り返る。

男がベルを連れて近づいてきた。

「話は聞きました。あなた方がベルを助けてくれたとか……お礼の申し上げようもありません。

ありがとうございます」

額が膝に付く程に深々と頭を下げて礼を言われ、エイジャは少し慌てて答えた。

「助けたって言っても、俺達は今ここで送ってきただけですから……」

……」

「いえ、娘はもしもあなた方に助けてもらえなければ、命はなかっただろうと。」

何も無い家ですが、どうか今晚はうちにお泊まり下さい。お口に合うか分かりませんが、娘に夕飯の支度をさせますので……」

男は大きな身体を折ってぺこぺこ頭を下げ、ベルはその横ではにかむように微笑んでいた。

客室に通され、エイジャとルチアは荷を降ろして身体をほぐした。小振りのテーブルを挟んで左右にベッドを配し、広くはないがきれいに整えられた部屋である。

窓のないのが少し気になったが、壁にかけられた絵も趣味が良く、そこいらの宿屋よりもよっぽど良い部屋だと言える。

「野宿の予定が、こんないい部屋に泊めてもらえる事になってちょっとラッキーだったね」

「まあ、少し遠回りになったがな。フェルダにはお前から謝ってくれ。すっかり気に入りのようだからな」

ルチアと相部屋なので胸のサラシを取ってゆっくり休むというわけにはいかないが、野宿よりは随分マシだ。

「夕食の後でなら、ベルに野盗の話聞いてもいいか？」

ルチアがエイジャに尋ねる。先程、不躰に話を聞き出そうとしてエイジャに咎められたのを気にしているらしい。

「いいんじゃないかな。お父さんと会って、ベルもだいぶ元気になったみたいだし。」

でも夕飯の支度なんてさせて、悪かったかな。俺達が見つけた時は、立ち上がるのもやっとなって感じだったし……

俺、支度を手伝ってくるよ」

エイジャがそう言って、部屋のドアノブを回した。

ガチャガチャ、と金属のぶつかる音。

「……？」

「どうした？」

ルチアが声を掛ける。

「……鍵が掛かってるみたい」

「何だと？」



ルチアがドアに近づき、ノブを回して扉に体重を乗せる。

「……どういう事だ？」

ドンドン、と扉を叩き、エイジャがドアの外に声を掛ける。

「すいませーん！なんか、扉が。何か引つかかっているみたいで、開かないんですけど！」

何度か呼びかけた後、扉の向こうから、ベルの父親の声が返ってきた。

「うるせえ！ドンドン叩くんじゃねえ！この部屋には鍵をかけたんだ、大人しくしてろ！」

エイジャはきよとした顔でルチアと顔を見合わせた。

「え、なんで？」

問いかけたエイジャの声に、ベルの父親はあきれたような声で返答する。

「まだ気づかぬえのか、めでたい奴らだな。

てめえらのような女みてえな顔した奴らは高く売れるんだよ。

せいぜい素敵なご主人様に買って頂けるように祈るときな」

下品な笑い声を残して、ベルの父親は扉の前から去って行った。

「……だって」

エイジャがルチアを振り返る。

「ハア……人攫いはこつちだったって事か。

確かにお前はいい値が付きそうだなあ」

「何バカな事言ってるの。どうする？」

「どうするって、お前の魔術でこの鍵開けられないのか？」

「物理的に掛けられた鍵を開ける事はできないよ。ルチアこそ剣でこの扉切れないの？」

「こんな重い扉は無理だ。剣が折れる」

「役立たずー」

「お前が言っなよ」

二人揃ってため息を付く。

「とりあえず、俺達が売り物ならずっとこの部屋に閉じ込めっぱなしってわけにはいかないだろう。」

場所を移す時にでも扉が開く。そうすればまあ、何とかなるだろう。今はどうしようもないな、とルチアがベッドに横になる。

エイジャももう一方のベッドに腰掛けた。

「ベルは……分かってて俺達を誘導してきたって……事だよな」「そうだな」

エイジャがうな垂れる。その様子を見て、ルチアが身体を起こす。

「まあ、気にするな。あの状況じゃ、誰だって助けてやろうとする。俺だって、行き倒れの女をほったらかしにして先を進めるなんて男じゃないと思ってるさ」

「うん……でもごめん。大事な旅の途中で、足止め食っちゃって……」

「ま、長居するわけにはいかないがな。」

ああいう奴らは攫った人間を長くは手元に置かない。さっさと売って金にするはずだ。

きつと今晚のうちに場所を移そうとするから、その時を逃さないようにしよう。

……ベルに手加減するなよ。お前、女に甘いからな」

凶星を突かれて表情がこわばったが、うん、と力強くエイジャは頷いた。

(8) 旅は道連れ、世は情け - 3

窓がないので今がどの時分なのかは分からないが、おそらく夜更け近くになって扉の向こうに現れた気配に、目を閉じて休んでいたルチアが先に顔を上げた。

まどろんでいたエイジャも気がつき、ドアに意識を集中させる。数人の男の荒い足音が近付き、ガチャリと鍵を開ける音がした。

(打ち合わせ通りに)

お互いに目で合図をして、どこかどか部屋に入ってきた男達を無言で迎える。

一見、普通の村人に見える男達だが、表情は醜く歪み、二人を品定めするように、無遠慮に眺めてくる。

一番最後に入ってきたのはベルの父親。態度から言つて、この男達を束ねる首領格である事が分かる。

「こいつらか、ベルが連れてきた上玉だつて？」

「確かに高く売れそうな顔してるなあ。文官風の優男つてのはお前だな……そっちは、本当に男か？女じゃねえのか？」

「かーわいそうに、震えてやがるぜ、こいつ」

腕を掴まれ、エイジャは身体を固くして精一杯怖がつて見せた。

ルチアも男達に囲まれ、抵抗する気もないかのように、憔悴した表情を見せる。

「ベルの言つた通りだな。この剣は飾りか？見た目だけは大層だな、これも高く売れそうだぜ」

一人の男がルチアから剣を奪い、上機嫌で自分の腰に差した。

ベルの父親がその後ろで、指示を飛ばす。

「早くそいつら縛つちまえ。まあ、可哀想に怖くて抵抗もできねえみたいだな」

エイジャとルチアは、抵抗せずおとなしく縄をかけられ、男達にうながされて部屋を出た。

先頭をルチアから剣を奪った男が歩き、その後ろにルチア。ルチアの左右に男が一人ずつ、その後ろにエイジャが続く。エイジャも左右を男達に固められ一番後ろをベルの父親が歩いている。

廊下を進み、玄関から外へ出る時、エイジャの視界の端に黒鷲色の頭が映った。

すぐに家の陰にその姿は消えたが、馬上で近くに見たベルの髪色に違いなかった。

「男に騙されるのはバカだが、女に騙されるのはお人好しだ」とか何とか言っただけルチアはなぐさめてくれたが、我ながら情けない。

どうも自分は女性に甘い。それは今まで、たくさんの女性の優しさに助けられてここまで生きてこられたからなのだが……

動き出すタイミングを見逃さないよう、前を歩くルチアの背中に気を配る。

しばらく歩かされると、二頭引きの幌馬車が停まっているのが見えてきた。

詰めれば5、6人程は乗れそうな荷台だが、見たところ先客はおらず、エイジャの後ろにも他に連れて来られた人間はいないようだ。

(捕らえられたのは俺達だけか……良かった)

ルチアが一瞬後ろを振り返る。その目が合図を送ったのをエイジャは見逃さなかった。

先頭の男が馬車の荷台に手を掛けて振り向いた時、ルチアが動いた。

一瞬、身を屈めたと思うと、男に体当たりをくらわせてバランスを崩させる。

「なっ!!」

同時に、詠唱を終えたエイジャが術を発動させる。瞬間、ルチアを後ろ手に縛っていた縄から小さな炎が上がり、横に付いていた男達が驚いて身かわす。

エイジャの左右を固めていた男達が慌ててルチアを捕らえようと腕を伸ばしたが、すでに縄は燃え落ち自由になった右腕で、ルチアが男から取り戻した剣を抜いていた。

半身を翻して一人、二人と男を切り倒し、続いて後ろから飛びかかってきた男も、勢いのまま薙ぎ払う。

騒ぎに気づき、村のあちこちから男が飛び出してきた。

エイジャは男達の手を逃れながら詠唱を続ける。

「こいつ！魔術師か！」

捕らえようと追いかけてくる男達に雷撃を落としながら走り、同時に自分を縛っている縄を発火させる。

「あつっ……！」

炭となった縄を払い落としつつ、馬車の御者席へ走り込む。

手綱を取るうとして、そこにいた人物にぎよっとして目を見張った。

「ベル！」

「ハイ いらつしゃい、エイジャ」

咄嗟に詠唱しようとしたエイジャの口を、ベルの手の平が塞ぐ。

「大丈夫、逃がしてあげるわよ。ルチアは？まだ来ないの？」

「えっ？えっ??」

混乱するエイジャに、ベルがニツと八重歯を見せて笑う。

「また騙そうとしてるのかって思ってるでしょ、まー信用してくれとは言いにくいけど！」

その時、左から御者席に踏み込んでこようとした男の手の甲を、ベルは脇から抜いた短刀でぐさりと差した。

御者席から豪快に蹴落としてこちらを振り向く。

「このお馬さん達、あなた達の馬でしょ。このまま逃げるわ」

言われて前を見ると、たしかに馬車に繋がれているのは見覚えのある愛馬だ。

（ベルに手加減するなって言われたのに！どうすればいいんだよっ！）

その時、馬車が大きく揺れた。振り返ると、御者席に乗り込んだル

チアがベルを見て言葉を失っている。

「なっ、ベル、お前！」

「はいはい、出るわよっ！」

ベルが手綱を引く。馬車は勢い良く走り出した。

猛スピードで林を抜けると、先程通った荒れ地が見えてくる。

ベルが馬車の速度を少し落としたのを見計らって、ルチアがベルを問いつめた。

「どういう事だ、ベル。お前はあいつらの一味じゃないのか」

「んー、まあそうとも言えるけど、一味っていう程深い付き合いでもないし、だいたい私も捕われてたみたいなものだったし」

「そうだったんだ！？ベルもあいつらに捕まってたんだね」

「そうなのっ、エイジャ！私、逃げ出したくても逃げられなかったの」

瞳をうるませてエイジャに訴えるベルに、ルチアが呆れたように返す。

「おいエイジャ、またすぐ信用するな……」

ベル、そんな言葉やすやすと信じられるわけないだろう。自分のやった事を分かっているのか」

「あなた達なら、逃げ出せるだろうと思ってたわよ。でも、ちゃんとかいっつらに嘘の情報流しておいたでしょ？」

文官風の優男に、女みたいなのひよろつとした男の二人連れ。ご大層な剣は差してるけどただの飾りで、抜いた事もなさそうだななんて話しておいたんだから」

「最初から、自分の逃走を手助けさせようとしてあの村に連れて行ったっていいのか？」

「うーん、そうなればいいなとは思ってたけど、ほら、あの時もずっと遠くから村の男達が監視してたのよね。村に着くまでに私が変な動きをしたらすぐ襲ってくる手はずになってたし。」

第一、このお馬さん達を馬車に繋いでおいたのは私よ。これでも信用できない？

それに、あいつらが馬で追ってこないのは不思議じゃない？」

「そういえば……全然追いついてこないな」

「さつき、村の馬小屋にいる馬を全部放して村の外に逃がしておいたのよ。足がないから追ってこられないってわけ」

涼しい顔で言つてのけるベルは、とても保護した時の弱々しい少女と同一人物とは思えない。

「分かった、とりあえずその言葉だけは信じる。」

「じゃあ、一度止めてくれ。馬車のままではスピードが遅くなるし、目立つからな」

りょーかい、と返事して、慣れた手つきでベルが馬車を止める。

「あー、この馬車、街で売ったら結構いい値になりそうなのになあ」  
馬車から馬を外しながら、ベルが繰り言を言う。

「じゃあお前がそうしろ。行くぞ、エイジャ」

自分の馬に跨がったルチアが、同じく馬に跨がったエイジャに声を掛ける。

「えっ！ちよつと待ってよ！私置き去り！？」

「どうしてこのままお前を連れて行かないといけないんだ。」

お前の言葉が真実なら、やつらは追ってこられないんだろう？  
後は自分で何とかしろ」

「ひつどい！騙したわね！卑怯者！」

「どちらが卑怯者だ。騙したのはお前の方だろう」

逃がすものかと馬の前に立ち塞がるベルに、ルチアが冷たく言い放つ。

「ルチア、夜更けに女の子一人、こんな所に置いていけないよ。  
次の街か、せめてもう少し人通りのある所までは連れて行ってあげない？」

「エイジャ！優しいっ！！」

ベルが拳を握りしめてエイジャを見つめる。

「お前、お人好しにも程があるぞ……」  
ルチアが呆れたようにこぼす。

「馬はなくても、あいつら徒歩で追ってくるわよ！村の正体を外部に知られるわけにいかないもの！

私一人、徒歩で逃げてたら絶対に捕まっちゃうわよ！殺されるかも！夢見が悪いと思わないの!？」

「そうだな、あの村の正体を知ったやつは生かしておくわけにはいかねえな」

ふいに後ろから掛けられた声に、エイジャとルチアは虚を突かれて振り向いた。

声の主は二人を素早く抜き去り、次の瞬間にはベルを羽交い締めに乗らえていた。

「ベルのお父さん!」

「いやエイジャ、これお父さんじゃないから。お父さんって言ったの、嘘だから」

エイジャの天然発言に、羽交い締めになれ喉元に短剣を突きつけられながら、ベルが突っ込む。

「ベル、馬を逃がしたつても嘘だったのか？」  
ルチアが尋ねる。

「ほお、やっぱり馬を逃がしてくれたのはベル、お前か。  
俺の馬だけは戻ってきてくれたぜ。お前が良く躡けてくれたお

かげでな」  
ベルがぎりつと唇を噛んだ。

「カルロス、私はもうあんだの一味を抜ける。私達の事は放っておいて。村の事は絶対に口外しないわ」

「ほお、だからここは逃して下さいってか？そんな要求が通ると思うか？このアマ」

腰の剣に手を掛けたルチアに、カルロスの制止が飛ぶ。



「おつと動くな。仕方がねえからお前らは逃がしてやるよ。この女は置いていきな。」

なかなか役に立つ女なんだな。悪いようにはしねえ、安心して去りな」

ベルの表情が曇る。

エイジャはじつと黙ってその様子を見ていたが、やがてルチアに顔を向けた。

「分かった。行こう、ルチア」

「えっ、おい、いいのか、エイジャ」

ルチアは少し慌てて、馬を進ませ始めたエイジャを追う。

ベルは、何も言わなかった。

「言っておくが、俺らの仲間はそのいらの街にうようよしてる。」

夜道を安全に歩きたきや、余計な事は言わん事だな」

後ろ姿にカルロスが声を掛けた。

二人を乗せた後ろ姿が闇に紛れたのを見届け、カルロスが短剣を持った手を下げ、羽交い締めを解いた。

俯いたベルの腕を取り、自分の馬に向かって歩き始める。

「行くぞベル。てめえみたいいなすれっからしが、まっとうな道に戻ろうなんて、図々しいんだよ。」

てめえは俺らみたいいなやつらと一緒にいるのがお似合いだ」

ベルはうなだれ、腕を引かれるままカルロスの後に続く。

「ファイアマ・エスト！」

闇の中から詠唱が響いた、と思った瞬間、カルロスの頭に上空から炎が降り注いだ。

「うわ……ああっ！！！」

驚愕したカルロスが思わずベルの腕を放す。

髪から炎を上げるカルロスの姿にあっけにとられていたベルの体がふわりと浮き、背中の方へ腕を引っ張られた。

「キヤッ……」

何が何だか分からないまま、ただ近くにあったものに必死でしがみつく。

「大丈夫？荒っぽかったね、ごめん！」

頭上から掛けられた声は優しい。

「エイジャ……！」

「しっかりと掴まって。エス・ファ・フォブラーヌ！」

ベルを抱いたまま、馬上からエイジャの詠唱は続く。カルロスを含む炎は勢いを増す。

「こ……の……っ……クソ魔術師が……っ……！」

エイジャの方へ走り込んでこようとしたカルロスの背後を、ルチアが捕らえていた。

躊躇ない一刀のもとに切り伏せる。

「がああ……っ……！」

カルロスの伸ばした腕はベルに届かず、その場に倒れ込んで動かなくなつた。

(8) 旅は道連れ、世は情け - 4

「元々、カルロスがいなけりゃ何もできない奴らの集まりよ。もう追ってくる事はないわ」

焚き火を前にして、ベルが言う。

闇の中をランプの灯りを頼りに荒れ地を進み、ベルを保護したあたりを通り過ぎた所で、丁度良い岩陰を見付けた。近くには小さいが川も流れている。

朝になるまで、少しでも野宿をして身体を休める事にした。

「これだけははっきり言っとく。あんた達には感謝してる。ありがとう」

ベルは頭を下げた。

「なんだ、殊勝だな。気持ち悪いぞ」

ルチアのおんまりな言い草に、エイジャが口を尖らせる。

「そんな言い方ないだろ、ルチア。」

ベル、気にしないで。事情があつたんだし、君に助けられたのは事実なんだから。

ちゃんと、人のいる所までは送っていくから、心配しないで」

「エイジャ……」

川でくんできた水で湧かした、温かいお茶を手渡され、ベルは瞳をうるませた。

「お前のその性格のせいで、この先俺は何度も命の危険にさらされるような気がしてならん……」

ルチアの呟きは誰にも受け取られる事なく、闇に消えていった。

日がすっかり上がり、仮眠を取った三人は先を急いで出発した。

カルロスが乗ってきた馬にベルが乗り、三頭の馬が進む。

横並びに三頭の馬が並んで歩いているのには訳があった。

出発前。

川へ水を汲みにエイジャが座を離れた隙に、ベルがルチアにすり寄った。

「ね、あんた達の旅の目的ってどこ？私も連れて行ってよ」

「なんでお前を連れていかなきゃならないんだ。近くの街まで同行してやるだけで有難いと思ってくれ」

「私、結構役に立つわよ。ただの観光旅行でフラフラ旅してるわけじゃないんでしょう？」

「役に立つか立たないか以前に、まったく信用できない。いつ裏切られるか分からん娘を連れて歩く程の余裕はないからな。」

「だいたい、何で俺達に付いてきたいんだ。お前の行きたい場所へ勝手に行けばいいだろう」

「ルチアが好きなの！」

「嘘つけ」

「嘘だけど」

「どっちかと言うと、お前が好きなのはエイジャだろう」

「そう言われて、ベルの頬が一気に赤くなったのを目にして、ルチアの方が驚いた。」

「なっ・・・なっ！何それ！そんなんじゃ！」

「……お前、そうしてると年相応の娘みたいだなあ」

「感心したようにじろじろと顔を眺めてくるルチアに、ベルが牙をむく。」

「うるさいわねっ！そんなんじゃないのよ！」

「お前の方が俺の事が好きだとか言ったんじゃなかったのか、とルチアは心の中でつつこむ。」

「……カルロスの一味にはね、私から近付いたのよ」

「やっぱりそうなんじゃないか。捕われたなんて言ったのは嘘だったんだな」

「そりや最初に近付いたのは私からだっただけど、逃げ出せなくなつたのは本当よ！」

いつも監視が付いていたし、一味を抜きたいなんて言つたら監禁されそうだったんだから」

「だいたい、なんで自分から近付いたんだ」

「……人攫いの情報を探ってるの」  
ベルの瞳が揺らいだ。

「肉親でも攫われたか？」

ルチアが問う。ベルはその質問には答えず、自嘲めいた笑顔を作つた。

「おかげで、人攫いの片棒担ぐ羽目になつたけどね」

「俺達に付いてきても、お前の望む情報は得られないと思うが」

「思い当たる筋はもう当たり尽くしたのよ。全然手掛かりに近づけないから、方向を変えてみようと思つて。」

ルチアのその剣、王宮騎士団でしょ」

言い当てられて、ルチアは瞠目した。

「あんた達の事情はよく分からないけど、王宮関係者と一緒にいれば、普通は手に入らない情報にも触れられるじゃない。」

ね、迷惑は掛けないから、お願い！連れて行って。」

逆に、私みたいなものしか知らない情報筋だつてあるのよ。お互い様で役に立てる事もあると思うわ！」

ベルは顔の前で手を合わせた。

「……連れて行くも行かないも、だめだつて言つたつてお前勝手に付いてくるんだろっ」

「……いいのっ？」

目を輝かせたベルに、ルチアが釘を刺す。

「そのかわり、もう俺達を騙すような事はするな。」

特に、エイジャに嘘をつくな。これ以上騙されたら、あいつ女性不信になりかねん」

「……ルチアとしてはそっちの方がいいんじゃないの……」

ぼそつと呟かれた言葉に、ルチアのこめかみがぴくりと動く。

「何か言ったか？」

「別にっ。じゃ、これから私達は旅のパートナーね！よろしく」  
ルチアが差し出された手を無視していると、そこにエイジャが戻ってきた。

「何？どうしたの？」

「あつ、エイジャ！ルチアが、私も旅に付き添っていいって！」

「えっ、そうなんだ！？ルチア、いいの？本当？」

「いいも何も、付いてくるって言って聞かないんだ、仕方ないだらう」

ルチアが心底迷惑そうに答える。

「私、役に立つからっ　よろしくね、エイジャ！」

ルチアに無視された握手を、エイジャに向ける。

「うん、よろしく！ベル」

エイジャは手を握り返し、ニコリと微笑んだ。

ベルはエイジャに馬を並べて進み、しきりに話しかける。

下手な事を言わないか、また何かエイジャが騙されないかと心配で、それにルチアが馬を並べる。

それで三頭の馬が横並びに進む羽目になっているのだった。

「フェルダさんにベルを紹介しなくちゃね」

エイジャの言葉に、ベルが尋ねる。

「なに、誰？フェルダって？エイジャの仲間？」

「次の街で待ち合わせてるんだよ。すぐきれいな女の人……  
に見える、男の人だよ」

「何それ。エイジャの事？」

「えっ？いや、俺？なんで？」

噛み合っているのかいないのかよく分からない会話を耳にしながら、

ルチアは考えを巡らせる。

もちろん、ただベルの勢いに押されて同行を承諾したわけではない。もう何年も前から、アストニエル王国内で頻発している人攫い事件。王宮にもその報告はあがってきており、騎士団が調査にあたっている。

だが、ある一味を摘発する事ができても、助け出せるのはその時捕まっていた人達だけ。

それまでに攫った人間をどこに流したのか、途中までは辿れてもその先が分からないまま終わってしまう。

あまりにもその足取りが掴めない為、国外へ連れ出されているのではないかという見方が強まっていた。

そんな中、シアル大公周辺に人身売買の一味の影があるという情報が入ってきたのだった。

自国内での人身売買ももちろん人として許されるものではないが、それが国外から攫ってきたものとなると、これは侵略行為の一種。不可侵条約に抵触する国際問題となる。

ベルがこれまでに人攫いの一味に接触して得てきた情報の中には、王宮騎士団が追ってきた中では手に入らなかったものもあるだろう。油断のない相手ではあるが、有益な情報を得る為には仕方がない。

ルチアは、そう考えていた。

（ベルの事情はおいおい聞き出していくとして……本当に目的はそれだけなのか、警戒していなくてはな……）

必要があれば、フェルダに催眠術をかけさせるか……）

「そっか……じゃ、ベルはその双子の弟さんを探してるんだね」

「うん。もう5年前よ。体が弱くて、気も小さくて。私みたいに立

ち回れるような子じゃないの。だから、心配で……」

ベルの言葉が耳に立ち、ルチアは二人の会話に意識を向けた。

「なんだって？」

「ルチア、何だ、聞いてなかったの？」

ベルはね、5年前に攫われて行方不明になっちゃった、双子の弟さんを探してるんだって。その為に、いろんな人攫いの一味に接触して探ってきたんだよ」

「ああ……、そうなのか」

「そうなのか、じゃないでしょ。さっき話したじゃない。まったく覚えてないわけ!？」

ベルが突っかかる。

「いや、双子の弟ってのは初めて聞くな。

そこらへんはあまり話したくないのかと……」

「聞かれれば必要な事は喋るわよ。

だから変な薬飲ませたり、術かけて喋らそうとしないでよね」

「やだな、ベル。そんな事するわけないだろ」

ベルの言葉を冗談と受け取ったエイジャが屈託ない微笑みを向ける。

対照的に、凶星を指されて表情を強ばらせるルチアだった。



## (9) 揺れる心

昨夜の一件でロスした分を取り戻すべく、三人はひたすら馬を前に進めた。

明日には次の街、ザクセアに到着したい。

代りばえのしない荒れ地が続くが、日が落ちる前に野宿に適した木陰を見つける事ができた。

馬を繋いで焚き火を起こし、携帯食料を分け合いながらお互いの労をねぎらう内、話はベルの昔話になった。

「ベルの弟かあ……双子って事はそっくりなの？」

「あんまり、顔は似てないかも。性格は……正反対だって言われてたわね」

「つまり、どこも似てないんじゃないか」

「私の家族は、旅芸人だったの」

ルチアの突っ込みには答えず、ベルが続ける。

「旅芸人！？すごいね」

エイジャが素直に驚き、ベルは少しはにかんだ。

「別にすごくないけど。父さんがリュートを弾いて、母さんが歌って。家族だけの小さな一座よ。」

弟は楽器が上手なの。笛もうまかったし、ピアノのある劇場だったらピアノも弾いたし。

私だけ、楽器が下手で。歌も母さんみたいにうまくなかったから、タンバリンを叩いて踊ってたの」

ベルが手に持っていたカップをタンバリンがわりに、タンタン、と打ち鳴らして見せた。

エイジャが楽しそうに笑う。

「素敵だね」

ふふっ、とベルも微笑みを返す。

「私はこんな性格で、楽器の練習もまともにやらなかったから、父さんや母さんにもよく怒られたし、弟ともしょっちゅう喧嘩してたけどね。」

でも……楽しかったな。今思えば」

ふっと表情が曇る。その変化に、エイジャが気遣わしげな視線を向ける。

「旅の途中で、こんなふうには野宿してた時だった。」

どこからか知らない男達が現れて……」

そこでベルは言葉を切り、俯いた。

「ベル……いいんだよ、無理に話さなくても」

エイジャがベルの肩に手を添える。

ベルはしばらく何かをやり過ぎすように沈黙していたが、一つ息を吐いて、話を続けた。

「……父さんと母さんは殺されたわ。」

私と弟は連れて行かれた。

私はそいつらのアジトでしばらく暮らしてたけど、弟はすぐにどこかに売られた。

そして、私はそいつらの元から逃げ出して、……色々あって、今はエイジャと一緒に」

感情が溢れ出す前に、一気に、簡潔に、話しきった。

エイジャはベルを抱き寄せた。エイジャの肩口に顔をうずめ、ベルはしばらく動かなかった。

「……ごめん。なんか……、どうかしてるわ。気が緩んだかな。川で顔洗ってくる」

ランプを手に立ち上がり、ベルは座を離れた。

エイジャも心配そうに腰を浮かせたが、ルチアの「そっとしておこう」という言葉に、頷いてその場に座り直した。

「大丈夫か？お前までひどい顔してるぞ」

ルチアがエイジャに声を掛ける。  
エイジャは力なく微笑みを返して、また俯く。

両親を目の前で失い、たった一人で行方不明になった弟を追ってきたベル。

自分と似た境遇を辿ってきた少女。

(でも、俺は失ったものからずっと逃げてきた……)

ベルは、弟を取り戻す為に、憎むべき相手に自分から近づいて……

…必死に生きてきたんだ……)

ぐるぐると、まとまらない思考が頭を巡る。

(「一番大事な事を間違えなければ、選択を誤る事はないはずよ」  
フェルダに言われた言葉を思い出す。

一番大事な事は……？

自分に課せられた使命を果たす事。

戦争を起こさせない事。

皆の無念を晴らす事。

目の前で消えていったたくさんの命を思い出す。

燃え盛る炎。泣き叫ぶ声。

憎き相手の怒声が耳に蘇る。

肌が総毛立つ。

「エイジャ！」

突然、俯いていた顔を上向けられ、エイジャは目を瞬かせた。

「な……に、ルチア、どうしたの？」

エイジャの頬に両手を添え、ルチアが顔を覗き込んでいた。

「どうしたの、じゃない……何度も呼んでたのに、気づかなかったのか？」

「あ……ごめん。ちょっと考え事してて……」

ふう、とため息をつき、ルチアはエイジャの頬から手を離してエイジャの左に座った。

「ベルの素性に同情するのは当然だが、お前まで一緒に落ち込んでどうする」

「……俺、落ち込んでないよ」

ルチアは何も言わず、指先でエイジャのまぶたをぬぐった。触れられて初めて、自分の瞳が濡れていた事に気づく。

「……ただ同情しただけじゃないんだろっな。」

お前にも何か事情があるんだろう……」

フェルダから何か聞いたのだからっか。

エイジャは、秘密を抱えている事を責められるのかと、緊張に身を固くした。

静寂の中、パチパチと火がはぜる音だけが夜の闇に吸い込まれていく。

しばらくの沈黙の後、ルチアが再度口を開く。

「今は言わなくてもいい。」

……いつか、話してくれれば。力になる」

「ルチア……」

エイジャは顔を上げ、ルチアを見た。

その目は、何か事情を隠しながらもそれを明かさなないエイジャを責めるようなものではなく。

ただエイジャの傷をいたわるように、優しくかった。

「ありがとう……」

ルチアの気持ちに答えるようにエイジヤは精一杯微笑んでみせたが、その動きに合わせて目尻にたたえていた涙が、一滴こぼれ落ちた。一瞬息苦しさを覚えたルチアが、ぐっ、と両手を握り締めた時、後ろから甲高い声が響いた。

「くらーーーーーーーっ!!!」

私がちよつと離れた隙に、何やってんのよっ!!!」

さっきこの場を離れた時のしおらしさはどこかに消え、すっかり元の勢いを取り戻したベルが走り込んできて、エイジヤとルチアの間割つて入る。

「ルチア……あなたとはいつか決着つけなきゃいけないみたいね」

「何の話だ。俺は別に、エイジヤが落ち込んでいたから励まそうと」  
「そうだよベル。ルチアは何も悪い事してないし、ベルの悪口なんて言つてないよ」

「私の悪口ですって!? どうせあんなペテン師の身の上話信用できないとか、あばずれに騙されるなとか、女は皆悪魔だとか、ある事ない事吹き込んでたんでしょっつ、変態!!!」

エイジヤに抱きついてルチアに牙を向くベル。

「お前……なんかその言い様、俺もお前も両方傷つけてるぞ」

「よ、良かった、ベル、元気になったんだね」

湿っぽい空気は一瞬で吹き飛び、ルチアを罵るベルの罵声が響く中、夜は更けて行つた。

太陽が真上を通り過ぎた頃、ようやく見えてきた街の姿にベルが声をはずませる。

「ザクセアの街よ! やつと着いた!」

嬉しそうに、少し馬の足を速めたベルの後ろ姿を目で追いながら、エイジヤがルチアに尋ねる。

「フェルダさんとは待ち合わせ場所とか時間を決めてあるの？予定より一日遅れちゃったけど……」

「ああ、居場所は分かってる。」

「それよりお前、もう大丈夫なのか？」

昨夜、戻ってきたベルに会話を中断されてからは、ベルがべったりとエイジャにくっ付いていて、二人で話す隙がなかった。

「うん、大丈夫」

「無理するな。大丈夫じゃない時はそう言え。嘘をつくな」

「……んー、また、大丈夫じゃなくなる時もあるかもしれないけど、今は大丈夫。これが正直なところ」

「そうか」

「ルチア、あの……ごめんね。」

俺、任務の事だけ考えてなくちゃいけないのに、自分の事で頭がいっぱいになっちゃって、わけわかんなくなってる……

その、いつもはこんなじゃないんだ。ちゃんと、一人で依頼をこなしてるんだよ」

ルチアは黙って言葉の続きを待つ。

（ルチアといるとなんか、調子が狂う……力になるとか、無理するとか、そういうふうに言ってくれるのは嬉しいけど、自分が弱くなる気がする……）

「あんまり……」

「ん？」

「甘やかさないでね」

「へ？」

（ルチアが優しいから、俺、すっかり頼り切ってた。しっかりしなくちゃ）

「なんだかよく分からんが、元気になったのならいい。」

お前が笑ってれば俺も安心できる」

ぼろっと口をつけて出た言葉に、ルチアは自分で少し驚いた。

そうだ、エイジャが不安がっていたり、悲しそうにしている顔を見

ると、自分がひどく落ち着かないのだ。

周りの人間の感情にこんなふうには振り回される事などなかったはずだが……

腑に落ちない気持ちで横を見るが、エイジャは笑顔を取り戻している。

とりあえず、こいつが笑っていればいいか。

ルチアはそんなふうには、無理矢理結論づけた。

## (10) ザクセアの占い師

ザクセアは、王都に次ぐ規模を誇る大都市だ。

様々な商人がこの街で事業を起こし、各地から人や物が集まる。

王都から離れている為に王宮の目が届きにくく、犯罪すれすれの商いも活発で、それがまたこの街独特の熱気を生み出している。

ルチアは王宮騎士団として任務の途中で何度も立ち寄っているし、エイジャも王国東部で依頼をこなす時にはこの街に宿を取る事も多い。ベルは過去にしばらくこの街に住んだ事もあるらしい。

歩いているだけで四方八方から客引きの声が掛かる。変わらない街の様子に苦笑いをこぼしながら路地を進む。

「フェルダさんの家はどこ？」

「家というか、店だな。ほら、そこだ」

ルチアが指し示した先には、商店に挟まれてこじんまりとした民家が一軒立っていた。

店だとルチアは言うが、看板もなく、窓がないので中の様子を伺い知る事もできない。

知っていなければここが店だとは誰にも分からないだろう。

エイジャが面食らっていると扉が開き、若い男性が一人足早に店を出てきた。

入れ替わりに中に入ると、中は狭い待合室のような部屋。奥にドアが一つ。

ルチアがドアをノックする。

「フェルダ、俺だ。遅れてすまない」

ギイとドアが開き、フェルダが顔を出した。

「先に謝られちゃ怒れないじゃないの。ルチアのキス一つぐらいお詫びにもらってやろうと思ってたのに」

「勘弁してくれ。事情は後で話す」

「あら、あなた……」



フェルダがベルに気づいた。ベルは初対面の美女に少し緊張した様子で、いつになくしおらしい。

「遅れた理由は彼女？」

「……若いのに苦労してるのね」

ベルが目を見開く。

「なんで分かったのかって顔ね。まあまあ、それくらい分からなくちゃ商売がなりたたないって。」

ようこそ、占い師フェルダの館へ。さあ、中へどうぞ？」

フェルダは戯けたように礼を取り、三人を部屋に招き入れた。

「あなた……占い師なの？その、どんな事でも分かるの？」

ベルは掛けるように促された椅子に座るやいなや、フェルダに問いかけた。

「どんな事でもってわけじゃないけどね。」

「……まあ、あなたの場合、探しものにはいまだ会えず、って所かしら？」

ベルはますます目を見開いて硬直した。

「そ、そうなの！！お願い、教えて！私、攫われた双子の弟を探してるの！」

どこにいるのか、分からない！？」

息せき切って、ベルはフェルダに迫った。

「ごめんなさいね、そこまでは分からないわ。」

私に見えるのは、目の前にいる人間の心の揺らぎと、魂が負ってきた傷の存在……まあ、そのぐらいね。

占い師なんて、それさえ分かればできるのよ。後は、お客さんが自分で喋ってくれるから」

ベルが、あっと手を口に当てる。

「何よ、それじゃインチキじゃない」

憎々し気にベルがつぶやくと、フェルダはくすりと笑みをこぼした。  
「さて、どうかしら。これをインチキと呼ぶか、奇跡と呼ぶか……  
それはお客さんが決める事よ。」

あなたの弟さんの居場所を、水晶玉で見つける事はできないけど……」  
そう言つて傍らからヒラリと一枚のメモを取り出す。

「でも、ヒントはあげる。最近この街にできた、とある店の住所よ。  
次々に勤めていた子達がいなくなつてる。王都にある本店に転勤  
したんだつて話だけど、店の裏手から出た馬車が王都のある西じゃ  
なく、東に向かつて出発するのが何度か目撃されてるわ」  
フェルダはうやうやしく、ベルにメモを手渡した。

「あなたの探し人に近づく情報が手に入るかもしれない……くれ  
ぐれも気を付けて。ラッキーパーソンは文官風の色男と、女の子み  
たいな男の子」

エイジャは目をぱちくりと瞬かせ、ルチアはため息をついた。

メモを手に店を飛び出したベルをエイジャが追ひ、残された部屋で  
ルチアがフェルダに問う。

「どういう事だ、あの情報は？」

「あなた達と入れ替わりに行つた坊やがいたでしょう？彼の恋  
人が、その店で働いているらしいの。」

稼ぎがいいから店をやめるわけにはいかないつて恋人は言うけど、  
妙な噂も耳にするんで、彼氏としては心配で仕方がないのね。

分かりやすく思い詰めた顔して来たから、何かひどく不安を抱えて  
いるんですね、つて聞いただけで、ペラペラ喋ってくれたのよ。

その店はやめさせた方が良いつて言つてあげたら、納得して歸つて  
いったわ」

「占いでも何でもないじゃないか。ベルの言う通りだな」

「あら、別にタロットだの水晶玉だの使うのが占い師つてわけじゃ  
ないでしょう？その人の悩みを聞き、一番必要なアドバイスをあげ

る。十分じゃない」

フェルダは悪びれず、妖艶に微笑む。

「あなたにも忠告をあげるわ。」

大事なものが二つできてしまった時は、どちらも救う手立てを考えましょう。常識にとらわれず、自分の心に正直になりましょう。ラッキーカラーは銀色」

「お前のその助言はたまにひどく当たるから嫌だ」

「ふふっ、そうでしょう？さ、あの子達を追ってきなさいな。夕食の準備をしておいてあげるわ」

ベルはすぐに目的の店を見つけた。

「クラブアルトローゼ……ここだわ」

半年程前にこの街を訪れた時にはなかった、まだ新しい店だ。

街で一番の繁華街にあつて、堂々たる店構え。「準備中」の札がかかっていても、周りの店が霞んで見える程に目立っている。

様子を伺って店の裏手に回ったベルに、後を追ってきたエイジャが追いついた。

「待って、ベル」

「エイジャ。付いてきてくれたの？」

声ははずませるベルに、エイジャが苦笑を漏らす。

「急に飛び出して行くから焦ったよ」

「ごめん、いてもたってもいられなくて」

そう謝りながら、ベルは店の外壁に貼られていた貼紙に気がついた。「フロアレディー募集……年齢16〜25歳まで、お客さんと楽しくお酒を飲んで会話するだけの、簡単なお仕事です……お触り厳禁の明るいお店で安心です……」

私、行ってくる！」

貼紙を勢い良く破り取って走り出そうとしたベルを、エイジャが引

き止めた。

「ちよつと待つて！ベル、もう少し良く考えてから……」

「大丈夫よ！私、こういう仕事もしてた事あるし！内部を探るなら、そこで働くのが一番……」

その時、前方の従業員勝手口の扉がギィ、と開いた。

慌ててエイジャがベルの腕を引つ張り、姿を隠す。

そうつと角から顔を覗かせて様子を伺うと、休憩に出てきたのだから、人相の良くない若い男が煙草に火を付けた所だった。

「あいつ……」

「ベル、知ってるの？」

声を潜ませて尋ねると、ベルは頷いた。

「カルロスの知り合いよ。名前はデイノだったかしら、昔は一緒に仕事もしてたみたい。何度か、この街に来た時にカルロスに連れられて会った事があるわ」

「それって……」

「やっぱりこの店、曰く付きってわけね」

男は苛々とせわしなく歩き回り、煙草を半分ほど吸った所で地面に落として踏みつぶした。

また店内に戻っていったのを見届けて、ベルとエイジャはフウ、と殺していた息を吐いた。

「デイノがいるとなると、私が潜り込むのは難しいわね……。顔が割れてるし……」

そう言つて親指の爪を噛み、思案するベルにエイジャが声を掛ける。

「顔が割れてなくても危ないよ。またどこかに売られたりしたらどうするの？ベルは女の子なんだよ」

諭すように言つたエイジャの言葉に、ベルは少し表情を幼くして視線を泳がせた。

「そりゃ、女の子だけど……でも私、ちゃんと護身術だつて身につけてるし……大丈夫よ」

「だめ。とにかく、一度ルチアとフェルダさんの所に戻るう。きつと心配してるよ」

真面目な顔で言われて、ベルは押し黙る。

その時、ルチアが通りの向こうからやってくるのを見つけ、エイジヤが手を振る。周りを気にしながら近付いてきたルチアが、ベルを軽く睨んだ。

「お前、俺達に同行するなら、どこかに行く時は断ってから行け。

エイジヤが心配するだろう」

「エイジヤが」とわざわざ付けたルチアの言葉にムツとしながらも、身勝手な行動を取った事を悪いと思ったのか、ベルは小さな声で謝罪の言葉を口にした。

「ごめん……だって、これは私の問題だし。あんた達の旅には関係ない事だから……」

「それがそういう訳でもないんだ。とりあえずフェルダの家へ戻るぞ。話はそれからだ」

（10）ザクセアの占い師（後書き）

活動報告を書きました。

(11) 女になったエイジャ

「おいしーっ！すごい！これ全部フェルダさんが作ったの！？  
口の料理人みたい！」

フェルダの店の奥にある居住スペース。

ベルはフェルダが用意した夕食を口にすると、感激したようにフェルダを見つめた。

「まあね、男を掴むにはまず胃袋からって言うじゃない？魔術の修行よりも努力したんだからっ。」

おかげでルチアもアタシの料理だけは好きだって言ってくれるのよ。何せほら、愛情という名のスパイスが……」

自らの料理を褒められて気を良くしたフェルダが、愛情論を語り始めそうになったのをルチアが制する。

「分かった、その話はまた後で聞く。」

ベル、お前にはまだ俺達の旅の目的を話していなかったな」

「どうせ話してくれないでしょ？いいわよ別に、勝手に付いて来てるんだし。私みたいなチンピラ信用できなくても仕方ないわ」

ベルが擦れた言い方をしてみせるが、瞳は少し期待するようにルチアの様子を伺っている。

「まあ、いちいち面倒な奴だが俺達に仇なす存在でない事は分かった」

「ふーん、そんな簡単に信用していいわけ」

憎まれ口を叩きながらも、ベルの口元は嬉しさを隠しきれないように歪んでいる。

「完全に信用したわけじゃないが、嘘をついていたり後ろめたい所があれば、フェルダには分かる。何も言わない所を見ると、何もないんだろっ。」

お前はただの擦れた生意気な小娘、それだけって事だ」

今度こそベルは立ち上がり、テーブルを叩いて抗議した。

「ちよつとつ！黙って聞いてりや何よその言い草！？だいたいあんた私とエイジャと態度が違いすぎるわよ！変態！」

「誰が黙って聞いてたって？変態ってなんだ、お前こそ訂正しろ」

「ルチア、今のはルチアが悪いよ。ベルも言い方良くない、確かにルチアの顔って人間離れしてるけど、変態とはまた違うよ」

「も〜何よあんた達、トリオ漫才〜？」

フェルダは止める様子もなくワインを口にしている。

「……とにかく。これはさっきの店の問題とも関係する事だから、話しておく」

ルチアの言葉に、ベルも口をつぐんで続きを待つ。

「俺達の旅の目的は、シアル公国の大公家に王宮からの書簡を届ける事だ。言っておくが、今後王宮の反対勢力からの妨害行為に遭遇する事もある。」

現にすでにユズールに向かう途中で襲撃を受けている。危険な旅になるが、それでも付いてくるのか？」

「……王宮関係者だとは思ってたけど、お届け先がシアル大公とはね。ちよつと驚いた」

ベルは先程までの突っ掛かるような物言いを収めて、神妙に答えた。「で？それとさっきの店とどう関係があるの？」

「旅のもう一つの目的は、シアル大公の動きを探る事だ。」

ここ数年、アストニエル王国内では人攫い集団による拉致が多発してる。

お前が探ってきたように、王宮騎士団でも捜査を進めてるが、一味を摘発しても、拉致された人間がどこに流れたのかが掴めないんだ。これはまだ未確認だが、どうも、国外……シアルに流れているらしい。そのバツクに、大公がいるという情報があるんだ」

「シアル大公がアストニエルから人を攫ってこさせてるって言うの！？」

ベルは目を見開いた。



「もちろん直接大公が指揮を執っているというより、仲介するブローカーがいるんだろうがな」

「カルロスは攫った人間を運ぶ時には絶対に連れて行かなかったわ。取引相手とは一対一で会うようにしていたから。私は、その取引相手に近付きたかったんだけど……」

「おそらくそれが向こうの条件だったんだろう。自分達の存在を明るみにしない為のな。」

それにしても何年もの間、存在が巧妙に隠されている。よほど強大なバックがいなければ不可能だ」

「シアルに……そうか、それなら足取りが掴めないのも納得……」

ベルは強く握り締めた右手をあごに添え、ようやく手にできた有力な手掛かりに目を輝かせた。

エイジャも初めて聞く話に目を丸くしている。

少しの間考えた後、思いついたようにベルがルチアに尋ねた。

「で？あんた達はシアル大公の悪行を暴いてどうするの？戦争を起こす根拠にでもするの？」

ルチアは目を眇めてためいきをついた。

「逆だ。俺達の主は反戦派だ。」

お前の言う通り、これが真実なら、シアル大公のやっている事はアストニエルに対する侵略行為だ。それだけでもキバライ帝国がアストニエル側につくだろう。

王宮内の開戦派に、その事実を先に掴まれて開戦の根拠にされる前に、内々に解決したい。

シアル公国としても、キバライがアストニエル側に付く事は何としても避けたいはずだ。大公が引かないなら、周囲を動かして大公を降ろさせる」

ベルは、ほっとしたように表情を緩めた。

「良かった。戦争なんてイヤだし」

「じゃ、じゃあ、ベルの事を手伝うのも、任務の内ってこと？」

エイジャが嬉しそうに尋ねる。

「そうだな。あの店、王都に本店があるとか言ったが、ああいう店は出店に王宮の許可が必要だし、審査も厳しい。」

「ここ数年で許可を出した覚えはないから、王都に本店があるという話自体が怪しい」

「王宮騎士団ってそんな仕事もしてるの？出店の許可なんて」

ベルが問うと、エイジャが横から「ルチアは王子の側近なんだよ」と補足した。

「王都へ向かうはずの馬車が、東へ向かったのを目撃されている。働いている娘達が、騙されてシアルに売られている可能性がある。あの店を探れば、ブローカーに繋がるかもしれない。」

それにベルの話だと、カルロスの馴染みの男がいたんだろう？何か裏があると考えるのが自然だ」

「ベル、君一人でがんばらなくていいんだよ。俺達も皆協力する。」

良かった、ベルを助けたいけど、カルニアス王子のご意思に背く事になるのかなって、心配してたんだ」

そうエイジャが言うと、ベルはぺたんと椅子に腰を降ろし、背もたれに体を預けた。

髪の手を指でいじりながら、「んー」とか「あー」とか呟いた後、すっと姿勢を正した。

「ありがと……。なんか、信じられない。誰かが協力してくれるなんて、今まででなかったから……」

ぺこりと頭を下げ、素直に礼を述べる。

「問題はどつやって店に潜り込むかな」

ベルが先程ちぎってきた貼紙をテーブルに広げる。

「スタッフの女の子として入るのが一番確実なんだけどなあ………デインさえいなきゃ……クソッ」

舌打ちするベルから、貼紙を取り上げたフェルダが提案する。

「何も問題ないわよ。アタシが行けばいいじゃない？」

「16から25歳……」

「……」

「フェルダ、悪いが無理があるぞ」

「失礼ね！化粧と髪型と服装でいくらでも若作りできるわよ！」

「いや……25というのはさすがに……だいたいお前オッサンだし……」

「また言ったわね！！」

キーツと金切り声をあげて怒りをあらわにするフェルダの拳を間一髪で避ける。

「いやまあ、暗い所で見れば分かりにくいとは思いますが……しかしお前が行く位ならむしろ、」

「そうね、それなら……」

エイジャは、自分に視線が集まっている事に気がつき、数秒考え、その意味に気がついて青くなった。

「えっ……何！？」

「フェルダさん！こ、この下着はどうすればいいんですかあ！？」

「後ろにホックが付いてるでしょ、それを止めるの！後ろ手でやりにくかったら、前で止めてぐるっと後ろに回せばいいわ。

それから特製極厚パッドを装着する！OK？」

「や、やってみます」

結局、エイジャをフェルダの手で完璧に女装させて店に潜り込ませる以外に、良い方法はないという結論に達したのだった。

「大丈夫よエイジャ！アタシが腕によりをかけてあなたを店ナンバーワンの美少女に仕立ててあげるからっ！」

さすがは女装の達人、フェルダ。必要なものは全て揃っている。

エイジャは女性用下着やコルセット、ドレスなどを山のように手渡されて、別室に放り込まれた。

以前にスパイ任務で女装をした事はあるが、その時は女中として屋敷に潜り込んだため、ただ用意された女中の制服を着て、若干髪型

を変えた程度で、ここまで手の込んだ女装はしなかった。女性用の下着など、身につけた事もない。

もっとも、フェルダに渡されたその下着は、男の体を女性らしく矯正するもので、胸の部分には一緒に手渡されたぶ厚いパッドを入れるポケットが付いていた。

サラシを解けば自分の胸がある以上、このパッドは必要ないのだが……それは言えない。

エイジャは極厚パッドを自分の鞆にしまい、次はドレスに取りかかった。

「あの、フェルダさん、できたんですが……」

細く開けた扉の隙間から、外で待っていたフェルダ達に声を掛ける。

「わあっ、出てきて早く見せて！」

ベルが扉を強引に開けた。

フェルダが用意したのは深い青色のロングドレスだった。

首もとまで覆われていて胸元は隠されているが、シルエットは体の線がくつきりとするデザインだ。

何より背中が大きく開いて白い肌を露にしており、それが最もエイジャを落ち着かなくさせていた。

「すーつつつごい!!! エイジャ! すつつごい可愛い!!!」

ベルはエイジャの周りを回りながら、きゃあきゃあ黄色い歓声をあげる。

「うーん、さすがねえ。ちょっと悔しくなっちゃうわ〜」

フェルダはエイジャの着付けを軽く直しながら、まじまじとエイジャの姿を眺めた。

「じゃあ、後はメイクね。今のままでもすごくいいけど、ああいうお店の暗い照明の中だと顔が引き立たないから」

「えっ、まだやるんですか!?!」

「すぐに客前に出られるくらいに仕上げておかないと、お店で直されるわよ。さ、こっちにいらっしやい」

すぐごとフェルダの後について部屋に入っていくエイジャを見送り、ベルがため息をつく。

「似合うだろうとは思ってたけど、驚愕の美少女ぶりね。女として危機感覚えちゃう」

そこでベルは、先程から全く声を発していないルチアの存在に気がついた。

「ルチア？どうしたのよ」

「……いや、どうもしない」

「めちゃくちゃどうかしてるじゃない！ちよつと、どこ行くの？」

「ちよつと外に出てくる」

心無しかふらふらとした足取りで部屋を出ていったルチアの後ろ姿を見送りながら、ベルが独り言ちる。

「ライバルに火を付けちゃったかな、暴走しないように見張ってなきゃ」

## (12) ルチアの苦悩

(なんなんだ、あれは)

壊れた装置のように心の中でその台詞を繰り返しながら、ルチアは目的もないまま大通りを足早に歩いていた。

(なんなんだあれは、本当に)

他の台詞が出て来ない。頭の回転が停止してしまったかのようだった。

ああいう見た目だから、女装すればかなり見られるようになるだろうとは思っていた。

なにしろ、初めて会った時にはえらく美しい女性冒険者だと思っただ程だ。

フェルダの助けを借りて着飾れば、男だとはれる心配なく、女になりきる事ができるだろう。

そう考えていた。

予想通り、部屋を出てきたエイジャの姿は、どう見ても女の子だった。

いや、正直に言えば、想像以上の美しさだった。

ドレスの深い青を引き立たせる白い肌。細い腰。恥じらうように瞳をふせた表情は艶っぽく、初々しい色香を漂わせていた。

あれなら女性従業員として店に潜り込むのに、何の問題もないだろう。

問題があるのは、その姿を目にして、言葉が出て来ないほどの衝撃を受けて固まってしまった自分自身。

あの時、自分はエイジャを女装した男ではなく、女として見ていた。ルチアはその事実にも、完全に動揺していた。

(ベルにおかしな事を言われたからか……どうしたって言うんだ、

あれは男だぞ……)

どんなに心を惹かれても、どうしようもない。

(……って、心を惹かれているというのか!? ないない!!)

幼少時より常に冷静さを失わないよう育てられてきたルチアにとって、頭が働かなくなる程に心を乱されるといふ事自体が皆無だ。

早鐘を打つ心臓の音が自らの耳にうるさく響く事も、初めての経験だった。

とりあえずこの状態に何らかの説明を付けなければ、気が狂ってしまいそうだと、ルチアは思った。

ただの旅の同伴者だったエイジャの存在が、少し特別なものになったのはいつだっただろうか。

あれは、魔獣の森のフェルダの館に泊まった夜。

何か寝付きが悪く、部屋の窓から月を眺めていると、月明かりの頼りない光の中を、悄然とした足取りで歩くエイジャの姿が見えた。ルチアが見ている事にも気づかず、同じように月を見上げているエイジャの姿を眺めていて、妙に胸のあたりがざわつく思いがした。それはきつと、エイジャの元気のなさそうな様子が心配だからだと解釈して、自らも館を出てエイジャの元に向かった。

遠目から眺める月明かりの下のエイジャは、何かこの世の者ではないような、儚さをたたえていて。

声を掛けて振り向いた時に頬が光ったように見えたのは、今思えばきつとあの時にも泣いていたのではないかと思う。

その時は夕食の席で話した内容にショックを受けたのかと考えていた。

カルニアス王子を誇りに思い、自分は絶対に王子の味方だと力説す

るエイジャの言葉が嬉しかった。

部屋に戻るエイジャと別れ、少し酒でも飲めば寝られるだろうと食堂でワインを探した後、自室に戻ろうとしたルチアは、エイジャの泊まっている客室から出てきたフェルダの姿を見かけた。

その行動が、フェルダがエイジャをどう捉えているかを示していた。フェルダは、人が心の中に隠し持つ傷を感じ取る。エイジャに対して、わざわざ夜中に部屋を訪れるような、何かを感じ取ったという事だ。

相変わらずの個人プレーでルチアに対して何の説明もないのが気に食わないが、行動を見て推し量れというのがフェルダのスタンスだ。きつと、あの時エイジャの部屋から出てきたフェルダの姿を、ルチアが見ていた事にも気づいているのだろう。

一体、フェルダはエイジャの何を感じ取ったというのか。あの、穏やかで明るいエイジャが、どんな心の傷を負っているというのか。気にならないはずがなかった。

思い返してみれば、エイジャはフリーの冒険者として経験してきた様々な依頼の話を聞かせてくれたが、冒険者として身を立てるようになるまでの生い立ちについてはそれとなく避けているようだった。会話の中でふと見せた苦し気な表情を思い出す。

昨夜のエイジャの様子から分かったのは、エイジャが抱えている問題が、単なる過去の心の傷という程度のものでないという事だった。エイジャはそれを明かさない。

それがもどかしい。いつか、話してほしい。

俺が力になる。エイジャに告げた言葉に、嘘はなかった。なぜこんなに心配になるのか、自分でも分からない。

弟のようなものだろうか？

試しに、そう考えてみる。



あまり今の感情にしっくり来るようにも思わなかったが、何となく自分を納得させられる言葉であるような気もした。

自分には、弟や妹がいなかったし、エイジャのような接し方をしてくる人間もいなかった。

気取りや飾りのない、それでいて心配が耐えない。そんなエイジャに庇護欲をかきたてられて、弟のように思ったのではないだろうか？

（弟のように思っていた存在が、まったく女にしか見えない格好で現れたから、驚いてしまった。そう考えれば、おかしくない話だ）  
うむ、と自分で自分を納得させてみると、少し心臓の音が落ち着いたような気がした。

（そうだ。やはりベルがおかしな事を言ったからだな。

いくらエイジャが女のような容姿をしているからといって、そのような対象として見る訳がない。俺には、そんな趣味はない）  
だいぶ頭が回りだした事にルチアは少し安堵した。

冷静さを取り戻して周りを見回すと、随分とフェルダの店を離れていた。

辺りはすっかり夕暮れが押し迫っている。すぐに戻って、作戦を立てなければ。

よく覚えていないが、ベルにちゃんとした言い訳もしないままに出てきてしまったような気がする。

店に戻って、またあの姿のエイジャと向き合う事を思うと、どうしても落ち着かない気持ちになる事は否めないが……

（大丈夫、あれは「弟のような存在」だ。それが「女装している」んだ。それを忘れるな）

そう強く自分に言い聞かせ、ルチアはきびすを返した。

(13) 潜入捜査 - 1

日が落ちた歓楽街に、人が溢れ始める。

問題の店、「クラブアルトローゼ」も準備中の札を返し、営業を始めていた。

入り口に立っていた呼び込みの若い男が、近付いてきた少女に気づいてそちらに顔を向ける。

「あの、すみません。お、私、ここで働きたいんですが」

そう話しかけてきたのは、店で着飾ったきれいな娘をたくさん見てきた男でも思わず見蕩れてしまうほどの、美しい少女だった。

ほっそりとした身体に青いドレスを纏い、漆黒の長い髪を緩く編んで背に垂らしている。

彫刻のように整った顔立ちの中でも殊更目を引く、深く澄んだ青緑の瞳。人形の如く長い睫毛。

「……………あの？」

顔を覗き込むように尋ねられて、男ははっと我に返った。

「あ、ああ、うちの店で働きたいのかい!？」

「はい、とてもお給金が良いと聞いたので」

「何かお金がいる事情でもあるの、そりゃうちは給金は良いけれど……………」

言い淀んでいると、店の扉が乱暴に開いた。

「おい、ザック!何してる、店内手伝え!……………」

中から出てきた男はそう怒鳴りかけて、横にいた少女に気がついた。

「なんだ、働きたいのか?もしかして」

「はい、お願いします」

機嫌悪そうに歪んでいた表情を幾分崩して、男は扉の中に招き入れるように、少女の背を抱く。

「いやいや、こりゃきれいなお嬢さんだ。あんたみたいな女は大歓迎だよ。さ、早速入ってくれ」

ザックと呼ばれた若い男が、慌ててその後を追って店内に入っていく。

「デイノさん、待って下さい！あの、その、彼女は……」

「なんだ？ザック。もういい、お前は外で呼び込み続けてる」

そう言い捨てられ、ザックはデイノに肩を抱かれた少女を心配そうに振り返りながら、持ち場に戻って行った。

「じゃあ、きれいに支度してあるんで、すぐにお客さんの前に出てもらおうかな。あんたみたいなのが好きな方が来てるんだよ」

デイノに肩を抱かれたまま、店内を歩く。

エイジャはむきだしの肩に添えられた手を振りほどきたい衝動を必死に抑えながら、笑顔を作った。

「そうですね、嬉しいです……でも、私、こういうお仕事は初めてなので、何をすればいいの……」

「いやあ、あんたみたいなきレイな女は、何もなくていい。ただ座ってへらへら笑ってりゃいいんだ。今日は他の女が酒を作るからじっと座ってお客さんの話を聞いてりゃいいさ」

「そ、そうですね、でも、あの、やっぱり急にお客さんの前に出るの……」

エイジャの訴えなどまったく聞こえていないかのように、デイノは店の隅の一角へエイジャを誘導する。

「リナルド様、たった今入店したばかりの新人でございます。どうぞよしなに」

どん、と背中を押されたエイジャは、つんのめるように前へ出た。みっともなく太った中年の男が、左右に若い女の子達をはべらせて座っていた。

「おおつ、こりゃきれいな娘だな。こんな上玉はなかなかおらんぞ、どこに隠しとつたんだ」

「先程入ったばかりの女で。まずはリナルド様に可愛がっていただ

くのが筋でございませうから」

デイノは手揉みしながらにやにやと笑う。

「うむ、よく分かつとるな。どれ、わしの隣に座れ。名前はなんだ？」

エイジヤは強引に腕を引かれて、リナルドの隣に座らされた。

「あ、あの、エイミー……と申します」

「エイミーか、名前も可憐だな、気に入ったぞ。もっと近くに来い」腰を寄せられて、エイジヤは悲鳴を上げそうになるのをこらえる。

（ガマン、ガマン……ここで根を上げたら、全て水の泡だ……）

いつのまにか出て行ってしまっただけで戻ってこなかったルチアを除いて、フェルダとベルと三人で打ち合わせた筋書きはこうだ。

エイジヤは店にスタツフとして潜り込み、休憩時間や閉店後を見計らって他の女の子達から話を聞き出す。

王都へ転勤したという女の子達から、連絡が来る事はあるのか。戻ってきた子はいるのか。

次の転勤の機会はいつなのか。

全員が揃って休憩を取れるわけではないから、休憩時間に話を聞ける子は良くて一人か二人ぐらいだろう。

たくさんの話を聞けるチャンスは終業後になるだろうから、どれだけ鳥肌が立っても、何とか閉店まで乗り切らなくてはいけない。

それにしても、「お触りはなし」だとあの貼紙に書いていなかったか！？

リナルドはべたべたと肩や腰に触てくる。

顔を寄せてくるのは、グラスを口にして何とかかわした。

デイノの態度や、一人で5人も6人も女の子をはべらせている所から見て、金払いの良い上客なのだろう。

飽食と運動不足で太ったのであるう巨体を揺らして、気分良さそうに笑っている。

この店の裏稼業が人身売買だとしても、表稼業の店運営もうまくいっているようだ。店内はほぼ満席で、各テーブルに1人か2人の女の子が付いている。

これでは、一気に女の子達をブローカーに引き渡してしまつては、表稼業の運営がなりたたなくなるな。

フェルダの話では、店の裏口から東へ向かつて馬車が出るのは、だいたい半月に一度程度。

そうになると、一度に連れて行くのは2人か3人か、補充可能な範囲内なのではないかと推測した。

「どうしたエミリー。ぼうつとして、もう酒に酔ったか？ほら、もっと飲め」

リナルドが他の女の子を促し、エイジャのグラスに酒を継ぎ足させる。

「は、はい、でも、もうとてもたくさん頂いたので……」

「何だ、これっぽっちで酔っぱらつてはこの商売はやっていけないぞ。」

よし、分かった！おまえはわしの秘書になれ！雇つてやる。とりあえず今日は店が終わつてからわしに付き合え」

げっ！と思わず表情に出そうになり、エイジャは何とか笑顔を作つた。

「いえ、そんな、私のような者には秘書だなんて……到底勤まりません。それに、今日は初日ですから、お店が終わつたら皆さんにご挨拶をしないと……」

「この店はわしで持つてるんだ。そのわしがいいと言えば誰も文句は言わん。口答えは許さんぞ、エミリー」

すつと表情に残酷さを浮かべ、リナルドが威圧的に言い放つ。

「そうだな、店が終わるまでここにいる必要はない。さあ、もう出るか」

エイジャの腕を引っ張り、席を立とうとしたリナルドの前にその時、

女性が立ちほだかった。

「あーらあなた、ご機嫌ですこと。新しい秘書を雇うのですって？  
わたくしにも紹介して下さいな」

リナルドを見下ろしてそう言い放ったのは、高級そうな身なりをした中年女性だった。

「ロジーナ！？お、おまえ、なんだこんな所まで来て……」

「まー、こおーんなに若い女の子をはべらせて、随分羽振りの良い  
ご様子ですわね。この分でしたらわたくしの実家の援助など、もう  
必要ないんじゃないですか？」

みるみるうちに顔をなくしていくリナルドに向かって、女性はさらに畳み掛ける。

「つい先日わたくしにもう女遊びは控えるとお約束なされた舌の根  
の乾かないうちにこれだけお遊びなんでも、それ相応のお覚悟  
がおりなんでしょう？」

あなたのお気持ちはよく分かりましたから、わたくしこれで失礼  
致しますわね。

あ、そうそう、あの家はわたくしの両親の物ですから、あなたはど  
こかあなたご自身のお家にお帰り下さいませね」

くるりと踵を返して歩き出した女性を、リナルドが慌てて追いか  
ける。

「いや、違うんだ、これはな、仕事でどうしても必要があつてな…  
…聞いてくれ、わしは来たくはなかつたのだがな、もちろんお前と  
した約束を忘れる事なんてなかるうが、待ってくれ、話を聞いて…  
…」

足早に店を出て行こうとする女性に縋るように、リナルドが足下を  
もたつかせて追いかけて行く。

女性は扉の前に立っていた先程の呼び込み役のザックに、ちらりと  
意味ありげな視線をやって店を出て行った。

(13) 潜入捜査 - 2

「あなた、入っていきなり大変だったわね。一旦、休憩行って来ていいわよ」

リナルドと一緒にいていた女の子が、エイジャに声を掛けた。確か、ノーラと呼ばれていた子だ。

女性らしく男好きのするスタイルで、勝ち気そうな目をした美人だった。

ときばきと他の女の子達に指示を飛ばしてテーブルを片付けている女の子達のリーダー格のようだった。

「あ、ありがとうございます」

「控え室はあっち……あ、ザック。この子、控え室に連れて行ってあげてよ」

ノーラはちょうど後ろを通りかかったザックを呼び止めた。

「あ、はい。じゃああの、こっちです」

エイジャはザックに連れられ、控え室へ入った。

「ザックさん、と仰るんですか？」

「えっ!?! あ、うん! そう、です」

ぎくしゃくしながらザックが答える。

「あの、もし違ったらすいません。さっき、私を助けてくれたのは、ザックさんじゃないですか？」

「ええええっ!?!」

尋ねたエイジャの方がびっくりする程大きなリアクションが返ってきた。

「なっ、なんで!?!」

「あの、女性の方がお店を出て行かれる時に、ザックさんに挨拶をされていったように見えたので」

ザックはばつが悪そうに声を潜めて答えた。

「……誰にも言わないでくれよ。こんな事バレたら、デイノさんに殺されちまう」

「やっぱりそうだったんですね。助かりました。ありがとうございます」

「ます」

ザックは人懐こい笑みを浮かべて頭を掻いた。

「いや、そんな礼言われるような事してないんだ。店の外で呼び込みしてたら、あの女の人が旦那探して店の前を歩いてたからさ。」

あの人、前にも旦那探して店に怒鳴り込んできた事があるから、顔知ってたんだよ。

だから、俺『どうも奥様こんばんは、お世話になってます』って声掛けただけなんだ。

奥さんはそれで察してくれたってわけ」

ザックは俺もあの人キライなんだよ、と小声で付け加えて笑った。

「でも、本当に助かりました。」

私、……エミリーです。よろしく」

エイジャの出した右手を、ザックは照れたように握り返した。

「あんだ、なんでこんなうちみたいな店に来たの？…って、金がいるって言ってたっけ？でもなあ……」

ザックが不満そうに言い淀む。

「あの、さっきもちよっとそんな事仰ってましたよね。どうしてでしょう？」

このお店、お給金もいいし、頑張って働けば王都の本店に行く事もできるって聞いたんですけど……」

エイジャの問いかけに、ザックが複雑な表情を見せる。

「ああ……、そうなんだ。ひと月に一回……二回くらいかな。」

見栄えのいい、客受けの良い子だけだけど、希望すれば王都に転勤させてもらえるんだ。

やっぱり王都の方が貴族相手で今よりもずっと給金もいいし、うまくすれば高貴な方に見初められて貴族の奥方になった子もいるとかい



う噂で、行きたがる子も多いよ。

こないだ馬車が出てから半月程たつから、そろそろ、次の転勤があるんじゃないかな」

(そういう触れ込みなのか……)

エイジヤは苦い思いでザックの説明を聞いた。

「でもさ、俺はもう三月以上この店で働いてるけど……王都に行つた子の話をその後、聞いた事がないんだ。

本当は王都の本店って言っても、今よりずっと厳しいんじゃないかって、そう思うんだよな。

金持ちなんて鼻持ちならないやつばかりだろ。お貴族様なんてきつと嫌な奴ばかりだよ。さっきの、リナルド様みたいな……」

「それで、この店で働くのをあまりおすすめされないんですね」

「うん……エミリーみたいな子はさ……ほら、なんだか人形みたいで、いかにも貴族受けしそうだから……すぐ、王都に来ないかって言われんじゃないかと思ってさ……」

鼻の頭を掻きながら、少し照れたようにザックはこぼした。

貴族受けしそうだというザックの意見はよく分からないが、初対面の自分の身を案じてくれたザックにエイジヤは好感を持った。

何より、最大のピンチを助けてくれた恩人だ。

「ありがとうございます、ザックさん。王都に興味があったけど、もう少し他の女の子の話も聞いて、よく考えてみますね」

「うん、そうしなよ。それから、リナルド様みたいな客は他にもいるからさ、他の子達のあしらい方を見て、うまい断り方も学んだ方がいい」

「そうします」

その時控え室の扉が開き、休憩の女の子が入ってきた。

「エミリー、交代よ。さつきと同じ席に付いてきてちょうだい。今度の客は、リナルド様みたいな工口親父じゃないから、大丈夫よ」  
ウインクした女の子に、笑顔を返す。

「ありがとうございます。行ってきます」

言われた通り、次の客はリナルドのような下品さはなく、エイジャともう一人の女の子を相手に少々の仕事の愚痴をこぼす程度だった。エイジャは王都で馴染みの女性達の話し方などを思い出して、懸命に女性らしく振る舞った。

その次に付いた客は、酔っぱらった勢いで家庭のいざこざを面白おかしく話して聞かせる男だった。

「エミリーは本当に、きれいだなあ。あんたみたいな人が奥さんだったらなあ……、俺、こんな店こねえで、まっすぐ家に帰るのになあ」

「やあだ、それじゃうちが商売あがったりじゃない」  
もう一人の女の子が突っ込むと、楽しそうに笑う。

「エミリー、男には気をつけるよおー、変な男に騙されちゃいけないぞ、いい男掴まえて嫁に行くんだぞ……あーあ、俺、独身だったらなあ」

すっかり酔いの回っている男の話に適当に相づちを打ちながら、エイジャは不思議な気持ちになっていた。

女性として扱われる事も、嫁の行き先を気遣われる事も、まるで他人事のようだ。

さつき、ザックが初対面の自分を心配してくれた事も慣れない経験だった。

そうだ、それは自分が今、女性としてここにいるからなんだ。

男は女の子を守らなければいけない。エイジャはそう考えて、これまで女性に接してきた。

今、自分がその守られる立場に立っている事に気づき、言いようのない違和感を感じる。

(すっかり男になりきってるんだな、俺)

女装した事で逆に、男として生きて来た短くない年月を実感する。

(……でも、ルチアは守ってくれる、な……)

押し寄せる不安から。逃れる事のできない過去から。

ルチアは守ろうとしてくれた。力になると言ってくれた。

それは……エイジャが女だからではない。

（ルチアは……俺が本当は女だって知ったら、一体どう思うんだろう……？）

ふと、思った。

より一層、守ろうとしてくれるのだろうか。

（でも、きつとそうされたら、俺は本当に弱くなっちゃうだろうな）  
ルチアがくれる優しさは、涙が出るほど温かくて、心地いい。

だからこそ、その優しさに甘えるわけにはいかない。

（あ、でもルチア、ベルには厳しいなあ……最初に騙されたからかな？

ベル、いい子なのに。そういえばルチア、戻ってこなかったけどどこに行っちゃったんだろう？）

「エミリー、エミリー！」

「あつ、はい！すいません！」

すっかり物思いに耽っていたエイジャを、女の子がつついた。

「もう閉店の時間。お客様がお帰りよ。お見送りに行きましょ」

客に腕を組まれて歩き、店外へ誘導する。

なかなかエイジャと離れたがらない客を他の女の子達が引きはがし、強引に帰らせてくれた。

「ありがとうございます！、またお越し下さい！」

客の姿が通りの向こうに見えなくなるまで見送り、店内へ戻ろうと振り向く。

反対側の通りの建物の横に、見慣れた背の高い男の姿が見えた。

（ルチア！ちゃんと来てくれてたんだ）

エイジャは他の人間に気づかれない角度で、ルチアに作戦は順調、という意味で軽く手を振る。

目が合ったように思ったが、ルチアはふいと視線を下に向けた。

きつと了解、という意味だろう。

さあ、これからが本当の仕事だ。女の子達から色々話を聞き出さなくては。  
エイジャは気合いを入れ直し、店内に戻った。

「ルチア! どう? 動きあった?」

店の裏口を見張っていたベルが、正面入り口を見張っていたルチアの様子を見にやって来た。

「裏口は今、フェルダさんが見てるから……ルチア?」

「あ? ああ、今、エイジャが出てきた。客を見送ってたようだ。一気に客が出てきたから、そろそろ閉店なんだろうな」

「あ、エイジャ出てきたんだ。こつちに気づいてた? 問題ないか、合図できたらするって言ってたんだけど」

「ああ、手を振っていた。問題ないだろう」

「……で? あんまり可愛いんで惚けてたわけ?」

ベルがルチアをからかうような、蔑むような眼差しを向ける。

「……何を言ってるんだ、お前は。はつきり言っておくがな、何を勘違いしているのか知らんが、俺には男色の趣味はない。」

エイジャに対してお前が想像しているような気持ちを抱くわけがないだろう」

「どうだか。王宮騎士団って男ばかりだから男色が普通だって言うじゃない」

「なんだそれは。そんな話どこで聞いた?」

「前に王都で買った絵物語に書いてあったもの!」

ルチアは片手を額に当てて呻いた。

「そんなものはデタラメだ。」

「……だいたい、俺には婚約者がいるんだからな」

ベルは思ってもいなかったルチアの言葉に、口をぽかんと開けた。

「婚約者あ!? それって、女なの!?!」

「当たり前だろう。男同士で結婚できるか」

「そうだけど……びっくり。ねえねえ、どんな人? どこで知り合っ

たの？王宮騎士団つてすつごくもてるっていうもんねー。ファンの一人だったとか！？」

「何でそんな事をお前に話さなきゃいけないんだ。」

もう持ち場に戻れ。フェルダに閉店するようだと伝えておいてくれ」

「……はい」

ベルはそれ以上追求してくる事もなく、素直にその場を後にした。その後ろ姿を見送り、ルチアはため息をつく。

ベルの指摘は、悔しいが間違っていないかった。

店の扉が開き、出てきたエイジャの姿を目にして、先程自分に対して言い聞かせたエイジャ「弟説が早速ぐらついでしまった。

フェルダに化粧を施されたのだろう、エイジャは先程よりも更に女らしさを増していた。

酔っぱらいの客に抱きつかれているのを見て、相手の男を切り倒したくなった事は否定できない。

こちらに気づいたエイジャが手を振ってきたが、動揺していたルチアは手を振り返すどころか、反応に迷って顔を下に向けてしまった。

(何をやってるんだ俺は)

自分自身に呆れ返った所にベルがやってきたのだ。

結果的にベルの疑いをはっきりと否定する事で、ぐらついていた感情にピリオドを打つ事ができた……と思う。

そう、もしも……万が一、エイジャに対して、例えばベルの言うような、特別な気持ちを抱く事が……もし、あつたとしても。

自分には婚約者がいて、エイジャにもおそらく恋人がいるだろう。あれだけ女性の扱いのうまい奴だ、もてないはずがない。

エイジャだって、俺が女として見ていただなんて知ったら、どれだけ嫌がるか。

自分の身に置き換えて考えてみると、迷惑な事この上ない。

(だいたい、今はこんな事で悩んでる場合じゃないんだぞ……)

その為にエイジャは危険を冒して潜入捜査の任に付いているっていうのに、俺がこんな状態でどうするんだ（ルチアはそう自分を叱咤し、頭を切り替えた）

閉店後の店内では、デイノを前にして女の子達が集められていた。

「今日もごくろうさんだったな。ちょっとしたトラブルはあったが、まあリナルド様もまたほとぼりが冷めればいらっしやるだろう。」

次に店にお見えになった時は、今日の事には触れないようにしろよ。で、今日は王都への馬車が出る日だな。

今回栄転するのは……ノーラとセルマ、それにエステラだったな。おめでとう」

わつと店内に女の子達の拍手が沸き起こる。

名前を呼ばれた女の子が三人、デイノの元へ歩み出た。エイジャに休憩を取らせてくれた、リーダー格のノーラも今回の転勤メンバーの一人のようだ。

エイジャは急展開に面食らっていた。閉店後に、次に転勤があるのはいつなのか探りを入れようと思っていたら、今日だったとは。

「みんな、ありがとう。私達、王都に行ってもがんばるから、みんなもがんばって、この店を盛り上げて行ってね」

ノーラが三人を代表してそう謝辞を述べると、また女の子達から拍手が贈られた。

嬉しそうに顔を見合わせる三人。

本当に、王都への転勤というのはこの店では栄誉な事とされている事が分かる。

「……あの！」

エイジャは声をあげた。

女の子達が一斉にこちらを向く。

「なんだ？ エミリー。どうした？」

デイノが尋ねる。

「あ、あの……あつかましいお願いなんです……私も、王都に行きたいんですが……だめでしょうか……」

いちかばちかの賭けだった。

女の子達から次に馬車が出る日時や人数などを聞き出して帰り、ルチア達とどういう形で取引現場を押さえるかを検討する予定だったが、それが今晚とあつてはこのまま帰るわけにはいかない。

ノーラ達を行かせてしまえば、おそらくブローカーの手に渡って売られてしまうだろう。

おそらく相手方も人目を避けて少数でくるはず。自分だけでも馬車に同乗して行けば、女の子達を守る事はできる。

裏口をベルが見張っているはずだから、エイジャが裏口から馬車に乗り込むのを見れば、後から追ってきてくれるはずだ。

働き始めたばかりだというのに、王都栄転に立候補したエイジャに対して、女の子達は冷やかな視線を投げかけてきたが、デイノはまんざらでもない表情を見せた。

「フーン……そうか。エミリーは王都で働きたくてうちの店に来たのか？」

「あ……はい、実は、そうです」

エイジャは頷いた。デイノが少し思案する。

「そうだな……、いいだろう、急だが、エミリーも連れて行ってやる」

女の子達がどよめく。ずっるーい、という小さな声が聞こえた。

「うるせえぞ、おまえら！エミリーが今日一日でボトル何本入れさせたか分かってんのか！？」

悔しかったらもつと働け。解散！」

デイノはぞんざいにその場を締めると、ばらばらと帰り支度を始めた女の子達の間を縫って、エイジャに近付いて来た。



「あの、ありがとございます！あつかましいお願いを聞いて下さって」

エイジャが頭を下げると、デイノはにやにやと笑いながらエイジャの肩を抱いた。

「まあ、お前みたいな女は貴族好みだからな、王都でもいい働きができるだろう。で、今日この後すぐに出立できんのか？家族に挨拶してくるか？」

優しい言葉を掛けてくるのが薄気味悪いな、と思いながら、エイジャは首を振る。

「いいえ、家族はいないんです。私一人で生きていかなくちゃいけないので、王都でがんばりたいんです」

「そうかそうか、じゃあ何の問題もないな。しばらくしたら馬車が出るから、ちよつと休憩しておけ」

デイノはエイジャのでまかせに何の疑いも持っていないようだ。上機嫌の様子でその場を去って行った。

入れ替わりに、ザックが駆け寄ってきた。

「エ、エミリー！なんで！？俺、王都に行くのは危ないんじゃないかって、言っただろ……！？」

息せき切ってそう尋ねてくるザックに、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「すいません……心配おかけして。」

でもやつぱり、王都に行ってみたいんです。大丈夫！私、がんばります」

ザックを安心させるようににっこりと微笑んで見せたが効果はなく、さらに心配そうに顔を歪める。

「ホント女の子って、男の忠告を全然聞かないんだなあ……、さつき、挨拶してたノーラ。あの子も、恋人に散々反対されてたのに、結局恋人に黙って行く事にしたらしいし」

「そうなんですか！？」

「ノーラに聞いてみなよ。よく相手の男が閉店後にノーラを迎えに

来ては、店をやめるだの嫌だのって喧嘩してたんだ。

俺は、男として恋人の肩を持つけどね」

もしかすると、フェルダさんの店に相談に来ていた男性だろうか。

ザックはエイジャの気が変わらない様子なのを見ると、「とにかく、もう一度考え直してみよ！」と言い残して走って行った。

（あんなに心配かけて、悪い事したなあ……。いい奴だな、ザックって）

エイジャはそう考えながら、女の子達に囲まれて話をしていたノーラに近付いた。

「あの……ノーラさん」

エイジャに気づいた他の女の子達が、少し面白くなさそうにエイジャに視線を投げかける。

「みんな、そんな顔しないの。エミリーの心意気を買ってあげましようよ」

姉御肌のノーラが周りにそう声を掛け、エイジャに微笑みかけた。

「エミリー、一緒に王都に行く事になるわね。これからよろしくがんばりましょう」

握手を求められ、エイジャも手を握り返す。

「ノーラさん、……。あの、恋人と別れて王都に行くって、本当ですか？」

ノーラの笑顔がひきつる。

触れにくい話題だったのか、周りの子達は気まずい顔をしてそそくさとその場を離れていった。

「……ずいぶんストレートな物言いするのね。誰から聞いたのか知らないけど」

「すみません。でも、あの、ノーラさんこそすごい心意気だと思つて」

自分でもよく分からない言い訳だったが、ノーラはそこは気にならなかったようで、少し視線を落としてため息を付いた。

「彼はずっと私がここで働いてる事に反対してたの。恋人としてはそりゃあ、自分の彼女が他の男に言いよられてるのはイヤだったでしょうけど。」

でもあの人、この店は怪しいって、王都に行くだなんて絶対許さないって……」

「今日出発する事も、告げてらっしゃらないんですか」

エミリーが尋ねると、ノーラは口元だけで小さく笑った。

「ひどいわよね、私。でも、どうしても自分の力を王都で試してみたいのよ。」

私、彼と一緒に王都に行くって言ってほしかったの。勝手よね……」

「恋人さんは、ノーラさんの事が心配で王都に行くのを止めてらっしゃったんでしょう？」

せめて一言、ご挨拶なさってから発った方が良いんじゃないですか？」

「……」

ノーラは黙って考え込んだ。

「……もう、遅いわ。馬車はもう間もなく出発するし……」

彼とは昨夜もひどい喧嘩をしたの。きっと今日は迎えに来ないはずだから」

「ノーラさん……」

その時、裏口で馬のいななきと足音が聞こえた。

「さあ、待たせたな。出発しよう」

デイノがこちらに声をかけた。

裏口から店の外へ出ると、二頭引きの箱型馬車が待機していた。

黒塗りの立派な客車を備えた大型のワゴンタイプ。まるで貴族が乗るような馬車に女の子達は歓声をあげたが、エイジャには簡単に馬車から飛び降りて逃げる事ができないように、この形の馬車を使っているとしたか思えなかった。

「さあ、乗れ」

デイノが指図すると、ザックが駆け寄ってきてノーラ達三人とエイジャが客車に乗り込むのを手伝い、最後に自分も乗り込んだ。

「ザックさん、ありがとうございます。どうぞお元気で」

エイジャが心からの感謝と別れの挨拶を告げると、ザックは気まずそうに視線をそらした。

「いや、今日は俺もついていくんだ。さっきデイノさんに頼んできた」

「あらザック、あんたまで王都で働きたいの？」

女の子達に問われて、ザックは頭を掻く。

「いや、俺みたいな下働きの男は王都店では手が足りてるってさ。

でも、今回は女の子が四人いていつもよりも多いし、色々と人手もいるだろうから、旅の手伝いだけ付いてこいって。帰りは、俺が御者をするんだ」

そしてエイジャに向き直る。

「エミリー、そういうわけだから、王都までの間だけだけど、よろしくな」

もしかすると、ザックは自分の事を案じて手伝いを買って出たのだろうか。

さっきは随分と心配させてしまったし……

エイジャはそう思って、ザックを騙している事に罪悪感を覚えた。

だが、ザックが付いてきてくれる事は正直ありがたい。一戦交える

事になった時、女の子達を連れて逃げてくれる人間がいると助かる。ルチア達は、エイジャが馬車に乗り込むのをどこからか見ているはずだ。急な事で慌てさせてしまっただろうが、ちゃんと追いかけてきてくれるだろう。

馬車はゆっくりと動き出した。

馬車の中で、女の子達はこれから始まる新天地での生活の話に花を咲かせていた。

ノーラだけは少し表情に陰りがあり、気がかりを残しているような様子だったが、きつと恋人の事を考えているのだろう。

エイジャはザックの話に相づちを打ちながら、窓にかけられたカーテンの隙間から外を伺う。

真つ暗で外の様子は分からず、どちらの方角に向かっているかを知る事はできない。

「エミリーはどうして王都で働きたいんだい？」

意識を外に向けていたエイジャは、ザックに話しかけられてそちらに向き直った。

「あの……私、家族がないので、一人で生きていかなくちゃいけないんです。

王都のお店は、とてもお給金が良いって聞いたので……」

デイノに答えたのと同じように話すと、ザックは神妙な面持ちで頷いた。

「そつか……エミリーは一人なのか。寂しいな」

家族がおらず、一人で生きていかなくではならない。それは本当だった。

「でも、エミリーみたいにきれいな子なら、恋人ぐらいいたでしょう？ 養ってもらえばいいのよお」

「そうそう。ま、私は王都の店で貴族に見初めてもらうのが目標だけどね」

女の子達にそう言われ、エイジャは笑って否定する。

「いえ、恋人だなんて。そんなの、いません」

「そうなんだ!？」

ザックが激しく反応したのを見て、女の子達がおかしそうに笑い合  
う。

「ザーツク、分かりやす過ぎるわよ!」

「えっ、何がっ!？おかしな事言うなよ!」

「顔赤くしちゃって。あんたももつと甲斐性を持てば良いのよ。そ  
うすれば誰かさんを養ってあげられるじゃない?」

ザックは悔しそうに顔をそむけた。

「なんだよ、俺だって今はこんな下働きだけど、いつかは自分の店  
を持つって夢があるんだからな」

「ザックの店かぁ、結構いいかも。意外に面倒見いいもんね、ザッ  
クって」

「でもちよつとお人好しすぎるんじゃない?やっぱり店のオーナー  
っていえば、デイノさんみたいにちよつとワルっぽい所がないとね」  
ザックと女の子達の会話を聞いていると、従業員に対してぞんざい  
な態度を取るデイノを、皆恐れつつ一目置いているようだった。

その男が、店の女の子達を転勤と偽って人買いに売っているとした  
ら。

彼女達はどんなに傷つくだろうか。

それを考えると、エイジャはやり切れない思いだった。

馬車が走り始めて一刻ほどたった頃だった。

「なんだっ!お前!」

デイノの声がしたかと思うと、馬のいななきと車輪のきしむ音が鳴  
り響き、馬車が大きく揺れて急停止した。

「キヤアッ!」

「なんなの!？」

女の子達が身を寄せ合って叫ぶ。

「どうしたんだろう、俺見てくる！」

客車のドアを開け、ザックがランタンを手にして飛び出した。エイジャもその後を追いかける。

まさかルチア達が馬車を止めたのだろうか？そんなはずはない。ブローカーと接した所を押さえなければ意味がない。

だが外に出てみると馬車の前に立ちはだかっていたのは騎乗した一人の男性だった。

（あれ、誰だったっけ……？見た事ある……）

エイジャが記憶を辿っていると、後ろから声が飛んだ。

「ブルーノ！？なんでこんな所に！？」

叫んだのは後を追って来たノーラだった。

「なんだ？ノーラ、おまえの知り合いか！？」

御者席から憎々し気にデイノが怒鳴る。

「ノーラ……！おいで、早く！」

ブルーノと呼ばれた男は、ノーラに向かって腕を伸ばした。

（あっ……フェルダさんの店ですれ違った人！）

やはり男はノーラの恋人だった。

「何言ってるのよ！？ブルーノ、無理矢理馬車を止めたりして！危ないじゃないの！」

「君こそ目を覚ませ！自分がどちらの方角に連れて行かれているのか、分かっているのか！？」

「えっ……」

辺りは真っ暗で、ランタンの灯りに照らされた範囲しか見えない。

きよるきよると見回したあと、ノーラはいぶかしげにブルーノに視線を戻した。

「どちらの方角って……王都は西よ。それが何なの！？」

「じゃあ、なぜこの馬車は東に向かってるんだよ！？」

ブルーノの言葉に、ノーラは目を見開いた。

「……どういう事！？」

ザックがランタンを掲げて辺りを照らした。

「……本当だ……なんで東の峡谷にいるんだ？……どうして!？」  
「チツ……もう少しだったのに!」

デイノが吐き捨てるようにつぶやいたのを耳にしたのと、御者席から伸ばされた腕がノーラを掴まえたのは同時だった。

「キヤアツ!!!」

「ノーラ!」

「ノーラさん!」

デイノは御者席にノーラを乱暴に引っ張り上げ、首筋にナイフを当てた。

「動くなよ……この女の首をかつきるぞ」

「デイ……ノさん……」

ノーラが震える声を絞り出した。キヤアア、とエイジャの後ろから、客車から降りてきた女の子達の叫び声が聞こえる。

「……デイノさん、どういう事ですか!？」

ザックが叫んだ。デイノはにやりと笑う。

「ザック、お前は どうする?どちらに付く?この場で俺に手を貸せば、あの店の副支配人にしてやるぞ。」

歯向かえば、この女らと一緒に人買いに売るまでだ。どちらか選ばせてやるよ」

「な……なんだって!？」

ザックはあまりの展開に考えが付いていかないように、立ちすくんでいる。

エイジャはザックの横に並び、くいとザックの袖口を引いた。

「言う通りに」

ザックにだけ聞こえる声量でそう伝える。

ぴくりとザックの肩が揺れた。

「……分かりました……おれは、何をすれば……?」

「それでいい。お前なんて一人じゃ何もできないんだ。俺の言う通りにしてりゃいいんだからな……」

おい、そっちの男。大事な女の喉から血が噴き出すのを見たくな



「つたら、馬から降りな」

ブルーノが真っ青になりながら馬を降りると、デイノはザックに言いつけ、ブルーノの体を近くの木に縛り付けさせた。

「女共は客車に戻れ。下手な動きをするなよ。俺はカツとなると手元が狂うんだ。お前らの仲良しのノーラを殺しちまったら、今度はお前らの誰かがノーラの代わりになるだけだからな」

ガタガタと震えている女の子達を促し、エイジャは客車に戻る。不安そうにこちらを見たザックに、目だけで頷いて見せた。

「ザック！御者席に來い。お前が手綱を引け。まっすぐ進むんだ」

馬車が動き始めるとすぐ、エイジャはドレスの裾を踵で踏んで抑え、スカート部分を勢いよく破った。短くなった裾を腰の横で結ぶ。

恐怖のあまり泣きじゃくっていた女の子達が、驚いてエイジャを見た。

長く男装で生きてきたエイジャはドレスの下が下着だけというのがどうにも落ち着かず、太腿丈のズボンの中に履いていた。ハイヒールを脱ぎ捨て、持って来た鞆からいつものブーツを取り出す。

エイジャの行動にあっけにとられて泣き止んだ女の子達に、エイジャは安心させるように微笑みかけた。

「騙しててごめんね。俺、男なんだ」

「男・・・!？」

思わず声をあげかけたセルマの唇を、エイジャはそつと人差し指で制した。

「大丈夫。あなた達の身は必ず守るから」

ニコリと笑顔を見せたエイジャに、セルマとエステラは思わず状況を忘れて赤面したが、ぶんぶんと首を縦に振って答えた。

デイノが言った「もう少しだったのに」という言葉は真実だったらしく、程なくして馬車は動きを止めた。

「危ないから、あなた達はここで待ってて」

エイジャは女の子達にそう言い聞かせ、細く開けた扉の隙間から素早く客車を降りると、馬車の下に体を滑り込ませた。

馬車の前には同じような大きさのもう一台の馬車が止まっていた。取引相手の男達が二人、馬車から降りてきてデイノに話しかけている。

「デイノ、なんだ、商品にナイフなんて突きつけて。物騒な事だな」

「こつちの男は？これも商品か？」

「ああ、そいつも頼む」

デイノの返答の後、ザツクの「なっ、やめろっ！」という声が聞こえた。

エイジャの頭上で車体がガタガタと揺れ、ガツンと殴りつける音が聞こえたかと思うと、御者席から地面に転げ落ちたザツクの姿が見えた。

「大人しくしてりや痛い目見ずに済むんだ。おい、縛っとけ」

男の声に、抵抗したザツクが暴力を振るわれた事を知る。

(ザツク、ごめん！少しの間、我慢してて……)

エイジャは心の中でザツクに詫び、静かに詠唱を開始した。

男の一人がザツクを縛り上げている間、もう一人がデイノと話を続けていた。

「今日はこの男とその女だけか？後ろには？」

「ああ、今日はあと女が3人もいる。

一人は上玉だぞ。髪は黒いが、真っ白な肌の人形みてえな美人だ。

そういうのが好みなんだろう。お前らの主は」

「ああ、そりゃいい。そういうのを探してるんだ」

一人が馬車の後ろに廻ってきた。客車の扉に手をかけた、その瞬間。「フィアマ・エスト！」

エイジャは詠唱していた術を発動させた。男の全身から一瞬にして炎が噴き上がる。

「ぐあああつ！！」

「なんだ！？どうしたっ！？」

仲間の異常に気がついたもう一人の男が馬車の後方へ走り込んでくるのを確認して、エイジャは馬車の下から逆方向に飛び出した。

横目に、後方から走って来る一頭の馬が見えた。

騎乗している人物のシルエットを確認して安心する。

ルチアだ。良かった、やつぱりちゃんと来てくれていた。

これで馬車の後ろに廻った取引相手の二人はルチアに任せられる。

素早く御者席へ廻りこむ。デイノは何が起こったのか分からず、客車のドアの方を見ようと御者席で腰を浮かせている。ナイフを持った手がノーラの喉元から離れていた。

「ノーラさん、避けてっ！」

突然名前を呼ばれ、ノーラは驚いてこちらを振り返る。エイジャの指示を理解したのか、走り込んで来たエイジャを反射的に避けただけなのか、転がるように御者席から飛び降りた。

「なっ、お前……！！」

振り返ったデイノに、エイジャは走り込んだ勢いのまま、思い切り体当たりを食らわせた。

「うわっ……！！」

御者席から転げ落ちたデイノを追って飛び降り、地面に転がったナイフを拾う。

デイノの体に体重をかけて抑え、首筋にナイフを当てた。だが次の瞬間、エイジャの体はすごい力でデイノから引き離され、後方へ引っ張られた。

「わあっ！！」

エイジャは後ろから羽交い締めになれ、手で口を塞がれた。言葉を

発する事ができなければ、詠唱はできない。

「お嬢ちゃん、魔術師か？勇ましいなあ。だめじゃないか、いたずらが過ぎるぞ」

頭の上から落ちて来たのは、聞いた事のない声。

（しまったっ……三人目がいたのか……！）

「エイジャー！！」

ルチアの声が遠くに聞こえる。

だがその姿を目にする前に、ガラガラと怒りに燃えた目をしてエイジャの前に立ったのは、ナイフを取り返したディノだった。

「こいつ……！やってくれたな……！！」

ディノは怒りにまかせたように、裏手でエイジャの頬を打った。

頭蓋骨への衝撃に、一瞬気が遠くなる。

そのまま男に抱えられ、男達が乗ってきた馬車の客車に乱暴に投げ込まれた。

朦朧とする頭で必死に足を動かして男を蹴り上げるが、大柄で筋肉質な体をした男には効く様子もなかった。

「この野郎……っ、大人しくしろ！！」

怒鳴りつけられたのと、太腿に熱湯を浴びたような激痛が走ったのは同時だった。

もう一度頬を殴りつけられて座席に額を打ち付け、今度こそエイジャは意識を失った。

大柄の男に羽交い締めになされたエイジャの姿が目に入り、ルチアの背筋に冷たいものが走った。

「エイジャー！！」

ルチアは相手にしていた男を一太刀に切って捨て、エイジャの方へ駆け出した。

エイジャが力任せに殴りつけられ、がくりと頭を垂れるのが見えた。そのまま馬車の方へ連れられて行く。

「こ……の……っ」

怒りに我を忘れる、という感情を初めて知った。

エイジャを殴りつけた男を背中から切って倒し、エイジャが連れ込まれた馬車へ走った。

馬車の客車から出てきて御者席に乗り込もうとしていた大柄の男を切り、客車に駆け込むと、目に入ったのは血まみれのエイジャの姿だった。

「エイジャ……！！」

その光景に血の気が引き、目眩を覚えながらエイジャを抱き起こす。

「エイジャ！大丈夫か！？返事をしてくれ、エイジャ……！！」

「ルチア！エイジャは……」

後を追って客車に駆け込んできたフェルダは、エイジャの姿を見て絶句したが、すぐに気を持ち直して状況を把握した。

「貸して、すぐに手当をするわ。ベルが男達を捕縛しているから、ルチアもそっちに行つて」

呆然とエイジャを抱いたまま動かないルチアの後頭部を、フェルダが思い切りはたいた。

「ルチア！しっかりしなさい！」

「あ……フェルダ……」

「ここはアタシに任せなさい！早く行つて！」

鋭い声で一喝され、ルチアははっと表情を変えてフェルダに焦点を合わせた。

頷いたフェルダにエイジャの身体を譲り、客車を飛び出して行つた。

「ルチア！何やってんのよっ！早く！」

外に飛び出すとすぐに、ベルの声が聞こえた。

見回すと、エイジャ達を乗せてきた馬車の横で、ベルが先程ルチアによって切られた二人の男に手際良く縄をかけている。

敵はもう二人いるはずだ。

エイジャ達を馬車に乗せてきた、店のオーナー……デイノと言ったか……は、ルチアが切り倒した場所にそのまま身体を横たえている。

自分の与えた傷が致命傷になったか、身動き一つせず、遠目にはすでに絶命しているように見えた。とどめは刺さず、生かして話を聞き出すつもりだったが、あの時は頭に血が昇っていて、そんな事はすっかり忘れていた。

近付いて確かめると、微かに息があった。意識が戻っても自力で逃げられるとも思えなかったが、念のために縄で縛り、辺りを見渡した。

もう一人、エイジャを馬車に連れ込んだ凶体のでかい男も切ったが、奴はどこだ？

目を凝らすと、すでに追いつけないほど遠く、馬を駆って逃げ去って行く大きな背中が見えた。

「逃げられたか……」

馬を確かめると、ベルが乗ってきた馬が消えていた。あの男が乗って行ったのだろう。

エイジャが助けた店の女が下男らしき若い男の縄をほどいているのを横に見ながら、ルチアは捕縛した取引相手の男達を見張っていたベルに声を掛けた。

「ベル、そいつらの見張りを頼めるか」

「いいけど……私一人に任せるわけ？！？まだ気失ってるけど、目が覚めたら私一人じゃ不安なんだけど！」

「あ、俺も見張ってますから！」

縄を解かれた下男が手を挙げた。横にいた女も頷いている。ルチアは足早にエイジャの元へ戻った。

客車に飛び込むと、そこにはフェルダによって応急処置を施されながら、いまだ意識の戻らないエイジャの姿があった。

「フェルダ……エイジャは……」

「頭の傷の出血がひどかったの。額は出血量が多くなるものだから、見た目よりは傷は深くないはずなんだけど……まだ気を失ってるわ。しばらく安静に……」

フェルダが止める間もなく、ルチアは客車の床に横たえられていたエイジャの身体を抱き起こした。

閉じられたままの瞳を目にして、ルチアはエイジャを失うかもしれないという恐怖に、自らの身体が震えるのを感じた。

(13) 潜入捜査 - 5 (後書き)

いつも読んでくださって、ありがとうございます。  
良かったら感想など教えてもらえれば嬉しいです。  
よろしくお願いします。



(13) 潜入捜査 - 6

頭の後ろに大きな手を添えて、強く抱きしめてくれる腕。

人々の泣き叫ぶ声が聞こえないよう、しっかりと耳を覆って。

父さん、腕を解かないで。

このままずっと。

俺、怖いものなんか見たくないよ。みんなの声、聞きたくないよ。

俺はどうしたらいいの？みんなの願いは何？

なぜ、俺を生かしたの？

父さん……

「……………ジャ…エイジャ……………!!」

遠くに声が聞こえる。

優しい人の声だ。

しっかりと抱きしめてくれている。

父さんなの……………？

「エイジャ……………目を開けてくれ……………!!」

ちが……………う。

「ルチア……………？」

腕の中で小さくつぶやかれた声を耳にして、ルチアは慌ててエイジャの顔を見た。

「エイジャ……！」

「どうしたの……ルチア……」

「……良かった……っ……！！」

ルチアはエイジャの目が開いているのを確認すると再び腕の中にエイジャをかき抱き、絞り出すように声を漏らした。

「えっ……な、なに？」

エイジャは状況が分からずに為されるままになっていたが、

「あの、あの、ルチア、どうしたの！？何かあったの！？」

意識がはつきりしてくると、なぜ自分がルチアに抱きしめられているのか。

その事態に気付いた途端、さあつと顔に血がのぼり、慌ててルチアから身体を引き離れた。

エイジャの行為に気付いて顔を上げたルチアと、真正面から視線がぶつかる。

「キヤアッ！」

エイジャは咄嗟にルチアの肩を突き飛ばして、膝から転げ落ちた。

(び……び……びっくりした)

心臓がどくどくとすごい音を立てている。

「……痛っ」

そこでやっと、エイジャは右太腿に巻かれた包帯に気がついた。

心臓が脈打つのに合わせて、包帯の下がずきずきと痛む。

「……は……い、はい、ごちそうさまでしたあ〜」

フェルダの声に、エイジャはそちらに顔を向けた。

「フェルダさん！え？あれ？ここ、どこですか……？」

エイジャはきよるきよると辺りを見回した。馬車の客車の中のようなだったが、自分が店から乗ってきたものとは少し様子が違う。

(えーと、あれ？俺、お店で女の子として働いてて……馬車に乗り

込んで……ノーラさんの恋人が馬車を止めて……？」

「ああ、だめだめ。まだ動かないで、エイジャ。あなた、頭を打って気を失ってたのよ」

「えっ……ああっ、人買いの男達は！？ザックは、ノーラさん達は！？」

やっと自分が気を失う直前の出来事を思い出し、エイジャは立ち上がろうとして額に痛みを覚え、手をあててしゃがみこんだ。

「みんな無事だ……だから、まだ動くな。お前、息もしているかはつきりしなくて、本当に……もう目を開けないかと思ったんだからな」

ルチアの地を這うような低い声に、ぎくりとそちらを向く。

(こ、こわい……)

「あの……ルチア……お、怒ってる……？」

黙ったまま頷いたルチアの鋭い視線に、エイジャは身体を縮ませた。ルチアの怒った顔は初めて見る。完璧に整った顔が凄むと、こんなに恐ろしいものだろうか。眼鏡のおかげで少し眼光が和らいで見えるものの、怖くて顔を見られない。

(そっだよね……俺、やられて気を失うなんて……バカ)

「ごめん、ルチア……油断したつもりはなかったんだけど……すっかり相手は二人だと思っちゃって、もう一人いるのに気付かなくて……」

ルチアがやつつけてくれたんだよね……役に立たなくて……っっていうか足引っ張っちゃって……ごめん……」

しどろもどろで謝罪の言葉を口にするエイジャに、ルチアの苛立ちは頂点に達した。

「そういう事じゃない！自分の身の危険もかえりみないで勝手な事をするな！

こんな怪我をして……命がなくなったらどうするつもりだ……！」

ふがいなさを怒られているのではないのに気付いて、エイジャは分らないというふうに困った表情を見せる。

「あのね、エイジャ。ルチアは、エイジャが勝手に馬車に乗って行っちゃって、しかも一人で行動開始しちゃったから怒ってるのよ」  
フェルダが助け舟を出してくれた。

「あの……でも、ノーラさん達が危ないと思って……」

エイジャがそう答えると、はあつとルチアが大きなため息を付く。

「ノーラっていうのはあの店の女達の事か？その子達の身の安全ももちろん大事だが、まずは自分の身を案じる。

きちんと作戦も立てないで馬車に乗り込んだりして、もし俺が追いつけなかったらどうするつもりだったんだ？」

「……ごめんなさい。……ルチアなら絶対付いてきてくれると思うから」

ぐっ、と言葉に詰まったルチアを横目に、フェルダが苦笑いする。

「それ言われちゃ怒れないわね、ルチア」

ルチアは頭を掻きむしって立ち上がった。

「フェルダ、俺が切った奴らの傷も見てくれ。死なれちゃ話を聞き出せないからな」

そう言い残し、客車を出て行ってしまった。

その後ろ姿を眺めながら、フェルダが困ったような笑顔を見せる。

「でもね、エイジャ。ルチアの言う通りよ。あなたはもう単独行動の冒険者じゃない。アタシ達はチームなの。」

確かに、今日が馬車が出る日だったっていう事は想定していなかったけど、だからって一人で乗り込むなんて危険よ。

女の子達の身を心配する気持ちも分かるけど、それよりももっとアタシ達がエイジャの身を心配するって事も覚えておいてちょうだい。ベルなんて、早く馬車を止めてエイジャを助けろってそりゃもううるさかったんだから！

とにかく取引の場に着くまでは手を出さずにいるの、大変だったのよ」

「……ごめんなさい……」

エイジャは、フェルダに頭を下げた。

善かれと思つた行動が、仲間に心配を掛けた事。

すまなく思いながらも、自分の身をここまで気遣われた事に、新鮮な感動を覚えていた。

「とにかく、足と額の怪我はあるけど、無事で良かったわ。

ルチアにも、後でちゃんと謝つてあげてね。本当に心配してたのよ。額の傷からの出血がひどくて、見つけた時は血まみれだったんだから」

「はい」

エイジャは肩を落としたまま頷いた。

「じゃ、アタシはあいつらの傷を看てくるわね」

一緒に立ち上がったエイジャを、フェルダが止めようとしたが

「大丈夫です。ちょっと、足の怪我の具合も見てみたいので、歩いてみます」

そう断つて、エイジャはフェルダと連れ立って馬車を降りた。

「エイジャー！」

馬車を出るとすぐにベルが駆け寄つて来た。

「大丈夫！？気を失つてたんでしょう！？」

「ああ、もう大丈夫……ごめんね、ベルも心配してくれたんだってね」

「そうよっ！もう！勝手に馬車に乗つてっちゃって、エイジャがどこかのいやらしいオッサンに売られちゃうんじゃないかってほんと心配だったんだから……！」

ベルは腕を組んでエイジャを睨んで見せた。

「ごめんごめん。ルチアとフェルダさんにも怒られたよ」

「ルチア、完全にパニックになつてたもんね。さつき馬車から出てきて、向こう行っちゃったわよ。私が声掛けても無視。なんなの、あれ！」

ベルが顎で示した先には、少し離れた木の影で、向こうを向いて座

っているルチアの姿があった。

「ルチア」

後ろから声を掛けてみたが、返事はない。

エイジャはしゃがみこみ、もう一度声を掛ける。

「あの……ルチア、ごめんね？」

エイジャはそっぽを向いたままのルチアの正面に回り込み、顔を覗き込んだ。

「俺、ルチアやフェルダさんやベルが俺の身を心配するかもなんて、全然考えてなかった。

フェルダさんが言っていた。チームだって……。心配かけて、ごめんルチアはため息をついて、エイジャと視線を合わせた。

眼鏡の奥で、長い睫毛が辛そうに伏せられる。

「……悪いと思ってるなら、もう二度とこんな真似はやめてくれ。

こんなに……頬を腫らして」

ルチアの冷たい手の平がエイジャの頬を包んだ。

（ああ、そういうえば殴られたっけ。まだちよつと傷が熱いや）

じんじんと熱を持っている頬をいたわるように、長い指がエイジャの輪郭を撫でる。

「痛むか」

「んん、大丈夫」

「大丈夫じゃない時はそう言えと言ったはずだ」

「……ちよつと痛いデス」

へへっ、とエイジャは笑ったが、ルチアは笑い返してくれなかった。ただ、黙ったまま、着ていたロングジャケットを脱いでエイジャに被せた。

「わっ、えっ、何？寒くないよ」

「いいから着てる。そんな格好でうろつくんじゃない」

そう言われて自分の姿を改めてみると、肩と背を出した青いドレスを短く破って腰で結び、足は太腿までのズボンに包帯巻き。

(……追いはぎにでもあつたみたいだな)

エイジャはそう思い、それをルチアが咎めたものと考えた。

「ごめんね、ひどい格好で。動きにくかったからドレス破っちゃったんだ。フェルダさんに謝らなきゃ。」

あ、そうだ！ザックやノーラさん達の様子を見て来なくちゃ」

「エイジャ」

立ち上がるうとしたエイジャは、ルチアに腕を掴まれて振り返った。

「何？」

「お前……」

「……どうしたの？あ、やっぱり返す？」

ジャケットを脱ごうとしたエイジャを、慌ててルチアが止めた。

「いや、違う。」

……何でもない。店の女達は、お前が乗せられてきた馬車の客車の中にいる」

「分かった、行ってくるね。あ、ザック！」

エイジャは店の下男を見つけ、手を振ってそちらへ走って行った。

お互いの無事を喜び合った後、ザックはエイジャの身体のおちこちに  
残る傷跡を見て、顔をしかめた。

「エミリー……なんか気を失ってたって聞いたけど、大丈夫なのか  
？傷だらけだし……」

ザックに心配そうに尋ねられ、エイジャは笑って答えた。

「うん、もう大丈夫。」

ザック、ごめん。いろいろ……黙ってて」

「ああ……」

ザックは頭を掻いた。

「セルマとエステラに聞いた……」

あの……エミリー、男だつて………本当？」

恐る恐る、といったふうに聞いてきたザックに、エイジャは苦笑し  
ながら頷く。

「……しんつつつじらんねえ……」

はあああ、とものすごく大きなため息を付いて、ザックはその場に  
しゃがみこむ。

エイジャは慌てて自分もしゃがみこみ、ザックに目の高さを合わせ  
た。

「ごめん！ほんとにごめん！そういう作戦だつたんだ。あの店が怪  
しいっていう話があつたんで、潜入捜査しなくちゃいけない……  
俺、こんな見た目だから、女装して潜り込んだんだ……騙してごめ  
ん！」

しゃがんだ姿勢のまま、膝頭に額を付けて謝るエイジャを、ザック  
は泣きそうな顔をしながら見つめる。

「いや……エミリーは悪くないよ……エミリーがいなかったら、ノ  
ーラもセルマもエステラも……俺も、あの人買いに売られてた。  
エミリーに助けられたんだ。ありがとう」



「ザック……」

騙されていた事をなじる事もなく、礼を述べるザックに、エイジャは救われる思いがした。

ふいに熱い涙がこみあげてきて、エイジャは勢い良くザックに抱きついた。

ザックはバランスを崩して尻餅をつき、目を白黒させる。

「ありがとう！ザック、ほんとにごめん！なのに、許してくれて……ほんとにありがとう！」

「あああああの、エミリー、いやその、分かってんだけど、男同士なんだけど、なんかこの状況やば、ってというか向こうでエミリーの仲間の男がすげえ顔してんだけど……！」

狼狽えるザックの視界の先には、ザックを殺さんとばかり射るように睨みつけてくるルチアの姿があった。

エイジャ達が乗ってきた馬車に店の女の子達を乗せ、ザックが御者をしてザクセアの街へ戻る事になった。

もう一台の馬車には客車に捕縛した二人の男と一命を取り留めたデイノ、見張り役にフェルダが同乗し、ベルが御者をしている。

二頭の馬にエイジャとルチアが乗り、馬車の後ろを付いて歩く。

捕縛した男達の見張りをフェルダ一人にまかせるのは危険ではないか、とエイジャは尋ねたが、ルチアが「フェルダ一人で十分」と言い切った所を見ると、心配ないのだろう。

見覚えのある峡谷まで戻ってきた所で、一行は進行を止めた。

馬車の客車の扉が開き、ノーラが飛び降りて木に縛り付けられていた恋人の元へ走る。

「ブルーノ……！」

「ノーラ……！」

ブルーノの縄をほどいているノーラの姿を馬上から見ながら、ルチアが少しきまり悪そうに呟く。

「あの男は連れて行くと足手まといになりそうだったから、置いて行っただ」

「ひどい、ルチア」

エイジャが口を尖らせて抗議すると、ルチアが肩をすくめた。

「俺達がここを通った時、木に縛り付けられたまま大騒ぎしてたんだぞ。こっそり後を付けてるつてのに、あんなうるさいのを連れて行ったらどうなる」

それは……仕方がないかもとエイジャも納得した。

「でもブルーノさんは、ノーラさんを助ける為に一人で追いかけてきて、危険を顧みず、馬車を止めたんだよね。ノーラさんは、嬉しいと思うよ」

恋人達が人目も憚らず再会を喜び合う様子を見ながら、エイジャがぼつりとこぼした。

「……お前なら、嬉しいか」

ルチアに尋ねられ、エイジャはうーんと唸った。

「どうか……。それより、大事な人には、危ない事しないで欲しいな」

エイジャの答えに、ルチアはため息をつく。

「そう思うなら、お前ももう少し自分の身を大事にしてくれ……」

「ん？何か言った？」

「いや、いい。ほら、行くぞ」

ブルーノの馬は主から遠く離れる事なく、すぐ近くの木陰にいた。

その馬にブルーノとノーラが仲睦まじく二人乗りして、一行はザクセアの街に戻った。

ザクセアの街に着くと、ザックやノーラ達を店まで送った後、ディノと人買いの二人の身柄はフェルダの店へ移された。

すぐにザクセアに駐屯する王宮兵に引き渡すのかと考えていたエイジャは面食らったが、成る程、この人買いの存在自体が、シアル大

公の侵略行為を証明する事になるかもしれないのだ。安易に王宮兵に渡してしまうわけにもいかない。

フェルダが店の奥の部屋のクローゼットの扉を開け、掛けられていたドレスを横に寄せると、奥に出てきたのは地下に続く長い石の階段だった。

思いも寄らない光景に言葉を失っているエイジャをよそに、ルチアはデイノ達を連れ、慣れた様子で階段を降りて行く。

デイノ達は意識はあるものの、まるで夢遊病者のように虚ろな目をして、おとなしく指示に従っている。

その姿に薄気味悪さを感じながら、エイジャとベルも後に続いて階段を降りて行った。

「さ、入りなさい」

地下にあったのは石壁に囲まれた鉄製の牢獄だった。

デイノ達は何の抵抗も見せず、素直に牢獄に入って行く。

フェルダがカチャリと扉に鍵を掛けて振り向いた。

「お疲れさま。話を聞くのは明日にして、とりあえず少し休みましょ」

「あ……はい」

エイジャがまだ緊張を解けずに答えると、フェルダは微笑んで見せた。

「大丈夫よ。催眠術が掛かってるから、この三人にも朝まで寝てもらおう」

フェルダは男達に向かって、小声で何かを命じた。すると、立ち尽くしていた男達はがくりとその場に膝をつき、体を横たえて眠ってしまった。

「フェルダさん……そんな術も使えるんですか」

「こっわー……。一番敵に回したくないタイプね」

エイジャとベルが少したじろいでいるのを見て、フェルダがおかし

そうに笑う。

「そうよお。アタシを敵に回すとコワイわよ〜！」

無言で頷くルチアが、その言葉に間違いがない事を示していた。

浴室で汚れを落とし、一人に一部屋があてがわれた寝室で、エイジヤはようやく肩の力を抜いてベッドに倒れ込んだ。

ああ、長い一日だった。

もう外はうっすらと白み、夜明けが近い……

（フェルダさんは、明日は寝坊していいからゆっくり休めって言うてくれたし……お言葉に甘えちゃおう……）

緊張が解けた途端、一気に眠気が襲ってきて、エイジヤは眠りについた。

同じ頃、ベルはまだ眠れずにベッドで横になっていた。

疲労困憊ながら寝付けずに考え続けていたのは、捕らえた男達の事だった。

取引現場に追いついてすぐの事、飛び出して行ったルチアが取引相手の男達を切り、そのまま二人を放り出してエイジヤを追いかけて行ってしまったので、後を追ってきたベルが急いで二人を捕縛した。一応、こういう時の縄の掛け方は心得ている。そんな自分に呆れながらも手際良く縛っていると、男の一人が薄らと目を開けた。

（ヤバッ！）

ベルは手近にあった石で男の頭を殴りつけ、再度昏倒させた。だが、殴りつける瞬間、男がベルの顔を見て放った一言に、耳を疑った。

「ノエル様！？」

ゴン、と鈍い音を立てて石が命中し、男は気を失った。

ベルは手にした石を取り落として、今自分に向けて放たれた言葉を頭の中で繰り返した。

(ノエル、さま……!?)  
その名は、忘れる訳もない、生き別れとなった自らの双子の弟の名前だった。

ノエルなんてありふれた名前……どこにでもある。

意識朦朧としていた男が、自分を誰かと見違えて、意味もなく口走った名前だろう……

そう考えようとしても、やはり疑いが頭をもたげる。

あまり似ていないと言われながらも、その言葉には「双子の割に」という前置きが付いていた。目や口元なんかは、やっぱり双子だと言われていた。

あの男は、弟の所在を知っているのではないか。双子の自分の顔を弟と見違えて、咄嗟に名を呼んだのでは……

しかしそうだとすると、なぜ「様」を付けたのか。

人買いに売られていった弟が、人買い達に「様」を付けられる立場にいるとは考えられない。

やはり偶然の一致、人違いだきつと……

何となく、誰にも話す事はできなかった。

ルチアとフェルダは王宮の人間だ。今は目的が一致して行動をともにしているが、いざという時、自分の弟の身を最優先にしてくれる確証はない。

エイジャは心からベルの身を案じてくれているが、それだけにルチア達に隠し事をさせる気にはなれなかった。

明日になったら……フェルダが男達に話を聞くはずだ。隙を見て、ノエルという名に心当たりがあるのか、聞いてみよう。

そう思うと、どうしてもベルの意識は研ぎすまされてしまい、眠りに付く事はできなかった。

(14) 正論と私情

「ええっつ！何それ！？もうあの三人の身柄を王都に移しちゃったって……どういうこと！？」

もう太陽が真上に昇ろうという時刻になってから囲んだ、朝食の席で。

ベルは思わずテーブルに両手をつけて立ち上がり、向かいの席で美しくナイフとフォークを使うルチアに詰め寄った。

「これから先の尋問は王都で俺達の手の者が行う。報告は随時入る予定だ。俺達は先を急ぐ」

「だって……話は明日聞くって、フェルダさん……」

「あら、アタシ達が直接尋問するとは言ってなかったと思うけど……だいたい、アタシの尋問ってエグイわよ。見たかったの？」

フェルダがニヤリと笑い、ベルは背筋に寒気を感じて椅子に座り直した。

「ベル……あの人達に、聞きたい事があつたんじゃない？」

エイジャが心配そうにベルの顔を覗き込んだ。

「……」

「お前の双子の弟の事は、何か知っている事がないか聞き出すように指示してある。後で弟の名前や背格好なんかの情報を纏めて送る手はずになっているから、心配するな」

ルチアはそう説明したが、ベルは答えず、朝食に手を付けないうまま席を立って部屋を出て行ってしまった。

「ねえ、ルチア。ベルは……自分で聞きたかつたんじゃない？」

エイジャが言うと、ルチアはナイフを置き、無作法に肘を付いた。

「あいつは人攫いに対して私怨が深すぎるんだ。もしかしたら聞きたくないような話を聞かなければいけないかもしれないからな」

「ベルはどんな事でも、自分の耳で聞きたかつたんだよ、きつと……」

…。  
それで傷つく事があつたとしても、弟さんの足取りを自分の手で掴みたかつたんじゃないかな」

「あいつがああ調子でキャンキャンがなりたてた所で、口を割るような連中じゃない。専門家にまかせて確かな情報を得る方があいつにとつてもいいだろう」

ルチアの言葉を受け、フェルダが口を挟む。

「ベルちゃんには申し訳ないけど、あいつらの尋問にはかなりの慎重さが必要なの。」

こちらがベルちゃんの弟さんの情報を欲しているっていう事を相手に掴まれたら、それをあちらの交渉材料にされてしまうわ。

相手のペースにさせる材料を持ち込むわけにはいかないのよ」  
つまり、ベルの弟の事は最優先事項ではないということ。

フェルダが言った事の意味を理解し、エイジャは唇を噛んだ。

分かってている。これは二国間の、ひいては大陸全土を巻き込むかもしれない戦争に関わる問題。フェルダの言っている事は正しい。

でも……ベルの気持ちは？

エイジャは何も言い返せず、手早く食事を済ませて席を立った。

ベルの寢室の扉をノックしてみたが、返事はない。

家の中を一通り探し歩いてみたが、ベルの姿はなかった。

(外に出たのかな……)

エイジャは玄関から外に出、ベルの姿を探しながら大通りに向かって歩いて行った。

大通りは買い物客でごった返していた。

商人の街らしく様々な店が立ち並ぶ通りを、人ごみの中にベルの姿がないか、きよるきよると見回しながら進む。

しばらく歩いた所で、大きな包みを抱えて店から出てきたベルの姿

を見つけた。

「ベル！」

名前を呼んで駆け寄ると、ベルはばあつと顔を綻ばせた。

「エイジャ……追って来てくれたの？」

「うん、ベル、傷ついたんじゃないかと思ってさ……、何、これ？」  
持つよ、とベルの抱えていた包みを受け取りながら、エイジャは尋ねた。

「買ったかった ストレス発散には買い物が一番だもん。ね、ね、どう？これ」

ベルがぐるりと廻って見せる。先程朝食の席で着ていたのとは違うワンピースを着ていた。

ウエストからふわりとスカートが広がり、裾にはレースが縫い付けられている。

明るい蜜柑色がベルのキャラクターによく合っていて、ベルを年頃の娘らしく可憐に見せていた。

「よく似合ってるよ。かわいい」

エイジャが微笑むと、ベルは頬を赤く染めてはにかんだ。

「ね、エイジャ、お茶飲まない？私、朝ご飯食べてなかったからお腹すいちやった！付き合って」

そう言つてエイジャの腕を引いた。

「いいけど、俺お金持って来てないよ」

「大丈夫！これがあるもん」

ベルはバッグから金色のカードを出して見せた。

カード中央には王宮の紋章が刻印されている。そういえばユズールの町で買い物した時に、ルチアがこれで清算していたっけ、と思いつ出した。

「王宮騎士団のゴールドカードよ。ルチアから借りてきちゃった」

「えっ、ルチアが貸してくれたの？」

ルチア、ああ見えてベルにもちゃんと優しくしてるんだな、とエイジャは考えたが、



「まさか、あの男が私にこんなもの貸してくれるわけないじゃない。さつきルチアの部屋から取ってきたのよ」

二の句が継げずに絶句しているエイジャに、何とも無さげにベルが続ける。

「あいつ、ちよつとガードが甘いわよね。さすがにお届け物の書簡とか剣なんかは部屋には置いてなかったけど、財布もカードも部屋に置きっぱなしなんて信じられない。どいういう育ちよって感じ」

「……後で怒られるよ？」

「どうせカードでツケた分、後で王宮に請求がいくだけだもん。誰が使ったかなんて分かんないし。帰ったらコツソリ戻しとくから大丈夫」

ね、ね、何食べる？悔しいからおもいつきり贅沢しちゃうよ。

なにが『指示してあるから心配するな』よ。私を挟んだら面倒な事になるから、黙って勝手に送致したくせに。協力だけさせといて、私の弟の事なんか結局どうだっていいのよ。ルチアのバカ！変態！」

口は悪いが、言い分はもつともだとエイジャは思った。

ベルは弟の行方を追うために、エイジャ達に協力してくれているのだ。昨夜もベルは男達を捕縛したりと大活躍したのに、一言の相談もなく、身柄を移してしまうなんてちよつとあんまりだと思つ。

……フェルダとルチアの見解が正しい事が分かっているだけに、「私情を挟むな」と、自分も言われたような気がして。

だからさつき、何も言い返せなかったんだ。

「よしつ、何かすつごくおいしくてすつごく高い物食べちゃおつか！ルチアのカードで！」

「そうそう！あと、後で王宮に請求がいった時に『お前何買つてんの？』って担当者にニヤニヤされちゃうような恥ずかしい物買っちゃいましょうよ！ルチアのカードで！」

おー！と盛り上がるエイジャとベルだった。

店を物色しながら繁華街を歩いていると、後ろから掛けてくる声があった。

「エミリー！」

この名前で呼ぶ人間は限られている。

「ザック！」

ザックは笑顔で近付いてくると、素早くエイジャの全身を見回した。「もう傷、大丈夫なのか？エミリー……って、あ、エミリーなんて女の名前なわけないか……」

気まずそうに言ったザックに、エイジャは苦笑した。

「うん……ごめん。俺、エイジャって言うんだ。エミリーっていうのは、あの時咄嗟に付けた名前。」

傷はもう大丈夫。一応まだ絆創膏はしてるけど、もう痛みはほとんどないよ

ほら、と前髪を上げ、額の絆創膏を見せる。

「そっか……良かった」

ザックは心底ほっとした顔をした。

「エイジャか。うーん、いまだに信じられないや。男だなんてさ……」

「あんたも変態仲間？エイジャに変な気起こさないでよね」

ベルがエイジャの腕に抱きついてザックを睨む。

「あ、君は昨日の」

「ベルよ」

「縄をかけるのが異様にうまかった女の子だね。素人とは思えないくらい」

「……あんたもとろくさそうに見えて結構いい性格してるわね」

ベルとザックの間に流れる不穏な空気を察し、エイジャが慌てて話を変える。

「あの、ザック、今から店！？」

「あ、うん。デイノさんはいないけど……女の子達はいつも通り、

出勤してくるしさ……」

「そうだね……。お店、どうするの？」

店に向かつて一緒に歩きながら、エイジャは尋ねた。

「うん……。昨夜さ、エイジャ達と別れてから、ノーラやセルマ達と話したんだ。」

女の子達はみんな、あの店が好きなんだ。

デイノさんがやってきた事は許せないし、今でも何か信じられないけど……。

今まで、王都に転動した子達……。つまり、売られてしまったって事だけど……。その子達が無事でいてくれて、もし戻ってくる事ができたら……

家族なんかいない子もいたし、あの店しか帰ってくる場所ってないと思うんだ。

その為にも、店は続けるべきなんじゃないかって」

「そっか……。それがいいかもしれないね」

「デイノさんは、どうなった？エイジャ達がどこかに連れて行ったんだろ？」

「ああ、もう王都に送致されたよ。これから、王宮で詳しく話を聞く事になると思う」

「王宮で？ああ、そっか……。エイジャ達って、王宮に使える秘密結社のメンバーなんだよな」

「ひみつつけっしや！？」

エイジャが驚くと、ザツクは声を潜めた。

「大丈夫、誰にも言わないから。それで、反国家分子の調査をしてるんだろ？昨日ベルに聞いたよ」

ベルを見ると、しれっとした顔でよそ見をしている。

ああ、そういう事にしてあるのか。

エイジャは納得して、話を合わせる事にした。

「そ、そうなんだ。だから、デイノさん……。デイノは、もうここに戻ってくる事はないと思う」

「そっか……。そうだよな」

ザックはつぶやいた。

「なんか……悪人だつて分かつてはいるんだけど、変な気持ちだよ。乱暴だつたし嫌な奴だなんて思う事は多かつたけど、女の子達を人買いに売るなんて、そこまでしてたのかつてさ……」

「あいつに同情しちゃだめよ。あんた達に見せてたのは表の顔。

人身売買以外にもありとあらゆる事やってんだから」

ベルが言い放つと、ザックは黙り込んだ。

「そうだよ、ザック。デイノさんの事は忘れて、ザック達がいいお店にしていけばいいと思うよ。

ザック、優しいし面倒見がいいから、きつといいオーナーになるよ。

昨日、セルマさん達もそう言ってたしさ」

エイジャが言うと、ザックは苦笑した。

「みんなは俺が支配人になって、ノーラがママになるのがいいって言っただけだよ。

でも、勝手に支配人になんてなつちゃっていいのかなあって思うよ。

第一、店の権利書なんかは金庫に入ってるはずだけど、金庫の鍵がないし」

「あら、そんなの気にする事ないわよ。もうデイノは戻ってこないんだもん。勝手にもらっちゃえばいいのよ。

権利書の場所も分かってるんなら、何も怖くないじゃない」

「でも、鍵が……」

「あーもう、鍵ぐらい私が開けてやるわよ。行きましょ」

足を速めたベルに、エイジャとザックは慌てて付いて行った。

(15) 宴の夜

カチャ。

小さな金属音を確認して、ベルが金庫の扉を開いた。

中に入っていた数枚の書類と札束を目にして、狭い部屋が歓声に包まれる。

ルチアとフェルダを除いた昨夜のメンバーが、クラブアルトローゼの支配人室に集まっていた。

「すごいや、ベル。さすが秘密結社！」

「本当ね。王宮に仕えてなきゃ、大泥棒になれるわよ」

ザックとノーラに褒められ、ベルは苦笑いを浮かべている。

セルマとエステラは、普段目にする事のない大金を前にしてすっかりテンションが上がり、キアキアと楽しそうにはしゃいでいた。ノーラの横に立っていたブルーノに、エイジャが声を掛ける。

「ブルーノさん、ノーラさんがこのお仕事を続ける事を、許して下さったんですね」

「ああ……、無理矢理僕の意見を通そうとして、また黙って王都に行かれちゃ敵わないからね」

苦笑したブルーノを、ノーラが恥ずかしそうに小突いた。

「やだ、もう勝手にそんな事しないわよ。ブルーノがどんなに私の事を想ってくれてるか、ちゃんと分かったし」

「ちよつと、そこ、人前で堂々といちやつかないですよ」

セルマが冷やかかし、ノーラとブルーノは照れたように笑い合った。

「まあ、この店ももう悪い奴はいなくなつたし。ノーラも店主として働くなら、あんまり客にベタベタされる事もないだろ？それならまあ、許せるかなつて」

ブルーノの言葉に頷き、ノーラがエイジャに顔を向けた。

「エミリー……じゃなくて、エイジャ、ね。本当にありがとう。あなたがいなかったら、私達みんな今頃どこかへ売られてしまつてた

なんて、考えただけでゾツとするわ」

ノーラがエイジャに礼を述べると、セルマとエステラも頷いた。

「エイジャが急にスカートを破いた時はびっくりしたわ。まさか男だなんてね」

「すいません、騙してて」

エイジャが頭を下げるとセルマとエステラは恥じらうように二人で顔を見合わせた。

「びっくりしたけど……でもあの時、大丈夫、あなたたちの身は必ず守る、なんて言われて、ときめいちゃったわ、私」

キヤー、と声をあげて盛り上がるセルマとエステラに、ベルが牙をむいた。

「ちよつとお！勝手にエイジャにときめかないでっ！エイジャもあちこちで女の子に優しくしないでよっ！」

「いや、そんな……俺はセルマさん達が怖がってたから、安心してもらいたくて……」

「まあ、まあ。」

ねえエイジャ、まだしばらくザクセアにいるの？助けてもらったお礼がしたいわ。昨日のかっこいいお兄さんとお姉さんも連れて、お店にいらつしやいよ」

ノーラの誘いに、エイジャはうーんと唸った。

「どうなんだろう？もしかしたらもう、今日発つかもしれない……聞いてみなきゃ分かんないけど」

「えっ、そうなの！？慌ただしいんだな」

ザックが残念そうに言う。

「残念ね。お店の再スタート祝いに、いいお酒たくさん用意しようと思ってたのに。今日は貸し切りにして、女の子みーんなエイジャ達に付けてもらうつもりだったのよ」

ノーラが言うと、ベルの瞳がキラリと光った。

「エイジャ、フェルダさん達に聞いてみましょうよ。いいお酒があるって言えば、来るんじゃない？あの二人、酒好きみたいだし」

「そうだね、聞いてみようか。じゃあ、いつペン戻るよ」

「あ、私はここで待ってるわ。準備も手伝いたいし」  
そう言ったベルに、エイジャはまだルチア達に顔を合わせづらいんだな、と考えた。

仲直りの意味でも、今晚店に招待してもらって一緒にお酒を飲むのは良いかもしれない。

「うん、分かった。俺が話してくるよ」

店を出て行ったエイジャを見送り、ベルはニヤリと笑った。

フェルダの家に戻ったエイジャは、ルチアの泊まっていた寝室のドアをノックした。

「ルチア、いる？」

すぐにドアが開き、ルチアが顔を出した。

「どこに行ってたんだ、お前。出掛ける時は行き先を言っ……」

「ごめん、ごめん。ベルが心配で、探しに行ってたんだよ。」

それでザックに会って、お店に行ってきたんだ」

エイジャは店であった事と、ノーラがお礼をしたがっている事を話して聞かせた。

「出発は今日？できたら、あの人達の再出発をお祝いする為にも、今晚みんなで招待してもらいたいなあ、って思ったんだけど……。」

ノーラさん、いいお酒をいっぱい用意したって……」

「行くわ」

後ろから掛けられた声に振り向くと、フェルダが立っていた。

「昨日、店の裏にリュシアン・ベアールの空き瓶が積まれてたのよ！結構いいお酒出すのね、って思ってた所！

ルチア、今日はまだ残務処理が残ってるでしょ？出発は明日にして、今晚は招待されましようよ。決まり！」

鼻歌混じりで去っていくフェルダを見送り、ルチアがため息をついた。

「……というわけだ。俺はまだ仕事が残ってるから部屋にいる。店に行く時に呼びに来てくれ」

「分かった！ありがとう、ルチア」

「つこりと笑った後、エイジヤは少し心配そうにルチアの目を覗き込んだ。」

「仕事、多いの？手伝おうか？」

「いや、いい。俺にしか分からん書き物ばかりだ。まあ、夕刻までには終わるから心配するな」

「じゃあ、後でまた呼びに来るね。無理しないでね」

エイジヤを見送りながら、ルチアはうーん、と背筋を伸ばした。

朝食の席では、ベルを気遣ってエイジヤまでしょんぼりしていたが、機嫌が直ったみたいで安心した。

ああいう店は気乗りがしないが、店の再出発を景気付けてやるのもいいだろう。

フェルダと同じく、いい酒を用意しているという言葉にも弱かった。さて、夜までに仕事を終わらせるか。こわばった肩を鳴らしながら、ルチアは部屋に戻った。

夕暮れ時になり、エイジヤはフェルダとルチアを伴って、クラブアルトローゼを訪れた。

待っていたのは、ずらりと並んだ店の女の子達、総勢十数名。

「いらっしやーい！」

「キャアツ、いい男ー！」

「エミリー、本当は男だったんですってー！？」

「やだー、お姉さん超セクシー系ー！」

店の女の子達に囲まれ、ルチアは顔を引きつらせた。

「なんだこれは……」

「今日は貸し切りだから、みんな俺達に付いてくれるんだって」  
エイジヤが言うと、ルチアは頭を抱えた。



「聞いてないぞ……こんなたくさんの女、相手にする方が疲れる」  
「はい、お兄さんこっちこっち」

数人の女の子達に捕まり、ルチアはするするとソファに引きずられていった。

エイジャがルチアの後を追おうとすると、反対側から抱きついてきたのはベルだった。

「エイジャはこっち！ね、みんなエイジャの話を知りたがってるんだから！来て！」

「あれ、ベル、どうしたの、その格好！？」

ベルは昨夜エイジャが着せられていたようなドレスを着ている。襟ぐりが大きく開いており、いかにも夜の商売といった雰囲気だ。

「店の女の子達に貸してもらっちゃった セクシーでしょ？エイジャほどじゃないけど」

腰に手を当ててポーズを作る。

「かわいいけど……ちょっと露出が多いんじゃないの？」

エイジャがそう注意すると、ベルは少し頬を染めてエイジャの腕を叩いた。

「もっつ、どこ見てるのっ！エイジャったらっ！」

「さあ、今日はクラブアルトローゼの再スタート祝いよ！みんな、グラスは持ったー？」

ノーラの声が飛ぶ。

「乾杯の号令は新支配人をお願いしますよ。ザック！お願いね！」  
指名されたザックは、慌てて皆の前に立った。

「ええつと、まあ色々ありましたが、皆で力を合わせてこの店を続けていきたいと思えます！俺は形式上、支配人になったけど、俺一人の力じゃ無理だから、皆協力して下さい。」

「じゃあ、乾杯！」

かんぱーい、と声が上がリ、グラスの音が鳴り響いた。

女の子達には、まだ昨夜の事は話していないという事だった。

これまで王都への転勤と称して店からいなくなった子と仲の良かった女の子もいて、王都へ転勤したのではなく人買いに売られたのだという事実は、簡単には話せない出来事だった。

危ない裏稼業に手を出したデイノがしくじって、失踪したという話になっているそうだ。

店が落ち着いたら、改めて本当の事を話すつもりだと、ザックがエイジャに耳打ちで話してくれた。

エイジャやルチア達は、そのデイノの失踪に絡んで、今後も店を続けられるよう尽力してくれた人達だと説明してあるようだ。

フェルダは元々この街で占い師として隠れた人気を誇っており、店の存在を知っていたノーラや女の子達は嬉しそうに人生相談を持ちかけている。

エイジャの周りにも、入れ替わり立ち代わり、女の子が話を聞きに来る。昨日は新人の女の子として入ってきたあのエミリーが実は男だったという事実は、やはり女の子達の興味を引くようだ。

その中で、最も女の子達を集めていたのはルチアだった。髪を地味な栗毛に変え、黒縁の野暮ったい眼鏡で顔立ちを隠している、ルチアの容姿は女の子達を惹き付けるようだ。

ずらりと左右を女の子達に囲まれ、質問責めに合っている。

「ねえねえ、お兄さんってそんな堅いナリしてるけど、実はむっつりスケベなんですって〜!？」

「女ならなんでもいって本当〜!？」

「あたし達の中でお持ち帰りするなら誰ですか〜!？」

ベルに吹き込まれたのか、それは一体誰の事だと言いたくなるような質問を矢継ぎ早に浴びせかけられ、完全に笑顔をひきつらせているルチア。

その時エイジャの横にいたベルが立ち上がり、ルチアの周りの女の子達に声を掛けた。

「だめよー、その男、婚約者がいるんだからー！」

死んだような目で女の子達の質問を聞き流していたルチアが、眼鏡の奥でぎょつとして目を見張った。

「えーっ、そうなのー！？ざんねーん！」

「どんな人！？あたし達の中だと誰に似てますー！？」

女の子達はますます盛り上がり、質問責めが加速していた。

ベルはちらりと横を見る。

エイジャが少し驚いたように目を丸くして、ルチアを見ていた。

ルチアは頭を抱えていたが、ふと顔を上げてエイジャを見た。

束の間、二人の視線が合う。

ふいと視線を反らしたのはエイジャだった。

(やった。ざまーみるルチア！)

心の中で拳を握り締めたベルだった。

(15) 宴の夜(後書き)

リュシアン・ベール

お酒の名前。

軽くて飲みやすいが、味わいにしっかりとした余韻があり人気の  
発泡葡萄酒。

(架空)

## (16) 酷く甘い夜更け

夜更けになってようやく宴はお開きになり、エイジャ達はフェルダの店へ戻ると、そのまま別れて各自の寝室へ戻った。

エイジャはベッドに俯せになると、大きく息を吐いて体をシーツに沈めた。

酒には強い方なので、さして酔っているという自覚もないが、そこそこ量は飲んだので、少し頭の回転が遅くなっているような感じがある。

このまま寝ちゃおうか……そう思ったが、なんだかそんな気分にもなれず、エイジャは体を起こして、テラス窓に近付いた。

カーテンを開けると、ちょうど月が窓の中央に見えた。少し紗がかかって見えるのは、自分の目が酒のせいでいくらか潤んでいるのかもしれない。

少し外の空気を吸いたくて窓を開け、バルコニーに足を踏み出してひんやりした空気を胸に吸い込んだ。

この近辺は平屋造りの建物が多い。二階にあるこのバルコニーから見える景色は、家々の屋根がどこまでも連なり月の光を反射していて、まるでいつか見た夜の海のようなと思った。

手すりに頬杖をつき、エイジャは今日の宴の様子を思い返した。

デイノを失って不安もあるだろう。何とか、自分達の力で頑張っていこうとしているザックやノーラ達を思うと、自分も頑張らなくちゃ、という勇気が湧いてくるようだった。

結局、ベルとルチアを仲直りさせるという目的を達せられたのかどうか分からないが、店への帰り道、酔っぱらった二人がいつものように舌戦を繰り広げながら歩いていたので、きっとあの二人はあれで良いのだろう。

フェルダさんも随分お酒を飲んでいたみたいだったけど、やたらと色っぽくなっただぐらいで悪酔いはしてなかったみたいだ。

それにしてもルチアもかなりの量を飲んでいただけ、大丈夫なのだろうか。部屋で苦しんでいないかどうか、少し心配だ。

帰り道、微妙に心もとない足取りで歩いていたルチアを思い出す。あの時、本当は走って行って、肩を貸したかったのだけだ。

(……婚約者、かあ……)

無意識に、あまり考えないようにしていた事実を、ふいに思い出した。

意外といえば意外だし、当然といえば当然。

はつきりと聞いた事はないが、おそらくルチアは20代前半といった所だろう。まさに適齢期だ。

何しろ王宮では今のような変装もしていないのだ。あの容姿、洗練された優雅でスマートな身のこなし。次代の王であるカルニアス王子の側近を勤められるような知性と、王宮騎士団から近衛に昇格するほどの剣の腕の持ち主。

正直、逆にあそこまで完璧に美しい男に対して恋なんてできないような気がするが、王宮には庶民が到底拝めないような麗しい美姫が揃っていると噂に聞いた事がある。きつとそんな、美しく艶やかで、名のある家の女性と結ばれたのだろう。

(ちよつと……近付き過ぎたのかもしれないな)

エイジャは、そう思った。

たくさんの人々の好意に助けられて生きてきたエイジャは、周囲の人間へその優しさを返す事を大切にしてきた。

だが同時に、必要以上に親しい人間は作らないようにしてきた。

他人には明かせない秘密を抱えて生きている以上、一定の距離を保つてつきあう事が必要だった。

冒険者組合からの依頼で一時的に他の冒険者とパートナーを組んで行動する事もあったが、その後も一緒に組んで仕事をしたいと言われても、それを承ける事は決してなかった。

ルチアは、エイジャが何かを隠している事に気付きながらも、強引にそれを聞き出そうとはしない。

ただ側にいてくれる。そして、エイジャがルチアの助けを求めた時には、必ず来てくれる。

そんなルチアの優しさが心地よくて、つい距離を縮めてしまったのかも知れない。

甘えちゃいけない、そう思っていたのに、いつのまにかルチアにとって自分が特別な存在であるかのように錯覚していたのではないだろうか。

そう、婚約者がいるという事実を知って、気持ちが落ち込むほどに。

はあ、とため息を吐き出し、エイジャは頭を振った。

なんだか自分がひどく弱い人間になってしまったみたいで。

こういう自分は嫌いだ。

女の子を守る時、女の子の笑顔を見た時、エイジャは男としての自分を実感する事ができる。

それはエイジャにとって自分自身の存在意義を再確認できる事だった。

誰かを守る事のできる自分。誰かの役に立てる自分。

でも、ルチアが優しくしてくれると、心地よさと同時に、その存在意義が揺らいでしまうような不安があった。

ルチアに大事な人がいると知っただけで動揺するような、弱い心を認めたくはない。

これからも一人で生きていかなくはいけないのだから。

ギィ、と音がしたのに気がついて、顔を横に向ける。

隣のバルコニーに、ルチアが立っていた。

窓に手を掛けたまま、驚いたような顔でこちらを見ている。

「……ルチア。どうしたの？」

エイジャが声を掛けると、ルチアははっとしたように目を瞬かせた。

「……ちよつと酔い覚ましにな……。飲み過ぎた」

「やっぱり。飲み過ぎじゃないのかなあって心配してたんだよ。シヤルル・ノワールを何本も開けて。あれ、度数かなり高いんじゃないの？」

「シヤルル・ノワールだったのか、あれ……。度数も高いが値段もかなりするぞ、あのノーラって女も結構したたかだな」

ルチアは店を出る前、ボトルを入れた分は払うと言って何故かルチアのゴールドカードをベルがノーラに差し出していたのを思い出した。

最初から金は払うつもりだったからいいのだが、なんでベルが自分のカードを持っていたのか不思議に思いながら、ルチアはバルコニーの手すりに体を預けた。

エイジャがこちらをじつと見ている。

「大丈夫？お水、持ってこようか？」

「いや……。いい。大丈夫だ」

しばらく二人の間に沈黙が続いた。

「婚約……」

エイジャがつぶやいた言葉に、ルチアの肩がびくつと跳ねた。

「婚約、してたんだね。おめでとう……。つて言つとなんか変だけど。」

水臭いよルチア、何で言ってくれなかったの？」

「いや……。そんな改まって言うような事でもないし……。第一、関係ないだろう」

そう言うと、エイジャは黙り込んだ。

「……エイジャ？」

「そ……。だね。関係ないね……」

エイジャは手すりに掛けていた腕を離し、身体の向きを変えた。

「関係ないけど……。でも……。俺達は今はチームなんだし……。それぐらい、話してくれても……」

「あ、いや、関係ないってというのは……。俺の婚約者が、俺達の旅に



は関係ないだろうっていう意味だぞ。お前が関係ないっていう意味じゃ……」

なぜ、俺は慌ててるんだろう。

なぜ、エイジヤは顔をこちらに向けないんだろう。

ルチアは、隣のバルコニーにいるエイジヤに手が届かない事を歯がゆく思った。

こんなに近くににいるのに。

うまく廻らない頭でそう思った時、ひとりでに身体が動いた。

物音に気付いて振り向いたエイジヤは、バルコニーを飛び越えようと手すりに足を掛けるルチアの姿を見て戦慄した。

「キヤアアアッ!!」

二階とはいえ、酔って普段の運動能力を失っている今の状態では、失敗して下に落ちれば大怪我をするに違いなかった。

エイジヤは慌てふためいて駆け寄ったが、止める間もなくルチアは軽々と手すりを飛び越え、駆け寄ったエイジヤの腕を掴んだ。

そのまま胸の中に抱き込まれ、エイジヤはパニックに陥った。

「る、る、ルチア!?! どうしたの!?!」

動転した声で尋ねるエイジヤに答えず、ルチアは腕に力を込める。

「気持ち悪いの? ねえ……大丈夫!?!」

「……大丈夫だから……少しの間、このままでいてくれ」

「えっ!?!」

腕の中の抵抗が弱まり、エイジヤが身体を強ばらせながらも、ルチアを気遣ってじっとしているのが分かった。

抱きしめたエイジヤの身体はやはり、男の物とは思えないほどに頼りなく、柔らかくて。

ルチアは、人買いの男達との一戦で気を失ったエイジヤを抱きしめた時の事を思い出す。

あの時は気が動転していて分からなかったが、後になって思ったのだ。

本当に男なのか？

王宮騎士団にいた頃、訓練や作戦の最中、同僚の男達の身体を背負ったり組み合う事はあった。

剣士の揃った騎士団の男達の体つきと比べる事に無理があるのかもしれないが、エイジャの身体はあの男達とは完全に異質なもの思えた。

その後、謝りに来たエイジャに思わず問い質したくなって引き止めてしまったが、さすがに聞くわけにはいかなかった。

「お前は本当に男なのか」などと、誰が聞けるだろうか。

今も酔いのせいで、正常な判断力が自分にあるとは思っていない。でも……ならばこの細い腰も、小さな肩も。月光を浴びて輝く白い肌も、伏せた長い睫毛の下で、濡れたように光る碧玉のような瞳も、全てが甘く、胸を斬られるように切なく感じるのも、全て酔いのせいなのだろうか。

ああ、きっと酔いのせいだ。シャルル・ノワールのせいだ。だから俺がこれから何をしようかなんて、誰にも責められるものではないんだ。

(17) 身に覚えのない朝

最初に目に入ったのは、白い天井だった。  
抗いがたい眠気に再度目を閉じると、外から鳥のさえずる声が聞こえてくる。

(朝か……)

ゆっくりりと頭を動かした瞬間、激しい痛みがルチアの脳天をつらぬいた。

「……つたあ……」

(なんだ、この頭痛は……)

そのまましばらく痛みに耐えた後、そろりと体勢を変え、頭部に振動を与えないように注意しながら、ルチアはベッドの上に上半身を起こした。

ズキズキと痛む額に手を添えて思い出す。

(そうか……昨夜は例の店で飲んだっただな……)

左右を店の女達に囲まれて質問責めに合い、それをかわすのに、随分酒を過ごした記憶がある。

ぼんやりと昨夜の事を思い返していたルチアは、突然戻った記憶に愕然として青ざめた。

衝撃に痛みを増した額を抑えながら、慌てて周りを見回す。

ベッドには……自分一人だ。

だが、今いるこの部屋は自分の部屋ではない。

書斎を備えたルチアの部屋よりもこじんまりとしており、何より壁に掛けられた風景画。

この絵が知った景色によく似ているとかでエイジャがひどく気に入って、この部屋で眠れる事を喜んでいたので。

一気に顔色をなくし、ルチアは狼狽した。

(まさか……俺は……!?)

その時、部屋の扉がコンコン、とノックされた。心臓が止まる程驚き、ルチアは扉を見つめて硬直した。

「ルチア？起きてる？」

掛けられた声はエイジャのもの。

ルチアは混乱しながらも、「ああ、起きてる」と慌てて返事を返した。

ドアが開き、エイジャが入ってきた。鍵は掛けていなかったようだ。

「具合はどう？頭痛くない？」

「ああ……大丈夫……いや、頭痛はひどいな……」

それより、俺は……？ここはお前の部屋、だよな？」

エイジャはくすりと笑った。

「やっぱり全然覚えてないんだ。俺、おかげですっかり腰が痛いのに」

ルチアは身を堅くして観念した。

「エイジャ……その、俺は……」

何かしたのか？……お前に……」

エイジャはきよんとした表情の後、おかしそうに笑った。

「ルチアってば、昨夜バルコニーで俺にもたれたまま寝ちゃったんだよ。もー、ここまで引きずってくるの、すつごく重かったんだから！」

それより、ベッドに乗せる方が大変だったよ。こうやって、背負い投げみたいにしてベッドに乗せたんだよ。ルチア、まったく目が覚めなくてさ。俺はルチアの部屋で寝させてもらったけど、もう、一晩寝てもまだ腰痛治らないよ」

エイジャの答えを聞き、ルチアはハアアッと大きなため息をついて、ベッドに再び倒れ込んだ。

(ああ……良かった……)

安堵と、少しの落胆。

いやいや、何で落胆なんだ。

自分に突っ込み、ルチアは顔を回してエイジャを見た。

昨夜の事は、どこまでが現実なのか、夢なのか……

腕に抱いた身体の柔らかな感触は、今でも思い出せるのに。

このエイジャの全くいつもと変わらない態度は何なのだろう。

全部夢？いやいや、今こうしてエイジャの部屋で目覚めた事実が証明している。あれは現実だったんだ。

恨めしい気持ちでエイジャを見上げていると、エイジャが腕を伸ばしてきた。

ルチアはそのまま腕を取って抱き寄せたくなる気持ちを抑え込む。

「はい、起きて。髪、する？先にお湯浴びてくる？」

エイジャがルチアの肩に手を添えて、身体を起こすのを手助けしながら聞いた。

気付くと、寝ている間に結び紐が外れていたらしい。頭は金髪に戻っていた。

エイジャがベッドのサイドテーブルに置かれた眼鏡を手にする。

「ああ、眼鏡はちゃんと外して寝たのか、俺」

「何言ってるの。俺が外して行ったんだよ」

額に手を当てながらルチアは立ち上がった。

「湯を使ってくる。その後で髪を頼む」

「頭痛そうだねー……、大丈夫……？」

エイジャが後に付いて歩き、扉を開けてやった。

揃って部屋を出た時、廊下の向こうから声が飛んできた。

「エイジャ……！？なに、その男っ！？」

今一番聞きたくない人間の声に、ルチアが不機嫌さを露にしてベルを覗む。

「ちよっとその金切り声、押さえてくれ……頭に響く」

「な、なんなのその歩く女神像みたいな男っ！？なんでエイジャの部屋から出てくるわけ！？」

何連れ込んでんのよっエイジャ！！バカアーーーーッ！！！！」

「…………で、これがルチアの本当の姿ってわけね」

ルチアが湯を使っている間に事の次第をベルに説明し、エイジャは湯上がりのルチアの髪を整えていた。

椅子に座りエイジャに髪を委ねているルチアの姿をしげしげと眺め、ベルがつぶやく。

「…………まあ、ライバルとして相手に不足はないわ」

ルチアがちらりとベルを横目に見ると、ベルがびくつと肩を揺らした。

「ちよつと！その顔でこつち見ないで！土気が萎える！」

眼鏡かけなさい眼鏡！とベルに強引に眼鏡を掛けさせられ、ルチアは迷惑そうにしながらもそれに従った。

エイジャが結び終わった髪に手を添え、詠唱する。目に痛い金色が輝きを失い、地味な栗色へと変化した。

「はあ…………やつと落ち着いた。それにしてもあんた、よくそんなド派手な容姿で王宮騎士団にいられたわね。目立って仕方がないじゃないの」

「あ、俺も思った。騎士団つてずっと王宮内にいるわけじゃないじゃん、街なんか歩く時、注目浴びてやりにくくなかったの？」

ベルの質問に、エイジャも同意する。

ルチアはため息をついて説明した。

「王都で民衆の前に立つ時は、正装で兜を付けていたから…………。だがそういえば、他所の街を歩く時は、仲間に周りを取り囲まれていた。今思えば、この髪色や瞳の色が人々の目につくのを防いでくれていたのかもしれないな。」

…………それにしても、そんなに奇異か。俺の外見は」

「……そこまでいくと奇異ね」  
ベルの言葉に、ルチアはがくりと肩を落とした。  
「奇異っていうか！その、ちょっと人間離れしてるっていうか！派  
手すぎてあんまり直視できないっていうか……」  
エイジャのフォローもあまりフォローになっているとは言えず、ル  
チアはまた頭痛がひどくなったような気がした。

朝食の前にフェルダが入れてくれた、とびきり苦い薬草茶のおかげ  
で、昼近くにはルチアの頭痛も随分良くなったようだった。

「さて……じゃあ、出発しましょうか」  
準備を整えたフェルダが言い、ルチアが頷く。

「フェルダさん、次の町についたら御者交代してよね」  
馬車の御者席でベルが不満を漏らす。

この馬車は、先日の人買い達が乗り捨てて行ったものだ。  
乗馬するのは嫌だが馬車ならOK、と言うフェルダの為の馬車では  
あるが、道中戦闘に巻き込まれた時の為、エイジャとルチアはそれ  
ぞれの馬を使う事になった。

街の外れまで進んだ時、エイジャは後ろから自分を呼ぶ声に気がつ  
いた。

「エイジャー！」

振り向いて確認する。声の主はザックだった。

「ザック！見送りに来てくれたの？」

「うん、昼には発つって言ってたからさ……」

エイジャは急いで馬から降りた。

走ってきたザックは息を整える。

「いろいろ、ありがとう。本当に世話になったよ。昨夜も結局、お  
礼するつもりが逆に酒代を払ってもらっちゃったし……」  
礼を述べるザックに、エイジャは微笑んだ。

「こつちこそ！これからお店、がんばって盛り上げていってね」

「うん。それで、いつか自分達の力で、本当に王都に店を出すよ」  
そんな時はよろしくな、とザックは馬上のルチアに声を掛ける。

詳しい事は分からなくても、ルチアが王宮に顔が利くという事は分かっているようだった。

「ああ、その時は口添えする」

ルチアも馬上から返答する。

ザックはエイジャに右手を差し出した。

手を取って握手を交わすと、ザックが照れたように笑う。

「初めて会った時、この子は俺のお姫様だ、って思ったよ。結局、俺よりずっと強くて男らしかったけどさ。」

秘密結社の任務って危険が多いんだろうけど、気を付けて。またこの街に寄る事があつたら、絶対顔見せに来てくれよな」

「ザック……ありがとう……」

涙声になったエイジャがまた抱きついてきそうになったのを察し、ザックが素早く身を引いた。

「それはやめとく！怖えから！」

手を振るザックの姿が見えなくなり、エイジャは前を向いて少し鼻を噉った。

「そんなに別れが辛いかな？」

ルチアがつまらなそうに言う。

「うん……ザックって、なんだかお兄ちゃんみたいでさ。会ったばかりの俺の事、すごく心配してくれて、ほんと、いいやつだよな」

「お兄ちゃんか……」

(ザックが兄なら俺はなんだ?)

ルチアはそう聞きたかったが、なかなか聞きにくい質問ではある。

なにしろ、エイジャが昨夜の出来事をどう思っているのかも謎なのだ。



「ルチアは……」

エイジャの言葉に、ルチアははっとして次の言葉を待った。

「ルチアは、父さんみたいだ」

「……」

（とうさんだと!?!）

「昨夜、ルチアは酔っぱらって覚えてないだろうけど、俺、ちょっと落ち込んでさ……」。

でも、ルチアがぎゅーっとしてくれて、俺、父さんの事思い出して、すぐ気分が落ち着いたんだ」

えへへ、と心無しか頬を染めて話すエイジャの顔を、冷えた頭で眺める。

（父さん……それって……喜ぶべきなのか？悲しむべきなのか？そんなに親父扱いされているのか、俺は？）

嬉しそうなエイジャとは対照的に、沈みこんでいく気持ちを抑えられないルチアだった。

## 幕間 ベルの独り言（前書き）

ちよつと視点を交えまして、ベルの独り言をお送りします。

いつもとは文体も違つて一人称になりますが、番外編という事でお楽しみ頂ければと思います。

## 幕間 ベルの独り言

ああ、疲れた。ルチアってば休憩取るのが遅いのよ。  
空を仰いで、私はうーんと背筋を伸ばした。

木陰に腰を降ろす。ずっと御者席に座っていたからお尻がカチンコチンだわ。

そのままごろりと仰向けに寝転んだ私の視界に、太陽を背にして、大好きな人が顔を出した。

「ベル、そんな所に寝転んだら、服が汚れるよ？」

はい、これ敷いて。と、敷物を私の横に敷いてくれる。

ああ、なんて優しいの。

「ありがとっ、エイジャ」

敷物の上に移動して座ると、エイジャも私の横に腰を降ろした。

その横顔をじっくり眺める。うん、今日もきれい。

そこいらの女よりもずっと美しくて、なのにそこいらの男よりもずっと強くて、とびきり優しい、私の大好きな彼。

目を閉じると、今でも初めて出会った時の事を鮮明に思い出す事ができる。

あの時、私はまだカルロスの一団にいた。私の仕事は、行き倒れのうら若い娘の振りをして、助けてくれた旅人を村に誘導すること。

我ながら卑怯な手だとは思っけど、これまでこの手に引っかけたきた連中は皆、下心アリアリの男達ばかり。

介抱もそこそこに服を脱がせようとした奴もいたし、村へ連れていく道中、「命を助けてやったんだからこれぐらいはサービスしろ」って感じで、身体にべたべた触ってくる奴もいた。

はつきりいって、そいつらがカルロス達によって身ぐるみはがされようが、どこかへ売られようが、私には何の罪悪感もなかった。

でも、エイジャは違った。

目を瞑ったまま、誰かが岩陰に私を連れて行くのを感じて、ああ、今度もまたスケベ親父かなあ、なんて私は思ってた。

でも、ゆっくりと私を岩陰に降ろしたその人は、持っていた水を、手ずから飲ませてくれて。

おずおずと目を開いてその人の顔を見た時に、私の心はもう打ち抜かれちゃってた。

なんてきれいな人なんだろう。なんて……優しく微笑むだろう。

エイジャと名乗ったその人は、物腰は柔らかかで、私を馬に乗せる仕事も優雅で。

後ろから手綱を取ったエイジャの息づかいを首筋に感じて、私は胸がドキドキして死にそうだった。

そして、村に到着する頃には、覚悟を決めてた。密かに考えていた計画を、実行に移す事。

エイジャの連れのルチアは、黒縁のダサイ眼鏡なんてかけて、栗毛の髪を後ろで纏め、文官風の上下をきつちり着込んで、いかにも頭脳労働してますって感じの見た目だった。

でも私は気付いてた。ルチアの帯剣してる剣は、王宮騎士団のもの。お飾りで持つような剣じゃない。あの見た目はきつとまやかした。剣の使える人間に違いない。

二人はどちらかが主人という事もなく、対等な関係で旅をしているようだった。ルチアみたいな剣の使い手が旅に伴っている所を見ると、エイジャも戦える人間なんだろう。エイジャの細い身体から言っつて、武術は使えなさそうだから、きつと魔術師。

いろんな人間を見てきてるから、こういう読みには結構自信がある。果たして読みは正解。馬小屋から逃がした馬が一回戻ってきたちゃつて、カルロスに後を付けられたのは想定外だったけど。

でも、その時のエイジャの振る舞いは、今思い出してもぞくぞくする。ああ、見捨てられた、って思わせておいて、いきなりの奇襲。

馬上に引き上げられて、私の身を気遣う声を近くに聞いた時は、嬉

しくて泣いちゃうかと思っただわ。

ああ、カルロスは結局ルチアが斬っちゃったけど、斬られて当然。今まで何人も命を奪ってきた悪党だもん。

……私の事は、愛してるだの何だの言ってたけど、どうかな。今ではそれが本当だったのか、分からない。

エイジャは見た目もきれいで、魂も澄み切ってる。そんなの、何の能力も持っていない私に分かるわけないって思われるだろうけど、汚れきった人間をたくさん見てきたから、分かるんだ。

私も、そう。エイジャには話せないような事もたくさんしてきたし、全然きれいな人間じゃない。私みたいな汚れた人間が、エイジャの側にいていいのかなあって思う事だってある。

でも、エイジャは私の事を汚れた女みたいには決して扱わない。きつと、私がこれまでしてきた事をうすうす察してはいるはず。でも、私をお姫様みたいに大事に扱ってくれる。

エイジャの側にいると、私のこれから行く先に光が差しているように感じる。生き別れになった双子の弟を探す為に、いろんな事をしてきたけど、正直もう諦めかけてた。でも、きつといつか会えるって、また思えるようになったんだ。

だから、私は絶対にエイジャの側を離れない。正直、エイジャは誰にでも優しくするから、ライバルなんて数えきれない。王都で冒険者として身を立ててるって話だけど、きつと王都に帰ったら、エイジャ狙いの女がわんさかいるはずだ。

でも目下のところ、一番のライバルは、こいつだ。

「なんだ、ベル。俺の顔に何かついてるか？」

ルチア。憎き恋敵。

こいつは男のくせに、エイジャに惚れてる。私には分かる。

言い訳がましく、俺は男には興味がないだの、婚約者がいるだの、

いろいろ言ってるけど、それじゃそのエイジャを見つめる鬱陶しいぐらいの暑苦しい視線は何なの！？あんたは男色の変態決定よ！  
エイジャの魔術で髪色と目の色を変えていた事が分かった時は、眼鏡を取ったド金髪の素顔のあまりの美人っぷりにマジで引いちゃったけど、負けるもんですか。

だいたいあの日、酔ったルチアがエイジャの部屋で寝ちゃったからエイジャはルチアの部屋で寝たって言ってたけど、なんでルチアがエイジャの部屋にいたのかが問題よ。

エイジャが嘘をつくとは思えないけど、まさかルチアが酔った勢いでエイジャに変な事をしてやしないか、私は今も疑ってるんだから。

……ま、でも正直、ルチアの気持ちも分からなくはないんだ。女装した時のエイジャなんて、どう見たって男じゃなかったもんね。

私だって、エイジャ、本当に男なの？って思う時も……実は、ある。

でもね！私の気持ちは本物です。

もしも、エイジャが実は女だった！なんて仰天の展開があったとしても、私の気持ちは変わらない。

愛は性別を越えるのよ。

エイジャが男か女かで悩んでるルチアとはそこが違う。

それにルチアってば、あんな派手な容姿してるけど、恋の経験は相当少ないと見た。宴を催してくれた、クラブアルトローゼの女の子達への態度を見れば一目瞭然。

婚約者がどんな女なのか知らないけど、王宮騎士団なんて王都じゃアイドルグループみたいなもの。おおかたその地位とルックスに釣られて寄ってきたバカ女に捕まったんだろう。

その点、自慢じゃないけど私は百戦錬磨。生きる為にいろんな男を利用してきたんだから。男を落とすテクニクなんていくらでも持っている。

……まあ、エイジャにはそれがなかなか効かないんだけど。

「さつきから何なんだ。何か言いたいことがあるなら早く言え」  
ルチアが面倒くさそうに言う。

言つてやるもんですか。あんたがボサツとしてる間に、私がエイジヤを頂いちゃうわよ、なんて。

「そういえば、お前。クラブアルトローゼで飲んだ時、俺のゴールドカードを持ってたよな？何でお前が持つてるんだ」  
ぎくっ。しまった、返すの忘れてた。

さっさと返しておこうと思ってただけど、あれがあれば何でもツケで買えちゃうもんだから、便利でついつい返しそびれてた。

私は鞆から、中央に王宮の紋章が印刷された金色のカードを取り出した。

「ルチアったら、うっかりやさん。これ、フェルダさんの家の廊下に落ちてたの。渡してあげようと思つて拾つておいたのよ」

につこり笑つて手渡すと、ルチアは不信感いっぱいな表情でカードを受け取つた。

「……全く信じられんが、まあいい。

しかし何故、王宮騎士団のカードの事を知つてるんだ？お前、俺の剣が王宮騎士団のものだつていう事も知つていたよな」

ああ、その事。私はエイジヤの方をちらりと見た。

エイジヤはちよつと不思議そうな目でこつちを見ている。

「昔の元彼が王宮騎士団だったの。それでちよつとね」

「ああ……つて、元彼だあ！？」

驚いているルチアの方は気にせず、私はエイジヤの表情を盗み見る。エイジヤ、元彼の存在を知つて、少しはヤキモチを焼いてくれるかしら？

「誰なんだ、それは。俺の知つてる奴なのか！？騎士団の誰かが、お前みたいな悪女と付き合つていた事があるつていうのか！？」

「あーもう、うるさいなあ。何よ、悪女つて。失礼ね」

「そつだよルチア、ベルの事そんなふうには言わないでよ」

エイジャ！だから好き！

「もう昔の事よ。ルチアが騎士団に入るよりもっと前の事よ、きつと」

「昔ってお前、今16、7だろう！？いくつの時に騎士団の男と付き合ってたっていうんだ！？」

「だーからあ、ロリコンの彼だったの！」

「騎士団にそんな奴がいるか！」

「もう、ルチア！そういう事、他人が無理矢理聞き出すもんじゃないよ」

エイジャがルチアを制してくれるのを眺めながら、私はまた寝転んで空を見上げた。

思い出す彼の人は、いつでもしかめっつらをしている。

ねえ、ゲオルク。

私、ちゃんと光を見つけたよ。

もうずっと思い出さないようにしていたその名前を、心の中で呼ぶと、記憶の中の彼の表情が、少しだけ和らいだような気がした。



幕間 ベルの独り言（後書き）

途中、人名を間違えている箇所がありましたので修正しました。  
恥。

## (18) 劇場の街

ザクセアの街を出てから数日。

エイジャ達一行は途中小さな町をいくつか経由しながら、国境までの道をひたすら東へと馬を進めていた。

心配していた王宮の反対勢力ー王女派の貴族の手の者による襲撃などもなく、時折エイジャを挟んでルチアとベルが火花を散らす程度で、先を急ぎながらも存外穏やかな道中だった。

ただ、ザクセアで捕らえたデイノと人買い達の尋問は思うように進んでいないようで、フェルダが時折魔術を使つて王都の仲間と連絡を取っていたが、いまだ有益な情報は得られていなかった。

残酷な拷問は行っていない事も尋問が進まない原因の一つではあるのだが、それがカルニアス王子のご意思だという話を聞いて、エイジャは一層王子への敬慕の情を強くしていた。

その日、シアル公国との国境を目前にしてエイジャ達が宿を取る為に立ち寄ったのは、モープルという比較的大きな街だった。

王都から遠く離れているにも関わらず、通りには大勢の人々が溢れ、賑やかで活気に溢れている。

街の中心を走る目抜き通りにはレストランやブティックが建ち並び、周辺の田舎町では見られなかったような流行の型のドレスを来た女性達が楽し気に行き交っていた。

「もう国境が近いのに、賑やかな街だね」

きよるきよると周りを見回しながらエイジャが言つと、横を歩いていたフェルダが通り沿いの建物を指差した。

「ほら、あれ。劇場よ。あっちもそう。モーブルは劇場の街なのよ」  
そう言われて指差された方向を見ると、格調高い伝統的な造りの劇場がいくつも軒を連ねている。

「へえ……。フェルダさんはここ、来た事があるんですか？」

「アタシはプライベートでも良く来るのよ。お芝居や歌劇、大好きなの！」

「お前を東に向かわせると、必ずこの街に立ち寄るからなあ……」  
ルチアが少し呆れたようにこぼした。

「私だつてこの街、来た事あるわよ。舞台に立った事もあるんだから！」

ベルが横から口を挟む。

「舞台に？すごいね！」

エイジャが驚くと、ベルは少し自慢げに胸をそらした。

「ま、前座だつたんだけどね。でも結構ウケたのよ。」

懐かしいな。それ以来、来た事なかった」

ベルは家族の事を思い出したのか、少し寂しそうに辺りを見回した。

ふと、通りの向こうに目をやったルチアが歩みを止めた。

「ルチア？どうしたの？」

エイジャが尋ねたが、ルチアはこちらに顔を向けず、何かに視線を留めている。

「……先に行つてくれるか。ちょっと気になる事がある。」

フェルダ、お前の常宿に泊まるんだろう？俺は後で行く」

「ルチア、俺もついて行くの？」

エイジャが声を掛けたが、ルチアは首を振った。

「いや、大丈夫だ。たぶん俺の思い違いだろうが……一応、確認してくる。」

フェルダ達と一緒に先に行つてくれ」

そう言つて走り出すと、ルチアの姿はあつというまに人混みに隠れて見えなくなつた。

フェルダがいつも宿を取るといふホテルは、周辺の町ではまず見かけない、いかにも高級そうな一流ホテルだった。

当然宿泊費も、普段エイジャが取る宿とは桁数が違う。

「経費よ、経費。カルニアス王子が出してくれるから心配いらわないわ」

フェルダは何でもないように四部屋を取り、鍵を一つずつベルとエイジャに寄越した。

「私はエイジャと相部屋でも良かったんだけどなあ？」

ベルの提案は、「だめよ、エイジャが襲われちゃう」という理由で却下された。

荷物をそれぞれの部屋に置き、三人はフェルダの部屋に集合してルチアを待っていた。

半刻程が過ぎても、ルチアは来ない。

「どうしたんだろう？ なにか見つけたみたいなの素振りだったけど……」

「知り合いでもいたのかな？」

「ま、大丈夫だって言ってたんだから心配するような事じゃないと思っけど？」

フェルダが荷物を整理しながら答える。何が入っているのか、大型のトランクが3つ。だがこれでも全ては持ってこれずに、馬車の客車の中に荷物を残して来ている。

「お腹すいた。ねー、ルチアには置き手紙して、先に夕食にしない？」

ベルが言うのと、フェルダは少し考えて答えた。

「そうねえ。夕食の後、劇場にも行きたいし。」

フロントに手紙を預けて、先に行きましょうか」

ルチアへの手紙をホテルのフロントに預け、エイジャ達三人は街の大通りに面したレストランに入った。

日が落ちた後も、表にはたくさんの方が行き交っている。レストラ  
ンの客もきれいに着飾った女性が多い。皆、今夜の芝居のプログラ  
ムを手にして、楽しそうに声はずませている。

「今日は、あの一番大きな劇場に行こうと思ってるの。アタシの大  
好きな女優が出てるのよ。」

窓から見える、立派な建物を指してフェルダが言った。

「私が前座で出た事があるの、あの劇場よ！」

ベルが言うと、フェルダは感心したように目を見開いた。

「へえ、すごいじゃない。前座とは言っても、くだらない芸人はあ  
そこには出られないわよ。」

「でしょ？ふふっ、ちよっとは見直した？」

ベルは得意そうに表情を緩めた。

「でも、王都からかなり離れてるのにこんなに劇場がたくさんある  
なんて、不思議だね。」

エイジャが周りを見回しながら尋ねると、フェルダはそうねえ、と  
返事し、

「国境が近いから、きつと旅芸人の出入りが多かったのね。それで  
娯楽業が発達したんだと思うわ。」

そう説明すると、エイジャとベルは合点がいったように頷いた。

「エイジャは王都で劇場なんて行くの？」

ベルが尋ねた。

「うーん、興味はあったけど……チケットが高くて、客として行っ  
た事はないな。女優さんからの依頼で、ボディガードをした事はあ  
るよ。」

「へえ、誰誰？」

フェルダが身を乗り出す。

「ロミーナさんっていう人なんだけど……。」

エイジャの答えに、フェルダが目を丸くして立ち上がった。

「ロミーナってもしかしてロミーナ・アイマーロ！？」

「あ、フェルダさん知ってるんだ」

「やだっ、アタシ大ファンなのよ！っていうかホラこれ、今晚観に行こうと思ってた歌劇の主役、ロミーナ「アイマーロ！」」

フェルダが手にしていた活版印刷の紙を差し出す。紙の半分程のスペースを使って描かれている美しい女性の横顔はたしかに、エイジヤの知っている女優のロミーナのも物だった。

「ほんとだ、ロミーナさんだ」

「どうしよう！ねえエイジヤ、お芝居の後に楽屋にお邪魔できないかしら！？サインが欲しいの！！」

いつになく取り乱しているフェルダとは正反対に、ベルは不機嫌そうに黙り込んでいる。

「……エイジヤ、そのロミーナって女とはただの依頼主とボディガードだけの関係でしょうね？」

ベルの質問に、エイジヤは目を瞬かせて首を傾げた。

「ただの……って、うん、そうだよ？俺にとっては普通の雇い主っていうよりも、ちょっと特別な人だけだ」

「ちょっと！特別な人ってどういうことっ！？」

ベルがエイジヤに食って掛かった。

「いや、王都で公演する時には、いつも依頼してくれるんだよ。

なんか、王都のどこかで俺を見かけた事があるらしくて、冒険者組合にボディガードの依頼をしてくれただって」

「それ、明らかにおかしいじゃない！なんで街で見かけた男をボディガードに名指ししてくるわけ！？下心があるからに決まってるわよ！」

「ベルちゃんっ！ロミーナに限ってそんなふしだらな女なわけないわよっ！彼女の十八番は悲劇の女王アデリーナ役よ！？あんなに完璧にアデリーナを演じるロミーナがそんな下心なんてあるわけないでしょう！？」

「フェルダさん、それ絶対騙されてるから！女優なんて芝居するのが仕事なのよ！？」

ベルとフェルダの間でロミーナ善悪論が繰り広げられているのを聞きながら、エイジャはロミーナと出会った時の事を思い出していた。

ロミーナに初めて会ったのは、もう3年ほど前になる。

まだ冒険者として駆け出しだったエイジャに、組合から「おいしい仕事」として紹介されたのが、女優のボディガードという依頼だった。

「女みたいな若い冒険者がいるって聞きつけたらしくて、指名してきたんだ。女優ってのはむさ苦しい男が嫌いだからな。お前みたいなヒョロヒョロの若造の方が向いてるんだろうよ。せいぜい、食われねえようにな」

口の悪い組合の事務員にそう言われ、王都で一番大きな劇場の裏口扉を叩いたのは15歳の時。

今よりも背も低く、まだ顔立ちに多分に子供っぽさを残していたエイジャは、他の冒険者達から馬鹿にされる事も多く、早く冒険者として一人前になりたいと躍起になっていた頃だった。

当時、彼女はすでに王都でもチケットがなかなか取れないと評判の大女優だった。

その美しさは咲き誇る大輪のバラのように華やかで毅然としていて、通された楽屋で初めて対面したエイジャは、しばしその姿に見とれてしまった程だ。

「エイジャ!! キュラビオ……! と言うのですって?」

自己紹介も忘れてばかんと口を開けていたエイジャに、ロミーナはそう声を掛けた。

「あっ、はい、そうです! すいません、自己紹介が遅れて……!」

慌てて答えたエイジャに、ロミーナは優しく微笑んだ。

「とても若いのね。年はいくつ?」

「はい、15歳になった所です」

「まあ、そうなの。冒険者だなんて、危険な目にもたくさんあうで

しょう。

あなたみたいなきれいな子が、なぜ冒険者なんてしているの？良かったら、私が役者にしてあげるわよ」

そうロミーナは言ってくれたが、エイジャはぶんぶんと首を横に振った。

「俺なんてそんな、役者なんて、絶対できません。

それに冒険者をしているのは、自分を鍛錬する意味でもあるんです。危ない目にあう事もあるけど、それも自分を成長させる為の試練だと思っています」

エイジャの答えは、ロミーナの気に入ったようだった。ロミーナは「とてもいい子だ」と褒めてくれた。

ロミーナはまさしく「年齢不詳」というのがふさわしく、娘のように若々しく見える事もあれば、年齢を重ねた大人の女性の貫禄を見せる事もあった。

大女優として周りからもてはやされていても、浮き足立つ事も高飛車になる事もなく、女優という仕事に真摯に向き合っている。

ボディガードといっても、公演後に劇場を立つロミーナに押し寄せる熱狂的なファンから彼女の身を守る程度で、特に何者かに命を狙われているとか、そういった物騒な話はないようだった。

一体自分が役に立てているのかどうかよく分からないエイジャだったが、1ヶ月程の公演が無事終わって任を終えると、またその数ヶ月後、王都での公演が始まる時には同じようにエイジャが呼ばれた。エイジャをまるで弟か、時には子供のように可愛がってくれるロミーナは、いつしかエイジャにとってもただの雇い主を越えた特別な存在になっていたのだった。



夕食を済ませた後、一度宿に戻ったエイジャとベルは、フェルダの部屋へ呼ばれた。

「観劇に行くんですもの、うんとドレスアップして行くのが礼儀つてもものよ」

そう言つてフェルダは、トランクから、次々とドレスを取り出す。

「えーと、ベルちゃんはこれがいいわね。それから、エイジャは…この赤いドレスなんてどうかしら？」

「フェルダさん、俺はもう女装の必要ないでしょ……？」

「ああ、そうだったわね。残念。エイジャを着飾らせるの、楽しいのに！」

じゃ、エイジャは劇場に行く前にタキシードを買いに行きましょう」

「この格好じゃダメですか？」

エイジャは自らの服装を見下ろす。

ユズールの町でルチアに買ってもらったコートとレザーパーンツ。これまでエイジャが着ていた服とは比べ物にならないほど良い品だ。

買った当初に比べれば少しくたびれてきているが、ザクセアのフェルダの家に泊まった時にきれいに洗濯もしたし、手入れはしているつもりだが。

「その格好もステキだけど、アタシのエスコート役にはやっぱりちゃんと正装してもらわないとね」

「だめよっ、エイジャは私のエスコート役なんだから！ねっ、エイジャー！」

「あらちよっとベルちゃん、じゃあアタシはどうすればいいのよ？ルチアは帰ってこないし」

エイジャがフェルダとベル、どちらをエスコートするかで二人が揉めだしたのを見て、エイジャは慌てて間に入った。

「分かりました、二人をエスコートしますから。後で、タキシード

「買いに行きます」

「ねえエイジャ、私、変じゃない？」

胸元とスカートにふんだんにレースがあしらわれた、薄いピンクのロングドレスを身に纏い、髪をフェルダに結び上げてもらって、薄く化粧を施したベルは、いつもの擦れた言い方をおさめて自信なさげにエイジャに問いかけた。

「全然、変じゃないよ。すごくかわいいよ」

エイジャはそう言っただけで微笑んだ。ベルもはにかみながら笑顔を見せる。

お世辞ではなく、本当に愛らしい淑女といった雰囲気だった。エイジャがこれまでに接してきた貴族の娘達にも全く見劣りしない。

「こんな、貴族みたいな格好……した事ないから、落ち着かないわ。ベルはそわそわと自分の身なりを確かめている。

「なんだかベル、話し方も女の子らしくなったみたいだ」

エイジャが言うと、ベルは口をとがらせた。

「私、いつもそんなに口が悪いかしら？ルチアのせいよ、きっと」

「そういえばルチア、遅いね。今夜は帰ってこないのかな？」

「ま、気にしないでアタシ達は楽しんでいましょ。ああ、こんな所でロミーナ・アイマーの舞台が見られるなんて！しかも挨拶ができるなんて夢みたい！」

基本的に普段からドレスアップしているフェルダは、今夜はさらに気合の入ったゴージャスなロングドレスに身を包んでいる。

「会わせてもらえるかどうか、分かんないよ？俺の知らないボディガードが付いてるだろうし、王都ではファンが訪ねてきても、断つてたから」

「な〜に言ってるの。エイジャは別よ。王都での公演がある時は、必ずエイジャが呼ばれてるでしょう？よっぽどお気に入りなのよ」  
フェルダは自信たっぷりに言い放った。

ホテルを後にして、劇場へ向かう途中でエイジャは服屋に連れて行かれ、正装に着替えさせられた。

「やったぁーっ！超似合っつー！」

「ステキ！エイジャったらそんな格好もいいわ〜！」

試着室から出てきたエイジャを見て、ベルとフェルダの絶叫が店に響き渡る。

店内にいた他の客が、声に釣られてこちらをじろじろと見てくるのに気付कि、エイジャは顔を赤らめた。

光沢のある深い黒のタキシードがエイジャのしなやかな体軀に映え、白い肌と漆黒の長い髪を引き立たせている。

「本当によくお似合いですわ。まるで異国の若き王子様のように……  
…とっても素敵です」

店員までがうつとりとエイジャの姿を眺めているのに気づき、ベルが周りの女性達を牽制するようにエイジャの腕に抱きついた。

「ねっ、これで決まり！早く行きましょ」

「ちよつとベルちゃん、ひとりじめはダメよ。今夜はエイジャはアタシ達二人のものなんだから！」

二人から両腕を掴まれ、エイジャはずるずると引きずられるように店を後にした。

劇場のロビーでも、エイジャ達三人は他の客の視線をひとりじめにしていた。

「気分いいわね〜。皆こつちを見てるわよ」

フェルダが楽しそうに葡萄酒のグラスを傾ける。

「落ち着かないよ……俺、変じゃないかな」

今度はエイジャがそわそわと身なりを気にする。

「ぜんつつぜん変じゃないから！エイジャがステキだから皆見てるのよ。うふふっ、優越感〜！」

ベルはさっきまでの自信なさげな態度はどこへやら、エイジャの腕に抱きついたまま嬉しそうに笑った。

開演の時間になって席へ着くと、程なくして舞台が幕を開けた。オーケストラの演奏に合わせ、演者達が登場する。

今日の演目は王宮を舞台にした悲恋物だ。

貴族の一人息子が美しい庶民の娘と恋に落ち、親の決めた縁談に背いて駆け落ちするが、捕らえられて二人は引き裂かれ、娘は恋人の父親によって町を追われてしまう。

その娘役がロミーナだった。

ロミーナが舞台上に登場し、第一声を発した瞬間、客席はしんと静まり返ってその歌声に聞き惚れた。

初めて客席でロミーナの歌を聞いたエイジャは、すっかりその歌声に魅了されていた。

思えば、今までいつも舞台袖で聞いていたはずだったが、不審人物はいないかと周りに神経を集中させていた為、こうしてじつくりと歌を聞いた事はなかったのだ。

身分という越えられない壁を嘆き、離れがたい想いを切々と歌い上げるロミーナ。

やがてロミーナ演じる娘は、町を追われて彷徨っていた所を、偶然出会った王に見初められ、強引に王宮へ上がられる。

王の妾となった娘は王宮で青年と再会するが、すでに青年は親の決めた相手と結婚しており、娘は絶望して命を断つ。

割れんばかりの拍手の中、何回目かのカーテンコールを終えて幕が降り、終演を告げるアナウンスが聞こえても、エイジャは席を立つ事もできずに涙をぬぐっていた。

「エイジャったらこういうの、弱かったのね」

二枚目のハンカチを差し出しながら、フェルダが苦笑した。

「うっ……ずいばせん……だって……がわいそつで……うっ……」

……」

「うづうづエイジャもかわいい」

泣きじゃくるエイジャの頭を、ベルがよしよしと撫でた。

「泣きまくっているとこ悪いんだけどエイジャ、早く楽屋に行かないと、ロミーナが帰っちゃう〜」

フェルダはどうしても今日ロミーナにサインをもらいたいようだ。

「うづうづ、はい、わがってます……すいません……」

鼻をすすりながら、エイジャは立ち上がった。

客席を出て、関係者用の通路に足を踏み入れると、今ポディガードをつとめているらしい恰幅の良い男が、エイジャ達の前に立ち塞がった。

「どちらさまですか？」

威圧的に聞いてくる男に、フェルダが胸を張って答える。

「関係者よ。ね、エイジャ」

まだしゃくりあげながら、エイジャは名前を名乗り、取り次ぎを頼んだ。

男はいぶかしげな視線を向けつつも、通路の奥の部屋に入って行き、しばらくして戻ってきた。

「ロミーナさんがお会いになるそうです。こちらへどうぞ」

(20) 大女優と冒険者

「エイジャ！ひさしぶりね、びつくりしたわ。舞台を観に来てくれたの？」

まだ化粧を落としていない、舞台衣装のままのロミーナが、嬉しそうにエイジャ達を迎えた。

「はい、すごく良かったです。俺、感動して……」

「客として観るのは初めてだったのね。あなたのこんな顔、初めて見るわ」

ロミーナはまた泣き出しそうになっているエイジャの顔を自らのハンカチでぬぐった。

「この街には仕事で来たのかしら？」

「はい、そうなんです。そうしたら偶然、ロミーナさんが舞台をされてたので……」

「嬉しいわ。その格好もよく似合っていて素敵よ。」

そちらは？」ロミーナはフェルダとベルの方に視線を移した。

「あ、今一緒にお仕事をしている……仲間なんです。こちらがフェルダさん、それから、ベル」

「初めまして、ロミーナさん。アタシ、ずっと以前からあなたのファンで……今日はエイジャにお願いして、図々しくも押し掛けてしまつてすみません。今夜の舞台もすごく素敵でしたわ」

フェルダが挨拶し、ロミーナは笑顔を見せた。

「ありがとうね。エイジャにこんな仲間がいたなんて、知らなかったわ。そちらのお嬢さんも、かわいらしいこと」

「あ、私、ベルです……初めまして。舞台、すごく良かったです。ベルが緊張しながら挨拶する。」

「よろしくね、ベル。あなたはエイジャの恋人なのかしら？」

「ええっ、そんな、恋人だなんてっ、そのっ、そんなんじゃない！」  
ベルが顔を真っ赤にして手を振った。

「こんなにきれいな女性を二人も連れて、両手に花ね、エイジャくすくすと笑いながら、ロミーナがエイジャに言った。

「あ、もう一人仲間がいるんです。今夜は来れなかつたんですけど」「あら、そうなの。残念ね。私はまだここで公演があるけれど、あなた達はまだこの街にいるのかしら？」

「いえ……明日にはもう立つんです」

「まあ、慌ただしいのね」

ロミーナは残念そうに言った。

「まあ、あなたにはまた王都に戻ったら会えるものね。エイジャ」

「はい、ありがとうございます。その時は、今日みたいに泣かないでちゃんとボディガードをしますから」

エイジャの言葉を聞いて、ロミーナは笑った。

「あなた方、この後お時間は？この劇場の地下にバーがあるの。私、公演の後はいつもここでお酒を頂くのよ」

ロミーナが言った。そういえば、王都の劇場でもロミーナは舞台の後は必ずバーに立ち寄っていた。

「もうぜんぜん何の予定ありませんわ！アタシもお酒が大好きで！」

大乗り気のフェルダに、エイジャが尋ねる。

「フェルダさん、ルチアが待ってるんじゃないですか？」

「いいのいいの。劇場に行く事は書き置きしてきてあるんだし。きつと部屋で休んでるわよ。」

あのロミーナ「アイマー」口とお酒が飲めるのよ！？こんなチャンス逃してなるものですか！」

なんとしてもこの機会を逃すまいとするフェルダに、エイジャは苦笑して頷いた。

劇場地下のバーは会員制で、客は身なりの良い金持ち風の間人ばか

りだった。

ベルが居心地悪そうにきよろきよろと辺りを見回している。エイジャもプライベートでこのような場所で飲んだ事はなかったが、ロミーナのボディガードとして出入りしていた経験があるため、ベルよりはいくらか落ち着いていられた。

フェルダは慣れた素振りでも高級酒を注文し、ロミーナとお芝居の話に花を咲かせている。

「この劇場は、思い出深い場所なの。初めて立ったときは、私はまだ旅芸人の一座にいて、前座として立ったのよ」

ロミーナの話聞いて、エイジャはベルに話を振った。

「ベルもそうだよ。前座として立った事があるんだろ？」

「う、うん。こんなちゃんとした劇場に立つ事ってほとんどなかったけど、母さんがこの支配人と知り合いだったみたいで」

「まあ、あなたもそういう仕事を？」

ロミーナが興味を示し、ベルの方へ体を向けた。

「いえ、もう昔の事です。子供の頃、家族で旅芸人の一座をしていて。一度だけ、前座に上がった事があるんです。今は家族は皆亡くなってしまったので」

「まあ……なんて事。かわいそうに」

ロミーナは心底同情するような表情を見せた。

「私も子供の頃から旅芸人として国内を旅していたのよ。もう記憶もおぼろげだけど、生家はとても貧乏でね……。口減らしのために、旅芸人の一座に売られたのね。」

一座には同い年の仲良しの女の子がいて、私はいつもその子と二人で歌を歌っていたものよ。

あなたを見ていると、彼女を思い出すわ」

大女優に見つめられて、ベルは一層そわそわと視線を泳がせた。

「いつまでも彼女と一緒に旅をするんだと思っていただけ……座長の男が、何か悪い事をしたみたいで捕まってしまうって、一座はバラバラになってしまったの。ちょうどあなた位の年の頃だったわ。」



彼女は、同じ一座にいた男の子と一緒にあったって噂を聞いたけど、今はどうしているのか……」

「ロミーナさんは、その時から女優さんになったんですか？」

「ええ……私は、面倒を見てくれる人が現れてね。その人の力添えで、女優として舞台を踏ませてもらおうようになって……最初は端役ばかりだったけど、少しずついい役を付けてもらえるようになって。あの時、彼に会って歌劇女優としての道が開けなければ、今頃どうなっていたか分からないわ」

「とてもいい出会いをされたんですね」

フェルダが頷く。

「そうね……そう。あの出会いが、全てね……」

ロミーナは少し遠くを見るような目つきをした後、視線を手元のグラスに落とした。

劇場の裏手で待機していた馬車の前で、ロミーナはエイジャ達を振り返った。

「今夜は付き合って下さってありがとうございます。また王都での公演時には招待状を送りますわ」

「やだ、本当ですか！？ありがとうございますっ、嬉しいっ」

フェルダが感激して答えた。手には首尾よく手に入れたロミーナのサイン色紙がある。

「ベルさん、機会があればまた舞台に立つてごらん下さい。一度経験した人間は、舞台の感触を忘れないものよ。私の力添えが必要な時は、言って頂戴ね」

「あ、はいっ、ありがとうございます……」

ベルは急いでお辞儀した。

「エイジャはまた、ボディガードとしてのお役目、お願いするわね」

「はい、また王都で」

エイジャは答えながら、ふと馬車の背後を横切る人影を見た。随分

と急いだ様子で、早足で歩いていく。馴染み深い、すらりと背の高いシルエツト。

「ルチア！」

突然どこからか掛けられた声に、ルチアは立ち止まって辺りを見回し、走り寄ってきたエイジャに気付いて顔を向けた。

「なんだ、エイジャ。何をしてるんだ？」

「ルチアこそ。俺達、ホテルに手紙を残してきたんだよ。読んでないの？」

「これからホテルに向かう所だったんだ。お前、その格好は？」

そう言われてエイジャは自分が正装だった事を思い出し、少し恥ずかしくなつて視線を落とした。

「俺達、劇場でお芝居を観てたんだよ。来て、紹介したい人がいるんだ」

エイジャはルチアの腕を引き、ロミーナの前に連れて行つた。

「ロミーナさん、もう一人の仲間のルチアです。」

ルチア、こちらが今日のお芝居の主演をされてたロミーナさんだよ。王都で公演される時は、俺がボディガードをしてるんだ」

ルチアは面喰らつたようにロミーナを見つめた。

「ロミーナ＝アイマーロ？」

「私をご存知ですか？光栄ですわ」

「いや、それは……当然、王都に住む者なら、皆存じ上げてますよ。エイジャ、ボディガードなんてしていたのか？大女優じゃないか」

「うん、そうだよ。今日偶然ここで公演されてたから、ご挨拶に行つたんだ。お芝居、すつごく良かったよ」

「エイジャったら、号泣しちゃって大変だったのよねえ」  
フェルダが笑う。

「私がお誘いして、お酒に付き合つて頂いてましたの。ご一緒できれば良かったですわ」

ロミーナはそこまで話して、ふと何か思い当たつたようにルチアの顔を見つめた。

「……ルチア、さんと仰いましたね？……どこかでお会いした事がある？」

「いえ……、ただ、私もエイジャと同じように、普段は王都におりますので。王都のどこかでお見かけした事があったのかもしれない」

「まあそうでしたの、どつりです。いえ、知っている方にどこか似ているように思ったものですから」

ではごめんあそばせ、と優雅な動作で礼をとり、ロミーナは馬車に乗り込んで去って行った。

## (21) エイジャの告白

「ああ、素敵だった！ロミーナ！アイマールとお酒を飲んで、サインまでもらっちゃって！長生きはするものねえ」

走り去る馬車をつつとりと見送るフェルダに、ルチアが呆れたような視線を向ける。

「お前の芝居狂いは、あいかわらずだな」

「ロミーナは特別よ！憧れの人だもの。あの哀愁を帯びた歌声。エイジャじゃないけど、聴いてると自然に涙が出ちゃう。ああいうのが天才っていうのね」

サイン色紙を抱きしめて今日の劇中歌を歌い始めたフェルダに、ルチアがため息をついた。

「ルチア、気になる事って何だったの？もしかして今までずっと外にいたの？」

「ああ……お前達に俺の居場所を伝えておこうと思って、一度戻ろうとしてたんだ。ここで会えたのならいい。俺はまた戻る」

「戻るって、どこに？」

「この先のホテルだ。人を見張ってる」

ルチアは三人を近くに集めると、フェルダに視線を移して告げる。

「ラヴィス侯爵がいた」

「ラヴィス……って、クレマン＝ラヴィス侯爵が？」

フェルダが思わず声をあげかけ、慌てて手を口に当て声を潜めた。

「ああ。変装してたんで、見間違いだろうと思ったんだが、どうも気になって追いかけてみたんだ。ホテルに入った後しばらくして、奴の従者で知っている男が出てきたから間違いはない」

「誰よその、ラヴィス？侯爵って事は、貴族なの？」

ベルが尋ねる。

「ラヴィス侯爵はウイスタリア王女派の貴族で、有力者の一人だ。王宮兵とは別に私兵隊を持っている、将軍かぶれの男だ。」

ユズールに向かう道で俺とエイジャを襲ってきた襲撃者達は、奴の手の者じゃないかと俺は考えてる」

「なんでラヴィス侯爵がこんな所にいるのかしら？アタシ達を追ってきたとか？」

「どうだろうな……。奴らはシアルに向けてカルニアス王子の使者が立った事は掴んでいるようだが、それが誰なのかはバレていないはずだ。」

ユズールに向かう道で襲ってきた襲撃者達には、顔を見られてはいないしな」

「追ってきた所で、相手が分からないんじゃないかな」

「あるいは、何らかの方法で使者が俺達だという事を掴んで、自ら手をくだしに出向いてきたか……。だな」

いつになく神妙な面持ちでつぶやいたルチアを見て、エイジャは緊張に身を堅くした。

「ルチア、俺も見張りに付いて行くよ」

エイジャが言うと、ルチアは少し考えて頷いた。

「そうだな……。二人ずつで交代して見張ろう。エイジャ、一緒に来てくれるか」

ルチアの返答に、エイジャは力強く頷いた。

ラヴィス侯爵が泊まっているというホテルは、この街で一番大きく豪華なホテルだった。

エイジャとルチアは、通りを挟んでホテルの入り口が見える建物の角に身を潜めた。

ルチアはエイジャが買ってきた簡単な食事を口にしながらも、入り口から目を反らさない。

「ラヴィス侯爵……。って人は、どんな人？何歳ぐらい？」

「年は50代前半という所か……。割とがっしりした体つきで、長い黒髪の男だ。」

普段は髪を後ろで一括りにしているが、今日は変装のつもりなのか、髪を下ろしてつば広のハットを被っていた」

がっしりした体つき、くろかみ、ハット、とエイジャが口の中で復唱する。

「ルチアの今の見た目なら、ラヴィス侯爵もルチアだって気付かないかな？」

「どうだろうな……。遠目なら大丈夫だろうが。至近距離で会ったら、気付くかもしれない。」

王宮の中ではしょっちゅう顔を合わせていた男だからな……」

「仲悪かった？」

「……仲がいいとか悪いとか、そういう付き合いではないな。」

もちろん表向きは和やかに接しているが、裏では敵対する派閥の間だ。

まあ、王宮内の人間関係なんてどれもそんなもんだが。皆、顔は笑っている腹の中では何を考えているやら」

「王宮って、なんか人付き合いが難しそうだね」

「お前はすぐ騙されるだろうなあ……」

しみじみとそう言われ、エイジャが不満そうに口をとがらせた。

「ルチアも人を騙したりするの？」

「騙したいわけじゃないが、本音を口にできる立場ではないからなお前と話しているようにはいかない」

「同じ、カルニアス王子派の人が相手でも？」

「王子に心から忠誠を誓っている者もいれば、ただ損得勘定で王子派についているだけの奴もいる。本当に信頼できる者なんてごく一部だ。」

今回の俺達の任務の事を知っているのも、数える程しかないな」  
エイジャは、ルチアと初めて会った時に横にいた、宰相風の男性を思い出した。

「俺が王宮に呼ばれた時、ルチアを紹介してくれた男の人は？あの人は味方なんだろ？」

いかにも王宮仕えの要人らしく畏まった話し方だったが、穏やかな眼差しと落ち着いた物腰の、信頼できそうな人物だった。

「ああ、あいつは古い付き合いだからな」

ルチアのくだけた言い方に、エイジャはあれっと思問に思った。

あの男の人の格好やルチアを紹介する時の話し振りからして、彼はルチアよりも立場が上の人物なのだろうと思っていたのだ。

「あの人……は、えっと、ルチアの上司？なんか、偉い人みたいだったけど」

「上司というか……まあ、なかなか頭が上がらない相手ではあるな。小姑みたいな面倒臭い男だが、裏切るような事はまずないだろう」

ふうん、とエイジャは答えて、権謀術数が渦巻く王宮にあって、ルチアが信頼を寄せる人物がちゃんとしている事に安堵した。

（それに、ルチアにはちゃんと大事な人もいるんだしね）

ふいに婚約者の存在を思い出して、顔が曇る。

（ああ、だめだなあ。まだそんな事を気にしてるのか、俺）

ザクセアの街での最後の夜、ルチアに婚約者がいる事を知って思い悩んでいたエイジャを、ルチアは（酔って良く覚えていないようだが）ぎゅっと抱きしめてくれた。

心配や不安で冷たくしぼんでいた心が、じわじわと温かいもので満たされていくような感覚。

それはまるで子供の頃に感じた、父さんの側にいる時の絶対的な安心感に似ていて。

なんだか自分でもよく分からないけど、ごちゃごちゃ悩まないで、ルチアと共に任務に専念しよう。ルチアの側にいられば、それでいい。そう思う事ができて、すっかり吹っ切れたのだと思っていた。普段はベルやフェルダと一緒にいるから気にしないでいられたのだが、こうしてルチアと二人だけになると、嫌でも婚約者の存在を思

い出してしまい、自分でも説明のつかないもやもやとした気分が襲われてしまう。

（だいたい、ルチアに父さんの影を重ねて見るなんて、ルチアに対しても失礼だよな）

ルチアに、父さんみたいだと話した時のルチアの表情を思い出す。引きつったような、何とも言えない顔をしていた。決して、嬉しうではなかった。

エイジャにとつては尊敬する父親の存在は何者にも代え難いもので、最高級の褒め言葉であったのだけだ。

勝手に人の親にされてはルチアも迷惑だろう。

「ルチア、あの……ごめんね。前に、ルチアの事を、父さんみたいだなんて言っただけだ」

突然しゅんと押し黙ったと思ったら、ルチアにとつて忘れられない発言を蒸し返してきたエイジャに、ルチアはぎよっとして顔を向けた。

「いや、別に……なぜ謝る？」

「ん……なんか、勝手に父さんと一緒にしちゃって、それって失礼だなと思っただけだ」

「失礼って事はないが……俺はそんなに老けてるか？お前とそう年は違わないんだがな……」

「あの、年の問題じゃなくて」

父さんは、俺の中では絶対的な存在なんだ」

そう言うと、エイジャは恥ずかしそうに目を伏せた。

「厳しい時もあったけど、いつでも俺の事を一番に考えてくれて、守ってくれて」

強くて、優しく……理想の男っていうのかな」

白い頬をつつすらと染め、所在無さげに指を遊ばせながら、ぼつり、ぼつりと話す。

ルチアは息を飲んだ。



「……それは……つまり……」  
何とかそう絞り出したルチアを、エイジャは瞳を輝かせて見上げた。  
「うん、俺、いつか父さんみたいな男になりたいって、ずっと思っ  
てたんだ」

「……・・・そうか」  
これ以上落ちないだろうという程に肩を落とし、ルチアは答えた。  
反対にエイジャは、考えがまとまった事に、落ちていた気分がいく  
らか浮上していた。

（そっか、そうだ。俺、父さんやルチアみたいになりたかったんだ）  
「俺、今はルチアや父さんみたいに強くないけど、頑張るよ」

両手を握り締めてそう話すエイジャを、ルチアは複雑な思いで見つ  
める。

ルチアの期待していたような展開とは程遠いが、とりあえず、エイ  
ジャにとって絶対的な存在であるという父親と同列に扱われている  
という事は、歓迎すべきなのだろう。

それにしてもエイジャがここまで心酔する父親というのは、どんな  
男なのか。

「それほどの男だというのなら、一度会ってみたいな」  
ルチアが言うと、エイジャはふっと表情を暗くした。

「あの……もう、いないんだ」  
ああ、それで。

ルチアは合点がいったように、心の中でつぶやいた。  
それ以上語らず、黙り込んでしまったエイジャ。

これまで時折見せる事のあった、深い悲しみに耐えるような表情の  
わけは、これか。

「ごめん……気、使わせちゃったね。でも、もうずっと前の事だか  
ら」

声だけを幾分明くして、エイジャが俯いた。

エイジャの表情は、顔の両脇に流れ落ちた髪に隠れて見えない。

ルチアは思わず腕を伸ばす。漆黒の髪を掬い上げると、エイジャは瞳を隠すように顔を背けた。

父親の代わりでも、何でもいい。

エイジャが求めるものを、自分が少しでも与える事ができるなら。ルチアがエイジャの細い顎に指の背を添えると、その仕草にぴくりと反応したエイジャがルチアを見上げた。

その湿りを帯びた瞳を目にして、ルチアは頭の芯がぐらりと痺れるのを感じる。

「…………ルチア…………」

エイジャの声が、まるで遠くに聞こえるようで。

「…………ルチア…………がっしり、くろかみ！」

焦点が定まっていないかのようにだった目に突然力が戻ったかと思うと、エイジャがルチアの腕を強く掴んだ。

はっと夢から覚めたかのようにルチアも目を瞬かせ、後ろを振り返る。

肩にかかる黒髪を後ろに流し、つば広のハットを目深に被った身なりの良い男がホテルから出て来た。

馬車が回されてくると、男は後ろに立っていた女性の腕を引き、馬車に乗せる。

二言三言話した後、親密な恋人同士のように口付けを交わすと、女性を乗せた馬車は走りだした。

「ラヴィス侯爵だな」

身を隠すように壁に張り付いたまま、ルチアが呟く。

「…………女の人が、いた…………。あの人って…………」

エイジャはその後に続く言葉を飲み込む。

「ああ」

ルチアが答えた。

女性は紛れもなく、数時間前に別れたロミーナ「アイマー」口だった。

(22) 追跡

「俺、ロミーナさんを追う！ルチアはラヴィス侯爵をお願い！」

「あ、おい、エイジャ！」

走り出したエイジャの腕を、ルチアが引き止めた。

「この時間だ、おそらくロミーナは自分のホテルに帰るだろう。ロミーナが入って行ってから灯りのついた部屋を見ておくんだ。灯りが消えても出てくる様子がなければ休んだという事だから、もう戻って来ていい。」

もし、ホテルに帰る事なく何か厄介な事になりそうだったら、行き先だけ見てすぐに帰ってくるんだ。一人で無茶をするんじゃないぞ。分かったな？」

ザクセアの街で単独行動に走った事をたしなめるように、ルチアが怖い顔をして言う。

「わ、分かった。勝手な事しない」

ぶんぶんと首を縦に振って、エイジャは走って行った。

客車に繊細な彫刻が施された馬車の後ろ姿を追い、エイジャは距離を保ちながら後をつける。

街中の石畳を走る馬車はそれほどスピードを出す事もなく、身軽なエイジャなら走って追いかける事は難しくない。

(なんで、ロミーナさんが！？ルチアやカルニアス王子と敵対してる、ラヴィス侯爵と……)

エイジャは混乱しながらも、馬車を見失わないよう、身を隠しながら懸命に後を付いて走った。

馬車は劇場の近くにあるホテルの前に止まった。

ラヴィス侯爵が泊まっていたホテルほど大きな建物ではないが、豪

奢な造りから一目で一流ホテルだと分かる。

真夜中という時間もあり、通りから見える客室の窓は全て灯りを落としている。

馬車を降りたロミーナは慣れた足取りで階段を上り、ホテルに入って行った。

ルチアの言う通り、ここがロミーナの泊まっているホテルで、先程のホテルにはラヴィス侯爵を訪ねて行ったのだと見て間違いないだろう。

しばらくして、通りに面した窓の一つが明るくなった。

（あそこが、ロミーナさんの部屋か……）

程なくして、その窓が外向きに開かれ、エイジャは慌てて陰に身を潜めた。

そつと顔を覗かせて様子を伺うと、窓には肘を置いて外を眺めるロミーナの姿があった。

先程のロミーナとラヴィス侯爵の様子から見て、二人は恋人同士なのだろう。

王都でボディガードについていた頃、ロミーナに恋人がいるという気配はまったくなかったが……

まるでお芝居のように、熱烈に口付けを交わしていた光景を思い出して、エイジャは赤面した。

（び、びっくりした……あんなの、初めて見た）

姉のように慕っていたロミーナの、見てはいけない場面を見てしまったような気がして、エイジャは動揺していた。

（ラヴィス侯爵は……ただ、恋人のロミーナさんに会いに、モーブルまで来た……って事かな？）

ラヴィス侯爵は、いつも王宮で顔を合わせているルチアでも見間違えるほどの変装をしていた。

ただ恋人に会いに来るだけのためにそこまで手のこんだ変装をする

というのも変だが、貴族達はプライベートを周囲に知られないよう、街に出る時はある程度姿を変える事が多い。

大女優のロミーナとの恋が周囲に知れたら、大変な噂になる。それは、貴族であるラヴィス侯爵にとってはあまり良くない事なのかもしれない。

エイジャはロミーナを見上げる。

表情までは分からないまでも、その様子は今夜見た劇中の、恋人を想って涙を流す娘の姿に重なった。

それは、今ロミーナが同じように悲しい気持ちでいるからなのだろうか。

だとしたら、なぜ悲しいんだろう。

（好きな人が王都からこんなに離れた国境近くの街まで会いに来てくれたのなら、それってきつと、すごく幸せなはずなんじゃないのかな）

しばらく夜空を仰いだ後、ロミーナは窓を閉めた。

灯りが落ち、ホテルの周辺は再び闇に包まれる。

動きがないのを確認し、エイジャはその場を静かに離れた。

戻ってきたエイジャから報告を受け、ルチアは考えを巡らせる。

通常、ロミーナのような大女優の公演スケジュールは何ヶ月も前から埋まっているはず。今、この街にロミーナがいる事は、自分達が同じタイミングでここに来た事とは無関係だ。

そうになると、ラヴィス侯爵は？

ルチアの知る彼は、家名への誇りと自らの私兵の統率に燃える、堅苦しい男。公爵家から妻を迎えて王宮内での地位を高め、王女の信頼も厚いと聞く。間違っても女優との恋路にうつつを抜かすような人物ではない。

それとも、姿を隠し、秘密の恋の為に王都から遠く離れた国境近く

までやって来たのが、本来の彼の姿だともいうのだろうか。

空が白み始め、フェルダとベルが見張りの交代にやってきた。ルチアから話を聞いたフェルダは、信じられないように目を見開いた。

数時間前に夢のような時間を過ごした憧れのスターと、敵対する立場にいる男との意外な関係に、納得がいかないようだった。

「……昼までにこの街を出発するつもりだったけど、少しラヴィス侯爵の動きを見てからにした方が良さそうね」

フェルダがため息混じりに告げたのを受けて、ルチアが頷く。

「そうだな。ラヴィス侯爵の目的が分からないまま先を進めるのは危険だ」

ベルがふわあ、と小さなあくびをしたのを見て、エイジャが声を掛ける。

「ベル、まだ眠そうだね」

「ん、ま、仕方ないわよ。エイジャなんて徹夜だったんだから…

…」

「ちよつと休んできたなら、また交代するからね」

エイジャが言うと、ベルは大丈夫よ、と言って笑った。

ホテルに戻ったルチアとエイジャは、それぞれの部屋の扉の前で別れた。

「疲れたろう。起こしに行くまで、ゆっくり休んでいるといい」

ルチアが言うと、エイジャは苦笑した。

「ルチアの方こそ。俺達がお芝居を見てお酒を飲んでる間もずっと見張ってたんだろ？俺よりずっと疲れてるはずだよ。ちゃんと、休んでよね」

「エイジャ」

ドアノブに手を掛けたエイジャは、ルチアの呼びかけに手を止めた。

「なに？」

ルチアは何を言いたかったのか自分でも分からなくなって、押し黙った。

「どうしたの？変なの」

くすりと笑って、エイジャがドアノブを回す。

「お前、一人で泣いたりするなよ。辛い時は言えと前も言ったはずだ。俺はお前の父親のような立派な人間じゃないが、側にいる事はできるから」

ルチアの言葉に、エイジャの動きが止まった。

「あ……りがと……」

ドアノブに手を掛けたまま、ぎこちなく返す。

「……あんまり、迷惑掛けないようにするよ。」

でも、どうしてもダメな時は、ちょっと迷惑かけるかもしれないけど」

「誰が迷惑だと言った。そんな事……」

「俺、ルチアや父さんみたいになりたいなら、甘えてちゃいけないんだ。父さんとも、ずっと一緒にはいられなかった。ルチアと違って、この旅が終わったら、もう住む世界も、目的も、違うんだからだから……」

一気に話すと、その先を考えていなかったかのように、エイジャは息を継いだ。

「……だから。旅が終わるまでは。ちょっと、甘える時もあるかもしれないけど……俺、がんばる。もっと、強くなるよ」

切れ切れにそう話し終わると、エイジャは顔を背けたまま、ドアノブを回した。

「おやすみ……ルチア」

パタンと扉が閉まる。ルチアは閉じられた扉を見つめたまま、しばらくその場に立ち尽くしていた。

(23) 来訪者 - 1

ドンドン、と無遠慮に扉をノックする音で、ルチアは目を覚ました。  
「ルーチーアー。起きてよー」

続いて耳に入ってきたのは、不機嫌そうな声。

重い瞼をこじ開け、はつきりしない頭を何とか動かす。

「ああ……ちよつと待て」

ドアを開けると、思った通り、立っていたのはベルだった。

「どうした。……交代か？」

「もお、何ぼーつとしてるのよ。エイジャが交代しに来てくれたから、さつき私だけ先に帰ってきたの。」

そうしたら、今ホテルの従業員が私の部屋に来て。何か、エイジャに客が来てるって言うのよ」

「エイジャに客？誰だ？」

「誰だかは言わなかったわ。どうする？」

「分かった、俺が行ってくる」

ルチアは頭の後ろに手をやり、結び紐が外れていない事を確かめる。ベッドサイドに置いていた眼鏡を掛けて部屋を出ると、階段を降りて行った。

ロビーへ行くと、毛皮のコートを纏い、クロツシエを深く被った女性の後ろ姿が目に入った。

振り向いて顔を見せずとも、その身なりと凜とした立ち姿だけで、彼女が誰なのか察しはついた。

「おはようございます、ロミーナさん。エイジャに御用事とか」

掛けられた声に振り向いた顔はしかし、昨夜言葉を交わした時のような大女優としての自信に満ちた表情ではなく、何か心配事を隠しているように見えた。

「……おはようございます。ごめんなさい、朝早く。」



あの、エイジャは……?」

「ああ、ちよつとそこまで買物に出てるんです。すぐに戻りますから、部屋でお待ち下さい」

ルチアはそう言つて、エスコートするように手を差し出す。

ロミーナは一瞬躊躇する素振りを見せたが、エスコートを断るわけにもいかず、ルチアの腕を取った。

ルチアは自分の部屋にロミーナを案内すると、ベルに紅茶の用意を頼んだ。

ソファに腰を降ろしたロミーナは悠然と振る舞つてはいるが、どこか堅さを感じさせた。

おそらく、常に自分を偽る王宮で生きてきたルチアにだけ分かる程度の違和感なのだろうが。

「今日、この街を立つとエイジャが昨夜、言っていたものですから。挨拶をしに伺つたのですけれど……」

「ああ、そうでしたか。わざわざ申し訳ありません。大女優にご足労頂くなんて光栄です」

ルチアはにっこりと微笑んで見せた。視界の端に、紅茶を運んできたベルのうさくさー、と言いたげな表情が目に入ったが、それは無視する。

「昨日この街に来られて、もうご出発だなんて、お急ぎの旅ですね?」

ロミーナが尋ねる。

「ええ、モーブルには宿を取るのに立ち寄っただけなので。それが偶然、ロミーナさんにお会いできて、エイジャはとても喜んでいましたよ」

「それはもう。私も嬉しかったですわ。エイジャとは王都の外で会つたのは初めてですから。

あの子、冒険者としていろいろと危ないお仕事もしているようで、私、いつもエイジャの身を案じておりますの。

今回も、あの、危ないお仕事なのかしら？」

ルチアはロミーナの声色に微かな緊張が混じったのを感じ取り、慎重に言葉を選んだ。

「いいえ、そのような危ない仕事ではありませんよ。俺達のような冒険者にとっては、いつも受けている仕事と変わりありませんから、慣れたものです」

「まあ……そうですね」

何かを聞き出そうとしているな。

ルチアは勘づいたが、気付かぬふりをして先を続ける。

「ロミーナさんはまだしばらくモーブルにいらっしやるのか？」

「ええ、あと数日はこちらで公演がありますの。その後は国内をいくつか廻って、また王都に戻りますわ」

「それはすごい。さすが大女優ロミーナ」アイマーロだ。国中の人間があなたの来るのを待っていますからね」

ルチアが褒めると、ロミーナは言われ慣れた賞賛の言葉に、ごく自然な微笑みを見せた。

「あらでも、ルチアさんは昨夜の公演をご覧になって下さらなかったのでしょうか？ 私がそのような賛辞に値する女優か、ご存知ないのではありませんか？」

少し意地悪をするように言ったロミーナに、ルチアは慌てる事なく返す。

「申し訳ない、昨夜はエイジャ達と行き違ってしまったのです。でも王都でああなたの舞台は拝見しておりますから、その素晴らしいさはよく存じ上げておりますよ」

「まあ、そうでしたの。演目は何をご覧頂いたのでしょう？」

「ええ、『薔薇と王冠』を」

ロミーナはにっこりと笑みを深くした。

「嬉しいですね。私も好きな演目ですの」

「へえ、知らないなあ、それ」

それまで黙って話を聞いていたベルが口を挟んだ。

「機会があつたらベルさんにも是非ご覧頂きたいわ。私のお芝居は、悲しいお話が多いのですけど、『薔薇と王冠』はハッピーエンドでとても幸せなお話なの。歌もとても美しい曲よ」

やはり舞台の話になると緊張が和らぐらしい。ロミーナはいくらか口調を軽くして、ベルと舞台の話 시작했다。

ルチアはふう、と誰にも悟られない程度に息をつき、手に持ったままだった紅茶のカップを口に運ぶ。

「わあ、どんな歌なんですか！？ちょっと、聞きたいな」

ベルがねだるように言うと、ロミーナは笑い、こほんと小さく咳払いをして歌いだした。

愛する貴方へ私は歌を贈る

私の魂を貴方に捧げる

貴方の幸福がとわにあること

それが私の願い

軽く歌ったものだったが、さすがと言う他はなかった。

神経を尖らせていたルチアも、思わず素直に感嘆して拍手してしまった程だ。

ベルはというと、間近で聞いた歌声に感極まったのか、言葉を失っている。

「大舞台で聴くのも良いが、こうしてこんなに近くであなたの歌声を独占できるなんて、この上ない贅沢ですね」

ルチアが言うと、ロミーナは微笑んだ。

「ありがとう。私も大好きな歌なんです」

「……知ってる。この歌、わたし……」

ベルがつぶやいた。

「この歌。母さんが、いつも歌ってた。私、大好きで……でも、なんて歌なのか聞く前に、母さんは死んでしまつて……」

その言葉を聞いたロミーナの表情が、すっと固くなった。

「お母様が……いつも歌っていらしたの？」

「はい、私……それから、自分なりに調べたんですけど、結局なにかのお芝居で歌われる歌なのかも、歌の名前も分からないままで。人に聞いても、知ってる人がいなくて。」

嬉しいです、やっと分かった」

満面の笑みを浮かべたベルの顔を見つめ、ロミーナは口元をぎこちなく動かす。

「ベルさんは……昨日の劇場に以前、前座として立った事があるのでしょうか？お母様が、支配人と知り合いだったとか……？」

「あ、そうなんです。なにか、古い知り合いだったみたいで。母さんは昔からずっと歌を仕事にしてきてたそうなので」

「そうなの。私もどこかでお会いした事があるかもしれないわね。お母様は……なんというお名前なの？」

「マリエルです。マリエル＝ロラン」

「そう……マリエルさん。……ごめんなさいね、お名前に聞き覚えはないのだけど……」

「いえ、当たり前ですよ、そんなの。母は歌はともうまかったけど、家族だけの本当に小さい一座でやってましたから。ロミーナさんがご存知なわけじゃないです」

ベルは手を振って恐縮した。

「……ああ、もうこんな時間。私、もう失礼しないと……エイジャを待ちたかったのですけど……」

ロミーナがそわそわと腰を浮かせた。

「そうですか、残念です。まったくエイジャは、どこで道草を食っているのか……」

ルチアは手にしていたカップをテーブルに置くと、すっと歩み出て部屋の扉を開けた。

「下までお送りしましょう」

ロミーナはルチアの顔を一瞥し、視線を落とした。

「エイジャが戻ったら……すぐに街を出られるのでしょうか？」

「そうですねえ……そんなに急ぐわけでもないですし……少しゆっくりしてから。もしかしたら、明日になるかも」

ルチアの答えを聞き、ロミーナが急くように顔を上げた。

「すぐに……出発された方が。先をお急ぎだと……」

「まあ、そんなに一刻を争うような仕事ではないのですよ」  
階段を先に降りながら、ルチアはのんびりと話す。

「それとも、何か俺達が急いで街を出た方が良い理由でも？」

歩みを止めて振り返ると、ロミーナが顔をこわばらせていた。

「……理由は申せません。でも、エイジャが戻ったら、すぐに街を出てほしいのです。今すぐにでも、エイジャを見つけて、出発する事はできないのですか？」

訴えるような目をしてそう続けるロミーナに、ルチアは白々しい笑顔を向ける。

「理由も分からないままに急がされるのもおかしいですね」

ロミーナはルチアを追い越して階段を降りきると、人気のないロビーの廊下へ歩を進めた。

「ルチアさん。あなたは王都でエイジャと同じく冒険者をされているとか」

振り返ったロミーナの表情には緊張がにじみ出ている。

「ええ、そうです」

「それは嘘ですね。あなたは王宮の方」

ルチアは動揺を表に出す事なく、笑みさえ浮かべてロミーナを見返した。

「なぜそのように思われるのですか？」

「『薔薇と王冠』は、王宮で王族の方の前でしか演じない、特別な演目ですわ。王を賛美する劇ですから、民衆には受けないのです。

王都や他の街でも、演じる事はありません」

（フェルダがいればうまく取り繕ってくれただろうに、しまったな）  
ルチアは自分のミスに内心で舌打ちした。

「でも、あの歌はベルも知っていましたよ？」

そう返すと、ロミーナは言い淀んだ。

「それは……その……でも……」

俯いて口ごもったが、きつと顔を上げてルチアを見つめ返す。

「私、王宮に招かれて『薔薇と王冠』を演じさせて頂いた後、皆様にお目通りしてご挨拶しました。」

その時、あなたにもお会いしたはず。昨夜、どこかでお会いしたと感じたのはやはり間違いではなかった」

そこで一度息を切り、意を決したようにルチアを正面から見据えた。

「ルチアさん……というのは、偽名ですわね？」

「……それをご存知である以上、このままあなたをお帰しするわけにはいきませぬね」

表情を変える事なく落ち着きはらって告げたルチアに対し、ロミーナは口をつぐみ、大きな目に力を込めて視線を返す。

「どうされるおつもりですか？」

ルチアが続けると、ロミーナはとうとう堪えきれなかったように表情を崩した。

「……私も……愛する人を裏切る事はできません……どうか……何も気付かなかった振りをして、すぐにこの街を出て下さい……！」  
ぼろぼろと両眼からこぼれ落ちた涙を目にして、ルチアはひとつの確信を得た。

「全てお話し下さった方が御身の為ですよ。ラヴィスを罪人にしたいのですか？」

ルチアの言葉に、ロミーナが目を見開いた。

「そんな……あの方を罪人になどと……！」

「では質問を変えましょうか。あなたはラヴィスに何を言われてここに来たのです？」

ロミーナは手を口に当て、嗚咽をこらえるように目を閉じた。

はあ、と息を吐き、ルチアに視線を戻すと、観念したかのように口を開いた。

「……エイジャを、連れてくるようにと」

「エイジャを？」

ラヴィスの目的は自分だと考えていたルチアは、拍子抜けしたように聞き返した。

「王子派がシアル公国に密使を送ったという事は、ラヴィス様達王女派の貴族の方々も早々に把握していたそうです……。でも、それが誰なのか分からず、後を追う事ができなかった。ラヴィス様は王

宮内の人間にそれらしき人物がいなかった事から民間の人間を使つたのだと察しをつけられて、冒険者組合へ圧力をかけ、王宮に呼ばれたのがエイジャだという事を突き止められたのです。

私は以前から、ラヴィス様によくエイジャの事を話していました……ちようど、私がモーブルで公演中だった事から、きっとエイジャは私の元を訪れるはずだとお考えになつて、昨日この街にいらつしやつたのです……」

「それで昨夜、あなたにエイジャを自分の元に連れてくるように言つたと？」

ロミーナは弱々しく頷き、涙に濡れた顔を上げた。

「ラヴィス様は、あなたの事は気付いていらつしやいけません。気付いているのは私だけ。ですが、この事はラヴィス様には決して話しません。だから、今すぐにこの街を出て下さい……！」

「そうしたら、あなたはどうかされるんですか？」

ルチアが尋ねると、ロミーナはまた俯いた。

「私は……エイジャはすでに昨夜街を出たようだと……ラヴィス様に報告いたします。昨夜のうちに出發していれば、早ければ今頃にはすでに国境を越えているはず。そうなれば、あの方もこれ以上あなた方を追う事もないでしょう。」

ですから、あの方へのお咎めは、どうか……」

「確かにラヴィス自身が国境を越えて来る事はないでしょうが……なぜそうまでしてあの男をかばうのです？あなたもシアル公国との開戦を望んでいるのですか？」

ルチアの責めるような口調に、ロミーナは声を震わせて頭を振った。

「そんな、開戦など……！」

「しかし、あの男……ひいては、王女派に付くという事は、そういう事です。」

ロミーナはしばらくルチアを見つめた後、俯いた。

「……あの方は、私の命の恩人なのです……」

遠い記憶を遡るように、ロミーナは静かに話し始めた。



「あの方と出会ったのは……私がまだ、旅芸人の一座にいる頃でした。

この街の小さな劇場で歌劇公演を行ったのをご覧になられていたのです。

ちょうどその時、一座の座長をしていた男が何か悪い事をしたようで、捕まってしまうて……子供達ばかりだった団員は皆、路頭に迷う事になってしまった。

これからどうすればいいのか、皆で不安に押しつぶされそうになっていた所に、あの方が訪ねていらしたのです。

数日前の公演で、主役をつとめていた娘はいるかと」

「それがあなただったと？」

ロミーナはルチアの質問に肯定するように無言で見つめ返すと、先を続けた。

「……あの方は私を連れ帰り、女優としての道を開いて下さいました。他の団員達にも、この先に必要な援助を施して下さいましたと仰っていました。

今、私があるのはあの方のおかげなのです。彼がどんな事をしようとしていても、私には彼を裏切る事はできないのです……」

ルチアは黙って話を聞いていたが、ロミーナの話が途切れたのを機に問いかけた。

「ラヴィスを愛していると仰いましたね」

「……はい」

「それは、身寄りのなかったあなたを身請けしてくれた事への恩義ですか。それとも……」

「もちろん、その事には返す事のできない恩義を感じています……でも、それだけでは……」。

私は、あの方を……お慕いしています」

「妻も子もある男ですよ。当然ご存知でしょうが」

ルチアは冷たい口調で言い放った。エイジャがいたら、またそんな

言い方をしてと怒られるだろうな、と思いながら。

「それは……分かっております。奥様を迎えられる時、あの方は私に仰いました。お家の為、国のために妻を迎えるが、心は私にあると……そう約束して下さいました」

公爵家から妻を迎えるよりも前からの関係なのか。

ルチアは意外な事実に関心で驚いた。

「王宮では大層な愛妻家だと評判ですよ。あなたの存在などまるで無いかのように。それであなたは幸せなのですか？」

「それは……。でも、あの方は、今回の件がうまくいけば、もう公爵家の後押しも必要ないと。奥様をお返しして、私と一緒に下さる事も可能だと。そう言って下さいましたわ。その為に、力を貸してほしいと……」

ロミーナの言葉に、ルチアは顔をしかめた。

「他人の色恋沙汰に口を挟むつもりはないが、愛情を盾に取引をさせるような真似、愛する人にさせる所業とは思えませんね」

ロミーナは黙り込んだ。

「大切な人なら、敵対する相手の元へ一人で向かわせたりなどしない。まして、自分へ向けてくれる想いを利用するなど、俺には信じられない」

ルチアは自分の中から湧き出てきたラヴィスへの怒りに驚きを感じていた。

これまではただ政敵の一人だというだけの認識だった男。だが今は、恋人に対する不実な振る舞いが許せなかった。

目の前で、涙に顔を濡らすロミーナ。

大事な人にこんな顔をさせる事が愛だというのか。

自分のいない所でこんなふう悲しみにくれているなんて、想像するだけで胸が締め付けられる程辛いのに。

「……大切な、方が……いらっしやるのですね」  
ロミーナがぼつりと呟いた。

ルチアは不意打ちとも言える問いかけに、返事に窮して視線を泳が

せる。

ロミーナは一瞬泣き笑いのような表情を見せた後、はあっとためいきをついた。

「そうね。」

私のような人間には、そうやって取引のように与えられる愛情しか相応しくないのだから、きつと」

ロミーナの口調がいくらか変わった事に気付き、ルチアは目を眇めた。

「どういう事ですか？」

「あの時……選ばれるはずだったのは私ではなかった……あれは……」

その時、ロミーナの言葉を遮るように、バタバタと足音を鳴らして近付いて来る者があった。

「ルチア！！」

「フェルダ！？どうした？」

駆け寄ってきたフェルダの取り乱した様子に、ルチアは嫌な予感を感じて尋ねた。

フェルダはルチアの前にいたロミーナを見て一瞬言葉を詰まらせたが、涙に濡れたロミーナの表情から状況を把握したのか、息を整える事もなく告げた。

「エイジャがラヴィスの手の者に連れ去られたわ」

ロミーナがあげた声が遠くに聞こえた気がした。

反射的に走り出そうとしたルチアが、腕を取られて振り返ると、フェルダが渾身の力で引き止めていた。

「何をするんだ、フェルダ！早く行かないと……」

「分かっているわよ！でもちゃんと状況を把握してからにして！」

ぎりぎりと力がせめぎ合う。フェルダとて妖艶な美女の装いはしていても、元は男だ。

フェルダがどうあっても離そうとしないのを見て、ルチアは舌打ちして力を抜いた。

「分かった、早く説明を」

「ええ……」

ちらりとロミーナに目をやったフェルダを見て、ルチアが頷く。

「いいから、早く話せ」

ロミーナはフェルダを見つめ、こくこくと頷いた。

「エイジャと二人でホテルの玄関を見張っていたら、ラヴィスの従者が出てきたの。ホラ、いつも供に連れる男よ。どこかに急いでいる様子で拳動不審だったから、エイジャがそいつの後を追っていたの。アタシじゃ顔が割れてるから……」

そしたらすぐにその後を5〜6人の男が付いて行って、エイジャを捕らえてしまったの。おそらくラヴィスの私兵よ。あの様子だと、見張りがついているのに勘づいて、わざとおびき出したんだと思うわ」

「エイジャはどこへ？」

「ホテルに連れて行かれた」

「分かった」

言うが早いか、すでにルチアは走り出していた。

「待ってってば！正面突破する気!？」

またフェルダに腕を引き止められて、ルチアは苛立ったように声を

あげる。

「それしかないだろう!? こうしてる間にエイジャが拷問されていたらどうするんだ!」

「そんな、拷問だなんて……あの方がそんな事……だって、エイジャは……」

ロミーナが信じられないように否定する。

ルチアは冷えた視線を向けた。

「ラヴィスは冷酷な男ですよ。目的の為なら人の命を奪う事になんの躊躇も見せない男です」

「表から突っ込んでいってルチアまで捕まったらどうするのよ!? 正体がばれたらもつと厄介な事になるのよ!？」

ルチアとフェルダが揉めているのを見て、ロミーナが歩み出た。

「私なら部屋に通して下さるはずですよ。エイジャに全て話すよう説得すると言えは会わせてもらえらると思います」

ルチアとフェルダは振り返った。

「ラヴィス様は命の恩人……私の愛する方。でも、エイジャも私にとってはかけがえのない存在です。」

必ず助け出して見せます。どうか、力を貸して下さい」

椅子に縛り付けられた手首に、縄がぎりぎり食い込む痛みを気に取られていたエイジャは、近付いてきた影に一瞬気がつくのが遅れた。

次の瞬間、頬に衝撃を受け、派手な音をたてて椅子ごと横向きに倒れ込む。

「強情なやつだな、ん? きれいな顔に傷がついてもいいのか?」

床に突っ伏すような姿勢で顔だけを声のする方に向けると、口元だけを笑うように歪ませて見下ろしている男の顔があった。

ラヴィス侯爵。

ロミーナさんの恋人が、こんな男だったなんて。

「お前がさつさと白状しないから、こんな事をしなくちゃならん。お前のせいだぞ？俺は本当は心の優しい人間なんだ。その俺に……」  
がつつと音が響き、周りにいた彼の私兵達が一瞬目をそむける。胸を蹴られ、げほげほとむせるエイジャを見下ろしながら、ラヴィスが至極残念そうな口調で続ける。

「こんなひどい事をさせるなんて。お前のせいだ。エイジャキユラビオ」

捕まったのは自分の不覚だった。後ろから迫ってきた気配に気がついて振り返り、咄嗟に詠唱をしようとしたが、自分が付けていた男に羽交い締めには捕らえられ、すぐに口を塞がれてホテルの部屋に運ばれた。

男達はエイジャの持ち物を改めたが、もちろん書簡は持っていない。常に身につけている腰袋からいくつか魔道具が出てきただけだ。

程なくして、ラヴィスが現れた。

昨夜ホテルの前で見た時とは格好が違い、帽子を被らず髪も後ろで一つに束ねている。ルチアが言っていた通り、これが普段の姿なのだろう。

がっしりとした筋肉質の体つき。大股で部屋の中を歩く足音が大きく響く。

その表情は自信に溢れ、傲慢ささえ感じさせる。

エイジャの前に立ったラヴィスは腕を胸の前に組み、見下ろす姿勢で話し始めた。

「俺を見張っていたというのはお前か。どうも不穏な気配を感じたんでな。誘き出させてもらったぞ」

「……」

この男がロミーナさんの恋人……

「ラヴィス様、これを。身につけていた物です」

部下の男の一人が、エイジャが身につけていた魔道具の入った腰袋をラヴィスに手渡す。

「ふん……なんだ、ゴミばかりだな……」

「いえ、恐れながら……おそらく、魔道具かと……」

「魔道具だと、これが？」

ラヴィスがバラバラと袋の中身を床にぶちまけた。  
「何の変哲もないガラクタにしか見えんな。価値のある物なのか？  
私が見た事のある魔道具はもつと、宝物ほうもつらしくきらびやかであった  
が」

「は、おそらく古代魔術で作られた物ではなく、もつと近代……何か特別な手段をもって作られたものではないかと……見た事のない技術です」

ラヴィスに報告している男は、魔術師のようだった。エイジャの持っている魔道具の帯びている魔力を感じ取ったらしい。普通の人間には、これが魔道具である事は分からない。

「まあいい。そんなに価値のあるものなら、しまっておけ」  
命じられて、魔術師らしい男は床にまき散らされた魔道具を袋に片付け、自らの腰にまとった。

「さてと、という事は……だ。お前は魔術師という事だな？」  
ラヴィスは魔道具を片付けた男に、この部屋へ魔封の結界を張るよう命じた。

エイジャに向き直ると、エイジャの口に巻かれていた猿ぐつわを取り払う。

「言うまでもないだろうが、この部屋で魔術は使えん。大人しく吐いた方がいい。」

その顔。王都で名をあげている。女のような顔をした若い魔術師……黒髪に白い肌、聞いていた通りだ。

冒険者組合からあの日、王宮に呼ばれたエイジャ「キュラビオ」というのは、お前だな」

エイジャは名前を知られていた事に内心驚いたが、表情に出さずただラヴィスの顔を見返した。

冒険者組合にとって、依頼人と派遣した冒険者の情報は重要機密。

それを明かしたとなると、誰かが金を積まれて喋ったのだろうか。強引に口を割らされたのではなければ良いが……

「冒険者組合からあの日、王宮に呼ばれたのはお前一人だな。シアル公国への密使がお前のような民間の冒険者一人というわけはない第一、お前は私の顔など知らないはずだ。私を見張っていたという事は、仲間に私の顔を知る王宮の人間がいるはずだ。それは誰だ？」  
エイジャは一言も言葉を発しなかった。ラヴィスは躊躇なくエイジャの頬を張る。

「王都を出てすぐ、私が放った兵をえらい目に合わせてくれたな。報告によると、剣士一人と魔術師一人だ。魔術師はお前。もう一人の剣士はなんとという名前だ？今どこにいる？」  
何も答えず、ただ睨みつけてくるエイジャに、ラヴィスは苛立ちを募らせる。

「椅子に縛り付ける。時間がかかりそうだ」

コンコン、と部屋の扉が外側からノックされ、部下の男の一人が相手を確認した。

床に倒れた姿勢のまま、エイジャは意識の片隅で来客の存在を知る。しばらく扉の付近でやり取りがあった後、客はコツコツと細いヒールの音を響かせて部屋に入ってきた。

足音は小走りに自分の方へ近付いてくる。

「エイジャ……！！」

掛けられた声にエイジャは驚き、ぎこちなく首を動かして声の主を見上げた。

「ああ、エイジャ、なんて事……！！」

頬に当たる滑らかな手の感触。いつもの花の香り。

「ロミーナさん……」

ロミーナは倒れた椅子ごと横たわっていたエイジャを抱き起こす。頬は腫れ、眉間から流れ出した血が目を塞いでいた。



「ラヴィス様……なんて事を！話を聞くだけだと、そう仰ったではないですか！？」

ロミーナは声を張り上げた。

「そうだ。お前がエイジャ」キュラビオを私の元に連れてくれば、話を聞くだけで済んだのだ。

いつまで待ってもお前は来ないし、ホテルの前で不穏な動きをしている人間がいるというので、誘き出してみれば、これがエイジャ」キュラビオだということではないか。

どうも私には何も話したくないようだな。暴れるので、少し懲らしめてやった所だ」

「少し懲らしめて……こんな……酷過ぎます！早く、手当てを……」

「お前は黙っている！私に意見するのか、お前が！？」

ラヴィスの怒鳴り声が部屋に響き、ロミーナがびくりと肩を震わせた。

「行くあてもなかったお前を救ってやったのは、どこの誰だ！？女優にしてやり、人並み以上の暮らしをさせてやり……お前は黙って私の言う事を聞いていればいいのだ！」

乾いた音が響き渡る。ラヴィスに頬を張られたロミーナが、床に倒れ込んだ。

「少しは役に立つかと、お前に期待した私が馬鹿だったな。お前は所詮卑しい商売女だ。折角これまで目を掛けてきてやったものを……肝心な時にこの様か！」

ロミーナは床に倒れ込んだまま嗚咽を漏らした。

「黙れ。ラヴィス。ロミーナさんに、そんな言い方をするなんて……許さない」

耳にした声に、ロミーナは顔を上げて振り向いた。

「……エイジャ……」

「なんだ？やつと口を聞いたか。で、何と言った？聞こえなかったな」

眉間から流れる血が目に入るのもそのままに、エイジャはゆっくりと閉じていた瞳を開いた。

「俺はロミーナさんのボディガードだ。ロミーナさんは、俺が守る」

(24) 救出作戦 - 2

「エイジャ……あなた……」

ロミーナが涙に咽びながら言葉を漏らした。

「ははっ……やっと口を開いたと思ったら、言う事だけは達者だな。ロミーナの息子にでもなつたつもりか!？」

身動き一つ取れない、魔術も使えない状態で、一体何をやってくれるっていうんだ？

ほら、見せてくれ」

ラヴィスがあざけるように笑った。

エイジャは精神を集中させて自身の内部を探る。

部屋に張られている魔封の結果は、術師の持つ魔力次第。

魔力を解放すれば、破る事ができるかもしれない……

でも……できるだろうか？抑える事ばかり考えてきた自分に……  
神経を研ぎすませていくと、身体の内側から少しずつ魔力のうねりが沸き上がり始める。

だがそれを外に出そうとすると、四肢に力が入らない時のように、放出する直前で離散してしまう。

掩たがを外さなければいけないだろうか……

エイジャはぶるつと身を震わせた。

その時、突然廊下をバタバタと走る足音が聞こえた。

続いて、男の怒声、悲鳴。

集中が途切れ、エイジャは顔を上げた。

「何だ!?見て来い」

ラヴィスが部下に命じ、数人の男が部屋を出て行く。

男達が扉を開けた瞬間、廊下の物音が耳に飛び込んできた。

「うわああっ!!!!」

「たすけ……ぐああっっ!!」

「なんだ、お前!!……」

扉が閉まったと思うと、部屋の中から鍵を掛ける前にまた外側から開かれ、廊下で見張りに立っていた男が駆け込んで来た。

「ラヴィス様、敵襲です!」

「なんだと、相手は何人だ!？」

「いえ、その、一人なんです……えらく手練で、廊下が狭いのでこちらも動きが悪くて……だいぶやられています!」

続いて、通りに面した窓の外で、爆音が鳴り響いた。

音に驚いた馬のいななきと人々の悲鳴が、部屋の奥にいるエイジャの所まで聞こえてくる。

ラヴィスと部下の男達が窓に走り寄った。

「今度は何だ、廊下にいる奴と関係あるのか!？」

「何か通りで爆発があつたようかと……」

「爆薬か、魔術か、なんだ!？」

「分かりません、確認しないと……」

エイジャは話に耳を立てていたが、手首を引かれる感触に気付いて視線を落とした。

ロミーナがめくりあげた長いスカートの下からナイフを手に取り、

エイジャの身体を椅子に縛り付けている縄に刃を当てた。

「……ロミーナさん!」

「しっ……エイジャ、ルチアさんが来ているわ。次に扉が開いたら走り出して。私の事は気にしなくて良いから」

「そんな、でも、」

ロミーナは必死にナイフを動かす。ぶつっと音がして、エイジャの手首が拘束を解かれた。

エイジャはロミーナからナイフを受け取り、素早く胴と足の縄を切り裂く。

部屋の扉が再び開かれたのはほぼ同時だった。

「早く!」

「……すぐに戻ります!」

ロミーナに背中を押され、エイジャは走り出した。

窓際に立っていたラヴィスが動きに気付いてこちらを振り返り、止めようと近付いてきた所に、肩辺りを狙ってナイフを投げる。

「なっ!!」

ナイフを避けてバランスを崩したラヴィスに体当たりを浴びせて転倒させ、扉を開けた部下の男の脇を素早くすり抜けた。

部屋を出た瞬間、身体の内側で出所を見失ってぐるぐると渦巻いていた力が解放される。

「フィアマ・エスト!」

細い廊下はラヴィスの部下の男達でごった返していた。突如後ろから現れたエイジャに対処する事ができずに慌てふためく男達に炎を浴びせ、隙間を縫って走る。

列をなしている男達の間を抜けていくと、視線の先、廊下の端で剣を振るっているのは、口元を布で覆い隠してはいるが、ルチアに間違いなかった。

廊下の幅が狭い為、体の大きなラヴィスの部下達は、大勢いても一人ずつ向かっていく事しかできなくなっている。

「ルチアッ!」

「エイジャ!」

ルチアは片手で剣を使いながら、もう片手でエイジャの腕を引き寄せ、盾になるように前に立った。

エイジャの顔を見たルチアは、眼鏡ごしの目だけでも分かる程、怒りの表情を見せた。

「お前……その顔っ」

「ちょっと血が出るだけ!それよりロミーナさんが部屋にいるんだ!」

「分かっている、俺が行くからお前は一旦外に出ろ!フェルダ達がいる!」

「やだっ、俺も行くよ!ロミーナさんが逃がしてくれたんだ、部屋

に入らなければ魔術も使える……！」

ルチアは舌打ちし、目の前の男を切り倒すと足を前に進めた。

「俺より前が出るなよ！」

「分かった！」

ルチアは剣と体術を使いながら、相手を一人ずつ確実に沈めていく。エイジャはルチアと自分に守りの術を施しながら、合間に攻撃魔術を組み込んで後に続いた。

部屋から次々に出てくる男達を切り、あるいは昏倒させながら扉の前まで来ると、エイジャはルチアを後ろから引っ張った。

「俺が行くよ！ラヴィスに顔を見られたらまずいんだろ！？」

うっ、とルチアが言葉に詰まる。

「大丈夫、もう魔封が解けてる！ロミーナさんを連れてくるから、ここで待ってて！」

「おい、絶対に自分の身を優先させるよ、分かってるな……！？」  
後ろでルチアが叫ぶのを聞きながら、エイジャは部屋の中に飛び込んで行った。

部屋の中にはすでに部下の男達はほとんど残っていなかった。

ラヴィスもロミーナの姿も見えない。

「ルチア、ラヴィスもロミーナさんもいない！俺探してくる！」

エイジャは扉の外にいたルチアに声を掛けて、部屋の奥へ走った。わずかに残っていた男達をルチアが相手しているのを後ろに確認し、素早く周りを見渡す。部屋の奥の、隣室へ続く扉が、閉まっていた。途中のように僅かに開いていた。

（あそこか！）

走り込むと部屋の中は暗く、一瞬エイジャは視界を失って目を瞬かせる。

「動くな！」

ラヴィスの声が暗闇から聞こえ、エイジャは歩みを止めた。

背中の後ろで閉まりかけた扉から漏れるわずかな光を頼りに目を凝

らすと、つきあたりの壁際にラヴィスが立っている。

その前にはロミーナの姿があった。

「ロミーナさん！」

ロミーナの喉元にはラヴィスの剣が突きつけられていた。

「近付くなよ……お前の大事なロミーナの命が惜しければな……」

エイジャは信じられないように声を震わせる。

「なんてことするんだ……恋人だろ!？」

ラヴィスは顔を歪めて不気味な笑いを見せた。

「ああ、そうだったよ。だが、この私を裏切った女にはもう愛情はないんでね」

エイジャはロミーナの顔を見た。

喉元につきつけられた剣への恐怖というよりも、全てを諦めたように、力なく俯いている。

「ロミーナさん……」

エイジャの言葉にロミーナがのろのろと顔を上げた。

「エイジャ……いいのよ、もう。逃げなさい、早く」

「お前は黙ってる!」

耳元で怒鳴られ、ロミーナは目をつむって体をすくめた。

エイジャの中で怒りの感情が魔力と絡み合い、増幅していく。

風もない部屋の中で、ふわりとエイジャの髪がたなびいた。

「まったく、この女のせいだとんだ誤算だ……だが……お前の顔は覚えたぞ……もう許さん。国境を越えようと、私が後を追ってやる

……絶対にな……!」

ラヴィスはロミーナを盾に、じりじりと部屋の奥へ移動していく。

(どこかへ逃げようとしている……?)

エイジャは慎重に、少しずつラヴィスとの距離を縮めながら、ラヴィスが視線をやらないようにしている方向に目を凝らす。

ラヴィスがどん、とロミーナの体を押したのと、エイジャが床を蹴ったのは同時だった。

そのまま逃げ出すかと思ったラヴィスは、だが、くるりと向きを変

えた。

「…………！」

咄嗟の判断が一瞬遅れた。ラヴィスが手にしていた剣を振り下ろす。エイジャにできたのは、ロミーナの前に身を投げ出す事だけだった。



(24) 救出作戦 - 3

ガキンツッ!!

耳をつんざくような金属音。

思わず目を瞑ったエイジャは、顔に当たる布の感触に恐る恐る目を開ける。

視界に入ったのは、濃紺色のジャケットの背中。

視線を上に向けると、背中ごしにエイジャを振り返った瞳が目に入った。

「…………だからお前はっ!!!!!!」

(うわああああっ、めちゃくちゃ目が怖いっっ!!!!!!)  
最初に頭に浮かんだのは、それだった。

「あの、あの、ルチア、ごめんっ!」

とりあえず反射的に謝ったエイジャに答えず、ルチアはつば迫り合いの相手を力任せに押しやった。

「ルチアだと…………!!?」

壁際に押し戻されてよろめいたラヴィスが、体勢を立て直しながらこちらを睨んだ。

「エイジャ、ロミーナさんを頼む」

「あっ、はい!あの、ルチア…………」

わたわたと慌てふためくエイジャを、ルチアはもう一度振り返った。  
「…………説教は後だ」

「うっ、分かった…………」

エイジャは床に倒れたロミーナを担ぐように抱き起こした。

ロミーナは意識はあるが、心ここにあらずといった様子で憔悴しきっている。

「口封じに始末しようとしたのか…………!!?」

責めるような口調で、ルチアがラヴィスに問う。

「人聞きの悪い事を言うな…………その魔術師、切られたロミーナを置

いて俺を追いかける程に肝が据わっているとは思えんからな」

不気味な薄ら笑いを浮かべて、ラヴィスが答えた。

「長年連れ添った恋人に対して……」

お前がそこまで人でなしだとは思わなかった」

「ふん、お前のような奴が俺の何を知って……」

罵るように口を開いたラヴィスは、何かに気付いたように目を見開いた。

「……その声……!? いや、髪が……」

ラヴィスの剣を受けた時に刃先がかすったのか、ルチアの口元を覆っていた布は下に落ちていた。

ラヴィスの顔がみるみるうちに青ざめていく。

「は、は……そうか、そうだったのか……。うまく化けたものだ……」

口元をひきつらせながら、ラヴィスは笑った。

「どうする、ここで俺を切るか? いいのかね、侯爵の俺を切ってしまつて? 隠しきれるものではない……」

ルチアはぎりぎり唇を噛む。

正体がばれた。このまま逃がすわけにもいかない。だがラヴィスの言う通り、ここでラヴィスを仕留める事はためらわれた。

もちろん、剣士であるルチアとて、むやみに人の命を奪いたいわけではない。だがそれ以上に、れっきとした侯爵であるラヴィスを手に掛ければ、大掛かりな捜査が入る。任務を秘密裏に進めている以上、それはどうしても避けたい事だった。

「取引なら応じる。双方に取って不利益は避けたいはずだ。違つかね……?」

剣を降ろしたラヴィスを見て、ルチアも静かに構えを解いた。

「話の分かる相手で良かった。ここで殺し合いをしても何にもならない。お互い、この国の将来を想う者同士……きちんと話をしましよ」

剣を鞘に収めながらラヴィスが言う。

「……何を要求する？」

ルチアが問うと、ラヴィスは思案するように片手を顎に当てて、やや後ろを向いた。

「そうですね……」

その時、成り行きを見守っていたエイジャは、ラヴィスの片足に力がこもったのに気付いた。

「……ルチアッ！」

収めかけた剣を抜いたラヴィスの体がルチアに突進する。

「くっ……！」

「ガルディアス・ダーガ！」

エイジャの詠唱が一步早かった。ラヴィスの剣はルチアの手前で弾かれ、咄嗟にルチアは剣を振りかぶる。

「やめてっ……！」

ロミーナの叫び声が、ルチアに一瞬の迷いを与えたのが、すんでの所で剣を避けたラヴィスは部屋の右手に走り出した。

けたたましい音を立てて扉を蹴破り、外に飛び出す。すぐにルチアが後に続く。

扉は廊下が続いていた。ラヴィスは廊下に帯のように倒れ、呻いている部下達の姿を目にして舌打ちする。

部下の体を躊躇無く踏みつけながら足を進めるラヴィスに、足蹴にされた男が継り付いた。

「ラ……ラヴィス様……！」

「ええい、邪魔をするな！」

足を振って男を振り落とそうとするラヴィスを、なおも他の男が引き止める。

「どこへ行かれるのです、私達はどのようなのですか……！」

「お前らの事など知らん！離せ！」

「そんな……ラヴィス様……！」

「所詮お前ら等使い捨ての駒に過ぎんだ！気安く触るな！身の程をわきまえよ！」

主の言葉に衝撃を受けたか、縋り付くのも止めて体を震わせた男の体を、ラヴィスは手にしていた剣で払った。

「ぐああっ……！」

倒れこむ部下の方を振り返る事もなく、くるりと向きを変えて逃げようとするラヴィス。

追いついたルチアが剣を構え直した時、ラヴィスの体は後ろから衝撃を受け、前向きにつんのめった。

「あ・あ……お前、なんて事を……！」

ラヴィスの口から恨みの言葉が漏れる。背中を見ようと首を回す。背中には一本のナイフが刺さっていた。

「嘘だ……嘘だ……ラヴィス様、私らが使い捨てだなんて……嘘だと言つて下さい……！」

ぐらりと体勢を崩したラヴィスの後ろに立っていたのは、今しがたラヴィスによつて剣を振られた男だった。

肩から胸にかけての傷は、ラヴィスにたった今つけられたものだが、致命傷に至る程に深いらしく、顔色はすでに死人のように白い。

「ぐっ……そ、そうだ……！使い捨てだなどと言つたのは、嘘だ……！早く治癒を……！」

ラヴィスは自分を刺した男の腕に縋り付いた。

「ラヴィス様……」

男は少し微笑んだように見えた。

「早く、早く治癒の術をかけんかつ……、お前はもう死ぬ！その前に早く私の傷を治せ、この野郎っ……！！」

ラヴィスが叫ぶ。

男は表情を変えず、一步後ろに引いた。

「やはり……それがあなたの本心……あなたに付いてきた我々も……皆……一緒に……ここで死ぬのです」

息も絶え絶えに、男はがくりと膝を付いた。

「フィアマ・エスト」

男の体から炎が噴き上がった。

「何を……貴様……!!」  
炎に焼かれながら、男は詠唱を続けた。炎は一瞬のうちに辺り一帯に燃え広がった。

(まずい……残りの命を魔力に変えたか……!)

あつげにとられて一連のやり取りを見ていたルチアは、急いで部屋に戻る。

「エイジャ!火に飲まれる!逃げるぞ!」

ルチアは床に座り込んでいたロミーナを担ぎ上げた。

「階段の方はもう火が廻っている。窓から降りるぞ」

「わ、分かった……ってルチア、ここ何階なの!？」

「5階、最上階だ」

部屋の窓に走り寄り、窓を開けて下を見下ろす。

下の階の窓のひさしが足場になりそうだった。

「エイジャ、お前は身軽だからいけるな?」

「俺一人なら大丈夫だけど……ルチア、ロミーナさん抱えていけるの!？」

「行ける所まで行く。下にフェルダがいるはずだ。何とかしてくれと言えば何とかするだろ」

「ちよっ……そんな適当な……」

言いながらエイジャは窓に足を掛けたが、はっと表情を変えて足を戻した。

「どうした?」

「魔道具!さっき取られた!取り返さないと……」

「魔道具って……いつも持ち歩いてるやつか?そんなに大事なのか?」

「大事だよっ、俺、探してくる!」

きびすを返して部屋を飛び出そうとしたエイジャをルチアが慌てて引き止めた。

「待て、もうそっちは火が廻ってる!」

「だって、おじいちゃんの形見なんだ……！」  
泣き出しそうな顔をしたエイジャを見て、ルチアは髪を掻きむしった。

「ラヴィスが持つてるのか？」

「うっん、魔術師の男だよ。いなかった!？」

(魔術師の男…… 火事を起こした張本人か! 身につけているのならもうすでに燃えているかも……)

「分かった、そいつの居場所は俺が知ってる。取りに行ってくるから、お前は先に降りてろ」

「だめだよ! 俺が行く! 俺が顔を知ってる!」

「俺もそいつの顔は見た、大丈夫だから先に行け!」

ルチアは窓から身を乗り出して叫んだ。

「フェルダツ!! いるか!？」

「いるかって、いるわよずっと! 何してんの!?! どうなったんのよ、人がどんどん出てきてるわよ! 何なのその煙!?!」

窓の下からフェルダとベルが声を張り上げる。

「火事だ! エイジャとロミーナさんを落とすからお前何とかしろ!」

「なんとかかって…… ちよつ、待って! 5秒待って!」

フェルダが詠唱を始めたのを確認し、ルチアはロミーナの身体を窓から落とした。

「…… キヤアアアア……!!」

茫然自失していたロミーナが、落下途中で気が付き絶叫する。

「グラーブ・フォア!」

フェルダの詠唱が響く。ロミーナの身体は地表まであと少し、というところでピタリと落下を止めた。

「ごめんなさいロミーナさん、荒っぽい男で」

フェルダがロミーナを抱き寄せて立たせる。

「エイジャ! あなたも来なさい!」

「だって、ルチアが……」

エイジャはおろおろと部屋の中を振り返る。

「ルチアの言う通りになさい、後で怒られるわよ!」  
最後の一言が効いたらしい。フェルダの詠唱に合わせ、エイジャは窓から飛び降りた。

宙でうまくバランスを取り、足から着地する。

「ふう、フェルダさんすごい重力コントロール……俺も習いたい……」

ベルがエイジャの顔を見て悲鳴を上げた。

「どうしたのっ!? その顔! 血まみれじゃないっ!」

「あ……、大丈夫、たぶん前の古傷が開いちゃったんだと思う。そんなに血出てる?」

ベルが真っ青な顔してコクコクと頷いた。

「その顔じゃ、ルチアが相当怒ったでしょう」

フェルダに言われて、エイジャはしゅんと肩を落とした。

「後で説教だつて」

「ま、そうでしょうねえ。で、ルチアは? 何してるの?」

「俺の魔道具を取り返しに行くって……」

「あゝあ……いいカツコしちゃって」

フェルダが悩まし気に髪をかきあげた。

ホテルの玄関からは、火の出た最上階より下の階の客達が次々と走り出てくる。

通りの向こうから街の消防団がやってくるのが見え、同時に周辺の店の住民達がバケツリレーを始めた。

エイジャ達も消火活動に加わり、ホテルの客も皆が協力した事で、火は最上階とその一階下を少し焼いたところで消し止められた。

(24) 救出作戦 - 3 (後書き)

明けましておめでとございます。

昨年はたくさんの方に「金の王 銀の姫」を読んいただき、とても嬉しかったです。ありがとうございます。

今年も、最低でも週1更新を守ってがんばって続けていこうと思います。

というわけで一年の計は元旦にあり、で1月1日0時の更新。本年もどうぞよろしくお願い致します。



(24) 救出作戦 - 4

ホテルから運び出されて手当を受けている人達、消防隊を始め消火活動に協力した人達に加えて、やじうまで集まってきた人々も多く、ホテル前の通りは祭りのような雑踏と化していた。

消火活動から解放されたエイジヤは、人混みをかき分けおろおろとルチアの姿を探していた。

ふとホテルから救出され手当を受けている人達に目をやると、その中にラヴィスの部下の兵士達の姿があった。

(ラヴィスはどうしたんだろ？逃げられたのかな……)

そこにルチアの姿がないのを確認してきびすを返しかけた時、一人の兵士がエイジヤに気が付き走り寄ってきた。

「あんだ……」

廊下でルチアが切った男の一人だ。だが、急所は外してあったのだろう。胸から腕にかけて応急処置を受けていたが、しっかりと足取りでエイジヤに近付いてきた。

エイジヤは咄嗟に身構える。エイジヤの後ろを付いてきていたフェルダも詠唱を準備し、ベルは懐中の短刀に手を伸ばした。

「いや、大丈夫だ。何もしない。さっきは、ラヴィス様の命令だから従ったが……」

あの方は亡くなった」

「ラヴィスが死んだの!？」

フェルダが驚いて声を上げる。

「火事の原因は俺達の仲間だ……ラヴィス様が俺達の仲間の魔術師を切つて……逆にそいつに刺された。火は、その魔術師が起こしたものだ」

男の言葉に少しだけ警戒を解いたが、油断せずに男の言葉の続きを待つ。

「俺達はラヴィス様の私兵として、忠誠を誓い従ってきたが……あ

の方は俺達を置いて、自分一人だけ逃げ出そうとした。

だが、あんたの仲間の男は、俺達を火の中から助け出してくれた」

「ルチアが……!?!?」

「消防隊の連中と一緒にあって、俺達を下の階まで降ろしてくれた。俺は何とか自分で歩けたが……あの人に助けられなかったら、死んでた奴もいる。

心から礼を言う」

「ルチアは、今どこ!?!?」

「分からん。あの人は最上階から下の階まで、何度も人を背負って往復していた。俺も建物を出てからは姿を見てない」

男の言葉を最後まで聞く事なく、エイジヤは走り出した。

(もう、ルチア!自分の身を最優先にしろって俺には怒るくせに……自分は何やってんだよっ!!!)

気がおかしくなりそうな程の焦り。不安。心臓がバクバクと音を立てる。

人混みをかきわけてホテルの玄関に辿り着き、中に飛び込もうとすると、入り口にいた消防隊の男に肩を掴まれた。

「ちよつと君!危ないから中に入らないで!」

「仲間が中にいるんです、離して……!」

「仲間が?ほとんどの人は助け出してる、探してみなさい。怪我の手当を受けているかもしれない。救護班はあそこに……」

「違うつ、ルチアは助け出す方をやってたんだ!きつとまだ中にいるんだつ、離して……」

肩を掴んだ手を離そうとしない消防隊員に、エイジヤは咄嗟に詠唱しようとした。

「エス・ファ・フォ……モガッ」

「何してるんだ、おまえ」

エイジヤは背後から口元を覆われて詠唱を阻止され、掛けられた声に振り向いた。

「ほら、魔道具」

顔はすすで汚れ、ところどころに火傷を負っているのが見て取れる。服に残る焦げ跡。

ルチアが、エイジャの魔道具の入った袋を軽く掲げて立っていた。

「ルチア」

眼鏡の片方のレンズにはヒビが入っており、そのせいで魔術が解除されてしまっているらしく、片目だけが深紅色に戻っていた。

でも、その瞳はいつもと同じに優しくして。

「う……」

「不思議なことに、これを身につけてた男は黒焦げになってしまったのに、これは無事だったんだ。やっぱり魔道具だけあって、特殊な力があるのか……エイジャ？」

大喜びで魔道具の袋を受け取るかと思ったエイジャはしかし、袋を受け取る事もなく立ち尽くしている。

ルチアが不思議そうに様子を見ているうち、エイジャの表情がぐしやりと崩れたかと思うと、みるみるうちに瞼から涙が溢れ出した。

「うああああん！うああ、ルチアのばかぁ！！！」

突然号泣しはじめたエイジャを目の前にして、ルチアは狼狽した。

「なっ、何やってんだよおっ！ルチア、し、し、死んじゃったのかと思って俺……うわああん！」

「す、すまん！遅くなっただか！？兵達を最上階から下に降ろす手伝いをしてたんだ、どこにどのくらい人が倒れているか把握するのは俺だけだったからな……助けられなかった奴もいるが……ほとんどは下に降ろせたはずだ」

ルチアの弁明が耳に入っているのかいないのか、エイジャは泣き続ける。

「ル、ルチア全然戻って来ないし……！どうしたんだろう、どこに行っただろうって思ってたなら、ラ、ラヴィスの部下の男が、ルチア、人の救助をしてるって言うし……！全然、戻って来ないし……も、もお会えなかったらどうしようかってうあああん！」

話しながらも涙は滝のように止めどなく流れ続ける。

こんなに感情を露にするエイジャ自体今まで見た事がなく、ルチアはただうろたえていた。

「ぜ、絶対死んじやだよ……ルチア、危ない事しないでよ……俺、ルチアが死んだら、どうしたらいいか分かんないよ……！」

「エイジャ」

ルチアは、涙と鼻水で顔をべちよべちよに濡らしているエイジャを、細い身体ごと抱き上げた。

エイジャは慟哭が止まらないようで、素直にルチアの肩でしゃくり上げている。

背中をあやすように撫でると、エイジャは無意識なのか、ルチアの首に腕を回してしがみついた。

正直、何人もの兵士を相手に剣を振った後に、大の男を担いで階段を幾往復し、さすがにルチアの体力も限界に近かった。

それなのに、新たに内から湧き出てくる途方も無い力を感じる。だが同時に、胸の奥をくすぐるような不思議な感覚に腰を砕かれそうだった。

(だめだ……もう認めざるを得ない)

ふとルチアは、目の前にいた消防隊員の男と目が合った。生暖かい笑顔を向けられて、我に返る。

(俺、ってすっかり言ってたもんなあ……こいつ)

男同士ですよな？と言いたげな視線を感じながら、ルチアはそれを跳ね返すように負けじと腕に力をこめた。

何か文句があるか？

そう言うように男に視線を返し、ルチアはエイジャの首もとに顔を埋めた。

「エイジャ、悪かった。俺は死なん。どこにも行かないし、お前の側にいる。だから、泣くな」

耳元に囁いた言葉は、号泣するエイジャにきちんと伝わったかどうかは分からない。

だがそれよりも、ルチアにとって、その言葉を口にした事に大きな

意味があつた。

「火元は最上階を借り切っていたラヴィス侯爵の部下の魔術師。日頃から部下に対して非情だった侯爵が部下の失態に腹を立てて斬りつけたのが発端。部下は持っていたナイフで反撃、止めようとした仲間達を次々に斬り、自らの身体を火あぶりにして自害した……ラヴィスの私兵達の証言から、そんな感じに収まったみたいよ」  
一人現場に残つて情報収集に当たっていたベルから報告を受けながら、一行はホテルのルチアの部屋でフェルダから傷の手当を受けていた。

「俺達にとつては助かつたという所だが……よくもまあ全員揃つてそんな嘘の証言ができたな」  
ルチアが安堵のため息を付く。

「あなたに命を助けられた事で、がらつと意識が変わつたらしいわ。元々、ラヴィスの部下に対する仕打ちはひどかったみたい。俺達を助けてくれたあの剣士は無事なのかつて、何人にも聞かれたわよ」  
「これからあの人達はどうするんだろう？主を失つて、帰る所はあるのかな……」

エイジャがつぶやく。フェルダに額に塗り薬を塗られ、イテツと小さく叫んだ。出血は古傷が開いた事によるもので見た目ほど大きな怪我もなく、血を洗い流した後は、泣き過ぎで腫らした瞼の方が目立つ。

「ラヴィスが勝手に自分の為に雇っていた私兵だからな。雇い主がいなくなつたんだから、全員無職か……」

「もつたいないいわね。王宮兵に雇つたらどう？ああいう連中は忠誠の対象を求めてるものよ。」

命の恩人のルチアが元王宮騎士団の筆頭で今はカルニアス王子の近衛だつて知れば、新しい主を見つけたつて皆喜ぶんじゃないかしら」

フェルダの提案に、ルチアは顎に手を当てて考え込んだ。

「そうだな……それもいいかもしれない。一度俺から話をしてみるか……」

ラヴィスの元部下達の今後の話をしているルチア達を横目に、エイジャはロミーナの様子を伺った。

ロミーナはホテルに連れて来られてからも、悄然としたままほとんど口を聞かない。

大女優の貫禄など、今はどこにもなかった。

「ロミーナさん……大丈夫ですか？」

エイジャはロミーナの横に膝を付くと、きつく握り締められていたロミーナの手に、そっと自分の手の平を重ねた。

「エイジャ……」

ロミーナがエイジャの顔を見つめた。

「ごめんなさいね……。そんな怪我をさせてしまって……」

「こんなの、全然大した傷じゃないですよ。それより、ロミーナさんこそ……」

ロミーナは顔や手に軽い擦り傷があった程度だったが、心の傷は計り知れない。

長年愛を捧げてきた相手に刃を向けられ、挙げ句その男は部下まで裏切った上に殺されてしまった。

こんな悲劇、ロミーナがこれまで演じてきたお芝居にもなかっただろう。

「いいえ、いいの。こうなる運命だったのよ。私が、こうなる事を望んだの」

「そんな……」

否定しようとしたエイジャに、ロミーナは静かにかぶりを振った。

「あの時……ね。あの方が、エイジャ、あなたをひどい目に合わせていたのを目にして、分かったのよ。あの人の本性。私の事など、どうだって良かったんだって」

ロミオはぼろぼろと話し始めた。

(25) 少女の犯した罪

「私ね……もう20年近く前に、子供を授かった事があるの。あの方譲りの黒い髪に、私によく似た白い肌の、天使のように可愛い坊やだったわ」

ロミーナの発言に、一同は驚きを隠せずに目を見張った。

「もちろん、ラヴィス様が認知して下さる事はなかったけど……それでも、月に数度は顔を見に来て下さって……お子として可愛がって下さっていると思っていたわ。」

でも……もともと……身体の丈夫な子ではなくて。

……二歳になる前に、亡くなってしまったの」

ロミーナは視線を床に落としたりした。

「私はもう一度子を授かりたかったけれど……それは叶わなかった。そのうちに、公爵家から身分の高い奥様を迎えられて……」

……お子様もお産まれになって。

私は、何も望む事はできなかった……

もし私の坊やが生きて育っていたら、どんな子になっていただろう。どんなにか立派な男の子になっただろうって、いつも考えていたわ。顔を上げ、ロミーナはエイジャを見つめて寂しそうに微笑んだ。

「エイジャを初めて王都の大通りで見掛けた時は、本当に驚いたわ。……坊やが育っていたら、きっとこんな少年になってたんじゃないかって……夢に見ていた男の子が、目の前にいるんですもの。」

黒い髪に、白い肌をして、天使のようにきれいな男の子。

すぐに身元を調べさせて、冒険者組合に仕事を依頼したの」

ロミーナが自分の事をとて良く想ってくれている事は分かっていたが、亡くした子の影を自分に見ていたとは、想像もしていなかった。

「ラヴィス様にも、よく話していたの。エイジャという、坊やによ



く似た冒険者の男の子に、ボディガードを頼んでいると……  
どんなに私がエイジャを大切に想っているか、何度も何度も話した  
わ。

そのエイジャにあんな仕打ちをしたのを見て……分かったのよ。  
あの方にとつて、私の大事な人などなんの意味もないんだって。

私の坊やの事も、あの方は愛してなんていなかったんだわ。

あの方が愛しているのは、ご自分の身だけ……

20年以上もお側にいて、きっと分かっていたのに、見ないように  
していたのよ」

ロミーナは声を震わせた。

「……誰だつて愛した男の悪い面は、見ないようにしてしまうもの  
ですわ」

フェルダが慰めるように声を掛ける。

「身寄りをなくしたあなたを引き受けて下さった方というのが……  
ラヴィス侯爵の事だったんですね」

「知ってたのか、フェルダ」

「そういう方がいるっていう事は、聞いたわ。まさかそれがラヴィ  
スだとは思わなかったけど」

「そうだな……あの男が歌劇場に足を運ぶ姿など想像もできないか  
らな」

ルチアがつぶやく。

「普段はお芝居など、興味はないという方でしたわ。」

私達のお芝居をご覧になったのも、貴族様方のお付き合いです事  
でしたし……」

ロミーナが答えた。

「そこでロミーナさんを見初めたってわけね」

フェルダがため息を付く。

行き場をなくして路頭に迷っていた少女に差し伸べられた救いの手。  
愛しく思ってしまうのも当然だろう。

「……それが、私の罪なのですわ」

「罪って……？」

問いかけたエイジャに視線を返して、ロミーナは一つ息を吐くと、椅子に座って話を聞いていたベルに顔を向けた。

「ベルさん……」

……ラヴィス様が見初められたのは、私ではないの。

あの日、主役を努めていたのは、あなたのお母様。

私の親友、マリエルだったのよ」

ベルは思いもよらない告白に、驚きを隠せないように立ち上がった。

「……どういう事ですか！？」

「私とマリエルは、交代で主役をつとめていたの……」

ラヴィス様をご覧になったのは、マリエルが主役だった日なのよ。

私は、それを分かっていた……」

あの日、主役をつとめたのは私だと……嘘を付いて……」

ロミーナは顔を両手で覆った。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……」

ずっと、マリエルに謝りたかった……大切な親友を、私は裏切ってしまったのよ……！」

肩を大きく揺らして泣き崩れたロミーナを、ベルは啞然として見つめていた。

「しばらく一人にしてほしいって……」。

鎮静効果のある薬草茶を飲んでもらったから、少し落ち着いたはずよ」

ロミーナを隣の自分の部屋に置いて戻ってきたフェルダは、ソファに腰を降ろすため息をついた。

ベルが入れた紅茶を一口飲み、背もたれに身体を預けて軽く目を閉じる。

「20年以上もの間、ずっと自責の念に苛まれてきたのね……」

「あんな辛そうなロミーナさん、初めて見た……」

エイジャも次々に明かされる真実に、ショックを隠しきれずにいた。「一目惚れした相手を間違えるというのがよく分らん」ルチアが言うと、フェルダは苦笑いを返した。

「舞台上では濃いお化粧をするし、衣装も髪型も変えてしまうものね……。」

ラヴィスのように普段舞台を見慣れていない人間なら、間違えてもおかしくないわよ」

そう言うと、フェルダは黙り込んだままのベルに向き直った。

「ベル、ロミーナさんを憎んでる？」

「……えっ……、どうして？」

ベルの返答に、フェルダは言いにくそうに続けた。

「だって……もしかしたらあなたのお母様が、今のロミーナさんのような大女優になっていたかもしれないじゃない？」

そう言われて初めて気が付いたように、ベルはパチパチと瞳を瞬かせる。

「……そっか」

「まあ、もしそうなっていればお前は産まれていないがな」

ルチアが言うと、ベルは椅子の上でもぞもぞと膝を抱えた。

「……何か、ピンと来ないっていうか……。」

ロミーナさんは罪だって言ってたけど、それって罪なのかな。

母さんは……いい死に方はしなかったけど、でもそれまでは幸せだったはずよ。

そりゃ、ロミーナさんみたいな大女優じゃない、家族だけの小さな一座だったけど……ラヴィスみたいな男の愛人になるより、ずっとずっと「

「ベル……」

気遣わし気に掛けられた声に、ベルはエイジャに顔を向けて笑顔を作った。

「だから、謝られても困る。母さんの人生を否定する事になるもの。私、ロミーナさんに話してくる」

ベルは立ち上がった部屋を出て行くのを、誰も止める事はしなかった。

「ロミーナさん」

ドアをノックしたが、返事はなかった。

「ロミーナさん、ベルです。少しお話がしたいんですけど……開けてもらえませんか？」

（一人にしてほしいって言ったもんな……開けてくれないかな）しかし、しばらくしてドアは静かに開かれた。

まだ青ざめたままのロミーナの横顔が、ドアの隙間から見える。

「ありがとうございます」

俯いたまま歩いて行くロミーナの背を追って、ベルも部屋の中へ歩みを進めた。

ロミーナは今まで座っていたのだろう、一人掛け用ソファに腰掛ける。

ベルは斜め向かいに置かれた椅子に腰を降ろし、何から話し始めれば良いか考えていた。

「『薔薇と王冠』のあの歌はね……」

ロミーナが先に口を開いたのに驚き、ベルは顔を上げた。

「マリエルと私が、二人で作った歌なの」

「母さんと、ロミーナさんが!？」

ロミーナは口元だけを少し緩ませて頷いた。

「遊び半分に、二人で歌い合いながらね。」

そのうち、きちんと伴奏を付けて、舞台上で歌おうって話し合っていたの。

いつか、王宮に呼ばれたら、王様の前で歌おうなんて盛り上がっていたわ」

遠い昔を懐かしむように、ロミーナは穏やかな口調で話し続ける。

「それから何年も経って、私は王宮でお芝居をする事になって。

劇作家が書き下ろした『薔薇と王冠』という新作のお芝居をする事になって、是非この歌を劇中で歌いたいって提案したの。

マリエルと私の夢を、やっと叶えられるって思ってた……」

「……そうだったんですか……」

ベルは、母の姿を思い出していた。

小さな旅回りの芸人一家に置いておくのは惜しいと、大きな劇団からスカウトを受けるほど美しい歌声の持ち主だった母、マリエル。子守唄がわりに聞いてきたあの歌が大好きで、ベルも弟のノエルも、よくせがんで歌ってもらっていた。

母さんはどんな気持ちであの歌を歌っていたんだろう。

「あの……」

ベルはおずおずと口を開いた。

「母さんは……幸せだったと思うんです」

ロミーナが顔を向ける。

「あの……最後はいい死に方ではなかったけど、それは運が悪かったっていうか……」。

でも、母さんの顔思い出すと、いつも笑ってるんです。

父さんの隣で、幸せそうに。

私、母さんは後悔なんて絶対してなかったと思うし、ロミーナさんの事恨んだりもしてなかったと思うんです」

ロミーナは黙ったまま、ベルを見つめた。

ベルはしっかりと目を見開き、視線を返す。

「だいたい、母さんがラヴィスの恋人で大女優なんて、柄じゃないし。昔はどうだったのか知らないけど、私の知ってる母さんでもうほんつと肝っ玉系で。父さんなんていつも尻に敷かれてて。

あんな母さん、もしラヴィスに出会っても恋に落ちるわけないですよ」

ベルはそう言うと腕を組んで椅子の背もたれに体を預け、天井を見

上げた。

ロミーナはぼかんとしていたが、あつけらかんと話すベルに、固く凍り付いていた表情がじわりと緩んだ。

くすつと漏れた小さな笑い声に、ベルがロミーナに視線を戻すと、

ロミーナは視線に気付いて微かな笑顔を向けた。

「ほんと……あなたってマリエルにそっくり」

「ええっ、そうですかぁ!？」

「すっかりしていて、明るくて。昔からそうだったの、マリエルは。私はいつでもマリエルの後ろに隠れて、後を付いてまわっていたの。血のつながりはなくても、私にとってはお姉さんのような存在だったわ」

「……なんか分かります。姐御っぽいってどうか」

「お父様のお名前は……？もしかして、レミーというのではない？」

「えっ、そうです！ご存知なんですか!？」

「やっぱり。マリエルったら、あの人と一緒になっていたのね」

ロミーナは微笑んだ。

「レミーは、同じ劇団で楽器を弾いていたの。実はね……私はちょっと彼に憧れていたのよ。」

でも、レミーはマリエルが好きだったの。マリエルは好みじゃないだなんて言っつて、つれなくしていたのだけど」

初めて聞く若かりし頃の両親の話に、ベルは身を乗り出して瞳を輝かせた。

「もつと聞かせて下さい、父さんと母さんの話」

ルチアの言うところの「面倒な残務処理」と、仕える主を失ってしまつたラヴィスの元私兵達を王宮兵へ再就職させる手続き諸々のために、エイジャ達一行はその後三日間をモーブルで過ごした。

ラヴィスの元私兵達はルチアの提案に色めき立った。主に裏切られた上に当人が死んでしまい、これからどうすれば良いのか途方にくれていた所に、命を救ってくれた恩人からの再就職の話だ。

しかもその恩人は武人なら誰もが憧れる王宮騎士団の元筆頭、現在はカルニアス王子の近衛をつとめる剣の達人である。

一度は敵対し、ルチアに傷を追わされた者でさえ、その剣さばきを身を以て体験した事に誇りさえ感じているようだった。

「どうもよく分かんない世界だわ。こないだまで敵だった男に、すぐに忠誠を誓えるなんて。しかも、本心からそう思ってそうだし、あの連中」

ベルが呆れたようにこぼす。

自分の部屋で仕事をしているルチアを除き、ベルとエイジャはフェルダの部屋に招かれてお茶の時間を過ごしていた。

ベルの言葉を受けて、フェルダが苦笑する。

「武人っていうのはそういうものよ。力が正義だもの、自分より強い者にはおのずと憧れてしまうんでしょ。それが自分の命を救ってくれた相手なら尚の事よ」

「ふーん、そうなの？ わっかんないわー、男って。

エイジャはその気持ち、分かる？」

「え！？ あ、気持ちって！？」

急に話を振られ、ぼんやりと窓の外の景色を眺めていたエイジャは、慌てて聞き返した。

「ラヴィスの私兵達の気持ちよ。なんか、ルチアの事崇め奉ってるっていうか、憧れの眼差しで見てるっていうか……」

「あ、憧れ？んー、そうだなあ……うん……俺も憧れるよ、やっぱり」

「何それ！？エイジヤも憧れてるって、どついう事!？」

キツとベルの顔つきが険しくなったのを見て、エイジヤはうるたえた。

「えっ!?!あ、そついう事じゃなくて!?!俺、なんかまずい事言つた?」

「そついう事もどついう事もないわよ、エイジヤはルチアに憧れなんてもたなくていいのっ!」

「ええっ、だつてほら、剣も強いし、頼りになるし……俺もあんなふうになりたいなあつて、やっぱり、思うんだけどな……」

エイジヤに詰め寄つていたベルは、告げられた言葉に、少し表情を緩めた。

「なんだ、そついう事。いいのよ、エイジヤはそのまま!そのままのエイジヤが私……」

ベルはそこで言葉を切つた。不思議そつに言葉の続きを待つエイジヤの視線に耐えられなかつたよつに体を離し、後ずさつた。

「あ、私、用事があるんだつた!ちよつと出掛けてくる!」  
パタパタと部屋を出ていくベルを見送り、エイジヤが首を傾げる。

「……ベル、怒つたのかな?俺、悪い事言つた?」  
「さーねえー!。アタシにはわつかない」

フェルダはどこか楽しそつに紅茶を口にした。

部屋を出たベルが廊下を進んでいると、目の前でルチアの部屋の扉が開いた。

「……ベル。出掛けるのか?」

顔を覗かせたルチアには、書類仕事続きで少し疲れた様子が見えた。



「ちょっとね。なにか用事？」

「ああ……。少し話があるんだが……」

「……話？なに？」

ルチアは前髪をかきあげ、周囲を伺った。

「ひとに聞かれちゃ困る話なの？」

ベルがつっけんどんに問うと、ルチアは少しきまり悪そうに視線を落とした。

「……ああ、まあ、大した話じゃないんだが……」

ルチアにしては歯切れの悪い話し方だ。

自身の部屋で話したそうな素振りだったが、ベルはためらった。相手の陣地で話すと強く出れないような気がして、ベルは廊下の奥へ足を進めた。

「こつち来なさいよ。人はこないでしょ」

ルチアは素直に後に付いて来た。

人通りのない廊下の突き当たりまでやってくると、ベルは振り返り腕を組んで壁に背中をもたれさせた。

「で、何」

「お前に言っておかないといけない事がある」

「だから何」

「……何怒ってるんだ、お前は。まだ何も言っていないだろう」

「何も言われてないけどなんかイヤな予感がビビシするのよ」

ルチアはため息をつき、睨みつけてくるベルに視線を合わせた。

「お前の言う通りだった」

「……何が？」

「……エイジャが好きだ」

ベルは表情を変えず、ただルチアを睨みつけていた。

「前に、俺はエイジャに対してそんな感情を持つ訳はないと言った。だが、それは誤りだった。俺はあいつが好きだ。

それをきちんとお前に言っておかないと、フェアじゃないと思ってな」

「……ふうん、やけに律儀なのね」

ベルは口元だけで皮肉っぽく笑った。

「じゃあ私も宣言しておくわ。私もエイジャが好き。絶対、あなたには渡さないから」

「ああ……。そう言うと思った」

ルチアの言い方に、ベルは眉をつり上げた。

「何、その余裕な言い方。言うておくけどね、アンタがどんなによこしまな気を起こしても、エイジャはお・と・こ！だから！女の私の方がずーっとずーっと有利なんだからっ！！」

「分かっている。エイジャをどうかしようなんて事は考えてない」

「プラトニックを貰くってわけ？」

「……そうだ。気持ちを伝えるつもりもない。あいつを困らせるだけだ」

「何よそれ。そんなの、分かんないじゃない。エイジャだって……」  
まるでルチアを応援しているような言い方になってしまったのに気が付き、ベルは口をつくむ。

「……エイジャが……男で、良かったと思っている  
ルチアの言葉に、ベルは怪訝な顔をした。

「はあ？何言ってるの？あんた、根っからの変態？」

「違う。まったくお前は……一体どういう育ちしたらそういう性格になるんだ」

「うるさいわねっ、人の育ちにいちやもんつけないでよ！だってそういう事でしょ、男で良かったなんて……」

「エイジャが女だったら、俺は何を捨ててもエイジャを望んでしま  
う。それは許されない」

ベルはきよとんとして瞳を瞬かせた。

「……俺には婚約者がいる事は話したな」

「知ってるわよ。なに、その婚約者に操を立ててるってわけ？」

「この婚約は破棄するわけにはいかない。俺は必ずその相手と結婚する。」

妻として迎えるからには、彼女を愛してやらなければいけない。形だけの夫婦は、不幸な人間を増やす」

ベルは視線を落とした。

「……わかんないけど。うちの親達は仲が良かったし……。でも、そういうのって愛してやらなければいけないって言って愛せるものなの？」

「俺も分らない。……だが、そうするしかない。」

エイジャが男だから、友人としてずっと側にいる事ができる。それで良かったと思っっている。

ただ、エイジャの相手がお前というのはやはり納得できないが」

「うるさいわねっ！そんなの私の勝手でしょ！困らせるからなんて言っただけにエイジャに気持ちも伝えないようなやつに言われたくないわよ！」

牙を剥いたベルに、ルチアは何も言い返さなかった。

「とにかく。そうと決まればもうマジ、手加減しないから。私とエイジャがめでたくラブラブカップルになっても、あんたには文句言わせないわよ」

胸をそらせたベルに、ルチアはため息をついた。

「……正直、おまえが羨ましくはあるよ」

ベルはぎよっとして体勢を崩した。

「なに、ちよっと、気持ち悪いんだけど。」

「だいたい、なんでわざわざ私に言うの？フェアじゃないなんて言うだけ、あんたがそこまで私に気を使う義理ないじゃない。私の事なんて、邪魔な小娘だと思ってるくせに」

「そうだな」

「そこ否定しないわけ！？」

間髪入れず返ってきた答えに、ベルは憤慨した。

「……誰かに、聞いてもらいたかったのかもしれない。」

胸の内に閉まっておくには、大きくなりすぎた。

こんなに人を想って胸が苦しくなるのは、生まれて初めてだ」

思いがけず告げられた言葉に、ベルは思わず顔を赤らめて言葉を失った。

「……それ、本人に言えば。私に言っでどーすんのよ」  
そこでルチアは初めて、苦く微笑んだ。

(27) 愛の歌

ルチアの部屋に招待状が届けられたのは、その日の午後だった。

「ルチア様、エイジャ様、フェルダ様。是非今晚お越し下さいませようにと、伝言を申しつかつております」

金で縁取られた高級そうな手触りの封書を手渡すと、使者はルチアの部屋を後にした。

「……ロミーナさんから招待状か」

ルチアはフェルダの部屋の扉を叩く。

「フェルダ。ロミーナさんから、今晚の舞台の招待状が届いたぞ」  
言い終わる前に勢い良く扉が開き、ルチアは鼻を打ち付けそうになったのをすんでの所で避ける。

「舞台の招待状ですって！？ロミーナさん、今夜の舞台に立つのね！？」

「ああ……あれから三日か。まだ辛い時期ではあるだろうがな……」

「それでも舞台に立ち続ける、このプロ魂！やっぱりあの人は真の大女優よ！行くわ！絶対！

ルチアももう今晚は出られるんでしょう？」

「どちらにせよ、明日の出発の前に一度ロミーナさんには挨拶に行くつもりだったしな。ただ、招待状は三通だけ、俺とフェルダ、エイジャ宛になってるんだが……」

封書の表裏を再度確認し、ルチアが困惑の表情を浮かべたのを見て、フェルダは何かを察したようだった。

「……なるほどね、了解。ベルは用事があるってさっき出て行ったし、連れて行かなくて大丈夫よ」

「おまえ……何か知ってるんだろう。何を隠してるんだ」

「べつにつに？さあ、はりきって用意しなくっちゃ エイジャー、ロミーナさんから招待状よ」

フェルダはつきうきとした足取りで部屋に戻って行った。

日が傾いた頃、エイジャは先日の観劇の際に買ってもらったタキシードに着替えた。

「やっぱり似合うわね、ステキよ、エイジャ！」

「あ、ありがとうございます……フェルダさんこそ、すごくきれいです」

「もうやだ、エイジャったら！」

フェルダは前回以上に気合いの入った真っ赤なイブニングドレスに、上質の毛皮のコート。高く結い上げた髪に宝石のちりばめられた髪飾りをあしらひ、襟元の大粒のダイヤモンドのネックレスが輝きを放っている。

「エイジャ、いるか？髪を頼む」

扉が開き、顔を覗かせたルチアを目にして、エイジャは思わず息を飲んだ。

「きゃあっ、ルチアったらもう、やっぱり超絶いい男ね！ひさしぶりにそんな格好見たら、惚れ直しちゃう」

ルチアはフェルダが嬉しそうに腕にまとわりつくのを気にも留めない様子で、エイジャの方を向き直った。

「眼鏡の片レンズに魔術が効いてないんでな……右目だけ紅に戻っているのを、なんとか髪で隠せないか？」

「つい見蕩れていたエイジャは、はっと目を瞬かせる。

「う、うん、やってみる」

結び紐を受け取り、椅子に座ったルチアの後ろに回る。

フェルダが用意した深い黒の燕尾服を端然と着込み、金色に輝く髪をしどけなく垂らしたその姿は凄艶な程で、エイジャに軽々しく髪に触れる事を躊躇させた。

（やだなあ、なんか……緊張する）

動揺から手が震えてしまうのを気付かれないように祈りながら、エイジャは金色の髪を手を取った。

「魔道具専門の修繕職人を探さなくちゃいけないわね。たぶん、次の街にいると思うんだけど……」

「そうなんですか！？こんなの、直せる人がいるんだ」

祖父が作り出した魔道具を、直せる人間がいるという事実にも、エイジヤは驚いた。

「ええ、ちよつと探し出すのが難しいかもしれないけど……たぶんね」

「良かった、大事な物を傷つけてしまったのを悔いていたんだ」ルチアがほつとしたように言う。

「ま、それまでは何とかうまく髪で隠すしかないわね。

分け目を変えてこっちの髪を前に持ってきたら？ほら、ちよつと髪の毛になるから、瞳の色が分かりにくいでしょう？」

フェルダに手伝ってもらいながら髪を整え、仕上げに手を添えて詠唱する。

髪色が見慣れた栗色に落ち着くと、エイジヤの動悸も少し治まったようだった。

「じゃ、行きましようか。今日はアタシが両手に花ね。嬉し〜い！」

フェルダが上機嫌で二人の腕を取った。

三人が招待された劇場の最上席に座ると、程なくして幕が上がった。前座をつとめる女性歌手が二人、しずしずと舞台の中央に歩み出てきたのを見て、客席がざわつく。

二人とも目元を仮面で覆い、口元は扇で隠している。スカートが大きく膨らんだ優美なドレスは、体を揺らす度に、縫い付けられたクリスタルに舞台照明が反射して輝きを返す。

「変わった趣向ね。仮面の貴婦人というところかしら」

興味津々といったふうには、フェルダが身を乗り出した。

音楽が始まり、扇をひるがえすと二人は歌い始めた。

愛する貴方へ私は歌を贈る

私の魂を貴方に捧げる

貴方の幸福がとわにあること

それが私の願い

座席に背を預けていたルチアが、驚いたように体を起こした。

フェルダがおもしろそうに小さな笑い声を上げる。

「えっ、あれ？この声……？」

エイジャがきよるきよると両側のルチアとフェルダを見ると、ルチアが呆れたようなため息をついた。

「こういう事が」

「すごいじゃない、ベルちゃん。とつてもきれいな声」

フェルダが感心したようにつぶやく。

「！やっぱり、ベル？で、横にいるのは……ロミーナさん！？」

主旋律をベルが歌っているため、ロミーナは普段歌う事のないコーラス部分を歌っているのだが、周囲の客達も、ロミーナの声に気付いたようだった。

たとえ長い時が二人を分つても

想いが消える事は無いでしょう

私の命がある限り

いつまでも いつまでも

仮面をしているため、二人の視線がどこにあるのかは分からないが、ルチアにはその歌がエイジャに向けて歌われている事がはっきりと分かった。

「こここのところ、ベルがちよくちよく出掛けていたのはこれの為か」

「ロミーナさんと練習してたんだね、ベル。すごいなあ……」

瞳を輝かせて舞台を見つめるエイジャの横顔を、ルチアは少し苦い気持ちで眺めていた。



本公演が終わり、やっぱり泣いているエイジャを連れ、ルチアとフェルダはロミーナの楽屋を訪ねた。

「エイジャ！……やっぱり泣いちゃったんだあ」

最初に駆け寄ってきたのはベルだった。すでに衣装を着替え、いつもの姿に戻っている。

「うう、ごめん……二度目なのに……情けないんだけど……」

「いいの、いいの。そんなエイジャが……好きなの、なーんて」

どさくさに紛れてさらっと告白したベルに、ルチアはぎょっとして目を見張った。

「ね、私の歌、聞いてくれた！？エイジャ」

「うん、すごくきれいだったよ！ベル、あんまり歌がうまくないなんて言ってたけど、あれ嘘だったんだね」

どうやらベルのさりげない告白はあっけなくスルーされたようだったが、ベルは負けじとエイジャの腕を取る。

「ゼーんぜん、やっぱりヘタクソで、ここんとこロミーナさんから特訓受けてたの！」

あれは、母さんとロミーナさんの思い出の歌なのよ。ロミーナさんが一緒に歌いたって言ってくれて」

そこで、化粧を落としたロミーナが顔を見せた。

「来てくれたのね、ありがとう、皆さん」

「ロミーナさん！もう、驚きましたわ。ロミーナさんのコーラスが聞けるなんて、絶対にない事ですもの。主演女優が自ら前座をつとめるなんて、客席も皆とても喜んでましたわ！」

フェルダが興奮したように話すと、ロミーナは嬉しそうに微笑んだ。「喜んでもらえたのなら嬉しいわ。私もこんな試みは初めてで、とても楽しかったのよ」

「私も！ひっさしぶりに舞台に立ったけど、やっぱり最高だった！」ベルとロミーナは顔を見合わせて笑った。

ロミーナの表情からは、二日前に見られた憂いはもう感じられなかった。

「……私、これまでずっと、ラヴィス様の愛を失う事をいつも恐れていたの。

子供も失ってしまったって、私にはもうあの方しかないのだと、思い詰めていたから」

劇場地下のバーに場所を移し、ロミーナは葡萄酒のグラスを手に静かに話し始めた。

「あの方を失って、自分の存在意義まで覆ってしまったような気がしたわ。

でも……違ったのね。

私には、体を張ってまで守ろうとしてくれたエイジャも、親友の忘れ形見のベルもいる。女優としての私を愛してくれる、フェルダさんやファンの方達もいる。

幻のような愛情にすがっていた時には、それ以外の何も見えていなかったわ。

今は、ラヴィス様しかいなかった時よりも、ずっと自由で満たされた気持ちでいるの」

ロミーナと目が合ったエイジャは、ロミーナが元気を取り戻した事が嬉しくて、はにかむように微笑んだ。

「私も、母さんと父さんの事を昔から知っている人に会う事なんてなかったもの。親戚なんてのもいなかったし……だから、すっごく嬉しい」

ベルが声をはずませる。

ロミーナにとって、親友の娘であるベルに出会えた事は、衝撃的な事件の傷を癒す、何よりの薬だろう。

長年の罪悪感からも解放されて、やっと心安らかになれたのかもしれない。

事件に巻き込んでしまった事に心を痛めていたが、これで良かったのかもしれない、とルチアは胸をなでおろした。

「エイジャの事……くれぐれも、よろしくお願いします」

バーを後にしたその足で、ルチアに駆け寄って来たロミーナが告げた。

「本当は、このような危険な任務につくなんて、心配で今すぐにもやめさせたい気持ちでいっぱいですわ。でも、エイジャはあなたに付いて行く事を選ぶでしょう。私にはそれを止める権利などありません。」

あの子は、自分の身の危険を顧みないというか……人のために自分を犠牲にする事をいとわない所があるのです……

それがあの子の良い所なのかもしれないけれど、心配で……」

やはり気付いていたのか。

一瞬の判断が求められる場面で、エイジャは常に自らを犠牲にまわりのものを守る事を選択してしまう。

まるで自分の存在する意味が、そうする為にあると考えているかのように。

仕事としてロミーナや貴族達のボディガードをしていた中で身に付いた癖なのかと思っていたが、それよりももっと根が深いものか思っていた。

エイジャが詳しく語ろうとしない、自らの過去に関係しているのかもしれない。

「それは俺も、いつもあいつに言い聞かせている事です。もっと自分の身を大事にしろと。でも……そう簡単に変わるものでもない。

まわりにいる人間にとってには心臓に悪いが、注意して見ていてやるしかないと思っています」

「あの子のこと、よくお分かりですね」

少しほっとしたように、ロミーナは表情を崩す。

「あの子にとっては……たとえ危険な目に合う事があっても、あなたのお側にいる事が良い事なのかもしれません。」

ただ……いつか……あの子に、本当の事を話してやって下さいませんか」

訴えるようなロミーナのまなざしに、ルチアは静かに頷いて答えた。「分かっています。……時がくれば、きちんと話をするつもりです」ルチアの返答を聞いたロミーナは、一息ついて眉を下げた。

「申し訳ありません……勝手な事を言って」

「いえ、当然です。ロミーナさんの大事な息子さんをお預かりしている気持ちで、大事にしますから」

ロミーナはふふつと笑い声を漏らした。

いぶかしげな表情を浮かべたルチアに、ロミーナは口元に手を当てて笑いを噛み殺す。

「すみません。なんだかまるで、息子というよりも娘を嫁に出すみたいだと思って」

「嫁……って」

口ごもったルチアを見上げ、ロミーナは悪戯っぽく笑う。

「いえ……失言でしたわ。」

娘だなんて言ったら、エイジャに怒られてしまいますわね」

ロミーナは後方のエイジャとベルを振り返ると、また視線をルチアに戻した。

「私にとっては、ベルももう娘のようなものですわ。」

娘の恋路を応援してやりたいですけど、こればかりは大人達の問題ですものね。」

なかなか骨が折れるかもしれないけれど、どうか仲良くして下さいな」

(どこまで気付かれてるんだ……?)

にっこりと微笑んだロミーナに、ルチアは口元だけをぎこちなく動

かして、薄い笑みを返した。

(28) その先へ進む為に

「フェルダさん、荷物また増えてないっ!？」

「ん、ま、ちよつと増えたかしら?ここでしか買えないデザイナのドレスがあつたものだから、ちよつと買い込んだじゃった」

「ちよつとつてトランクいくつ分買ったのよ!」

モーブルを出発する朝、フェルダの荷物運びを手伝うベルの悲鳴を耳にしながら、エイジャは詠唱を終えて手の平を降ろした。

「はい、できたよ」

その言葉を合図に、目の前に座っていたルチアが立ち上がる。ルチアの髪を結び、色を変える魔術を施すのは、エイジャの毎朝の習慣になっていた。

「すまない、大事な魔道具を壊してしまつて。

できるだけ早く修繕のできる職人を見つけよう。フェルダに当てがあるようだ」

そう言つてルチアは眼鏡に微かに入つた亀裂に指をやる。

よくよく見なければ分からない程の傷だが、それだけでも魔力を留めておくのに支障が出るらしい。右目だけは深紅色のままだ。

「いいよ、そんな眼鏡のヒビだけで済んでほんとに良かったよ。

まつたく、人には自分の身を第一に考えろつて怒るくせに、自分は火に飛び込んでくなんてさ……」

エイジャは拗ねるように口を尖らせる。

(ほんと、死んじゃつたらどうしようかって……俺、ひどく取り乱しちやつて、ルチアに抱きついて子供みたいにワンワン泣いたりして、恥ずかしいや)

気恥ずかしさに俯いたエイジャの頭に、ルチアの手の平が伸びた。

ぼんぼんと頭を撫でながら、ルチアの柔らかな声が頭上から降ってくる。

「悪かったな。大丈夫だ、俺は自分の身を最優先にするよう幼い頃から叩き込まれてる。だから、フェルダはいつも大して俺の身を心配してないだろう?」

「そういえば……」

この街に来てすぐ、ラヴィスを見かけたルチアが後を追っていつて帰ってこなかった時も、ホテル火災の時、ロミーナとエイジャを下に降ろし、ルチア一人だけが建物の中に戻って行った時も。

フェルダは特に心配そうな素振りを見せる事がなかった。

(そっか……フェルダさんは、ルチアはちゃんと戻ってくるって、信じてるんだ)

ルチアとフェルダが知り合ったのがいつなのかは分からないが、二人の様子から長い付き合いなのだろうという事は見て取れる。

その中で生まれた強い信頼感がお互いの間にあるのだろう。

(いいな、そういうのって。俺も……いちいち心配したり不安になつたりせずに、ちゃんとルチアの事信じよう)

「エイジャ?」

黙り込んだエイジャに、ルチアが声を掛ける。

「ルチア、俺、フェルダさんとルチアみたいな信頼関係を作れるように、がんばるね」

「……フェルダと俺?何だそれは??」

さっぱり分からない顔をしているルチアだったが、エイジャは一人納得して頷いていた。

出発の準備を終え、自分の荷物を持ってエイジャが部屋を出ようとした時だった。

「エイジャ」

引き止めるように掛けられた声に、エイジャはルチアを振り返った。

「なに?」

きょとんとしているエイジャを前にして、ルチアは一瞬臆したが、ごくりと唾を飲むと、口を開いた。

「前に……お前、この旅が終わったら、俺とは住む世界も目的も違  
うと言ったな」

「……うん」

「お前、王都に帰ったら、王宮に仕えないか」

「えっ!？」

「カルニアス王子のお抱えの冒険者として生きる道もあるって事だ。  
ただ、これまでのような自由はないかもしれない。王宮にお前を縛  
り付けておく事が良い事なのか、分からない。

だがもし……お前が望むなら。いくらでも立場は用意してやる  
事はできる」

「……王宮は騙し合いばかりだから、俺なんてすぐに騙されるって、  
ルチア言ってたじゃないか」

「そうだな」

ルチアは頷く。

「だから、騙されないよう俺が側で見といてやる」

「……っ」

エイジャは言葉をつまらせた。

かあつと頭に血が上り、うまく言葉を続けられない。

どうしよう。

嬉しい。

でも。

「でも……その、カルニアス王子がそんな事、許してくれないかも  
しれないよ?いくら、側近のルチアが、推薦してくれても……実際  
にお目にかかった事もないのに……」

エイジャがためらいがちにそうこぼすと、ルチアはふいと視線を斜  
め下にそらした。

「ああ、いや、それは……会った事がないわけでもないしな……」

「えっ!？」



「いや……お前の話は王子に通っている。王子もお前のような者が仕えてくれれば心強いと思って……下さるはずだ」  
ルチアの言い方に、エイジャはひらめいた。

（もしかして俺、王子に会った事がある？  
それって……）

エイジャの頭に突如、王宮でルチアを紹介してくれた宰相風の男性の顔が浮かんだ。

（うわあつ……、そっか、あの人、カルニアス王子だったんだ！！）  
どうりで、ルチアが前に「頭が上がらない相手」と言っていたわけだ。

あの落ち着いた物腰、堂々とした語り口。

領土拡大などという野蛮な夢物語に踊らされる事なく、貴族達と対立しようとも戦争を回避する為に尽力されている、尊敬すべき方。

……あの人がカルニアス王子！

「そうだったんだ……あれが……！」

目を輝かせて呟いたエイジャに、ルチアは怪訝な目を向けた。

「どうした？」

「う、ううん！何でもない！」

危ない危ない。

あの人がカルニアス王子だって事は秘密なんだ。

俺が気付いちやっただって事は、内緒にしておかないと。

エイジャは高鳴る胸を抑え、カルニアス王子の顔を思い出してみる。まさにエイジャの考えていたカルニアス王子像ともいうべき、理知的な雰囲気をもった貴人だった。

年の頃はエイジャより一回りほど上だっただろうか。威厳のある鋭い眼差しは、同時に慈悲に溢れていた。一介のフリーの冒険者であるエイジャに対してもその権威を振りかざすような事もなく、温かく接して下さった。

今までなんとなくぼんやりと思い描いていた依頼主像がしっかりと実像を持った事で、エイジャのカルニアス王子への敬意の念はまさに燃え上がっていた。

あの王子に、ルチアと共に仕える。  
なんか……すごくいいかもしれない。

そこではたと我に返った。

それでいいの？

尊敬すべき主と、信頼する心強い友を得て、王宮で生きていく自分。想像してみると、その光景には違和感を感じた。

当たり前だ。

俺にはそんな生き方は許されない。

いくらカルニアス王子が素晴らしい方でも……俺の人生をカルニアス王子に預けちゃいけない。

俺には、やらないといけない事があるんだから。

でも、その「やらないといけない事」が果たして本当に正しい事なのか、エイジャには今、分からなくなってしまうていた。

自分がいつか「やろうとしていた事」は、カルニアス王子のご意思に背く事ではないのだろうか。

失ったものはもう取り戻す事はできない。

できる事はただ、身に宿した皆の無念を晴らすのみ。

その想いがここまで、折れそうになる心を支え、足を前へ進める力となってきた事は間違いない。

自分が生かされた理由はそこにあると信じ、いつか皆の想いに酬いるのだと誓って、自らを鍛錬してきたつもりだった。

宿願を果たす事がこの世界にどう影響を及ぼすのかなんて、現実的

に考える事もできないほど、まだまだそれは遠い先の話で。

ベルのように、はっきりとした目的意識を持って、一直線に突き進む事もできず。

ルチアのように、私情に捕われず大局を見る冷静さもない。

……どっち付かずの自分。

エイジャは焦燥を押し殺すように唇を噛んだ。

ルチアなら、答えを見つけてくれるだろうか。

それは間違ってるぞエイジャ、とか、お前のやろうとしてる事は正しい、とか。

でも、こればかりはルチアに相談するわけにはいかない。

優しいルチアは、きつと以前そう言ってくれたように、力になろうとしてくれるだろう。

俺の因縁は、ルチアが描く未来とは噛み合わない。

これは俺が一人で背負うべき宿命なんだ。

ふいに腕が軽くなったのに気付いてエイジャが顔を上げると、持っていた荷物の片方をルチアが取り上げていた。

「半分持つ」

「大丈夫だよ。俺、持てるよ」

「いいから、まかせておけ」

エイジャの荷物を軽々と持ち上げ、ルチアは廊下を歩いていく。

「……すぐに返事をしろとは言わない。考えておいてくれ」

慌てて後を追ってきたエイジャに、振り返らないまま告げた。

ルチア。

俺、カルニアス王子の元で、ルチアとずっと一緒にいられたら、すごく嬉しいよ。

そう……言えたらいいのにな。

エイジャはルチアの背中を見つめたまま、黙って歩き続けた。

## 幕間 ベルの独り言〜モープル出発後〜

ガタガタガタガタ。

お尻に伝わる振動にウンザリしながら、馬車を駆る。

まったく、この馬車って客車の造りは豪華だけど、御者席の座り心地の悪さったらないわ。

その上、目の前には殺風景な荒れ地が広がるばかり。楽しい気分になれるわけがない。

気分が落ち気味なのは、もちろんそんな理由だけじゃなかった。

せっかく出会えた母さんの昔を知る唯一の人、ロミーナさんとの別れに、私にしては珍しく、ちょっと感傷的になってしまった。

昨夜の舞台が終わったあと、ロミーナさんはこの旅が終わったら王都で会おうって約束してくれた。

本当は危険な旅路に女の子の私が同行するのは反対だけど、行方不明になった弟を探すためにエイジャ達の旅に加わった事は話してあったから、止める事はできないって。

ロミーナさんと母さんが昔、同じ旅一座にいた親友同士だったって事が分かってから、ロミーナさんは母さんと父さんの若い頃の話がたくさん聞かせてくれた。

「ベルなら絶対に歌の素質があるはず」って言われてその気になった私は、それから三日間、ロミーナさんから直々にレッスンを受ける事になって。

子供の頃、母さんにいくら練習しろと言われても、どうせ母さんみたいにくまく歌えないからって、いつもサボってばかりだった私。その事を悔やんでもいたから、ロミーナさんのレッスンを受けてい

る間は、なんだか母さんと一緒にいるような気になる事もあった。

練習の甲斐あって、自分でもちょっと自分の声に聞き惚れちゃうような瞬間もあるくらい、歌は上達したと思う。

「ベルは声までマリエルにそっくりだ」なんてロミーナさんに言われて、ちょっと調子に乗っちゃったのよね。

ロミーナさんは私のために、彼女のお芝居の前座っていう舞台まで用意してくれた。

どうやら、私のエイジャに対する気持ちに気付いてたみたい。

だから私、客席にいるエイジャに向けて、せいっぱい気持ちをこめて愛の歌を歌ったんだ。

届きますように、伝わりますようにって祈りながら。

歌ってそうやって歌うんだ、って初めて分かった気がする。

なのに……エイジャったらほんと、腹が立つほど鈍感なのよね！

公演が終わった後、楽屋に来てくれたエイジャに、私としてはもう決死の思いで、それとなく、好きだって言ってみたのに。

エイジャったらロミーナさんの舞台を見て大泣きしてたからか、告白自体に気付いてもないみたいなんだもの。

私にしてみれば一世一代のアプローチだったのになあ……

ちよつと勝負に出る気になったのは、ロミーナさんが後押ししてくれた事もあるけど、やっぱりルチアの告白が原因だ。

今まで俺はストレートだとか、婚約者がいるだとか、さんざん言い訳してきた男が、何を改まって話があるのかと思っただら。

聞いているこっちが赤面しちゃうような告白してくれるんだもん。

なによ、エイジャの事を想って胸が苦しいのはあんただけじゃないわよ！私だって、同じよ！

私の事が羨ましいなんて言ったらルチア。  
……こつちの気なんて知りもしないで。

それはあのホテル火災の直後だった。

ラヴィスの元部下って男から、ルチアがまだ戻ってないって聞いた時の、エイジャの反応。

私が呼ぶ声なんてまったく聞こえない様子で、走り出して。

後を付いて行ったけどすぐに見失ってしまって、やっとホテルの玄関前でエイジャの姿を見つけた時、エイジャったらルチアに抱きついて号泣してるんだもん。

なんだか、もう二人の間には、他人を寄せ付けけない程、強固な絆があるように見えて。

いつもならすぐに割って入って二人を引き離すのに、私は、どうしてもそこに近づけなかった。

二人と一緒にホテルに帰るのも嫌で、情報収集の為に現場に残ったくらいだ。

あれは、ちょっとへこんだなあ。

ま、でも、二人の間にどんな強い絆があったって、ルチアがエイジャを変な目で見てたって、エイジャがルチアに感じてるのは「友情」だもの。

今はまだルチアの方が私よりもエイジャに近いかもしれないけど、そこは女の魅力ってやつで距離を詰めた。

エイジャだってああ見えて男だもん、いくらバカみたいに綺麗でも男のルチアより、まあまあ美人レベルでも女な私の方が、いいに決まってる。

私には特別優しくしてくれるし、脈はあるはずなんだ。

チャンスさえあれば夜這いっていう手もあるんだけど、どうもルチアどころかフェルダさんまで一緒になってエイジャの貞操を守ってる節があるから厄介なのよね。

そんなふうには物思いにふけってる目の前、先をいく馬二頭。エイジャとルチアがそれぞれの馬上から会話を交わしている。二人の横顔、見つめ合う視線がなんだかやたら甘いように思えて、こっちは気が気じゃない。

うう、くそう。なんでいつも私は馬車の御者なのよ！

エイジャの馬に二人乗りした甘い時間がもう夢の彼方だわ……

苛々しながら二人を眺めていると、急にエイジャがこちらを振り返った。

思わず、手綱を握った手に力がこもる。

エイジャは何も言わず、ニコツと微笑みかけて来た。

きゅん！

って思わず自分で効果音をつけちゃうくらい、胸がときめいちゃう。我ながら単純だと思っけど、それだけで気分が上昇しちゃうのよねえ。

私も笑顔を作って、手を振り返した。

エイジャは口パクに身振り手振りで、何かを聞いてくる。

ええと、「疲れてない？」か。

親指と人差し指で丸を作って見せると、エイジャは笑って頷くと前を向いた。

ああ、エイジャ！その優しさをひとりじめしたいのよ！！

前を向いてしまった背中に、そう念を送ってみる。

振り向いて、振り向いて！

私の念は飛んでった方向がちよつとずれたみたいで、振り向いたのはエイジャじゃなくてルチアの方だった。

きつとあからさまに不機嫌な表情をしてたんだと思うけど、ルチアは私の顔を見て怪訝な表情を作ると、前方を指差した。

目を凝らすと、地平線上にうつすらと連なる低い石塀が見えた。

その中央に立つ背の高い建物が、国境を守る砦ね。



いよいよ国境越えかあ。

経験ホーフな私だけど、実は国境を越えるのは初めてだったりする。「出るのは簡単だが、戻ってくるのが難儀だ」ってよく聞いたっけ。昔はもつと出入国管理も大雑把で、旅芸人とか商人を装ってればだいたい通れたんだけど、ここ数年は国同士の雰囲気がちよつと殺伐としてきたのに合わせて、入国管理が厳しくなってるって話だった。

とうとうシアルに行くんだ。

きつと、そこにノエルがいる。

今までどんなに探しても、情報の欠片も掴めなかった弟の行方。

まさか国境を越えてたなんて、考えもしなかった。

もしかしたら一連の拉致事件には、シアル大公まで絡んでるかもしれないなんてルチアの話もあつて、私が考えていたよりもずつと事態は難解なのかもしれないけど。

でも、ちゃんと今歩いている道がノエルに続いてるっていう確信はある。これは、ここ何年もなかった希望だ。

国境の砦の前で、私達はいったん馬を止めた。

フェルダさんが馬車から出てきて、ルチアと何か話し合っている。

馬から降りたエイジャが、私の方に近付いてきた。

「いよいよ、出国だね。ベル」

エイジャは少しだけ緊張しているように見えた。

無理もないよね、私達、初めてアストニエルを出るんだもん。

私もちよつと肩に力が入ってる感じ。

「ベルの弟さんの行方、掴めるといいね」

エイジャが少し遠く、シアルの方向に顔を向けてそう呟く。

「うん……そうね」

「きつと、会えるよ。ベルはこんなに頑張ってるんだから。目標に

向かって、まっすぐに」

エイジャの言葉が嬉しくて、私は顔がにやけてしまつのを抑えられない。

「俺、ベルのそういう所がすごいと思うんだ……」

「エイジャ」

なんだろう、こんなふうに褒めてもらえてすごくすごく嬉しいのに。エイジャの顔がどこか寂しそうに見えて。

「ねえエイジャ、私、悪い事もたくさんしてきたわ」

エイジャは黙ったまま、私の目を見つめる。その瞳は優しくかった。

「エイジャみたいに、きれいじゃないの。汚れてるの。生きていくため、弟を探し出すため……仕方ないと思ってた。

だって、私だってひどい目にあってきたんだもの。どうせもう、汚れきってるんだから、今更悪い事したって、汚れが少し増えるだけだつて」

なんで私、こんな事話してるのかな。

「そんな……俺だって……そんなきれいな人間じゃないよ」

エイジャはなんだか私の言葉が辛そうだった。

「それにベルは汚れてなんかいないよ」

まっすぐに、私の目を見つめるエイジャ。

「強くて、きれいだよ。自分の事、そんなふうに言っちゃだめだ」

数秒間、頭の中が真っ白になっていたのに気付いて、慌てて脳を再起動させた。

たぶん今私すごい顔してると思う。

きれいだって

私の事、強くてきれいだって

エイジャが言った。

「……エイジャ！」

放心したように黙ったと思ったら、急に至近距離で大きな声で呼びかけられて、エイジャはちよつと面食らつたみたいに目をパチパチ

させる。

「私！い、いつか、全部エイジャに話す。私がしてきた事、悪い事もぜんび、ぜんぶ」

「啖んだ！最後啖んだ！」

「だ、だからその時は、エイジャも話して？子供の時の事とか、昔の事とか、いろんな事を。それで、そしたら、そのときは、」  
お嫁さんにして。

「お」の口のまま、固まってる私に、エイジャはふっと表情を緩めて微笑んだ。

「分かった」

「え、あの」

「俺も……いつか、ちゃんと話す」

一番大事な結論をまだ言っていないんだけど……話はまとまっちゃった。

まあいいや。

エイジャが何かワケアリだって事は分かってる。

ま、これはこの旅のメンバー全員に言える事だけど、みんな昔の話ってしない。

お互いに信用してないっていうのとはまた違うんだよね。

ルチアだってエイジャの事を全部分かってるわけじゃないはずだ。

私はエイジャのトクベツになりたい。

悩みも辛い過去も全部共有したい。

いつか、そうなる事ができたら……そう思ってた。

今はまだお互いそこまで踏み込めないけど、そのつもりがあるって聞けただけで十分。

ああ、なんだかもうウェディングドレスを着てエイジャの隣に立つ私の姿がちらつと見えた気がする！

その時は、ルチアとフェルダさんも結婚式に招待してあげてもいいわ。

ラブラブな二人の姿をルチアに見せつけてやるんだから。

ルチアは誰だか知らない婚約者と一緒に列席するのかしら。

ああ、俺は本当に好きな人を手放してしまったって、きつと悔やむんだらうな。

生まれて初めて、胸が苦しくなるほど好きになった相手なのにさ。

バカじゃないの。

……ってなんで私ルチアの心配してんの。

あの憎つたらしいルチアがどうなるうが、知ったこつちゃないじゃない。

エイジャの相手は私、そうに決まってる。私がそう決めただから！

「ベル」

エイジャに呼ばれて、はつと我に返った。

「どうしたの？なんだか一人でブツブツ言つて、笑つたり怖い顔したりしてるし……やっぱり、ちよつと疲れた？」

「ううん！ごめん、ちよつと考え事。何でもないから気にしないで」

そう、と軽く笑つと、エイジャはこちらに歩いてきたルチアに顔を向けた。

ルチアとエイジャの視線が合う。

ふつとエイジャの目が柔らかく緩んだのを見て、ずきんと胸が痛んだ。

「行くか。皆で出国手続をしよう」

そう言つとルチアは、何かに気付いたように目の表情を変え、エイジャの頭に手を伸ばした。

ルチアの仕草を不思議そうな目で見るエイジャ。

「髪に葉がついてる」

止める間もないほど自然に、ルチアがエイジャの長い髪を梳いた。

その光景が、なぜか……とても眩いものに見えて。

ぼおつと眺めていた私は、はつと気が付いて慌てて二人の間に割つて入る。

「ほんとだー！エイジャ、どこで葉っぱ付けてきたの？もう付いてないかな！？私、見てあげる！」

早口でまくしたてて、キツとルチアを振り返る。

「さすがルチアよねー。よく気が付いたわねー。やっぱり『友達』だからかしら!？」

トゲトゲしく言い放った渾身の嫌みは、きつちりルチアに通じたように、ルチアは気まずそうに目を反らした。

あんた今エイジャに対して、すっげーかわいいー、髪に触りてー、とか思ってたんでしょ!?!この変態!!

一瞬でもルチアの事を気の毒に思った私が甘かった。

ちよつとでも気を許したらこの変態金髪男、何しでかすか分かんないわ。

エイジャの貞操は私が守る!

っていうか私が頂く!

私は心の中で決意を新たににして、ルチアを牽制するようになつこりと微笑んで見せる。

少し離れたところから、フェルダさんがおもしろそうに眺めていた。

(29) 治外法権の街

アストニエル王国からの出国手続きは、思いがけない程あっさりしていた。

砦の下に退屈そうに立っていた一人の王宮兵の男に、出国する人数と性別、年齢を告げる。

男はそれだけを手元の帳面に書き込むと、馬車の中を確認もせず、ひらひらと手を振って送り出した。

「出て行く人間には大して興味はないのよ。入ってくる人間を見ているの」

フェルダが説明する。

「それにしてもやる気なさすぎなんじゃないの。あんなだからアストニエルから人が攫われて、簡単にシアルに連れてかれちゃうのよ」  
憎まれ口を叩くベルを、ルチアが振り返る。

「その意見に関してはお前が正しいな。反論できない」

「帰ってくる時は厳しく審査されるって事？」

エイジャが少し心配そうに尋ねると、ルチアは軽く笑って首を振った。

「なんらかの身分証明があればそう手こらずに入れる。俺達は王宮発行の証明書があるから、問題ないだろ」

「ふうん、じゃあシアルにもその証明書で入るの？」

「いや……アストニエルの王宮関係者だという事は伏せたいからなシアルでの身分証明書はフェルダが用意しているから、そっちを使う」

アストニエル王国の王宮魔術師であるフェルダが、どうやってシアルの身分証明書を調達してきたのか知らないが、きっとそれは聞かない方が良さのらうと、エイジャは一人納得して口をつぐんだ。

しばらく馬を進めると、荒廃した砂漠地帯の真ん中に集落が見えて

きた。

「おまえは、アストニエルを出るのは初めてだったよな」

ルチアの問いかけに、エイジャはこくこくと頷いた。

「じゃああの街の話は知ってるか？」

「……一応、噂には聞いてる。寄って行くの？」

「情報収集にな。それに、この眼鏡を直せる職人は、きっとこの街にいるんだ」

アストニエルを出た事がなくても、この街の事は大抵の人間が知っている。

アストニエル王国でも、シアル公国でもない。どちらの国にも属さない、国境の街。それが、ラグースだった。

元々ただ砂漠が広がっているだけで国境の線引きがあいまいだった所に、いつのまにか人々が集落を作り始め、長い時間を経て一つの街を形成したと言われている。

存在をよく知られているとはいえ、安全に旅をしたい者なら、この街に足を踏み入れる事はせず、迂回して通り過ぎるのが常だ。

どの国にも属していない治外法権状態にある為、出国はしたが入国が認められずに仕方なく居座っている者や国から追われているお尋ね者も多い。商人や情報屋なども数多く集まり、ここで手に入らない物はないとまで言われているが、治安の悪さは筆舌に尽くしがたいともつばらの噂だった。

「ねー、ラグースに入るの!？」

街の入り口に向かっているのに気付き、後方の馬車の御者席から、ベルが声を張り上げる。

「ああ、そうだ。お前はよく知った街だろう？」

「行った事もないわよ!人をお尋ね者扱いしないでよね」

ベルが不満そうに頬をふくらませる。

「ルチアは？来た事あるの？」

エイジャの言葉に、ルチアが頷く。

「何年も前だが、王宮騎士団にいた頃に来た事がある。安全な街とは言えないが、噂に尾ひれがついてる所もあるからな。三歩歩くだけで身ぐるみはがされるとか、街に女が一人もいないとか、そこまではない」

その話はエイジャも聞いた事があつた。アストニエルを出る人間はあまりおらず、シアルからやってくる人間も少ない為、噂話ばかりが先行しているのだ。

「でも、おまえは一人で街を歩くんじゃないぞ。女が少ないのは事実だし、餓えた獣みたいな輩がうじゃうじゃしてるからな」

「ちよつとお、その心配は普通私に対してするもんじゃないの！？か弱い乙女よ！？」

ベルの声が後ろから響き、ルチアは目を眇めてベルを振り返る。

「か弱い乙女は自己申告しないだろう」

「誰も言ってくれないんだから自分で言うしかないじゃない。それとも私なんて夜道を一人で歩いてても誰も襲わないっての！？」

「何言つてんの、ベル。ダメだよ、一人で街歩いたりしたら。俺が必ず付いていくからね」

エイジャが言うと、ベルはぱあつと顔を綻ばせた。

「うん！ありがとう、エイジャ！」

ルチアは途端に機嫌の良くなったベルを振り返る。

一つの疑惑が頭をもたげていた。

エイジャはどの女性にも親切だが、ベルに対しては特に優しく接しているように見える。

案外、ベルみたいなのが好みのタイプなのだろうか。

ルチアには全く理解できないが、ストレートに好意を示してくるベルに、エイジャもまんざらではないのかもしれない。

しかし、そもそも王都に残してきた恋人がいるのかもしれないし、



そういう話はエイジャの口から聞いた事がないのだから何も分からない。

エイジャの話から察するに、(エイジャに自覚があるのかないのかは別として)半端なくもてる事は間違いない。

その女達全てを拒否する事がエイジャにできるとも思えなかった。

いや……逆に、しっかりとエイジャを支えていけるような、心優しい女性が王都にいるのなら。それでいいじゃないか。友人として側にいると決めたのだから、良い相手と結ばれる事を願ってやるべきだ。

旅を続ける中で、ベルが当初思ったほど悪い娘ではない事は分かってきたが、それでもやはりベルにエイジャをまかせるのは本意だ。エイジャに必要なのは、心に負っている傷を、そっと包み込んで癒してやれるような。それでいて、あいつが自分の身のを軽んじて危険に身を投じそうになった時には、守ってやれる強さがあって、辛い時は側にいて支えてやれる……

(……つまり、俺がそうしてやりたいって事だな……結局)

自縄自縛に陥っている事に気付き、ルチアはうなだれた。

ラグースの町並みは、今はもう懐かしいアストニエル王都のそれに少し似ていた。

白煉瓦作りの建物が立ち並び、その隙間を埋めるように屋台形式の商店がひしめきあっている。日差しが地面に濃い影を作り、時折大通りを吹き抜ける強い風が砂埃を舞い上げる。

通りには人が溢れ、様々な訛りの言葉が飛び交う。王都にも様々な人種が集まっていたものの、ここラグース程ではなかった。顔つきも髪や肌、瞳の色も多種多様で、まさに人種のるつぼと言える。

ただその誰もが、どこかぎすぎすとした緊張感を漂わせているのが、

明らかに王都とは雰囲気を異にしていた。

町外れの馬小屋に馬と馬車を預けたエイジャ達は、宿を探して大通りに足を踏み入れた。

途端に、四方八方から投げつけられる不躰な視線を感じる。

(嫌な空気だな。……こういう雰囲気、ひさびさだ)

エイジャは胸の内ですりごちる。

「相手にするな。珍しがってるだけだ」

一歩前を歩いていたルチアがエイジャを振り向いて言った。

エイジャは頷くと、すぐ横を歩いていたベルを守るように腕を引いた。

「え、エイジャ」

「危ないから。俺から離れちゃだめだよ、ベル」

ベルは驚いたように目をぱちくりとさせたが、嬉しそうに頷いた。

二人の様子に、ルチアはまたひそかに気落ちするのだった。

今晚の宿を取ると、エイジャ達は少し早い夕食を取るため、併設された食堂へ足を運んだ。

「話には聞いてたけど、ほんとに荒んだ街ねえ」

席についたベルがテーブルに頬杖を付く。

「いつもの事よ。慣れれば面白い街なんだけどね、ここも」

フェルダは何ともないように言うと、テーブルに置かれていたメニューを広げる。

「お前が一番注目を浴びてたような気がするがな」

「そうよねえ、歩くお宝博覧会って感じよね」

ルチアがフェルダに向かって言った言葉に、ベルが同意する。

今日のフェルダは見るからに上質そうなベルベットのロングドレスに、色とりどりの宝石が光る金のネックレス。指にも大粒の宝石をあしらった指輪をいくつもはめている。

「アタシはいつも通りにしてるだけよ？」

「そりゃそうだけど。絶対あいつら、フェルダさんの全身総額いくら計算してたわよ」

「まあ、女っただけでも人目を引いちゃうのよ、ここじゃ。気にしない、気にしない」

フェルダの言葉に、エイジャとベルは改めて食堂の客を見回す。

八割近くの席が埋まっていたが、その全てが男だった。

「それにしても、昔来た頃に比べてさらに女が減った気がするな」  
ルチアがつぶやいた時、背中から威勢の良い声が飛んできた。

「はい、おまたせー！熱いから気を付けてね！」

「あら、噂をすれば、女の店員だわ」

フェルダが振り返る。少し離れた別のテーブルに出来上がった料理を運んできた若いウエイトレスが、こちらに向かって声を掛ける。

「いらっしやい！ちよつと待ってね！」

高い位置で結われた灰色の髪が、少女のきびきびとした動きに合わせて揺れる。エイジャと同じ年くらいの、ぱっちりとした勝気そうな瞳をした少女だ。

淡いピンク色のワンピースに白いエプロンを付けて働く姿は、男しかない店の中で異彩を放っていた。

人数分のグラスをトレイに乗せ、こちらに近付いてくる。

「はい、いらっしやい！ご注文は？」

グラスをテーブルに置きながら、少女が顔を上げた。

「……………キーラ……………!？」

エイジャの声が震えているのに、ルチアが気付いた。

少女の動きが止まる。

「えっ……………エイジャ!？」

ガタンと音を立ててエイジャが立ち上がった。

「やだ……………エイジャなの!？なんでこんな所に!？」

あまりの驚きに言葉を失っているエイジャとは反対に、キーラと呼ばれた少女は嬉しくてたまらないように声をはずませた。

「会いたかったわ、エイジャ！」

エイジャに駆け寄り抱きつこうとしたキーラを、ベルが止めようとした時だった。

「バカッツ！！！」

エイジャが声を荒げ、キーラもベルもびくつと動きを止めた。

「エイジャ……………」

「ど、どこ行ってたんだよ！！人がどれだけ心配したか……………分かってんの！？何も言わないで……………！！！」

ルチアもフェルダも、呆氣にとられてその様子を見ていた。

本気で怒っているエイジャを見たのは初めてだった。

「ご、ごめんなさい！エイジャ……………だってあの時、どうしようもなかったのよ！あのままだと、エイジャにまで危険が及びそうだったから、私、しかたなく……………」

うつむいたキーラに、エイジャは唇を噛む。

「……………元気にしたのか？ひどい目にあったりは……………？」

「うん……………大丈夫。国境越えるまではヒヤヒヤしたけど……………。この街に来てからは、ここのオーナーにも良くしてもらってるし……………」

「……………そっか」

エイジャはそう答えると、黙り込む。

なんとも言えない空気が漂った。

「俺……………ちよつと部屋に戻るよ。ルチア達は食事……………続けて？」

「あ、おい、エイジャ……………」

ルチアの声も耳に届かないように、エイジャは足早にその場を後にする。

後には、気まずい沈黙とキーラが残された。

「……………ちよつと、なんなの！？エイジャがあんなに怒るなんて……………」  
「……………ちよつと、なんなの！？エイジャがあんなに怒るなんて……………」

ようやくベルが口を開くと、キーラはちらりとベルを見る。

目線だけを素早く上下に動かして品定めするような仕草に、ベルは

憤った。

「なんとか言いなさいよ！あんだ、何者！？」

「何者って……エイジャのカノジヨだけど。あんだこそ何？」  
張りつめていた空気が、瞬間的に凍り付いた。

「……カノジヨですって……！  
？」

ベルの金切り声が店内に響き渡った。

(30) エイジャのカノジョ

食堂を後にしたエイジャは先程取った部屋に戻ると、靴も脱がずにベッドに倒れ込んだ。

怒るだけ怒って、あの場をそのままにできてしまった事を皆に申し訳ないと思いつつ、キーラに対して何を言えばいいのか、どんな態度を取ればいいのか分からず、逃げ出してくる事しかできなかった。

頬に当たるシーツの冷たさに目を閉じる。

なぜ。どうして。

2年前にそればかりを心の中で繰り返した苦い記憶が、突然昨日の事のような鮮明さをもって蘇ってきた。

「エイジャ！もう、帰ってきたら一番にうちに来てって言ったじゃない！」

冒険者組合へ依頼完遂の報告を済ませたエイジャは、組合の建物から出てきた途端、胸に飛び込んできた少女を慌てて受け止めた。

「う・う・うめんごめん！昨夜、帰ってきたのがもう夜遅かったからな……」

いつもの宿で休んで、今、組合に報告してきた所なんだ」

ぎゅっぎゅっとう抱きついてくる少女の肩に手を掛けると、にこりと微笑む。

「ただいま、キーラ。遅くなってごめんね」

少女はふくれっつらをふわりと緩めて嬉しそうに笑った。

「おかえりなさいっ、エイジャ！良かったあ、無事に帰ってこれて！エイジャが帰ってきてるって、さっき宿屋のオジサンに偶然会って知ったのよ！？なんで昨夜うちに来てくれなかったの！？」

「だから、夜遅かったからさ……」

「夜遅くてもいいじゃない！ごはんだって私作ってあげるし、うちに泊まれば良かったのに……」

「そんな迷惑、掛けられないよ」

苦笑するエイジャにキーラは拗ねたように唇を尖らせたが、気を取り直したように笑顔を見せる。

「まあ、いいや。とにかく、おつかれさまっ。

ね、エイジャ、お昼ご飯まだでしょう？私、おなかすいちゃった」

「ん、じゃあごはん食べに行こうか。報酬受け取った所だから、俺おごるよ」

エイジャの返事に、キーラは嬉しさを顔いっぱいにしてエイジャの腕に抱きついた。

エイジャは16歳。冒険者組合からの依頼を多くこなし、王都城下町ではその名が少しずつ知られ始めていた。

大通りを歩くエイジャの姿に、ため息を漏らす女性達。

その腕にまとわりつく灰色の髪の少女に、容赦ない嫉妬の目が向けられる。

「エイジャ！帰ってきたのね、ちょっと寄っていきなさいよ！一杯おごるわよ」

通りの向こうから声を掛けてきたのは、顔馴染みの酒場の女店主だった。

「アニタさん、ただいま。また、夜に寄るよ」

エイジャがひらひらと手を振って返事を返す。彼女の店が開くのは日が落ちてからだ。

「客が誰もいない店に引っぱりこんで、何しようっての？人のオトコに手出さないでよね……」

キーラが悪態をつくくと、アニタは青筋を立てて怒った。

「なんですって!?!あんだ、ちよつとこつち来なさいよ!」

「ベーだ、いやですよーだ!」

ぺろりと舌を出すキーラを、エイジャがやんわりとたしなめる。

「キーラ、だめだよ、そんな事言っちゃ。キーラだって、アニタさんにお世話になつただろ?」

「……それと恋路は別よ」

つんと顔をそむけるキーラにエイジャは困つたように苦笑すると、アニタに顔を向けて片手で謝る仕草をする。

アニタはおもしろくなさそうな表情を作つたが、仕方ないわねというように手を振つた。

値段が手頃でおいしいと評判の店で、エイジャとキーラはテーブルを囲む。

「ええと、ベーコンと豆のスープと鶏肉のトマト煮込みと、海老のチーズ焼きと、あとサラダとパン」

「俺は野菜スープと白身魚の香草焼きと、サラダ」

「そんだけ!? エイジャ、もっと食べなさいよ。体折れちゃうわよ」「大丈夫だよ。キーラはたくさん食べなよ」

「やだ、女のほうが男より重いなんてイヤだもん。すいませーん、私、パンやめる」

店員を呼び止めて告げると、キーラはテーブルに頬杖をついた。

「エイジャがいない間に、さみしくて食べ過ぎちゃって、太っちゃつたしー。ダイエットしなきゃ」

「そんなのしなくていいよ。今のままで」「キーラは横目でエイジャを見る。

「私が太つても、浮気しない?」

「何言つてんの。変な心配しないで、ほら、来たよ」

運ばれてきた料理を前にして、キーラの機嫌も治つたようだった。食事をしながら、エイジャは今回の依頼で訪れた洞窟の話をお聞かせ



る。

王都から南西へ三日ほど馬を走らせた森の奥の洞窟に、凶暴な魔獣が現れたという報告があり、実態を確かめるためにエイジャが派遣されたのだった。

「ええっ、じゃあその魔獣に懐かれちゃったの!？」

「うん。たぶん、小さい時に人間に世話された事があるんじゃないかな。最初は興奮して攻撃してきたんだけど、鎮静かけて落ち着いたら甘え始めてさ。」

可哀想で、依頼期限ギリギリまで世話してたんだ。こちらから攻撃しなければ、何もしない。そうっとしておいてやるのが一番だっつて、組合に報告してきた」

「もぉー……ほんつとエイジャって、優しいっつていうかおひとよしっつていうか……」

「子供の時に飼ってた猫を思い出してさ」

「猫って……その魔獣、エイジャより大きかったんでしょ？」

「うん、獅子タイプの魔獣だよ。顔がキーラの身長ぐらいあったかな。すごく立派でカッコイイやつだったよ」

キーラははあつと呆れたようにためいきをついた。

「じゃあ帰る時は嫌がってた？」

「うん……やつぱり分かるみたいでさ。帰したくないみたいで、最後はちよつと暴れたよ」

「……」

「街に連れて帰る事はできないし……また度々、会いには行くつもりだけど……その間寂しい思いをさせるくらいなら、優しくしない方が良かったのかもしれない」

エイジャがぼつりとつぶやく。

「もらいつ」

ふいに目の前の皿から魚が一切れ奪われ、エイジャは手が止まっていた事に気付いて顔を上げる。

キーラが失敬した料理を口に運びながら、まっすぐにエイジャを見

据える。

「優しくしない方が良かったなんて、あるわけないよエイジャ。たとえ、それが限られた時間だったとしても、優しくしてもらって嬉しかった気持ちは、いつまでも残るもの。」

それは、人間だって魔獣だって一緒でしょう?」

エイジャは別れ際の魔獣の様子を思い出す。エイジャを引き止めるように暴れたが、通じるはずのない言葉で懸命に語りかけ続けると、最後には諦めたように道を譲った。

まるでエイジャの言葉を聞き分けたような態度に、余計に罪悪感が募る。

「別れ際の辛さよりも、一緒にいた時の楽しかった気持ちを覚えてほしいって思うな、私なら。だってそうしたら、また会いたいって思ってもらえるでしょう?」

キーラの言葉に、エイジャは顔を上げた。

「……キーラは強いね」

「強くなかないけど。でも、別れはたくさん経験してきたから、その度にへこんでちゃ、前に進めないから」

そう言うと、キーラはテーブルに身を乗り出してエイジャの顔を覗き込んだ。

「大丈夫だよ。その魔獣も、エイジャの事恨んだりなんてしてないよ。離れてても、あの子どうしてるかな、会いたいな、って想う相手が増えたんだよ?嬉しい事だと思わなきゃ」

ね?と首を傾げたキーラに、エイジャも笑みを漏らした。

「うん……そうだね。」

ありがとう、キーラ」

キーラは気が強くわがままで、その言動に振り回される事もあるが、何よりも楽観的で前向きな考えの持ち主だった。

何かと悩み、考え込んでしまうエイジャにとっては、その明るい強さがまぶしく感じられるのだった。

半ばなし崩し的に始まった付き合いだったが、今ではキーラ  
の存在はエイジャにとって大きなものになっていて。

（俺が、本当に男だったら、キーラを幸せにしてあげられたのに）  
エイジャはそう思っていた。

(30) エイジャのカノジヨ (後書き)

更新が大変遅くなってすいません。

お詫びを兼ねまして、イラストを載せましたので、もしよろしければ目次の下からご覧になってみて下さい。

(31) 恋人なのか？

キーラと過ごした日々を回想していたエイジヤは、ふと廊下を歩く足音に気付いて耳を澄ませた。

足音はエイジヤの部屋の扉の前で止まる。

(そういえば、部屋の鍵も締めてなかったな……)

ベッドシートに顔を埋めたまま、エイジヤはぼんやりとそう思った。扉のむこうの気配はその場を動かさず、かといって扉を叩く様子もない。

「エイジヤ。食事を持ってきた。食べられるか」

しばらくしてエイジヤを気遣うように掛けられた声は、ルチアのもの。

どう返事を返せばいいのか分からず、エイジヤが言葉を探していると、再び声が掛けられる。

「……入っていいか？」

声色から自分の事を心配してくれているのを感じて、胸が詰まった。

「……開いてるよ」

やっとそれだけ絞り出す。

扉が開かれたのを、ふわりと体を撫でる風の動きで知った。

静かな足音が近付いてきた後、俯せに倒れたままのベッドにわずかな振動を感じる。

ルチアが自分の体の側に腰掛けたのだと気付いて、エイジヤはゆるゆると顔だけをそちらに向けた。

「……なんて顔してる」

ルチアに言われて、エイジヤは困惑する。

「なんて、って……どんな顔？」

どんな顔って。

ルチアは答えに窮して視線を逸らせた。

しつとりと潤んだ瞳、辛そうに歪められた眉。

漆黒の髪は肩からシーツに流れ落ち、一筋の細い束が微かに開かれた唇にかかる。

その眺めは、見る者の理性を狂わせるには十分で。

陶器のように滑らかな白い首筋に指を添わせたくなるのを必死で抑え、ルチアは自制心を奮い立たせるように咳払いをすると、手にしていた皿をエイジャの顔の前に置いた。

皿の上にはハムとチーズを挟んだパンが置かれ、いくらかの野菜が添えられている。

「とにかく食べ。倒れたいのか？」

「食欲、ないよ……」

「冒険者がそんな事言ってるどうする。しっかり働きたかったら食べ」

最後の一言は効いたようだった。エイジャはおずおずと体を起こした。

なぜかベッドの上いきつちりと正座し、目の前に置かれた皿を手に取り。

パンを口にするエイジャを眺めながら、ルチアは組んだ足の上に肘をつき、ため息をつく。

キーラの「彼女」発言の後。

ルチアが気が付くと、いつの間にかキーラは姿を消していた。

「……よね、ルチア!？」

ベルに顔を覗き込まれたルチアは、しばらくの間自分が放心していた事を知る。

「ああ、え、何だ？」

「ちよつとなによ、聞いてなかったの!？」

あのキーラって子、エイジャの彼女だなんて言ってたけど、エイジャの話し方だとだいたいぶ前に勝手に王都を去ったまま行方知れずだっ

たみたいじゃない!? そんなのって彼女って言える? 言えたとしても元カノよね!? っていうかそんな女、元カノとも呼べないわよ! きつと、あの女が勝手にそう言ってるだけよ!」

一方的にまくしたてると、ベルは勢いにまかせて椅子に座り込んだ。「……あの女は?」

ルチアが尋ねると、ベルは怒りが治まらない表情のまま、顎で厨房のほうを指す。

「とつとどつか行つたわよ。交代の時間ですって」

しばらくして違うウェイターの男が料理を運んできたが、正直、ルチアも食事をする気分ではない。

無理矢理咀嚼して飲み込んだが、味はよく分からなかった。

「……エイジャにあの女の事、聞きたいけど……怖いな」

ぼつりとベルが漏らした言葉を耳にして、ルチアは目だけをそちらに向ける。

「お前の口からそんな気弱な言葉を聞くななんてな」

「あのね。あんた私の事なんだと思ってるわけ!?!」

食って掛かってくるベルも、いつもに比べて勢いが弱い。

重い空気の中食事が済んだ頃、ウェイターが新たに一皿を運んできた。

「なに、頼んでないわよ?」

ベルが言うと、フェルダが皿を受け取った。

「アタシが頼んだのよ。エイジャの分」

そして皿をルチアの前に置いた。

「こういう時は男同士のほうが良いでしょ。持って行ってあげなさいよ、ルチア」

「……俺に聞き出させていうのか」

「そういつわけじゃないけど。ちゃんと食事が喉を通るくらいには、話を聞いてあげてね」

すました顔でフェルダが続ける。

何か言いたそうにベルが唇を動かしたが、そのまま言葉を飲み込んだ。  
聞くのが怖いと言ったのは本心だったようだ。

食事を終えたエイジャはルチアから葡萄酒の瓶を受け取って口にする。

悲痛だった表情はいくらか弛み、少し気分が落ち着いたようだった。

「ごめん……。あんな状態で、部屋に戻っちゃったりして」

正座を崩さないまま、肩を落として詫びたエイジャを見て、ルチアはエイジャが自分の行動を情けなく思っている事に気付いた。

「気にするな。あの女もあの後すぐに立ち去ったし（放心してて気が付かなかつたが）、ベルもフェルダも逆にお前の事を心配してた」  
エイジャはうな垂れたまま、自分の膝頭のあたりを見つめて黙り込んでいる。

ルチアは意を決して切り出した。

「あの……キーラとかいう女は、お前の恋人なのか？」

「キーラがそう言ったの？」

「ああ」

「……そっか」

否定しなかったエイジャに、ルチアはスーッと意識が遠のきそうになるのを堪える。

二人の間に流れる沈黙。

「キーラはさ……」

エイジャが口を開き、ルチアはどこかへ去っていきそうだった意識を慌てて掴む。

「夜道で……酔っぱらいに絡まれてて。俺が偶然そこを通りかかって、すごく困ってたから、酔っぱらいを追い払ってやったんだよ。それが、最初」



聞きたくないような、聞いておきたいような。複雑な思いで、ルチアはエイジャの語る「カノジヨ」との馴れ初めに耳を傾けた。

「それから、なんだか懐かれちゃってさ。俺の事……好きだとか、恋人にしてほしいとか、いつも言ってくるんだ。」

俺は、そんな、恋人なんて作る柄じゃないし、第一、冒険者として修行中の身で、そんな余裕ないし……いつも、断ってたんだけど」「当然、キーラの誘いを断り続けていたのは、本当は自分が女性であるからなのだが、そこはもちろんルチアには伏せて、エイジャは話を続けた。

(31) 恋人なのか？(後書き)

土曜日に更新できなくてすいませんでした。短めですが更新しました。

詳しくは活動報告にて。

(32) 私を彼女にして

ある日の事、常宿にしている宿屋の食堂のいつもの席で朝食をとっていたエイジャに、知り合いの男が話しかけて来た。

「おいエイジャ、最近おまえの周りをうろついでる女いるだろ。あの子、お前の恋人？」

「……恋人ってわけじゃないけど。なんだよ？」

普段から女好きで手の早い男だったので、少し警戒して聞き返すと、男は顔を近づけて声を落とす。

「いや、さっき向こうの路地で何かガラの悪そうな奴らと言いついててさ。ちよつと揉めてるっぽかったぜ。恋人じゃないなら、ま、心配する事ねーか」

エイジャは朝食の残りを一息にかきこんで立ち上がった。

「あ、おい、行くのかよ？」

「恋人じゃなくなつて心配だろ。オヤジ、勘定ここに置いてくカウンターの上に置いた銅貨の中から、一枚を男の方に投げる。

「礼。どこで見た？」

「まいどあり。この店出て露店街の方に行く途中の路地だ」

エイジャは椅子の背にかけていたジャケットを手に取ると、羽織りながら足早に店を出た。

男に教えられた方角へ早足で歩きながら、細い路地に目を配る。しばらくすると聞き慣れた声が耳に飛び込んできた。

「だからっ！もう私には付きまとわないでって言ってるでしょうっ！？」

声のした方へ走る。

「キーラー！」

路地に立つ三人の男達の隙間から、キーラの顔が見えた。

「エイジャ！」

「なんだ、お前！」

男がエイジャに掴み掛かってくる。咄嗟にエイジャは身を屈め、用意していた詠唱を解き放った。

「デ・トルナド・ゲベルト！」

突如巻き起こる突風。細い路地の中で勢いを増した竜巻に巻き込まれ、男達の体が次々に宙に舞い上がった。同時にエイジャはキーラの手を掴んで走る。

路地を抜け、大通りの人混みの中を肩を避けながら駆ける。男達が追いついてこないのを確認しながらまた横道の路地に入り、一軒の店の裏口扉を開いて飛び込んだ。

「……いらつしゃーい……ってエイジャ、どーしたの？そんな所から入ってきて」

顔馴染みの女店主が驚いた顔で迎えた。

「ごめんアニタさん……ちょっとかくまって」

「それはいいけど、横の女の子は何よ？女連れっていうならちょっと考えちゃうけど？」

「そう言わないでよ、追われてるんだ」

「もお、分かったわよ」

エイジャより一回りほど年上のアニタは、以前からエイジャを気に入って何かと面倒を見てくれていた女性だった。目の覚めるような美女とまでは言わないまでも、笑顔が魅力的な彼女を目当てに店に通ってくる常連客も多い。

店内は開店準備中で椅子がテーブルに上げられている。アニタは店の端のテーブルの椅子を床に降ろすと、座るよう促した。

エイジャは繋いだままだったキーラの手を離し、椅子を引いてやった。キーラがおずおすと腰を降ろす。

まだ肩で息をしているキーラに、アニタが水の入ったグラスを差し

出した。

グラスを受け取ったキーラは一気に水を飲み干し、大きく息をつく。

「ちよつと落ち着いた?」

エイジャが尋ねると、キーラは頷いた。

「助けてくれてありがと……エイジャ」

「あの人達は誰?知り合い?」

「知り合いってどうか……」

キーラは言いにくそうに口ごもると、視線をテーブルに落とす。

「言いたくないなら無理には聞かないけど……」

服装や顔つきからは、どう見ても柄のいい連中には見ええず、キーラのような若い娘が関わりを持つのは良い事ではないと思えた。

「前に……あの連中と一緒にいた事があるの。……あの中の一人が、私の事気に入ってるみたいで……しつこくて、困ってるの」

「そうなんだ……」

キーラと初めて会った時も、酔っぱらいに強引に口説かれて困っていたのを思い出す。

きめ細かな肌にくるくるとよく動く亜麻色の瞳、形の整った柔らかそうな唇。まだ幼さを残しながらも、すでに大人の女性の片鱗を見せ始めている。改めて見ると、男心をくすぐる容姿なのかもしれない。

「ね、エイジャ。エイジャが彼氏だって言えば、あいつも諦めが付くと思うの。だからお願い、私を彼女にして!」

顔の前で手を合わせたキーラに、エイジャは困ったようにため息をついた。

翌朝。

宿の部屋の扉を叩く音で、エイジャは目を覚ました。

「お・は・よつ!エイジャ!」

知った声が耳に入り、慌てて跳ね起きる。大急ぎで胸にサラシを巻いてから、扉を開けた。

「……おはよ、キーラ……。どうしたの？」

「どうしたのって、朝だから起こしに来たのよ？早く顔洗ってらっしゃいよ。もう太陽がだいぶ上まで上がってるわよ」

エイジヤは寝ぼけ眼をぱちぱちと瞬かせる。

「……えと、昨日約束してたっけ？」

「約束？別にしていけないけど。」

やーね、恋人同士なんだから、約束なんてしなくたっていいじゃない。それでなくてもエイジヤったら依頼でしょっちゅう出掛けちゃうんだから、王都にいる間だけでも一緒にいたいもん」

上目使いでエイジヤの目をじっと覗き込み、甘えるように体を揺らすキーラ。

エイジヤは額に手を当ててため息をつく。

「……分かった。用意してくるから、下で待ってて」

着替えたエイジヤが宿の階段を降りて行くと、玄関の前にこちらに背を向けて立つ小さな背中が見えた。

エイジヤが声を掛ける前に、足音で気が付いたのか、くるりとこちらを振り向くと、嬉しそうにニッコリと笑う。

その顔を見ると、胸が温かくなって思わず自然に微笑みを返してしまふ。

本当に女性の笑顔に弱いなど、エイジヤは心の中で苦笑した。

「ごめんね、待たせて。で、どこに行くの？」

「ん〜、そうねえ。まずは腹ごしらえかな」

キーラに腕を掴まれ、露店通りをぶらぶらと歩いていると、いつも声を掛けてくる顔なじみの女性達が引きつったような表情を浮かべて硬直している。

「エイジヤ！ちょっとちょっと！」

その中の一人がエイジヤを手招きした。いつも果物をおまけしてく

れる青果店の女性だった。

エイジャがキーラに断って近付いていくと、ぐいつと顔を近づけて  
凄む。

「あの子誰！？もしかして……彼女だなんて言わないわよね！？」

「えっ……いや……どうなのかな？俺もいまいちよく分かん……」

「どうなのかなって何、それ！？」

声を荒げたのを合図に、黙って見守っていた周りの店の女性達が一  
気に集まってきた。

「エイジャ、今は彼女を作ってるような余裕なんてないって言っ  
たじゃないの！？どういう事！？」

「そうよ、それに私の事かわいって言ってくれたじゃない！？」

「やだ何よそれ、私だって優しく素敵だって言われたわよ！？」

「エイジャ、どういう事なの！？恋愛解禁なんだったら、私達だっ  
て黙ってないわよ！」

口々に詰られ、エイジャは必死に弁解する。

「いや、ほんと……彼女を作る余裕はなかったんだよ……、なんか  
その、成り行きというか……やむを得ずというか……俺もよく分か  
ってなくて……！」

エイジャはぐるりと周囲を女性達に取り囲まれてもみくちやにされ  
ていたが、輪の外からずると引つ張り出された。

「悪いけど、エイジャのカノジョはわ・た・しに決まったから！分  
かったら、人のオトコに手を出さないでねっ！」

キーラはきっぱりと言い放つと、エイジャの手を握り締めて走り出  
す。

「ちよつとっ！！あんた！！何なのよ、いきなり現れて……！」

「エイジャ、行こ！」

「あ、あ……ごめんなさい皆さんっ、わけはまた今度ちゃんと話  
します……！！！」

とにかくこの場は逃げるしかないと、エイジャはキーラに引かれる  
ままに駆け出した。

キーラの「彼女発言」の後、これまでエイジャを可愛がってくれていた女性達の態度は急変した。

これまで街で会えば必ず嬉しそうに話しかけてきた女性が、今は目を逸らせて通り過ぎる。

すっかり嫌われてしまったのかと、エイジャは肩を落とす。寂しいが、仕方がない事だと自分に言い聞かせていた。

（彼女を作る余裕はないって言うたのに、成り行き上とはいえ、皆に無断で彼女を作っちゃったんだもんな……嫌われるのは、当然だ……）

そんな状況やエイジャの心情を知っているのかいないのか、キーラは常に天真爛漫で明るかった。

冒険者組合からの依頼で街を離れる事の多いエイジャに、出発前には寂しそうな顔を見せるものの、依頼を終えて帰宅するとこれ以上ない程に喜んでくれる。

自分の帰りを心から待っていてくれる、特別な存在がいる事。

早くに家族を失ったエイジャにとって、キーラは冒険者として生き始めてから初めてできた、家族のような存在になりつつあった。



(32) 私を彼女にして(後書き)

またまた遅くなつてすいません。変則的な更新になりましたが、とりあえずアップしました。

### (33) 幸せな時間

キーラにしつこく言い寄っていたという例のチンピラ達は、それからエイジャの前に顔を見せる事はなかった。

「エイジャが小山のように大きくて獰猛な魔獣を手なずけたっていうのが噂になってるのよ。そんな強い冒険者が相手じゃ、勝てっこないもの。第一あいつら、エイジャには一度こてんぱんにやられてるしね」

キーラはそう話していたが、こてんぱんと言っても不意打ちのように竜巻の魔術をくらわせてその隙に逃げただけであって、状況が違えば次も勝てるかどうかは分からなかった。

しかし、エイジャが南西の森の洞窟に現れた魔獣を手なずけたという話が城下町で話題になってるのは事実だった。

これまではまだ年も若く痩せっぽちで、まるで女のようだったエイジャを馬鹿にしていた冒険者仲間達の間でも、エイジャの評価は高まり始めていた。

エイジャの見た目が見た目だけに、逆に「ああ見えて実は滅法強い」という話は信憑性が高いらしく、それが彼等を遠ざけているようだった。

恋人を作ったエイジャに対して冷たい態度を取っていた街の女性達も、少しずつその態度を軟化させていた。

露店街の女達の中でも姐さんの存在である、アニタがエイジャ達をかばったことで、彼女達の間には嫉妬からエイジャに冷たくしてしまった事を恥じる空気が流れ始めたのだった。

あいかわらず生意気な口を叩くキーラが女性達の怒りを買う事も多かったが、エイジャが依頼で長く王都を離れている時には、寂しそうにしているキーラを気遣って話しかけてくれる事もあるようだった。

若い二人を暖かく見守ってやろうという風潮になり始めたのは結局、皆エイジャを嫌いにはなれないという事実の現れでもあった。

穏やかな日々は半年ほど続いた。

エイジャにとつては無理矢理押しつけられたような恋人関係だったが、駆け出しの冒険者として依頼をこなす毎日を、前向きで明るいキーラの存在が支えてくれている事は間違いなかった。

だが、それと同時に彼女に対しての罪の意識も大きくなっていく。エイジャはキーラをまるで妹のように想っていたが、キーラの方はそんなつもりではない事は明白だった。

実際にこの半年間、一向に手を出してこないエイジャの事を責めるような言動さえあったが、こればかりは実は女であるエイジャにはどうする事もできない。

本当の男ではない自分には、キーラを幸せにしてあげる事はできない。

いつか、自分から別れを切り出さなくてはいけない。

しつこい男を遠ざけるといふ目論みが成功した今、できるだけ早く彼女から離れる事が、キーラに対しての誠意だと分かつてはいた。

ただ、それはエイジャにとつて、やっと手に入れた大切な存在を自分から手放さなければいけない事でもあり、それが決心を鈍らせていた。

その日、エイジャは商隊の護衛の仕事を済ませて、三日ぶりに王都へ戻ってきていた。

出発前の約束通り、戻ったその足でキーラの住む家を訪ねる。

「おかえり、エイジャ！ 予定通りだったね、良かったあ！」

キーラは嬉しそうにエイジャを家に招き入れた。

小さな借家の中には、おいしそうな香りが漂っている。

「夕食の用意を待ってたの！もし予定が長引いてたら、これ、私一人で食べなきゃいけなかったわ」

エイジャと付き合いだしてから始めたという料理の腕は、まだ発展途上という感じではあったが、旅から帰ってくるエイジャを手料理で迎えようと頑張ってくれる気持ちが嬉しかった。

「ん、おいしい。キーラ、料理うまくなったね」

ほかほかと湯気をたてるシチューを口にし、エイジャが微笑む。

「ほんとっ！？嬉しいっ！それ、エイジャがこの間おいしいって言うてくれたから、改良してみたの」

お世辞ではなく、本当においしかった。あまり肉が得意ではないエイジャのために、魚介類と野菜をたっぷり使ったシチューは、疲れた身体に染み渡るようだった。

普段食の細いエイジャが二度もおかわりをして、空になった鍋をキーラが満足そうに片付ける。

「ごちそうさま。すごくおいしかったよ」

「ほんと？ちよっとは上手になった？」

嬉しそうに振り返ったキーラに、エイジャは笑って頷いた。

「すごく上手になったよ。最初の頃は苦い料理が多かったもんね」

「もっつ、それは言わない約束でしょ！？」

頬を膨らませるキーラ。それを見てエイジャがまた笑う。

「ごめんごめん、もう言わない」

謝りながら、上着のポケットを探る。

「はいこれ」

テーブルに戻ってきたキーラの前に置いたペンダントが、コトリと小さな音を立てた。

「えっ……なに、これ」

「おみやげ。護衛してたのが宝石商で、チップがわりについて言うてくれたんだ。きれいだろ？」

「……すごくきれい」

瞬きを忘れたように、キーラは手にしたペンダントを凝視した。

「エイジャの瞳みたいだわ」

深い青緑の石は、碧玉のようだった。周囲を飾る金の細工も手の込んだもので、庶民にはなかなか手を出しにくい値段である事が伺い知れた。

「ありがとう、エイジャ。すごく嬉しい。私、これずっと大事にする。一生、大事にする」

キーラはペンダントをギュッと胸の前で握り締めて笑った。

エイジャはその顔を見ながら、深い幸福を感じていた。

ずっとこのまま、幸せな時間を過ごせたらいいのに。

依頼をこなして、おみやげを手に帰ったら、キーラが夕食を作って待っていてくれる。

冗談を言って、笑い合う、暖かな家。

凄惨な過去も、未来への不安も。

一時忘れさせてくれる、穏やかな日常。

自分から手放す事なんて、できるはずがなかった。

夜更け近くになって、エイジャはキーラの家を後にし、自分の宿に戻った。

いつも泊まって行けと言うキーラが、あっさりと自分を送り出した事に、少しの違和感を感じながら。

翌日、冒険者組合へ依頼の完遂を報告しに行く。

報酬を受け取り、組合の建物を出て、さてどうしようかと考えた。

いつもなら、朝からキーラが宿を訪ねてくる事がほとんどだった。エイジャが王都にいる間は少しでも一緒にいたいのだと言って、朝から晩までエイジャの周りをうるちよろしているのが常だった。

（昨夜ははりきって料理をしてくれたから、今朝は疲れてまだ寝てるのかもしれないな）

最近王都でゆっくり一人の時間をとれる事が稀になりつつあったので、いい機会だと思った。

エイジャは魔術に関する調べものをするため、一般公開されている王立図書館へ足を運ぶ事にした。

冒険者組合の身分証明書があれば入れる図書館で、魔術に関する書物を読み漁り、気が付いた時には日が傾き始めていた。

（キーラが、どこに行っていたのかわかって怒りそうだな。そろそろ宿に戻るか……キーラの家に行った方が早いかな）

図書館を出ると、昨夜遅くに後にしたキーラの家を訪ねた。扉をノックする。返事はない。

自分を訪ねて、宿のほうに来ているのかもしれない。

そう考え、エイジャは宿に戻った。

キーラはいなかった。

変な胸騒ぎがして、エイジャはもう一度キーラの家に戻った。

扉を叩く手が汗ばんでいる。

返事がない事に焦りを覚え、きよるきよると辺りを見回す。

市場に買い物に行っているのかもしれない。昨夜、料理を褒めたから、今晚も夕食を作ろうとしているのかも。……うん、きつとそう  
だ。

そう考えながら、ふと手にふれたドアノブを軽く回してみる。

カチャ、と軽い金属音がした。

鍵が……開いてる。

ギイと立て付けの悪い音を立てて、ドアは開いた。

夕焼けを背中から受けて見る部屋の中は真つ暗で、昨夜訪ねた時にキーラが迎えてくれた部屋とは、まるで違って見えた。

部屋の中に長く伸びた自分の影を目で追うと、昨夜一緒に食事をしたテーブルの上に、一枚の封筒が置かれているのが見えた。

なぜ、それが自分宛に書かれた物だと思ったのかは分からない。何も考えられないまま、エイジヤは震える手でそれを手にする。

思った通り、表書きには自分の名があった。

エイジヤ

ちゃんとお別れもしないで、いなくなる事

本当にごめんなさい

エイジヤと一緒にいた半年間、私はすごく幸せだった。

ありがとう。エイジヤの事、ずっと忘れません

四つ折りにされた手紙には、たったそれだけが書かれていた。

(34) 馬鹿じゃないのか、俺は

エイジャはそこで話を一旦切った。

ずっと黙って聞いていたルチアは、ため息を漏らす。

掛ける言葉が見つからないとはこの事だ。

辛い失恋を経験したエイジャを、気の毒に思う気持ちに嘘はない。

だが、エイジャに心から愛した恋人がいたという事実??というのも、エイジャは自分が女であるという事を伏せて話した為に、ルチアの中でそういう筋書きになってしまったのだが??もまだ受け止めきれていない。

「……キーラにも、事情があつたんだ」

エイジャが再度口を開く。

「お前を捨てた事情がか?」

ルチアが幾分投げやり気味な返答をすると、エイジャはうなだれる。

「俺、その後ずいぶんキーラの行方を探したんだ。町の人達にも、

キーラが借りてた家の大家さんにも、話を聞いて廻つて。でも誰も、知らないって……もう、何だか訳が分かんなくて」

その時のエイジャの心情を思うと、ルチアの胸は痛んだ。くそ、あの女。エイジャにそんな想いをさせやがったのか。

「そのうち酒場で、最初にキーラにつきまとつてた、例の男達を見つけたんだ」

「ああ……お前が竜巻でぶっ飛ばしたっていう」

エイジャは小さく頷く。

「キーラがどこ行つたか……って、ま、逃げたんじゃねーの?」

男の一人がさも当然のように言つてのけたのを聞いて、エイジャは耳を疑つた。



「逃げた？どこに？何から逃げたっていうんだよ？」

エイジャの質問に、男達は顔を見合わせて薄ら笑いを浮かべる。

「なんだよ、お前キーラの恋人だって聞いてたけど、何も知らねえの？」

カツと頭に血が上ったが、エイジャは必死で感情を抑えて話の続きを待った。

「あいつ、金貸しに追われて王都に逃げてきたんだよ。旅の途中で俺らと知り合ってた。旅費もねえって言うから、ま、ここに来るまでの金の面倒は見てやってきたんだよ」

「それなのに、王都まで来たらもう俺らとは関わり合いたくねえとか言いやがって」

「なんか親が作った借金だって話だったけど、親が親なら子も子だよな。恩知らずってのはあいつの事だよ」

「まあ、どういってもりで付き合ってたのか知らねえけど、お前もあんなあばずれの事はさっさと忘れた方がいいぜ」

口々にキーラを罵る言葉を耳にして、エイジャの中で行き場のない悲しみが怒りに変わっていく。

髪の毛が魔力を受けてゆらりとたなびくのを見て、男達は言葉を切つて息を飲んだ。魔力はなくとも、全身にみなぎる殺気は感じ取つたらしい。

「……その金貸しっていうのは？もう王都に来てるのか？」

「いや、その、二、三日前だったかな……キーラの事、聞いて廻ってる、知らねえ男を見かけてさ……たぶん、あれが金貸しじゃねーのかなあ……俺は、聞かれてねえけど！」

必死で自己弁護に走る男達を責めても仕方が無い。

今はキーラの身が心配だった。

エイジャはキーラの事を聞き回っていたという、金貸しらしき男の風貌を聞き出すと、テーブルに銅貨を置いて踵を返した。

「えっ、いや、受け取れねーっすよ……」

なぜか敬語になっている男達に、肩越しに冷えた視線を送る。

「借りは作りたくないから、取っという  
そのまま振り返らず、酒場を後にした。」

なんでだよ、キーラ。

なんで言ってくれなかった？

金貸しに追われて王都に来た事も、そのせいであの男達につきまとわれる羽目になった事も、何も言ってくれなかったじゃないか。  
お金に困っていたのなら、そんなの、俺が働いて一緒に返す事もできたのに。

早足で歩いていた歩みを止めて、エイジヤは路地でうずくまった。  
なぜ。どうして。

俺は、なぜ気付かなかったんだ。  
きつとキーラは苦しんでたんだ。

あのキーラの笑顔も、優しさも、どれも嘘なんかじゃなかった。  
まっすぐに俺に愛情をくれたのに、俺は後ろめたくて、ちゃんとキーラの事を見てなかったんじゃないのか。

最後の夜、夕食と一緒に食べて、すごく幸せで。  
おみやげのペンダントを、あんなに喜んでくれて。  
俺を送り出した後、どんな気持ちであの手紙を書いて、出て行ったのか。

王都に来て初めて、エイジヤは声を上げて泣いた。

結局、キーラの事を聞き回っていたという金貸しらしき男は見つからなかった。

キーラが王都を離れた事を知って後を追ったのではないかと心配し

だが、聞き込みをした限りキーラがどこに向かったのかを知っている人間は一人もおらず、金貸しもキーラを追う事ができずに地元に戻った可能性が高かった。

西へ向かったのか、東へ向かったのか、方角さえも分からない中、エイジヤは依頼で王都を離れて旅をする度に、訪れた街や村でキーラの行方を聞いて廻ったが、それらしき少女の情報を得られる事はなかった。

それから2年。

もうすでに行方を探す事を諦めていた相手が、突然目の前に現れ、あっけらかんと再会を喜んでいるのだから、そりゃ怒りもするだろう。

ルチアはしょげかえっているエイジヤを眺める。

痛い恋愛話を打ち明けられた今は、少し冷静になって、同じ男として同情してやれるような気もした。

その事に軽い安堵を覚え、ルチアはエイジヤの肩を抱く。男同士、友情のハグだ、これはと自分に言い聞かせながら。

「お前も結構女で苦労してたんだな」

そう言つと、エイジヤは小さな嘆息と共にルチアの肩口に頭を寄せた。

子猫が母に甘えるような仕草に、ルチアの心臓が跳ね上がる。

(う……… やっぱり、だめだ)

だが、悄然としているエイジヤを急に引きはがす事もできず、そのままじつとして耐える。

「……無事だったんだから、喜ぶだけでいいはずなんだ。なんで、怒っちゃったのかな……。」

あんなに心配したのに、キーラは全然平気な顔してるから……」「  
くすんと小さく鼻を鳴らす。掠れた声。

(ああ、何を考えてるんだ。こいつは他の女を想ってるってのに、馬鹿じゃないのか、俺は)

ルチアは途方にくれ、意識を散らすように窓の外へ視線をやる。  
夕暮れが押し迫っていた。

(35) 会わない方が良かった

翌日。

いまだ元気がないエイジャを宿に残し、ルチア、フェルダ、ベルの三人は、魔道具職人を訪ねてマーケットの裏通りを歩いていった。エイジャ自身はもう大丈夫だと言い張ったが、それが虚勢である事はルチアの目には明白で。そんな状態で物騒な裏通りに連れてはいけないと、ルチアに部屋に押し込められたのだった。

日中でも薄暗い裏通りは道幅も狭く、人通りはほとんどない。表通りのざわめきが遠くに聞こえるのみで、不気味に静まり返っている隙間なく立ち並ぶ建物はどれも相当の年代物らしく、まっすぐに建っているものは見当たらない。お互いに支え合ってやっと持ちこたえているような有様だった。

そのうち、一軒の建物の前でフェルダが足を止めた。入り口には腕組みをした男が扉を隠すように立ち、ルチア達に牽制するような視線を投げかけてくる。

「ここか？」

ルチアが尋ねるとフェルダは軽く頷き、懐から出した銅貨を男に手渡した。

男は黙ったまま身体を横にずらして扉を開き、三人を中に入れる。背後で扉が閉まる音を聞きながら、ギシギシと音を立てる古い階段を上っていくと、薄汚れた絨毯敷きの廊下が現れた。

小さな木製の扉が並ぶ。一番奥の扉を、フェルダがノックした。

「どうぞ」

無愛想な声の中から聞こえ、扉を開く。

壁一面をぐるりと天井まで届く高い棚に囲まれた、窓一つない狭い

部屋。膨大な数の本や何かの標本らしきオブジェ、得体の知れない道具などが所狭しと並べられている。

ベルがあっけにとられてきよるきよると見回していると、部屋の奥から先程の音が響く。

「お客さんか？」

「アタシよ。フェルダ。」

フェルダの返答を聞いて、声の主が棚の向こうから顔を出す。

「おお、あんたか」

背の低い、瓶の底のような度のきつい眼鏡を掛けた老人だった。

「今日はなんだ。情報が、道具の売り買いか」

「魔道具の修理を頼みたいの」

フェルダはルチアから眼鏡を受け取ると、老人に手渡す。

「へえ……こりゃ……」

老人は物珍しそうに、手渡された眼鏡を眺めた。

「どう？直せそう？」

フェルダの問いに、老人は難しい顔をした。

「あんた、これどこで手に入れた？」

「出所は聞かない主義じゃなかったの？」

「そりゃそうだがこれは……儂が今まで扱ってきた魔道具とは種類が違う。ここ数年に作られたもんじゃないか」

「あんた達みたいない魔道具職人が作ったんじゃないのか？」

ルチアが口を挟むと、老人は歯のない口を大きく開けて語気を強めた。

「馬鹿言え。儂らは古代魔法の時代に作られた魔道具の、ほんの少しのほころびを修繕するだけだ。新しく魔道具を作り出すなんて、できるもんかい」

興味深げに眼鏡を眺める老人に、フェルダが顔を近づける。

「で、直せるの？直せないの」

「儂には無理だ」

「誰なら直せるの」

「……こりゃあ難しいな。いくらこの街でもこれを直せるやつは……」  
老人は言葉を濁し、ちらりとこちらに視線を送る。フェルダが銀貨を一枚テーブルに置いた。

「クラウディオ。奴なら直せるかもしれないな」

「聞いた事ない名ね……どこにいるの？どんな人？」

「今はどこにいるのか分からん。数年前まではこの通りの向こうで店をしとったがな。顔を隠しとったからどんな奴かもよく知らん。陰気な男だよ、それだけ分かつとる」

フェルダが手を出すと、老人は名残惜しそうに眼鏡を返した。

受け取った眼鏡をルチアが掛け直していると、老人がその様子を見ながらにやりと笑った。

「それはそうと旦那、いい色の瞳をしてなさるな」

フェルダは額に手を当ててため息をつく。

「んもう、嫌な人ね。はい、これでいい？」

銀貨をもう一枚テーブルに置き、フェルダは老人を睨んだ。

「へっへっ、まいどあり。また情報がほしけりや来なよ」

建物を後にして裏通りを歩きながら、ベルが不思議そうに尋ねる。

「あのお爺さん、ルチアの瞳の色を褒めたの？なんで銀貨を渡したの？」

「なんだお前、エイジャから聞いてなかったのか？」

ルチアに言われてベルが怪訝そうな顔をしたのを、フェルダが苦笑して振り返る。

「紅い瞳はアストニエルの王族だけに遺伝するものなの」

「お、王族！？」

「まあ、俺の場合は遠縁というだけだがな」

「ま、あのお爺さんは口止めしといた方がいいわ。情報屋でもあるからな。」

うつかりしてた。魔道具職人って知識だけはあるから、ルチアの

瞳の色の意味を知ってて当然だわ」

フェルダはルチアを振り返る。

「というわけだから、クラウディオはアタシとベルで探すわ。ルチアは宿に帰ってて。眼鏡だけ置いていってちょうだい」

「お前達だけで大丈夫か？」

「ルチアが一緒じゃ銀貨がいくつあっても足りないもの」  
ルチアは眼鏡を外してフェルダに渡す。

「一般人にはその瞳の色の意味を知ってる人間もまあいないとは思うけど、気を付けて帰ってね」

フェルダに言われ、ルチアはひらひらと手を振って来た道に戻って行った。

留守番を命じられたエイジャは、宿のベッドに仰向けになり、ぼんやりと天井を眺めていた。

情けない。一晩寝れば気持ち切り替えられるだろうと思ったのに、今朝になっても重い気分は変わらなかった。

それを隠そうと明るく振る舞ったつもりだったが、ルチアにはカラ元気を見透かされてしまった。

(こんな所を見たら、キーラなら……しっかりしなさいよエイジャ、  
って怒るだろうな)

昨夜、二年ぶりに再会したキーラの顔を思い出した。

元気そうだった。髪がずいぶん伸びた。背も少し高くなってたな。はきはきと良く通る声はあいかわらず。気の強そうな瞳も、つんと尖った小さな鼻も、そのまま。

ただ、纏う雰囲気だけがすっかり大人びていた。

あの別れから、どんな経験を経てこの街に辿りついたんだろう。  
ひどい目にはあっていないと言っていたけど……



ふいに扉を叩く音が部屋に響き、考え事に没頭していたエイジヤは驚いて肩を跳ねさせた。

廊下を歩く気配にも気付かなかった事に焦りながら、返答を返す。

「誰？」

「……私。キーラ。」

エイジヤは手元にあつた枕をぎゅっと掴んだ。

「ちょっと話がしたくて……入れてくれないかな」

心臓がばくばくと音を立てる。しばらく逡巡した後、エイジヤは立ち上がり、扉を開けた。

睫毛を伏せていたキーラが、開いた扉に気付いて顔を上げる。

「……ありがとう」

はにかむように薄らと笑う。二年前には見た事のなかった、憂いを帯びた微笑みだった。

壁際に置かれていた小さなスツールに腰掛け、キーラはスカートの上で手の平を握り締めて床を見つめていた。

お互いに、何から話し始めれば良いのか分からないといった状況だった。

「……昨夜はごめんね。急に部屋に戻っちゃったりして。……この部屋、なんで分かったの？」

キーラと向き合う形で、ベッドに腰掛けたエイジヤが口火を切ると、キーラは顔を上げた。

「……この食堂で働いてるから、宿泊客の名簿は見れるの……」

「そっか」

また沈黙が続く。

「……あの」

言葉が重なり、二人とも口をつぐむ。

「なに？」

エイジヤが尋ね、キーラが話を繋げた。

「ほんとに……あの時はごめんね」

「すごく心配した」

エイジャの返答を聞き、キーラは下を向く。

「でも……元気そうで良かった」

エイジャの言葉に、キーラは顔を上げないまま、鼻を嚙った。

「私……どうしてもエイジャには言えなかったの……」

「なんで？俺は言っただけよ。一緒に借金を返す事だったのに、どうして」

「……借金のこと、誰かに聞いたの？」

下を向いたままのキーラの表情は見えないが、こんなしおらしい彼女を見るのは初めてで、エイジャは口調を和らげる。

「キーラに言いよってた男達がいただろ？あの人達にちょっと聞いた」

「……そう……」

しばらく黙ったあと、キーラが再び口を開く。

「最初から……あそこには、長くいれない事は分かってたの。王都に行けばいい仕事が見つかって、お金を返せるかと思っただけ……」

そんな簡単に大金なんて作れっこないもんね」

「そんなに大金だったの？俺だって一生懸命働いてたんだよ。頼ってくれたら良かったじゃないか」

頼りにされなかった事への不甲斐なさと、大事な事を話してくれなかったキーラを責める気持ちがないまぜになって、エイジャはつい口調を強めた。

「そんなに、俺は頼りなかった……？」

「違う、そうじゃないの……！」

キーラの声が震えた。

「違うの……私あの時、エイジャの事……、本当に好きになっちゃったの。だから、言えなかったの」

エイジャはぎしっと身体を強ばらせた。

あの頃、何度も何度もキーラに言われた言葉。エイジャが好き、彼女にして、いつも挨拶のように言われていたのに、なんだろう？

どうして今は、こんなに胸が痛むのか。

「エイジャが優しくしてくれる度に、辛かった。私、エイジャが冒険者として名を上げてるって知って、この人なら借金を助けてくれるんじゃないかって、そう思ったのよ。だから、近付いたの。そういう人間なの、私は」

何も言う事ができず、エイジャはただ嗚咽を漏らすキーラを見つめる。

「でも、エイジャは優しくして。男なんて、女の身体だけが目当てだっと思ってたのに、何もしないで、ただ、手を繋いでくれるだけで、そんな人、今までいなかった。どンドン……好きになっちゃって、借金の事なんて、知られるのもイヤだった。私がそれまでどんな事をして生きてきたかも知られなくなかった……！」

「キーラ」

「あのまま、会わない方が良かったよ……」

ガタンと大きな音を立てて、キーラの座っていたスツールが倒れる。立ち上がったキーラが扉を開けて出て行くのを、エイジャは慌てて追った。

「待つて、キーラ」

「やだっ、もう話したくない！」

部屋を走り出したキーラは、エイジャに腕を引かれて振り返った。

初めて見る泣き顔。

エイジャは思わずキーラを抱き締めた。ほとんど変わらない身長。

身体をよじって抵抗するキーラを拘束するように、腕に力をこめた。

「もう、やだ……。ほっというてよ、エイジャ……」

肩口で鳴き声を上げるキーラの髪を、なだめるように撫でる。

放ってなんておけない。あの頃、必死で依頼をこなす毎日を支えてくれたのは、紛れもなくキーラだった。

本当の事を言えなかったのは、自分の方なのに。

その時、廊下のむこうでガターン！と大きな音が鳴り響いた。  
驚いて顔を上げたエイジャとキーラは目を見合わせ、何事かとそちらに足を運ぶ。

そこでエイジャが目にしたのは、階段で足を踏み外したらしいルチアが、踊り場に倒れこんでいる姿だった。

(36) 最も嫌いなタイプの男

「……えっと、彼は今、一緒に旅をしてる、ルチア。

ルチア、彼女はキーラだよ。まあ、二人とも昨日、会ったと思うけど……」

エイジャの部屋で、ルチアとキーラはエイジャから紹介を受け、握手を交わす。

「初めまして……キーラです」

「ルチアです。昨夜はどうも」

お互いの手の平からピリピリと静電気が伝わってきたきそうなほど、部屋中に緊張感が漂っていた。

「お怪我……大丈夫ですか？」

キーラが尋ねる。

「ええ、大丈夫です。大した傷ではありません」

ルチアはこめかみをひきつらせながら微笑む。

宿に戻ってきたルチアは、階段を上る途中で、扉を乱暴に開ける音とエイジャの声を聞いた。

何事かと急いで階段を上ったところで発見したのは、キーラを抱きしめるエイジャの姿。

頭では分かっているにも認める事のできなかつた事実を目の前に突きつけられ、衝撃のあまり足を滑らせて五段下の踊り場に転落するという、ベルとフェルダが見たら一生ネタにされそうなあまりの失態も相まって、さすがにうまく笑顔を作る事ができない。

「本当に大丈夫？ 頭打ったんじゃない？」

ルチアの様子がいとも違う事に気付いたのか、エイジャが心配そうに瞳を覗き込みながら、手の平を伸ばしてくる。額を柔らかく撫でられ、ルチアは身体を強ばらせた。

「大丈夫だ。心配するな」

「そう?」

一瞬視線が絡み合って、勝手に頬の筋肉が緩んだ。それがエイジャを安心させたようで、ほっとしたような笑顔を見せる。その表情の愛くるしさに、ルチアの身体を支配していた緊張がふわりと解けた。「階段を踏み外して落ちるなんて、ルチアらしくないね」

「ちよつとな。足が滑った」

言葉を交わしながら、エイジャがベッドに腰を降ろす。ルチアが当然のようにその隣に座ったのを見て、スツールに座りかけたキーラの目つきが鋭くなった。

「ルチアさん、こっちにお座りになって下さい」

キーラは立ち上がり、スツールをルチアに勧めた。

「ああ、いや……キーラさんがどうぞ」

「いいえ、私はこっちでいいですから」  
そう言うと、キーラはエイジャを挟んでルチアの反対側に腰を降ろす。

ベッドに三人が並んで座っているというおかしな状況にルチアが負け、スツールに場所を移した。

(……昨夜も思っていたが、どうもベルを思い出す女だな……エイジャのやつ、やはりこういうのに弱いのか)

小さなスツールには余りすぎる足を組み、キーラを眺める。キーラの方もどこか挑戦的な視線を送ってくる。

エイジャだけが気が付かないまま、二人の間に静かな火花が散っているようだった。

「ルチア、眼鏡は?他の二人はどうしたの?」

エイジャが少し声を落とし、向かいに座るルチアに顔を寄せて聞いた。

「フェルダの知り合いの魔道具職人を訪ねたんだが、他の職人を探せと言われた。拳げ句、瞳について口止め料を請求されてな。フェ

ルダに俺は宿に帰ってると言われた。

エイジャ、クラウディオという男の名を聞いた事はあるか？そいつなら直せるらしいんだが」

ルチアの問いかけにエイジャはふるふると首を振る。

「フェルダも初めて聞く名前らしい。今ベルと二人で探しまわっているはずだ」

エイジャは軽く頷いてルチアから離れる。

キーラはその様子をじっと見つめていたが、おもむろに口を開いた。「ルチアさんも、エイジャと同じような冒険者？あんまり、そんなふうに見えませんか」

「そうですね？初めて言われました」

本当の事を言うつもりはないらしいルチアを、エイジャがちらりと見る。

「アストニエルを出てこんな所まで来るなんて、大変な依頼なんですよ」

「ああ……ここにはちょっとした用事で立ち寄っただけですから。用が済めばすぐに立ちますよ」

「……そうなんですか」

キーラが少し残念そうに眉を下げたのを見て、ルチアはつい険のある言い方をしてしまった事を後悔した。

(何を張り合ってるんだ、俺は……)

こんな、年若い女の子に対して。情けない。

「キーラさんは、ここの食堂で働いてらっしゃるんですか？粗暴な客も多いから、大変でしょう」

空気を変えようと、ルチアはキーラに話を振った。

「ええ、嫌な客もいますけど。でも、給金はいいので、そんな事言っただけです。早くお金を貯めて、出て行きたいし」

エイジャが目を見張る。

「キーラ、ここでお金を貯めて、アストニエルに戻るの？」

「うん……そうしたくて、頑張ってるんですけど……」

「そっか……」

エイジャの嬉しそうな微笑みが、ルチアの胸をざっくりと刺す。

「いつになるか、分かんないけどね。借金の分と、アストニエルに入る身分証明書も買わなきゃいけないし」

「身分証明書って、買えるんだ」

「偽造品だけどね。すごく高いの」

ルチアの眉が歪む。偽造証明書での入国は、本来は重罪だ。

それを知っているエイジャも、少し不安そうにルチアの方を見たが、ルチアが「分かっている」というように目配せしたのを確認してキラに視線を戻した。

「でも、いい仕事が見つかって良かったですね。この街では、女性があまっとうな職を得るのは簡単ではないでしょう」

ルチアが言うと、キラは頷く。

「このオーナーは、この街では顔役って感じなんです。ここ他にもいくつか店を持ってるとし、人脈も広いので」

キラの返事を聞いて、エイジャが手を叩いた。

「そうだ。キラ、俺達いま人を探してるんだけど。そのオーナーさんなら、もしかしたら知ってるんじゃないかな」

エイジャの言葉に、同じ事を考えていたルチアは同意するように軽く頷いた。

ルチアを宿に返したフェルダとベルは、魔道具職人のクラウディオを探して裏通りを歩いていった。

心当たりのある他の魔道具職人や、情報屋をいくつも訪ねたが、皆「今はどこにいったのか知らない」と首を振る。

「もう足取りもおぼつかなかったからなあ。どっかで野たれ死んだんじゃないか」と言う者もいた。

どうもクラウディオという男は相当の偏屈だったようで、ある日ふ



らりとこの街にやってきて店を構えたものの、他人との関わり合いを極端に避け、目深に被ったローブを人前で脱ぐ事は決してなかったらしい。

ローブから唯一覗かせる手の平は青白く筋張っていて、ぼそぼそと喋る声は力なく、その時点でかなりの年を重ねている事が伺えたという。

いつのまにか姿を見なくなってからすでに数年が経つというから、この街にはもういないと考えた方が良いのかもしれない。

魔道具職人達には眼鏡を見せてみたが、最初に訪ねた男と同じ反応が返ってくるばかりだった。

ただ、「こんなものは見た事がない、譲ってくれ」と金貨を積み上げた男がいたのを見て、魔力を持たないベルにも、この何の変哲もない古びた眼鏡に相当の価値があるのだと分かった。

「こんな眼鏡に、そんな価値があるなんてな。これって、エイジャのおじいさんの形見なんでしょ？」

ベルが手にした眼鏡をしげしげと眺める。

フェルダは、以前ルチアに聞いた話を思い返す。たしか、エイジャのおじいさんが「作った」と、エイジャがそう言っていたという話だったはず。

フェルダ自身、これまでに見てきた魔道具は、千年前の戦争よりも以前の古代魔法時代に作られたというものだった。その多くは王家に伝わる宝物として扱われていたり、闇市場に出回って法外な値段が付けられていたりで、決してそこの店で気軽に売られているような類いのものではない。

エイジャのおじいさんが作った、と聞いた時は、そうした魔道具を何かしらの方法で改造したものなのかと考えていた。

しかし、何人かの魔道具職人の反応を見てきた感じでは、これはそれよりもさらに不可解な代物。すなわち、「完全に新しく作り出された魔道具」。

そんな事が、果たしてできるものなのだろうか。

「お嬢さん達、こんな所で何してるんだい」

ふいに背後から声を掛けられて、フェルダとベルは振り返った。

長めの赤髪を後ろに流し、仕立ての良いスーツを着込んだ、壮年の男が立っていた。

日焼けした肌に映える、はっきりとした目鼻立ち。目尻の笑い皺が人なつこい印象を与える。首元と指に光る金の装身具が、羽振りの良さを示していた。

「何もしてないわよ、ほつといて」

あからさまに敵意を見せたベルに、男はにつこりと微笑む。

「まあまあ、そんな怖い顔しないでよ。美人が台無し。いきなりこんな怪しい奴に声掛けられて警戒するのは当然だけど」

牙を剥いて唸り出しそうな勢いのベルの肩に軽く手を置き、フェルダが半歩前に出る。

「なんの用かしら。まさか貴方みたいに女に不自由のなさそうな人が、ナンパじゃないでしょう？」

人差し指を唇に添え、優雅に微笑む。

男は白い歯を見せて笑った。

「美女にそんなふうに言われちゃ、いえナンパしました、なんて言えないなあ」

「あらやだ、美女だなんて、お上手」

あつはつは、うふふと笑い合う大人二人を見ながら、ベルがウンザリとした顔をする。

「ゴージャスな美女と、かわいらしい美少女が何やら危ない場所を歩いてるって聞いてね」

「まあ、どこからそんな情報が廻ったのかしら。不思議」

「人探しをしてるとか？」

ベルは、男が口元の笑みはそのままに、目の表情だけが微かに鋭さ

を増したのに気付く。

「ええ、ちよつと」

フェルダは完璧な微笑みを崩さない。

「クラウディオの事を聞きたいなら、俺の家に来るといい」

男の声のトーンが、ほんの少しだけ下がった。

フェルダは黙ったまま男を見つめる。

「歓迎しますよ」

男はもう一度、白い歯を見せて笑った。

(37) そういう態度、大好きですよ

「……すっごい豪邸……」

男の身長よりもはるかに高さのある鉄の門扉を開け、石畳のアプローチを歩きながら、ベルはきよるきよると首を回して辺りの景色に目を丸くしていた。

遠目に見える屋敷はまるで貴族のもの。いや、王都でもこれほどの豪邸に住んでいる貴族はなかなかいないだろう。

門扉の外からはただのうっそうとした森にしか見えなかったのが、個人の邸宅だったとは、何度もこの街を訪れているフェルダも知らなかった。

敷地の奥へと足を進めるほどに、周りの景色は美しく手入れされた庭へと様子を変えていく。街の喧騒もここまでは届かず、聞こえるのは小鳥のさえずりと、どこかに噴水でもあるのか、水の流れる小さな音だけ。

この街に来てから、砂と石と煉瓦、今にも崩れ落ちそうなボロ家ばかりを目にしてきたせい、心が洗われるような気持ちだった。ベルでもそうなのだから、美を愛するフェルダなら尚更だろう。

丁寧に刈り込まれた生け垣のむこうには、季節の花々が咲き揃っている。石畳を歩きながらふとその奥に目をやると、黒のワンピースに白いエプロンをつけた若いメイドが、掃除用具を抱えて歩いていた。

「旦那様、お帰りなさいませ」

こちらに気付いたメイドが男に声を掛ける。

「ただいま。不自由はないかい」

男が優しい声でそう返すと、メイドは微笑んで首を振る。

「ありがとうございます。皆さんによくして頂いています」

「そうか、何か困った事があつたら言いにおいで」

フェルダとベルは首を傾げた。使用人と主人の関係にしては何だか

妙な雰囲気だ。

ようやく館の玄関に辿り着く。間近で見るとますますその絢爛さに驚く。

白く塗られた屋敷の外壁は輝くばかりに磨き上げられ、梁や庇は意匠を凝らしたレリーフで飾られている。

男が重厚な扉を開くと、そこには先程のメイドと同じお仕着せを着た女性が立っていた。

「お帰りなさいませ、旦那様」

「ただいま。お客様をお連れしたから、お茶を入れてくれるかい。

君の入れたお茶は特別おいしいから」

「かしこまりました」

メイドが去って行く。その後ろを、違うメイドが花束を抱えて歩いている。

「お帰りなさいませ、旦那様」

「ただいま。きれいな花だね、どこに飾るんだい」

「旦那様のお部屋に。どうですか？」

「君の見立てはあいかかわらず素晴らしいね、ありがとう。それ、重くないかい」

「大丈夫です」

客間へ向かうまでの間だけで、10人近くのメイドとすれ違った。そしてその全てに男は声を掛け、必ず褒め言葉を入れる。

フェルダとベルは客間に通され、ソファに腰を下ろす。男はすぐに戻ると断って、部屋を出て行った。

上半身が沈み込みそうな程、弾力のあるソファに身体を埋め、フェルダとベルは呆れを通り越して感心さえしていた。

「女たらしもここまで来ると才能ね」

ベルがつぶやくと、フェルダが苦笑した。

「ほんと。聞いてて楽しくなってきたやう。ルチアも少し見習って

くれればいいのに」

「それにしてもすごい家ね……」

二人はあらためて周囲を見渡す。王宮の客間だと言われてもおおしくないほど贅を尽くした部屋だ。

ただ、実際の王宮の客間と違うのは、この部屋の趣向だった。

壁紙も絨毯もピンクを基調にした花柄。先程通ってきた庭を一望できる大きなアーチ窓には上部にステンドグラスがはめこまれている。部屋のおちこちに置かれた優美な曲線を描く猫足の家具にも、手の込んだ花の紋様が彫刻されている。貴族の婦人達の間で流行しているものだ。加えて、部屋中に飾られた薔薇の香りで室内はむせかえりそうな程だった。

「これほど全力で乙女趣味をまっとうしている部屋も珍しいわね。まさかあの男の好みだとは思えないんだけど」

フェルダがくすくすと笑う。

そこに男がメイドを従えて戻ってきた。手にはケーキの乗った盆を持っている。

「お待たせしました。彼女のお茶はおいしいですよ」

男は笑って向かい側のソファに腰を下ろす。

「自己紹介が遅くなりました。俺はロメオ。この街で、まあ、いくつかの店のオーナーをやっています」

握手を求められ、フェルダが応じる。

「フェルダですわ。こちらはベル」

「……よろしく」

目の前に置かれた、クリームがたっぷり乗ったケーキに目を奪われていたベルも、慌てて手を差し出した。

「この街にこんなお屋敷があったなんて存じませんでしたわ」

フェルダが言うと、ロメオはおかしそうに笑った。

「街の雰囲気とは随分違うでしょう。この街には、着いたばかりですか？」

「ええ、昨日来たばかりですわ」

「アストニエルから？それとも、シアル？」

「……アストニエルから。それがどうかしまして？」

「では、シアルに入る身分証明書はお持ちで？」

「ロメオの言葉に、フェルダが口元だけを動かして笑う。

「……それを聞いてどうされるんですか？ロメオさんには関係のない事でしょう」

「そうですね」

「ロメオは背もたれに身体を預け、胸の前で両手を組む。

「ただ、身分証明書をお持ちなら、すぐにこの街を出発した方がいい。今日、明日にでもね。」

「もしお持ちでないなら」

「フェルダとベルは黙って言葉の続きを待つ。

「ロメオはカップを口に運び、お茶を一口飲むと口を開く。

「この館でお暮らさない。彼女達のようにね」

「傍らに控えていたメイドを振り返りながら、そう告げた。

「何、それ！？私達に、あなたのメイドになれって言うの！？」

「ガタンと音を立てて立ち上がったベルが声を荒げた。

「ロメオは微笑みを絶やさず、ベルを見上げる。

「彼女達はメイドではありませんよ。ただ、この家の家事を手伝ってくれているだけです」

「それがメイドっていうもんでしょ！？同じお仕着せを着て、これがメイドじゃなければ何だっていうのよ！」

「まあまあ、ベルちゃん。落ち着いて、ちょっと話を聞きましょうよ」

「フェルダがベルの袖を引き、ベルはロメオを睨みつけたまま、鼻息荒くソファに座り直した。

「いいなあ、そういう態度、大好きですよ」

「ロメオはベルの不機嫌をまったく意に介していないように笑うと、

姿勢を正してフェルダに顔を向けた。

「この街に、女性がまったくいないのには気付いたでしょう」

「ええ、そうね。前から少なかったけど、ほとんど見なくなっただわ」

「この街には、人攫いがそこら中に潜んでいます。犠牲になるのは、主に女性」

ロメオの言葉に、フェルダとベルは目を見張った。

「彼等は言葉巧みに、あるいは力づくで、女性をどこかに連れて行ってしまふ。この街には、アストニエルのような王宮兵も、シアルのような大公軍もない。皆、自分で自分の身を守るしかないんです。」

彼女達がいつたどこへ連れ去られたのか、今はどうしているのか、誰も分からない」

ロメオは一言一言を噛み締めるように話して聞かせる。

「アストニエルからシアルへ、シアルからアストニエルへ、旅をする途中に立ち寄っただけなら、悪い事は言いません。できるだけ早く、この街を去る事だ。」

ただ、そうではなく、逃げてきたのなら。国を出ては来たもの、行く所がないのなら。

ここにいなさい。私の屋敷の中にいれば、安全です」

フェルダとベルが言葉を失っていると、ふいに部屋の外でガタガタと物音が聞こえた。

メイドの声と人の足音。男女の話し声が聞こえる。

「あら？この声」

フェルダが気付いて扉に顔を向けたのと同時に、ノックの音が部屋に響いた。

ロメオの横に付いていたメイドが扉を開けると、先程すれ違ったメイド達のうちの一人が立っていた。

「ご来客中に申し訳ありません。旦那様、キーラ様がお客様をお連れになりました」



「キーラが？」

ロメオが聞き返す。フェルダとベルは目を見合わせた。

「ロメオ、会わせたい人がいるんだけど」

部屋に入ってきた人物を目にして、ベルが立ち上がる。

「あんだ……！」

「！………なんであなたがここに！？」

ベルの姿を見たキーラも、顔つきを険しくして足を止めた。

「………なるほどね、さっそく連れてきたってわけ。いつもながら手の早いこと」

皮肉な笑みを浮かべ、キーラがつぶやくように言う。

「キーラ、お客さんが来てるなら、後で………」

「エイジャ！？」

キーラの後ろから顔を出したエイジャを見て、今度はベルが声を荒げた。

(38) 別れてなんかいないだから

乙女趣味全開の豪勢な客間は、さすがのフェルダでもこの部屋を脱出したいと思うほど、重苦しい空気に包まれていた。

フェルダとベルが座っていたソファには、端にエイジャが座っていた。ソファの横に置かれた一人掛けの椅子にルチア。だが、ロメオの座っているソファには横にまだ余裕があるというのに、キーラはそこには座らず、壁際に腕組みをして立っている。

「……申し訳ありません、急にお邪魔して。まさか、うちの連れもお邪魔しているとは」  
ルチアが口を開く。

「いやいや、彼女達を連れてきたのは私です。街で偶然会いましてね」

ロメオが白い歯を見せて笑った。

「キーラがお友達を連れてくるなんて、初めてですよ」

「お友達じゃないわよ」

キーラが不機嫌そうな声を出す。

つかつかとソファに近付いてきたかと思うと、エイジャの横に強引に割り込んで座った。

「この人、私のカレシなの。王都にいた時から付き合ってる、恋人よ」

しん、と場が静まり返った。嵐の前の静けさ……とフェルダは心の中ですひとごちる。

「……カレシ？……恋人？」

ぽかんと口を開いたまま硬直していたロメオが、言葉を発した。

「そうよ」

「ちよつと！いた時から、じゃないでしょ、いた時に、ちよつと付き合ってたってだけでしょ！？現在進行形みたいな言い方しないです！」

ベルが吠える。キーラはエイジャの腕に自分の腕を絡ませて、ベルを睨む。

「現在進行形よ！私達、別れてなんかないんだから！ねっ、エイジャ！」

「えっ、ええ？えつと、その……」

女性達に挟まれ、二人の剣幕にエイジャは泣きそうな顔をしてたじろいでいる。

「お前ら……ちよつと落ち着け。エイジャが困ってる」

ルチアの低い声が響く。

ベルとキーラは声のした方へ顔を向け、空気を凍らせんばかりのオーラを放つルチアを目にした。

眼鏡をかけていないルチアの一睨みは、二人を一瞬にして黙らせる迫力があつた。

二人が悔しそうに唇を噛み、視線を下に落としたのを見て、ルチアが口を開く。

「……お騒がせして、すいません。」

ルチアと申します。彼は、エイジャ」

ロメオははつと我に返ったように、差し出されたルチアの手を取る。

「こ……こちらこそ。ロメオです、よろしく」

「人を探してしまって。キーラさんが、ロメオさんならご存知かもしれないと言ってくれたので、こうしてお邪魔させて頂きました」

「人ですか」

「アタシ達もそれで来たのよ」

フェルダが言葉を繋げる。

「クラウドディオの事を聞きたいなら家に来いと、そう仰いましたわね」

「ええ……」

ロメオは両手で髪をかきあげ、まるで気持ちを切り替えるように頭を振ると、おもむろに話し始めた。

「クラウドディオは、この街で店を出していた魔道具職人です。変わり者の男でね。」

だが、俺にとっては古い馴染みで、恩があるんですよ。

彼はその腕の良さが災いして、いつも誰かに追われていた。それでこの街に流れ着いたんだが、ここにも追手がやってきてね。俺が、彼をこの街から逃がしたんだ」

「逃がしたって……じゃあ、もうこの街にはいないのね?」

フェルダが尋ねると、ロメオは頷いた。

「そういう事です。お力になれなくて、申し訳ない」

「どこへ逃がしたんです? シアル? アストニエル?」

「それは言えません。第一、俺にも分からないんですよ。今、彼がどこで何をしているのか」

フェルダは額に手を当て、眉間にしわを寄せた。

「眼鏡を直すのは無理、って事?」

「眼鏡?」

ベルがフェルダに尋ねたのを、ロメオが聞き留めた。

「眼鏡を直すために、クラウドディオを探しているんですか?」

フェルダはじつとロメオを見つめた後、頷く。

「ええ。そうです」

「よろしければ見せて頂けませんか? いや、わざわざクラウドディオ

を探してまで修理を頼みたいというような品、なかなか拝めるものではないですね。

「こう見えて、彼と付き合いが長かったのもあって、目は利くんですよ」

ベルは、まずい事を言ってしまったかと伺うようにフェルダの顔を見上げた。だがフェルダはベルに軽く目配せすると、眼鏡を取り出してテーブルに置いた。

ロメオは眼鏡を手に取り、まじまじと見つめた。

「……これが魔道具なんですか？」

拍子抜けしたようなロメオの言葉に、フェルダが笑みを返す。

「もつと宝飾品らしいものをご想像なさってました？」

「そうですね……俺が今までに見た事のあるものは、いかにも魔道具という感じでしたがねえ。こういうのもあるんですねえ」

あきらかに期待外れという顔をしたロメオに、エイジャが少し恥ずかしそうに俯いた。

本人の格好やこの家の様子からいって、ロメオがきらびやかで派手なものが好みである事は明らかだ。

ただの古びた眼鏡にしか見えない祖父の形見に、食指が動かないのは当然と思われた。

ロメオから眼鏡を受け取り懐に仕舞いながら、フェルダは腰を浮かせる。

「さて、それじゃあそろそろお暇やすみしましょうか」

「もうお帰りになられるんですか？」

ロメオが一緒に腰を上げる。

「ええ、クラウディオがこの街にいない事が分かった以上、ラグースに必要はありません。ご忠告通り、さっさと出発しますわ」

「そうですね。それが一番ですよ」  
ロメオが白い歯を見せて笑う。

キーラだけが立ち上がろうとせず、下を向いたままにいるのに気が付き、エイジャは浮かせかけた腰をソファに戻してキーラの顔を覗き込んだ。

「キーラ、どうしたの？」

「……もう行っちゃうのね」

「うん……ごめん。先を急ぐんだ……」

「お仕事だもんね。仕方ないよね」

目の前でいかにも恋人同士のようなやりとりを見せつけられ、ベルとルチアがやきもきしながらそれを見守る。

「キーラ、お忙しいんだから困らせちゃいけないよ」

ロメオがキーラに声を掛けると、キーラはキッとロメオを睨みつけた。

「ロメオには関係ないでしょ！ほっといて」

そう言つと音を立てて立ち上がり、部屋を走り出て行ってしまった。

「……どうも、まだまだ子供で。すいません」

ロメオが苦笑しつつ謝る。

「いえ、キーラがお世話になっているようで……ありがとうございます  
ます」

エイジャがロメオに礼を述べると、ロメオは困ったように笑った。

「いや、世話をしているといっても……キーラはこの家が嫌いだね  
俺の事も」

フェルダとベルは顔を見合わせた。

「キーラ……さんも、あなたがこの屋敷に連れて来たんじゃないん

ですか？」

フェルダが聞く。

「ええ、街の裏通りをフラフラ歩いているのを見かけて、危なっかしくてね」

「他の女性は皆、あなたに感謝しているようなのに」

そうベルが口にしたのを、エイジャとルチアが不思議そうに見る。

「他の女性？」

エイジャが尋ねると、フェルダが頷いて話を繋げる。

「ここで働いている女性達は、彼、ロメオさんが連れてきたらしいの。この街では人攫いが多発していて、何の頼りもない女性が暮らしていける状態じゃない。身分証明書を持っていて人にはすぐこの街を発つ事をすすめ、行く所がない人はこの館に住まわせる。そうですね？」

フェルダに話を振られたロメオは、頷いた。

「それで、フェルダさんとベルさんもこの館にお招きしたんです。でも、あなた方はきちんと身分証明書をお持ちだとか。すぐにこの街を発たれるという事ですから、心配ない。

それに、あなた方のように頼りになる男性達もいますしね」

ルチアとエイジャに顔を向けて笑みを作ったロメオに、ルチアが尋ねる。

「人攫い……というのはどういう奴らなんですか？」

「分かりません。どういう集団なのか、同じ組織なのかも……。分かっているのは、攫われるのはほとんど女性という事だけです」  
そう言うと、ロメオはつらそうに目を伏せた。

(38) 別れてなんかいないんだから(後書き)

活動報告を書きました。

リンクが貼れないのでブログでぶつぶつ。。。

<http://mypage.s-yosetu.com/mypageblog/view/userid/101553/blogkey/172520/>



(39) 女性は、難しい

ロメオが一瞬見せた苦い表情は、ルチアにそれ以上の詮索を躊躇させた。

「でも、素晴らしい事ですね。そんな輩から、私財を投じて女性を守っていらっしやるんですもの。この館の女性達が皆とても楽しそうなのは、拝見してすぐに分かりましたわ」

フェルダが話の矛先を変えると、ロメオは少し照れたように頭を掻く。

「それならいいんですがね……しかし、キーラには嫌われていますが」

「あの……キーラがこの家が嫌いって、どういう事ですか？

俺には、この街に来てからは、あなたに良くしてもらってるってずっと黙って話を聞いていたエイジャが口を開くと、ロメオは顔をあげて驚いたように目を瞬かせた。

「キーラがそう言ったんですか？」

「?……はい」

ロメオの反応を不思議に思いながら、エイジャは頷いた。

「そうですね、キーラが、そんな事を……」

ロメオは窓の外の景色に視線を移し、何か考えているように黙り込む。

その様子をただ見守っていたエイジャ達に、ロメオはおもむろに口を開いて話の続きを語り出した。

「……ほんの二年程前まで、この家はまったく今とは違う状態でし

てね。

大昔にこの街を出て行った富豪が残っていたまま、もう何十年も手つかずだったようで荒れ放題だったんです。

ある商売の報酬としてこの屋敷を譲り受けたものの、男一人で暮らすには一部屋が片付いていれば十分だと、特に修繕をせずにそのまま住んでいたんですよ」

そう言っただけを思い出すように目を細める。

「キーラと出会ったのは、二年近く前です。私の店でウェイトレスとして働いていてね。

女性が突然いなくなる事件が頻発していたので、彼女に部屋ならいくらでもあるから、好きな部屋を使えばいいと言いました。まるで幽霊屋敷みたいな館でしたから、最初は驚いてましたよ」

腕を組んだ格好で壁に体をもたれさせ、ロメオは懐かしそうに笑う。

「そのうち、キーラと同じような行く当てのない女性達に部屋を貸すようになりました。人が増え、幽霊屋敷が、少しずつ、人の住める場所になっていった。

キーラも、喜んでくれると思ったのですが、いつの頃からか……彼女は私の事も、この屋敷も、大嫌いになってしまったようです。

朝は早くに仕事に出て行って、夜遅くまで帰らない。帰ってこない日もあります」

「思春期の娘に避けられてるオヤジの泣き言ね、まるで」  
ベルがぼそっとつぶやいた悪態に、ロメオは怒る様子もなく苦笑する。

「まったくです。……彼女の考えている事が、ちつとも分からない。女性は、難しい」

およそロメオに似つかわしくない台詞のようだったが、寂しそうに歪んだ口元は、その言葉が決してキーラを揶揄する気持ちから出た

のではない事を示していた。

「どう思う？フェルダ」

沈み始めた夕日に照らされてオレンジ色に染まる庭園を、来た時と逆向きに歩きながらルチアが尋ねる。

「どう思うって、どれの事？人攫い？この屋敷？それともあの男？」  
「全部だ」

ルチアの答えにフェルダは苦笑いをこぼすと、少し顔を上げて生け垣の向こうに目をやる。

館にいたメイド達と同じお仕着せを着た女性が三人、なごやかに話しながら歩いているのが見える。こちらに気付いて頭を下げた彼女達に軽く会釈し、フェルダはぐるりと頭を回して、屋敷を眺める。

「女好きが高じて、街中の女性を館に集めてハーレムでも作ろうとしているのかと思ったら、どうもそんな感じでもないのよねえ。」

かといって慈善事業に私財を投じたって、この街じゃ得する事があるわけでもなし。動機がよく分からないわ」

「人攫いの話は本当だと思うか？」

「それに関しては、嘘は言っていないと思うわ」

「それに関しては……か」

ルチアは思案するように腕組みした右手を顎に添える。ふと、自分を見上げる視線に気付いて顔をそちらに向けた。

「どうした、エイジャ」

「ん、ううん……」

エイジャは慌てたように首を振った。

「ううんじゃないだろう。何か気になる事があるんじゃないのか」

「そういうわけじゃ……」

遠慮がちに口を閉じてしまったエイジャの腕を、ルチアが引く。

「ちよつと来い」

「え、なに」

「いいから」

うむを言わず、ルチアは石畳を外れた植え込みの影まで手を引いて行くと、少し腰をかがめ、エイジャの顔を覗き込んだ。

「さつき、宿に訪ねてきたキーラと話をしたんだろう。何かあったのか」

「何か、っていうか……。王都を離れる事にした理由を、ちよつと聞いた」

そう言うと、エイジャの頬がみるみるうちに赤く染まった。

一瞬、脳裏に抱き締め合うエイジャとキーラの姿がフラッシュバックし、意識が遠のきそうになるのを堪えて、ルチアは話を続けた。

「理由は借金だろうか？金貸しに追われてたんじゃないのか」

「それはそうなんだけど……。俺も一緒に借金を返す事もできたんだって言ったんだけど。あの……。何か、俺のこと、本当に好きになっちゃったから……。それで、離れたんだって、言ってた……」

ひどく恥ずかしそうに俯いてしまったエイジャの表情も、赤い耳も、ぎこちなく指を握り締める仕草も、今すぐ抱き締めたくなるほど愛しいのに。

エイジャにこんな顔をさせるのが自分ではないと思うとやりきれない。

ルチアは表情を隠すように手を額に当て、顔を横に向けた。行き場のない想いを無理矢理押し殺す。

（しっかりしろ。エイジャにとっての幸せを願うと誓ったはずだ）

「で……。あの女は王都に戻ってお前とやり直すために、今ロメオの店で働いて金を貯めてるってわけか」

やっとそう返したルチアに、エイジャはきよとんとした目をして顔を上げた。

思いがけないエイジャの反応を見て、ルチアも瞳を瞬かせる。

「……違うのか？」

「そ、か……。そういうふうにも取れるよね」

エイジャの言い方は、まるでそれに今初めて気付いたとでもいうように。

ルチアはよく分からなくなって、話を整理しようと口を開きかけたが、

「あの、ルチア。この街、もう明日発つのか？」

「ん？ああ……。さっきフェルダはそう言ってたな」

エイジャの質問にさえぎられ、慌てて返答する。

「俺、もう少しキーラと話したいんだけど……」

ルチアはこめかみを引きつらせそうになりながら、感情を表に出さないよう細心の注意を払う。

「……そうだな。さっきは俺が宿に戻ったせいで、お前達の話邪魔してしまったようだしな」

「え！？」

エイジャは焦ったような表情を見せる。

「また痴話ケンカにならないようにな。ほら、行ってこい。あまり遅くなるなよ」

屋敷のほうへエイジャの背中を押すと、心細そうにこちらを振り返りながら歩き出す。

エイジャを安心させるように笑顔を作り、ルチアは痛む胸をおさえてひらひらと手を振った。

屋敷に引き返したエイジャは、扉に付けられたドアノックを二度鳴らした。

すぐにメイドが出てきて、エイジャを室内へと入れてくれる。

「すみません。ちょっと、キーラに言い忘れた事があって……いま、話せますか？」

「そうですね、キーラ様にお取り次ぎしますね。少々お待ちください」

メイドはそう言うと、目の前の大階段を登っていく。

一人玄関ホールに残されたエイジャは、ふと今のメイドの言葉を反芻してみた。

キーラ様。

そう言えば、さっきロメオさんに会った時も、メイドさんはキーラの事、キーラ様って言った。

皆同じ立場なのに、なんでキーラだけ様付けなんだろう？

そう考え始めた時、階上でドアの閉まる音がけたたましく鳴り響いて、エイジャは階段を振り仰いだ。

「関係ないでしょうっ、ロメオには！もうほっつといてよっ！！」

キーラの声だ。

エイジャは階段を上がろうと、磨き込まれたマホガニーの手すりに手を掛けた。

「キーラ、まだ話は終わってな……」

「ロメオと話す事なんてないっ！」

ドストロスという荒い足音と共に、キーラが廊下の奥から姿を現した。階段を駆け下りてきた所で、エイジャにぶつかりかけて急停止する。

「……エイジャ！？」

「キーラ！？どうしたの」

キーラの表情を目にしたエイジャは、掛ける言葉を失った。

「なんでもないっ、エイジャ、行こ！」

キーラがエイジャの腕を取る。

自分を引っ張って走るキーラの後ろ姿に、2年前の日常を思い出し

ながら。

屋敷を出る直前、エイジャが振り返って目にしたのは、階段の上からこちらを見ているロメオの姿だった。

(40) 俺が約束を破った事がある？

ルチア達はすでに屋敷を後にしたらしい。

誰もいない夕暮れの庭を足早に駆け抜け、屋敷の鉄の門扉を出てからも、キーラはエイジャの腕を掴んだまま、黙って街を歩き続ける。何か声を掛けなければと思いつながら、エイジャは何も言えずに、ただキーラの後ろ姿を見つめながら、手を引かれるまま後に続いた。

街の表通りでは、夕食を求める人々が屋台の前に列を作り始めていた。

香辛料の香りと砂埃の匂いが混じり合い、鼻をツンと刺す。

肌の色も顔立ちも違う、様々な人種の人間でごった返す雑踏。耳慣れないイントネーションの言葉が飛び交う、夕暮れの屋台街。

その人混みの中を、腕を引いてぐんぐんと歩いていくキーラ。

見覚えのある光景が、懐かしくせつない記憶を呼び覚まし、エイジャの胸をぎゅっと締め付ける。

「キーラ」

声を掛けると、キーラはようやく足を止めて振り返った。

「懐かしいね。昔、よくこうやって市場歩いたよね」

先程見せた表情など、まるでなかったかのように、にっこりと笑う。

「……そうだね。ここは、王都に似てる」

エイジャが話を合わせると、キーラは強く握り締めていた手の力を緩めた。

拘束を解かれた腕をキーラの背中に回し、エイジャはキーラを周囲の人間から庇うようにして歩き始める。

「キーラはここで2年も、がんばって働いてきたんだね」

エイジャは独り言のようにつぶやいた。



一軒の屋台を見つけ、エイジャが足を止めた。

「キーラが好きなやつだ」

鶏肉と野菜を交互に串に刺して直火で色よく焼いた料理は、王都でも屋台街で人気のあるものだった。少し酸味のあるソースが特徴で、王都から遠く離れた西の街の名物なのだと、後に耳にした。もしかしたら、キーラの故郷の味なのかもしれない。

エイジャは屋台の主人に声を掛けて銅貨を支払い、串焼きを二本受け取って一本をキーラに渡す。

「……覚えてくれたんだ」

キーラが言くと、エイジャは笑みを返した。

「あたりまえでしょう。何本、一緒に食べたと思ってんの？」

エイジャの答えに、キーラは声を立てて笑った。

当時、屋台の主人にまでよく飽きないと言われるほど、頻繁に食べていたのだ。

二人は屋台街を少し外れた広場まで足を伸ばすと、もう水の出ていない古い噴水の縁に腰掛けて串焼きを頬張った。

慌たらしい人の流れを眺めながら、これといった会話もなく、ぼんやりと佇む。

まるで2年前にタイムスリップしたかのような、緩やかな時間。

「ロメオさんとケンカしたの？」

急にエイジャが話を振り、キーラは顔をこわばらせた。

エイジャの方に顔を向けず、人混みに視線を留めたまま、キーラは口を開く。

「いつものこと。ロメオだったら、うるさいの。あーだこーだ、保護者にでもなったつもりなのかしら。放っておいてくれればいいのに」

こちらを見ないキーラの横顔を、エイジヤは黙って見つめる。

「俺ね」

再びエイジヤが口を開いた。

「ずっとキーラがどうしてるか、心配だった。

昨日キーラに会って、元気そうなのを見て、安心もしたけど、実はちょっと悔しかったんだ。

俺がいなくても全然元気そうじゃないかって、あんなに心配したのに、キーラにとっては何でもなかったのかって」

「そんな……違うよ、エイジヤ」

慌てて反論したキーラに、エイジヤは軽く首を振り、ばつが悪そうな苦笑を返した。

「分かってる。キーラはこの2年間、この街で一生懸命生きてきたんでしょ？」

俺の中で、キーラは2年前に別れたキーラのまままで止まっていたんだ。でも、そんなわけないよね。キーラはキーラで頑張って生きて……。

それを支えてくれてたのが、ロメオさんなんだね  
キーラは黙り込んだ。

「……あんまり、家に帰ってないんだって？」

そう尋ねたエイジヤに、キーラは顔をしかめた。

「ロメオが言ったの？」

エイジヤが頷いて見せると、キーラは唇を噛んだ。

「あんな……ナンパ男。人攫いから女性を守るためだとか言って、女と見れば片っ端から声を掛けて家に連れてきて。屋敷を女ウケしそうな風にゴテゴテ飾り立てて。

夜になると、毎晩かわるがわる、誰かを部屋に呼びつけて。最低よ。」

大嫌い、ロメオもあの家も」

エイジャはキーラの発言に言葉を失った。  
まさか、あのメイド達が皆ロメオの愛人だというのだろうか。  
ロメオの語った話からは、安全を提供するかわりに身体を要求しているなどとは思えなかったが……。

「キーラ、それ本当なの？その、夜になると部屋に呼びつけてるって……。」

話をしているだけじゃない？ロメオさん、軽そうに見えるけど、そんな事をするような人には見えないんだけどな」

「それなら、何を話したのか教えてくれたっていいじゃない！

何をしてたのか、何を話したのか、誰に聞いても皆絶対に言わないのよ!？」

キーラが声を荒げる。

エイジャは少し考えた後、キーラの顔を覗き込むようにして問いかけた。

「ねえ、キーラ。それ、ロメオさんにも聞いてみた？」

キーラは勢いに水を掛けられたように口ごもった。

「……ロメオには聞いてない」

その返事を聞き、エイジャは少し表情を緩める。

「やっぱり。」

ちゃんとロメオさんに聞いてみなよ。ロメオさん、キーラがその事をそんなに気にしてるって、分かってないと思う。

ロメオさんはキーラの事、大切に想ってるよ。そのキーラが嫌がる事、するはずない」

「なんでエイジャにそんな事が分かるの？」

ふてくされたように言い返してくる。エイジャは少し瞳を伏せた後、顔を上げて視線を人混みに移した。

「キーラの側にいた男同士だから……かな？」

独り言のように告げられた言葉を耳にして、キーラは少し身を堅く

した。

「……エイジャも私の事、大切に想ってくれてた？」

キーラが不安そうに尋ねる。

「大切に想ってたよ。」

今も、キーラには幸せになってほしい

昔と同じ、穏やかな甘い声。

キーラはさっと頬を赤らめると、俯いた。

「……ロメオに、ちゃんと聞いてみる」

いつのまにかすっかり日は落ち、街灯の明かりがキーラの横顔を照らし出す。

「明日は早くに発つのか？」

キーラがぼつりとつぶやいた。

「うん……たぶん。先を急いでるし、この街には探してた魔道具職人の人はもういないみたいだから」

「そっか……。せっかく会えたのにな」

キーラは寂しそうに瞳を伏せる。

「キーラ、俺、帰ってくる時にまた必ずこの街に寄るよ。だから、またすぐに会えるよ」

「ほんと？絶対よ」

「うん、約束」

「じゃあ……、これ、持って行って」

キーラは着ていたブラウスの襟元に手を入れた。

チャリンと軽い音を立てて引っぱり出されたものを見て、エイジャが目を細める。

「……それ……持っててくれたんだ」

「うん」

それは、エイジャがキーラに送った碧玉のペンダントだった。

「これね、私ずうっと肌身離さず、身につけてたの。私にとって、

これはお守りだったんだ。

王都を出てからここに辿り着くまでも、このペンダントが守ってくれてるのを感じたの。エイジャが、守ってくれてるって思った。無事に出国して、この街に来てからも、すごく運に恵まれてきたわ。きつと、なにか特別な力があるって信じてるの。

だから無事にお仕事を終えて帰ってこれるように、持っていて？それで、帰ってきた時に、返してもらおうの「  
キーラの提案に、エイジャは顔を綻ばせる。

「ありがとう。すごく嬉しいけど、気持ちだけで十分だよ。それは、キーラにあげたものだよ。キーラに持ってほしい。」

これまでキーラを守ってくれてたんだったら、これからもキーラを守ってくれるよ。それを俺が持つて行っちゃったら、その間にキーラに何かあったらどうしようかって心配になっちゃうし」

「でも、エイジャの方が危険な目にあうでしょう？シアルに行くだなんて、何があるか分からないじゃない」

「大丈夫だよ。俺が約束を破った事がある？」

「そう言われて、キーラは口をつぐんだ。」

「……ないわ」

「でしょう？だから心配しないで」

立ち上がったエイジャの腕を、キーラが強く掴む。

「絶対絶対、無事に帰ってきてね、エイジャ。それで帰ってきたら、一番に会いに来て」

それは2年前、仕事に出掛けて行くエイジャに、キーラがいつも言っていた言葉。

「うん、分かった」

エイジャが微笑んで頷くと、キーラも精一杯の笑顔を見せた。

(41) 真夜中の訪問者

「エイジャ、遅かったじゃないっ！」

宿に帰り着いたエイジャを出迎えたのは、腰に手を当て怒りの表情をあらわにしたベルだった。

「あ……ごめん！夕食、待っててくれたの？」

「夕食はたしかにただだけど、そんな事はどうだっていいのっ。あのキーラって女と話してたんでしよう！？遅いじゃないっ！」

「ごめん、ちよっと街のほうに行つてたんだよ……屋台街を廻つて、それから噴水のところで話して、キーラを屋敷の前まで送つて……」  
ベルの勢いに気圧されてしどろもどろに説明し始めたエイジャだったが、それがかえつてベルの怒りに火をつけてしまったようだった。  
「何それ……！！私だってそんなのしたい！エイジャとデートしたい！あの女ばかりずるい！元カノのくせに！」

「うるさい。公衆の面前でギャングァン騒ぐな」

背後から現れたルチアに一喝され、ベルが不満そうに口をつぐむ。

「ちゃんと話はできたか？」

「……うん、ありがとう、ルチア」

ルチアはエイジャの表情が先程ロメオの屋敷で別れた時に比べ、随分と柔らかくなっているのに気付いた。

安堵と嫉妬の混じり合った複雑な想いを隠し、ルチアはエイジャに尋ねる。

「なんで俺に礼を言うんだ？」

「だって、ルチアが背中を押してくれなかったら俺、ちゃんとキーラに大事な事を言えずに別れてたと思うから」

(……うまくまとまつたって事か……)

ルチアは思わず心の中で肩を落とした。  
そうするように勧めたのは自分なのに、往生際の悪さに情けなさを  
覚えながら。

「キーラ、ちゃんとロメオさんと話してみろって」  
フェルダを加えた四人が揃って、宿の食堂でテーブルを囲む。  
エイジャの発言に、ルチアとベルはすぐに意味を把握できず、怪訝  
な表情を見せた。

「……ロメオさんと？話す？なんの話？」  
ベルが戸惑いながら聞き返すと、エイジャは少しテーブルの中央に  
顔を寄せ、声を抑えて説明した。

「ロメオさんが言ってただろ、キーラに嫌われてるって。  
そんなはずないと思ったんだ。キーラは、この街に来てからはオ  
ーナー……ロメオさんに良くしてもらってるって言ってたし。嫌い  
な人の事、そういうふうに言う子じゃないから。」

たぶん、あの二人、大事な事をちゃんと話し合ってなくて、行き  
違っちゃってるんじゃないかって」

「まあ、そんな所でしょうね」  
フェルダが相づちを打ったのを見て、ルチアはいぶかしげに顔をし  
かめながらテーブルに肘を付いた。

「それが気になって、もう少し話したいって言ったのか？」

「うん」

「エイジャったら、もう。ほんと、お人好しよねえ。元カノの人  
間関係なんて、ほっておけばいいのに」  
ベルが不満そうにこぼし、エイジャが苦笑を返す。

「しかし、お前にしちゃ読みが鋭かったな」  
ルチアが言つと、エイジャはぶうと頬を膨らませた。

「なんだよ、それー。失礼だな。俺、けっこう他人ひとの気持ちには敏感なんだよ?」

(……誰が他人ひとの気持ちに敏感だって……?)  
ルチアは心の中でつつこむ。ふと横を見ると、白けた目をしたベルと視線がぶつかった。

同じ事を考えているのがお互いに分かり、気まずさに顔を逸らせる。

エイジャがキーラに抱いているのは、単に昔なじみの女に対する淡い情なのだろうか。

元恋人が、雇い主とうまくいつていない事に気付けば、エイジャなら放っておけないのは当然だ。

仮に女のほうがエイジャに未練を残していても、エイジャの方は案外より返すつもりはないのかもしれない。

そう考えると少し気持ちが浮上したルチアだった。

「フェルダ、明日は朝のうちに出発するのか?」

「ん〜……そうねえ……」

ルチアの問いかけに、フェルダは意味ありげな表情を見せた。

「もう一日、この街にいるわ。アタシは明日出掛ける所があるけど、あなた達は自由行動でいいわよ」

「なんだ、何か調べる事があるのか?」

意外そうにルチアが尋ねると、フェルダは手にしたグラスを口元に運びながら薄らと微笑む。

「ちよつとね」

こういうふうに戻してくる時は、問いつめてものらりくらりと答えを交わされるのが常だ。

ルチアは早々に追求を諦めた。

「ねえ、エイジャ、それじゃ、明日は私に付き合ってくれませんか?市場を見て廻りたいんだけど、女一人だとちよつと心細いから……」



ベルが上目遣いで甘えた表情を作る。

「うん、いいよ。じゃ、朝食を食べた後、出掛ける？」

「うん！」

「ルチアは？一緒に行く？」

話を振ってきたエイジャに、ルチアは目を瞬かせた。

「あー……いや……」

ちらりとベルを見ると、鬼の形相でルチアを睨みつけている。

「……いや、俺は他にやる事があるから。お前達、二人で行ってこい。危ない場所には行くなよ」

「ふうん、分かった」

ベルに気を使う必要もないのだが、三人で出歩いてベルと火花を散らすのも疲れる。

（明日ぐらいはエイジャを独り占めさせてやるか）

キーラの登場に心を乱されているのが分かってしまうだけに、少々気の毒な思いもあった。

片付けておきたい仕事があったのも事実で、明日は一日部屋にこもって書類仕事に没頭する事を決めた。

誰もが寝静まった真夜中。

サラシを取り寝間着に着替えたエイジャは、ベッドに仰向けに横たわったまま、窓から見える月を見るともなしに眺めながら、物思いにふけていた。

昨夜キーラとの再会によって心が散り散りに乱れていたのが嘘のように、穏やかな気持ちだった。

2年前の突然の別れから、心の奥にずっと刺さっていた小さな棘が、じわりと溶けて消えたような不思議な感覚。

（私あの時、エイジャの事……、

本当に好きになっちゃったの。だから、言えなかったの)

キーラの言葉を思い出す。

好きだったから、本当の事を話せなくて、離れた。

未だ恋を知らないエイジャにとって、キーラその心情は自分の経験にはなかったものだったが、なんとなく気持ちが分かるような気がした。

だって、本当の事を話して、受け入れてもらえなかったら？

相手に対して想いが深ければ深いほど、その傷は大きくなるのではないだろうか。

そんなの、怖い。

きつと、キーラもそう思ったんだ。

俺がキーラにそう思わせてしまった。

キーラの求める愛情を返してあげられない後ろめたさを抱えていた事に、きつと彼女は気付いていたんだろう。

ふいに、部屋の扉を叩く音が聞こえた気がして、エイジャは体を起こした。

そら耳かと思うほど微かな音。

だが、耳を澄ませて待つと、もう二度同じように鳴らされて、誰かが意思を持って叩いたものと分かった。

エイジャは足音を忍ばせて扉に近付く。

「……………だれ？」

声を潜めて訪ねると、扉のむこうから抑えた声が返ってきた。

「ごめん、私……………。キーラ……………」

申し訳なさそうに俯いたまま、キーラは静かに部屋に足を踏み入れると、表情を見せないままベッドに腰掛けた。

エイジャはその横に座り、顔を覗き込む。

「どうしたの、こんな時間に……危ないじゃないか、一人で出歩いたりして」

キーラはますます顔を下に向けた。

「ごめんなさい」

軽卒な行動を嗜めたものの、こんな夜中に自分を訪ねてきたキーラに、よっぽどの事があったのだらうというのは容易に察しがついた。

「……ロメオさんと、何かあった？」

エイジャが尋ねると、キーラはさつと顔を上げた。

頬に幾筋も残る涙の跡を見て、エイジャは眉をひそめる。

「キーラ……泣いたの？」

「う……」

キーラがぼろぼろと涙の粒を落とす。

エイジャは思わず肩に手を伸ばそうとしたが、キーラの体はその手をすり抜けた。

ふいに目の前が暗くなり、バランスを崩してベッドに仰向けに倒れこむ。

いや、エイジャが倒れ込んだのではなかった。押し倒したのはキーラだった。

唇に押し当てられた柔らかな感触。

鼻と鼻の先が触れ合う距離まで彼女の顔が離れ、初めてそれがキーラの唇だと分かった。

(41) 真夜中の訪問者(後書き)

更新が遅くなりすいません！

にも関わらずNEWSWEIRランキングをクリックして下さる方々、

ありがとうございます。

おかげでがんばれます(泣)

エイジャは驚きのあまり言葉が出ず、ただ目を瞬かせてキーラの瞳を見つめ返す事しかできなかった。

また視界が暗くなる。抵抗する間もなくもう一度唇を重ねられて、今度ははつきりとキスされた事が分かった。

「キー……ラ……」

唇を離れたキーラに、エイジャはやつと言葉を絞り出す。

だがキーラは何も答えず、急くようにエイジャの寝間着のボタンを外し始めた。

「キーラッ……、待って……」

エイジャの制止もまるで耳に入っていないように、ボタンを上から二つ外すと、白い首筋に唇を滑らせる。

鎖骨の下にチリツと走った微かな痛みで頭が冴え、ようやくエイジャはキーラの腕を掴んだ。

「キーラ！だめだよ、こんなの……！」

キーラははつとしたように目を見開いた。

いくら恋を知らないとはいえ、エイジャにだって、キーラが何をしようとしていたのかぐらい分かる。

キーラはエイジャの事を男だと思っているのだから。

「なんで！？エイジャ、私の事、大事に想ってるって言うてくれたじゃない！だったらいいでしょ……減るもんじゃないんだからっ！」  
キーラはやけを起こしたように言い放った後、俯いた。

エイジャはゆつくりと体を起こした。

「どうしたのキーラ……何があつたの？」

キーラは顔を上げずに声を絞り出す。

「エイジャ、お願い……私を、一緒に連れて行って。もう、この街にいたくない」

「キーラ……」

エイジャは素早く寝間着の前を確かめる。キーラを部屋に招き入れる前に、サラシを巻いておいた事に安堵しながら、黙り込んでしまったキーラの手を取った。びくつとキーラの肩が跳ねる。

「キーラ……」

……ロメオさんが好きなんでしょう？」

キーラは顔を上げた。大きな目をさらに見開いてエイジャを見つめ返す。

「なんで……？」

「なんでって……分かるよ」

「なんでそんな事言うのっ、好きじゃない！あんな男……大嫌い！」

「本当に好きになってしまったら、側を離れるんでしょう？キーラは」

穏やかな声で告げられた言葉に、キーラは答えに詰まって口をつぐんだ。

「そう、キーラが言ったじゃないか」

「それは……エイジャの時の話だもん……」

「じゃあ、なんで大嫌いつて言いながら、泣くの」

そう言われてキーラは指を自分の頬に当てる。

新たに流れ出した涙が指を濡らした。

「キーラ、話して。何があったの？」

もう一度諭すように尋ねると、キーラの表情がぐにやりと歪んだ。

胸に飛び込んできた体を今度はちゃんと受け止めて、嗚咽がおさまるまでエイジャはキーラの背中を撫で続けた。

「ロメオに……聞いたの……」

毎晩、女の人を部屋に呼んで、何をしてるのって……」  
少し落ち着いたキーラが、ぽつりぽつりと話し始めた。

「そうしたら、私は知らなくていい事だって……」

私には言えないような事をしているんでしょうって聞いてみたら、  
子供には関係ないって……」ロメオがそう言ったの」

キーラの訴えに、エイジャは眉をひそめた。

ロメオの年齢は三十から四十そこらという所だろうか、確かに年齢  
差はあるが、キーラの事を子供扱いしてはぐらかすような物言いを  
する事はないと思っていた。

「ロメオは、変わったわ。最初はあんなじゃなかった。格好は派手  
だったけど、どこか自信なさげで、優しくて。私、よくロメオを怒  
ったの。もつとしつかりしなさいよって。一回り以上も年が離れた  
私の言う事、素直に聞く人だった」

涙で時折声を詰まらせながら、キーラは話を続けた。

「最初に会ったときもね……すごくオドオドした感じだった。食堂  
の仕事が終わって、その時に住んでた宿に帰ろうとして街を歩いて  
たら、声を掛けられたの。」

なんだか拳動不審だし、ナンパかと思って無視したのよ。

そしたら、店のオーナーだって言うから、驚いちゃって」

その様子を思い出したのか、キーラは小さく苦笑した。

「自分の家はバカみたいに広くて、持て余してるって。自分の店の  
従業員が安宿で危ない目に合っているのは放っておけないから、従  
業員寮だと思って住めばいいって言ってきたの。なにこの男、下心  
でもあるのかしらって疑ったけど、試しに少し手に触れてみたら、  
犬にでも噛まれたみたいに驚いて後ずさるもんだから、おかしくて」  
「ロメオさんが……？」

「そう、ロメオが。今のあの人からは想像もつかないでしょう？」

想像がつかないどころか、まるで別人だ。

「だから、絶対に変な事はしない、もししたらすぐに出て行くからって約束させて、付いて行ったの。」

あの屋敷、ボロボロだったのよ。まるで幽霊屋敷。人の住む場所じゃなかった」

キーラは懐かしそうに薄らと笑った。

「なんなのここは、こんなボロ家に女の子を住ませるつもりなのって、散々言っただけど、ロメオは申し訳ない、もう少しちゃんとするつもりだからって頭を掻いてた。」

……なんか、放っておけなくて。二人で少しずつ、家の修繕をしながら暮らし始めたの」

鬱蒼と茂った藪のような庭、ところどころ床が抜け落ちた廃墟のような屋敷が、自分達の手によって少しずつ蘇っていくのは、想像した以上に楽しかった。

自分の店の従業員だからといって、なぜ家に住ませようと思ったのか尋ねたキーラに、ロメオは少しだけ過去の話をしたという。

「……昔ね。大事な人を攫われた事があるんだって。だからもう、女の人が攫われるのを見たくないって、そう言ってた」

「そっか……、それで」

エイジヤは昼間にロメオが見せた辛そうな表情を思い出した。

「詳しくは言わなかったけど。きっと、恋人だったのよね。その人」  
キーラがくすんと小さく鼻を鳴らす。

「だから、屋敷の女の人達を毎晩呼んで、その人の代わりにしてるんだわ」

「……そうかなあ……俺には何だか信じられないんだけど」

「そうに決まってる。だいたい、ロメオが屋敷の女の人達に話すのを聞いたでしょう？ペラペラとうまい事ばかり言って、褒め倒して。あんな事、私には言った事がないのよ!？」



憤るキーラだったが、エイジャはそれを聞いて少し考え込んだ。

「ねえ、キーラ。明日は仕事？」

急に話題が変わり、キーラは目をぱちくりと瞬かせた。

「え？うん、朝から夕方まで、仕事だけど……」

「そっか」

「なんで……？」

キーラが不思議そうに尋ねる。

「俺、出発が延びたんだ。明日はまだこの街にいる事になったんだよ。」

だから、明日ちょっとロメオさんと話してみたいんだけど」

「ええっ、ロメオと！？何話すの！？」

「ん？まあ、それは明日になってから。夕方、キーラの仕事が終わったら迎えに来るから、一緒にロメオさんの屋敷に帰ろう」

「……キーラが気の毒だから、抱いてやってくれとか、言わないよね？」

「何言ってるの、そんな事言っわけないでしょ」

「……そうよね」

キーラは恥ずかしそうに下を向いた。

「じゃあ、今日は帰ろう。明日キーラ朝から仕事なんだったら、少しは寝ないと。」

俺、送っていくよ」

キーラはまだ何か言いたそうに躊躇していたが、立ち上がったエイジャに手を取られて腰を上げた。

エイジャとキーラはそつと宿を出て、ひっそりと静まり返った街を歩きだした。

かなり月の明るい夜ではあったが、それでもキーラの持ってきたランプがなければ足下がおぼつかない。

「こんな道を女の子一人で来るなんて、もう絶対ダメだからね」  
エイジャが注意すると、キーラは首をすくめた。

「もうしないわ、こんなこと」

そう言つと、エイジャの腕を取った。

「ああ、もう、絶対エイジャの方がいい男なのになあ、私、なんであんなオジサンが好きなのかしら」

「ロメオさんはいい人じゃないか」

エイジャが答えると、キーラは少し頬を膨らませた。

「エイジャにそんなふうに言われると、何だかイヤだわ。私、今でもエイジャの事も好きよ？じゃなきゃ、あんな事しないわ」

あんな事というのが先程の行為だと分かつて、エイジャは少し気恥ずかしくなつて頬を掻いた。

「キーラ、もうあんな事しちゃいけないよ」

「ごめん」

素直に謝つたキーラに、エイジャは苦笑する。

「2年前にも、キスしてくれなかったのにな。私、いつも待ってたのよ」

「……ごめん」

今度はエイジャが謝る。キーラはふふつ、と小さく笑つた。

「でも、エイジャに印、つけちゃった」

「しるし？」

「……」

キーラが自分の鎖骨の下あたりを指差す。

エイジャが不思議そうに自分の襟元を少し開き、示された場所を確認する。

そこにあつたのは、赤い鬱血痕。

「キスマーク、さつき付けたの」

キーラがいたずらっぽく笑う。

「キ……」

エイジャは顔を赤くして絶句した。

「これ、これがそうなの？」

冒険者仲間との酒場での他愛ない会話で耳にした事はあったが、実際に目にするのは初めてだった。

「どうやってこんな印つけたの!？」

「あれ、知らないの!? 分かんなかった？」

あー、なんか嬉しいなあ、エイジャに初めてキスマークを付けた女は私ってこと?」

「もう、キーラ……」

エイジャは苦笑を返す。それでも、いつものキーラの調子が戻ってきた事が嬉しかった。

(42) 印 (後書き)

いつも読みに来て下さる皆様、ありがとうございます。  
大変遅くなってすいませんでした……！

### (43) それ以上の存在

「エイジャ、送ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

見上げるほど高さのある鉄の門は、明るい空の下よりも一層存在感を増して見える。

キーラがスカートのポケットから取り出した鍵を差し込むと、重い解錠音が静まりかえった闇の中に響いた。

同時に、キーン、とわずかに空間を震わせる感覚に、エイジャは目を瞬かせた。

「キーラ、その鍵って……ロメオさんにもらったの？」

「……うん。一緒に暮らし始めてすぐに、渡されたの」

「ちよつと、見せてもらっていい？」

「? いいけど」

不思議そうに首をかしげながら、キーラはエイジャに鍵を手渡した。小さな鍵だが、凝ったレリーフが掘りこまれた年代物だ。

手の平に乗せて意識を集中させると、わずかに魔力を感じる。

「これ、魔道具だね」

「そうなの!? ただの古い鍵だと思ってた」

「この門に結界が張ってあるんだよ。侵入者が入れないように。この鍵でなら開くけど、無理にこじ開けようとすると痛い目を見ると思うよ」

「へえ……良かった、鍵もらって」

キーラは首をすくめる。

ロメオは伝説の魔道具職人クラウディオの古い友人だというから、彼にもらったものなのかもしれない。

こうやって、キーラや女性達を守っているのだろう。

「ロメオさんは本当にキーラ達の事を心配してるんだね」

「……そりゃ、あれだけ女を集めてれば、人攫いに奪われたくないんじゃないの」

無然としたキーラに、エイジャは鍵を返ししながら目を細めた。

「でも、その鍵を持つてるのはキーラだけじゃない？」

キーラは少し考え込んだ。

「……たぶん、そうかな。いつでも好きな時に出入りしていいって、でも、そのくせ危ないから夜は出歩くなってうるさいのよ。鍵を渡したのは、自分のくせに」

不満そうに口をとがらせる。エイジャはキーラの頭を柔らかく撫でた。

「キーラの事が心配だから口出しするんだと思うけどな」

「心配なんか……してないわよ。私なんて、いつも減らず口ばかりで、全然かわいくないし……」

視線を落としたキーラ表情は、普段よりもずっとあどけなく、頼りなく見えた。

「キーラはかわいいよ。自信もちなよ」

そう言うと、キーラは拗ねたような視線を向けた。

「……エイジャに言われると、嬉しいような嬉しくないような、複雑な気分」

「なんで？」

「エイジャの方がずっとずっときれいでかわいいんだもの！もう、男のくせにずるい！2年前よりもなんか……さらにきれいになっただけじゃない！？なんか、妙な色気まで出てきてるし！」

ドンドンとエイジャの胸を叩いて抗議するキーラに、どう返せば良いのか分からずに戸惑っていると、キーラはぐいっと顔を寄せて声を潜めた。

「昼間に会ったあのハンサム、あの男には注意したほうがいいわよ？ エイジャ」

「昼間に……？ ルチアのこと？」

「そう、ルチア。なんだかエイジャを見る目がおかしかったもの。

ただの旅の連れだとは思ってないわよ。それ以上の存在って感じ……そうなの？」

エイジャの声が嬉しそうに弾んだのを、キーラは聞き逃さなかった。「なに、その嬉しそうな声」

「いや、だってルチアは大事な仲間だから……。ルチアも同じように思ってくれてたら、嬉しいな、と思って……。俺は、いつも迷惑かけてばかりだけど。」

キーラは呆れたようにため息をついた。

「……あいかかわらずねえ、その鈍感ぶり……」

「え？ 今、なんて？」

「うっん、なんでもない。じゃあ、明日ね。夕方、食堂まで迎えに来てくれるんでしょう？」

「うん。それに、朝食は食堂で食べるから、その時にも会えるよ」「分かった。じゃ、また明日ね、エイジャ」

キーラが門の中へ入るのを確認し、エイジャは踵を返した。

まだ夜明けは遠い。

王都やザクセア、モーブルなどと違って、この街には街灯もほとんど設置されていない。

キーラがランタンを貸してくれようとしたのを断ってきたため、たまに点在する酒場の窓から漏れる灯りだけが、かろうじてエイジャの視界の助けになった。

冒険者稼業をしている以上、ある程度の夜目はきく。あたりに気を配りながら、宿へと足を早める。

一人になってみると、今日の出来事はずいぶん危険だったと改めて思う。

キーラが訪ねてきた時、あわてて胸にサラシを巻いておいたから良かったものの、もしそれを忘れていたら、キーラに自分が女だという事を悟られていたかもしれない。

同じ女でもキーラに比べれば腕力はあるはずだが、突然の出来事に頭が真っ白になり、すぐには抵抗できなかった。

襟元に指を伸ばす。キーラが「印をつけた」と言った場所。

（あの時、もし俺が本当の男だったら……どうしていたかな）

そんな事は、ありえないのだけど。でも、もし本当に男だったら……これまでに何度も心の中で繰り返した自問。

なぜ、俺は男じゃないんだろう。なぜ女に産まれてしまったのか……この問いを思い出すと、自分の存在を今すぐに消してしまいたい衝動に駆られる。

俺が男だったら、2年前にキーラを幸せにしてあげられた。

そもそも、男に産まれていれば、父さんも母さんも、皆……死なずに済んだ。



全身が震えるのを止められなくなり、エイジャは歩みを止めた。

呼吸が苦しい。両手で自らを抱くようにして、ゆっくりと息を吸う。何度か息を吸って吐き、頭の中からこの考えを押しやろうと試みた。

俺は生きていていいの？

みんなみんな、俺のせいなのに。

苦しいよ……

『いつか、話してくれば。力になる』

ふいに、いつかルチアが言ってくれた言葉が耳に蘇った。

あれから、何度もルチアには助けられて。いつも、呆れたり怒ったりしながらも、ルチアはこんな頼りない自分を支えてくれた。

必要以上に親しい人間を作らない事にしたのは、2年前のキーラとの別れも原因の一つだった。

自分を偽り、過去に蟠りを残して生きている以上、一時心を許しても、いつかは辛い別れが訪れる。

でも、この街でキーラと再会して。

あの時、キーラと親しくしなければ良かったとは、もう思っていない。

2年前には自分もキーラも深く傷ついたけれど、今はその過去があるからこそお互いに成長して再会できたのだとはつきり分かる。

（キーラは、ルチアが俺の事、ただの旅の連れだとは思ってないって言ってた……）

それは、素直に嬉しいと思う。でも、なぜか同時にいいようのない不安を掻き立てられた。

ルチアの優しさに甘えちゃいけない。いつかは離ればなれになる人だ。

この旅を無事に終え、ルチアは王宮へ、エイジャは冒険者へと戻る。その日の事を思うと、どうしてか胸が張り裂けそうな程に心を乱される。

（キーラとの別れと、同じだと思えばいいんだ。幸せにしてくれていたら、それでいいんだから）

自らに言い聞かせるように、何度もそう心の中で繰り返した。

はあっ、と一つ大きく息を吐き出し、エイジャは顔を上げた。

この得体の知れない不安感は、いつもの事。

そして、ぐるぐると思考の迷宮に入り込んでしまっていると、ルチアが声を掛けてくれるのが常で。

それだけで、気持ちがあすつと楽になるんだ。

朝になったら、ルチアに会おう。

今日の出来事は……とても話せないけれど。

ルチアの柔らかい笑顔を思い出し、エイジャはうん、と一人頷いた。少し元気になって、小走りで帰り道を急ぐ。

暗がりの中、宿の前に一つだけ設置された灯りが見えてきた。

その灯りの下、腕組みをして立つ人影に気付いて、エイジャは歩みを緩めた。

まだ顔は見えない距離でも、すらりと伸びたシルエットでそれが誰かはすぐに分かる。

「……ルチア」

宿の壁にもたれ、ルチアがエイジャに険しい表情を向けた。

(43) それ以上の存在(後書き)

本当に遅くなってすみません!!

なんとか7月中に更新できました……せえせえ。

次話はわりと早めに更新できる……予定です(汗)

いつも読んで下さる皆様、ありがとうございます!

(44) 境

「遅かったな」

腕組みをしたまま、ルチアが冷えた声を掛ける。

「ご……めん、ルチア、待っててくれたの？……あの、起こしちゃった……よね？」

おずおずと尋ねるエイジャに、ルチアは表情を変えずに答える。

「お前が謝る事はない。あの女が廊下を通った時点で気付いていた。扉の向こうの気配には敏感なんでな」

「そつ、か……ごめん……」

キーラを責めた言葉に、エイジャは謝罪を返す。

ルチアは唇を噛んだ。

「あの、えつと……声とか、聞こえてた？」

顔を俯いたまま、上目遣いでルチアの表情を伺うエイジャに、苛立ちさえ募った。

「……なんの声だ？何も聞こえてこなかったが。」

聞かれちゃまずい事でもあったのか？

「う、ううん！何も、そんな、まずい事とか、そんなのは……」

勢いよく首を横に振るエイジャだったが、顔は真っ赤だ。この反応を見て、何もなかったとは到底思えない。

いつもと雰囲気が違うのは、見慣れない服装のせいもある。

コートはいつも外出時に着ているものだが、中に着ている襟付きのシャツは寝間着のようだ。その襟元を片手で強く握り締めているのが気になっていた。

「首をどうかしたのか？見せてみる」

ルチアが手を伸ばすと、エイジャはさらに焦ったような表情を見せた。

「えっ！？何も、どうにもしてないよ!？」

襟元を握り締めた手にますます力を入れて後ずさる。

「何もないなら何故逃げるんだ」

「逃げてないよ!？別に、俺、その……」

エイジャは必死だった。ああ、俺なんでちゃんと着替えてこなかったんだ。

ルチアの目が怖い。エイジャが一步後に引くと、ルチアが一步前に出る。

気が付くと、宿の壁を背にして完全に追いつめられていた。

もう逃げ場がない。

襟元を握り締めていた手を取られ、エイジャは観念したように身を堅くして俯いた。

ルチアは左手にエイジャの手首を掴んだまま、右手で少し襟を開く。襟元から覗く白い首筋に異常は見られない。

だが必死で襟元を隠していたエイジャの態度がどうしても気にかかり、一番上のボタンに人差し指を添えた。

エイジャがきゅっと目を瞑ったのに気付かないふりをして、指先に力を込める。

現れた鎖骨の下には、白い肌に赤い鬱血痕が鮮やかに浮かび上がっていた。

「……虫にでも刺されたか？」

低い声で尋ねられ、エイジャは思わず背けていた顔をルチアに向けた。

「そ、うかも……大きな虫が、部屋にいたから……」

「悪い虫だな。こんなに痕を残して」

「うん……少し毒があったのかも……でも、きつと、明日には引くよ。痛いとか、かゆいとか、そういうのはいないんだ、だから……」  
エイジャはしどろもどろになりながら、必死で弁明した。

なぜだろうか、ルチアには先程の部屋での行為をどうしても知られなくなかった。

行為といっても未遂以前で、一方的にキーラに迫られただけなのだが、それでもルチアにだけは。

エイジャはルチアの表情を伺った。ルチアはエイジャの襟元に視線を固定したまま、目を合わせようとしない。瞳は冷たかった。

いつもなら。怒られても、機嫌が悪そうでも、目が合えば優しく微笑んでくれるのに。

ふいに、ルチアの親指が鬱血痕を撫でる。

その瞬間、ぞくりと背中を走る痺れに、エイジャは身体を震わせた。

「……っ」

思わず漏れた小さなためいきに気付き、ルチアが視線を上げる。

……やっと目が合った……

それでも、ルチアの表情にいつもの柔らかな笑顔は訪れなかった。

それどころか、ひどく不機嫌そうに眉をゆがめていた。

それが悲しくて、ざわざわと胸の奥から沸き起こってくる切なさに飲まれそうになる。

瞼に熱が集まるのを感じ、エイジャは必死で目に力をこめて、涙がこぼれそうになるのを我慢する。

「……そんな、顔を……するな」

苛立ったように、ルチアが声を絞り出した。

「……」

何か言わなくてはと口を開いたが、かすれた喉からは音が出ない。どうすればいいのか分からず、ルチアの瞳を見つめ返すと、掴まれたままだった手首に力が込められる。

その鈍い痛みについて瞬きをすると、大粒の涙が一つ二つ、ぽろぽろと頬を滑り落ちた。

いきなり腕を思い切り引かれ、エイジャはバランスを崩して前につんのめった。

ルチアがエイジャの腕を掴んだまま大股で歩き出し、乱暴に宿の玄関扉を開く。

エイジャは転びそうになりながらも必死でルチアの後に続いた。

ルチアがこんなふうには強引に腕を引く事など初めてだ。

すっかり怒らせてしまったらしい。なかば引きずられるようにして階段を上る。

ルチアは自分の部屋の前で足を止め、エイジャの手首を掴んだまま、自由な方の手でガチャガチャと鍵を開けて扉を開いた。

部屋の中に引き込まれた拍子に、ルチアの胸元に鼻をぶつけ、エイジャは思わず「痛っ」と声を漏らす。

ルチアは部屋に一步入ったところで足を止めた。エイジャが顔を上げると、すぐ頭上から見下ろしてくるルチアと視線がぶつかった。

窓から入る月明かりが頬に長い睫毛の影を落とし、深紅の瞳に反射して光を返す。

普段はその柔らかい微笑みが安らぎを与えてくれるのに、寸分の狂いもなく整った顔立ちは今、今はひどく冷たく遠いものに思えた。

ただ、瞳の赤い色だけが、まるで怒りを湛えているかのように燃えていて。

薄い唇を引き結び、形の良い眉を険しく寄せて、ルチアは黙ってエ

イジヤを見つめていた。

「……ル……チア？」

ようやく声が出て、おそろおそろ名前を呼ぶ。  
掴まれていた手首がぐっと強く締められたが、痛みを感じる余裕はなかった。

捕食される寸前の動物はこんな気分なのかもしれない。  
圧倒的な存在を目の前にして、どんな抵抗も意味がなくて、ただその獰猛な美しさに魅入るだけ。

心臓の音だけが、静まり返った部屋の中に響き渡るほどに強くて。

沈黙はほんの数秒のようにも、永遠のようにも思えた。

ルチアは一層表情を険しくして顔を背ける。

ほんの少し手首を引かれた気がしたのは錯覚だったのだろうか。ルチアはずっと掴んだままだったエイジヤの手を離れた。

一瞬、躊躇するように宙を掻いた後、エイジヤの肩を開いたままの扉の方へ軽く押しやった。

「早く……寝ろ。明日はベルと約束があるんだろう……」

苦しげに呟かれた言葉に、エイジヤは答えられなかった。

その場を去る事もできずに、立ち尽くす。

頭の中がぐちゃぐちゃで何も考えられない。何も言えない。

「ルチア……あの……」

うまく息もできないような緊張の中、やっとそれだけを口に出したが、ルチアはこちらを見る事なく、完全に背中を向けた。

「部屋に戻れ」



だめだ。

エイジャはすぐに部屋を出た。

自分の部屋の鍵を開け、中に入るとベッドに倒れ込んだ。シーツに顔を押しつけ、こみ上げて来る嗚咽を押し殺す。

突き放された。

ルチアに嫌われた。あんなに……こちらも見えてくれないくらい……。どうしてかは分からないけれど、ルチアの嫌がる事を自分がしてしまったのだという事は分かる。

息苦しくなって胸をおさえる。

父さん、助けて。どうしよう、俺、苦しいよ。

ルチアの名を呼べない以上、父の幻影にすぎるしかなかった。疲れていつのまにか眠りにつくまで、エイジャは声を殺して泣き続けた。

(44) 境 (後書き)

なんとか滑り込みで7月中に2回更新できました(汗)

いつもお待ち頂いている皆様、ランキンググクリックで応援して下さい。皆様、ありがとうございます。何よりの励みになります。

ご感想を頂けると狂喜乱舞します。よろしければ是非・・・

、  
(

(45) 朝帰りってなに？

ずいぶん遅れて朝食の席についたエイジャは、向かいの空席を目にしてきよるきよると食堂を見回した。

「ルチアは後で食べるんですって。何か、急ぎの仕事を思い出したとか言ってたわ。昨夜は寝てないみたい」

すでに食事を終えていたフェルダが言う。

「……そうですか」

少しほつとする。でもそれはつまり、エイジャを避ける行為である事は明らかだ。

やっぱり、怒ってるんだ。

ううん……ただ怒ってるとかそういうレベルじゃなく……本当に、嫌われたのかもしれない。

ルチアはしょっちゅうベルと口喧嘩のようなやり取りをしているけれど、それを翌日まで持ち越すなんて事はない。ベルの方が怒りをおさめていなくても、ルチアのほうは気にせず飄々としているのが常だ。

じわりと瞼が熱くなり、エイジャは瞬きで涙をやり過ごした。

(昨夜は寝てないって……あの後、俺が部屋に戻ってからも、ルチアは起きてたんだ……)

いつ眠りについたのかは覚えていない。

寝不足ではあったが、いつもの習慣で目が覚め、顔を洗おうとして鏡に写った自分の顔に驚いた。

枕に顔を押し付けて泣きながら眠ったせいで、すっかり瞼が腫れ上がっていた。

「ヒロア・イスラル」

洗顔用に用意された水を手に取り詠唱する。水滴は小さな氷粒へと

形を変えた。瞼に当て、腫れが引くのを待つ。

こんな顔を見せたら皆心配するから、と自分自身に言い訳をしながら、その実、食堂へ行つてルチアと顔を合わせるのが怖くて、なかなか部屋を出る事ができなかったのだ。

「エイジャ、今日はなんだか瞼が腫れてるみたいよ」

ベルが顔を覗き込んでくる。エイジャはベルの視線から逃れるように、瞼に指を添えて少し俯いた。

「……そう？変な寝方をしたのかも」

フェルダが一瞬顔を上げてこちらを見たが、すぐに何もなかったように読んでいた本に視線を戻した。

どうやら昨夜の事には気付いてないような二人の素振りに、エイジャは胸を撫で下ろした。

ルチアとの仲が険悪になってしまっても、この旅は途中で投げ出せるものではない。フェルダとベルに余計な心配を掛けるのは嫌だった。

改めて、昨夜の事を思い出す。

ルチアはなぜあんなに怒ったんだろう。

俺が宿を抜け出した事に気付いて、ああして外ですっと待っていてくれた……

機嫌は悪そうだったけど、最初はまだ、いつものルチアだった。

でも……そうだ。

首元のキスマークを見られた時からだ。

纏う雰囲気ガラリと変わった。

表情は冷たく、瞳は激しい怒りをたたえて……

とても怖くて、でもどうしても視線をそらせなかった。

月明かりを受けて輝く眼差しを思い出し、エイジャは身震いした。

なんだろう。

心臓のあたりがざわざわと気持ち悪かった。

ルチアが怒った原因をちゃんと考えて謝ろう。  
ずっとこのままなんて……嫌だ。

「はい、おまちどう」

目の前に朝食の皿を置かれ、考えに没頭していたエイジャははっとして顔を上げた。

腰にエプロンを巻いた男が、忙しそうに次のテーブルへ向かって行く後ろ姿が目に入る。

「……あれ、キーラは？」

ベルが怪訝そうな顔を向けた。

「キーラ？あの女なら今朝はいないわよ。私達の給仕も、あの人がやってた」

「彼、ウエイターじゃないわよね。厨房の料理人でしょう。すっごく忙しそう」

「……どうしたんだろ、今朝はキーラが入ってるはずなのに」  
エイジャが言うと、ベルとフェルダは顔を見合わせ、さあ、というように首を傾げた。

嫌な胸騒ぎがする。

エイジャは立ち上がって、男の元へ駆け寄った。

「すみません、あの、今朝はキーラは……？」

男はエイジャを一瞥すると、厨房へ向かう足を止めずに答える。

「なんだい、あんたキーラの知り合い？」

「はい、今朝は彼女が入ってるって聞いてたんですけど」

「そうなんだよ！なのに来ないんだよ！おかげで俺が厨房とウエイター両方やってんだよ！まいったよもう！」

ガンガンガン、と乱暴に鍋を振る音が厨房に響く。

「こんな事今までなかったんだがなあ、あの子。あ、その瓶取ってくれ」

顎で指し示された瓶を慌てて手に取り、男に手渡しながら尋ねる。

「俺、家に行って見てきましようか」

「ああ、そうしてくれると助かるなあ。病気でもしてんならそう伝言してくれりや助かるのに！とりあえずもう少ししたら他のウエイターの子が来るから、まあ今日はもういいよ。ゆっくり休んで治してくれって言うといってくれ！」

エイジャは急いでテーブルに戻った。

「ベル、ごめん……今日の予定なんだけど、先にちょっと、ロメオさんのお屋敷に行ってもいい？」

「ロメオの？……なんで？」

エイジャの提案に、ベルは訝し気に顔をしかめた。

「今日、キーラが無断欠勤してるみたいなんだ。お店の人の話だとこんな事今までなかったって……ちょっと気になって」

「ええっ！？なに、それっ！あの女の様子見にわざわざ行くっていつのっ！？」

ベルが立ち上がり、信じられないといったように目をむいて憤慨する。

キーラの事をベルが良く思っていない事は分かっていたし、こういう反応が返って来るのは予想していた。

「ほんとに、ごめん……ちょっと様子を見るだけだから。お店の人も、体の調子でも悪いなら、今日はゆっくり休んでいって言うってだから、それを伝えたいんだ」

「もおっ、エイジャのおひとよし」

ベルはおもしろくなさそうに口をとがらせたが、諦めたようにためいきをついた。

「分かった、ちょっと寄って様子見るだけね！？」

いかにも嫌々といった様子で承諾する。すると、フェルダが手にし

ていた本をパタンと閉じた。

「あら、じゃあアタシも一緒に行くわ」

「フェルダさんもあの女に用事でもあるの？」

ベルの問いかけにフェルダは含みのある笑みを返す。

「アタシはロメオさんの方。ちょっと聞きたい事があって、これから行くつもりだったのよ」

「ロメオに？何を？」

「な・い・しよ」

口元に人差し指を当てて微笑む。こういう時のフェルダはルチアが問いつめてもはつきり答えなくらいだから、ベルやエイジャが何を聞いても無駄だ。

昨夜の事を考えると身動きが取れなくなりそうだった。エイジャは今キーラの所在を確かめる事が先決と、無理矢理に頭を切り替えた。

鉄の門は昼間は施錠されておらず、フェルダが扉を軽く押すと、ギイと音を立てて内側へ開いた。

門の外側から見れば、手入れのされていない木々が好き放題に伸びきった、昼尚暗い主無しの庭。しばらく歩みを進めると、少しずつ視界が開けていく。

屋敷の玄関に辿り着きドアノックを鳴らすと、すぐに扉が開いた。

「あら……あなたは」

出てきたメイドは昨日お茶を入れてくれた女性だったが、エイジャの顔を目にして気まずそうな表情を浮かべた。

「？ あ……朝早くからすいません。キーラは……？」

「えっ……？奥様は、あなたとご一緒なのでは……？」

メイドの返答にエイジャはきょとんとして目を瞬かせた。

「奥様？」

その時、メイドの後ろからロメオが顔を出した。

「誰かと思えば……朝帰りの詫びにでも付いてこられましたか」

昨日の穏やかな物腰とはまるで雰囲気が違う。

不機嫌さを隠そうともせず告げられた言葉に、エイジャは事の次第がまるで分からず困惑の表情を浮かべた。

「どうということ？朝帰りってなに？」

横に立つベルの目がつり上がっていく。

「キーラが昨夜あなたを訪ねたでしょう。こんなに日が高く昇ってから、一人で家に帰するのはさすがに気が咎めましたか」

ロメオは憎々し気に言い放った。



(45) 朝帰りってなに？ (後書き)

またもやギリギリ、8月中旬に更新できました……  
ちよっと中途半端な所で切ってしまってますいません。

次話、できるだけ早く更新できるよう頑張ります。

(46) クラウディオ

「ちょ、ちょっと待ってください。たしかにキーラは、昨夜俺の宿を訪ねてきました。ロメオさんと喧嘩したって言って……」

エイジャは慌てて弁明する。

「でも、俺はキーラと話をして、夜のうちにこちらに帰したんです。ここまで送り届けて、キーラが門扉の鍵を開けて中に入るのを確認しました」

「……なんだって？」

ロメオが忌々し気に眇めていた目を見開く。

「しかし……キーラは昨夜は帰ってきてない。この家の扉を開けて入ってくれば、絶対に気が付くはずだ」

「……俺も、キーラが今日は朝から食堂の仕事だと言っていたのに、無断で休んだというから、気になって……それで、様子を見に来たんです」

「あの、旦那様！」

二人のやり取りを遠巻きに見ていたメイド達の中から、一人が前に進み出た。

「すみません、あの……私、今朝早くに市場に出た時に、これを拾ったんです。」

見覚えのあるものでしたから、これは奥様のものではないかと思っ

そう言って差し出して見せたのは紛れもなく、かつてエイジャがキーラにプレゼントしたあのペンダントだった。

「！……これは……！」

ロメオも見覚えがあるのか、ペンダントを奪うように受け取ると、愕然として息をのんだ。

「それは、俺がキーラに昔あげたものです。間違いありません」

エイジャの言葉に、ロメオはちらつとエイジャを一瞥すると、すぐにペンダントに視線を戻した。

「……知っています。キーラはこれをいつも肌身離さず身につけていた。昔愛した男性にもらったものだ、出会った頃に聞かされたよ」

エイジャはロメオからペンダントを受け取るうと手を伸ばしたが、ロメオはそれを渡そうとしなかった。二人の間に緊張が走る。

「ちょっと見せて」

フェルダがひよいとロメオの手からペンダントを取り上げると、素早くそれを確かめた。

「鎖がちぎれてるわね。何かの拍子に切れたんじゃない。意思を持って、咄嗟に首から引きちぎったんだわ」

ペンダントの鎖は女性用に華奢な作りで、キーラでも思い切り力を込めて引つ張れば引きちぎる事はできそうだった。

「肌身離さず身につけていたペンダントを自ら引きちぎって、市場に残したのなら……これはキーラちゃんからのSOSだと考えるべきでしょうね」

フェルダの言葉を聞いて、ロメオの顔色は真っ青になった。

「フェルダさん、それって……」

エイジャが焦りの表情を浮かべる。

「人攫いに攫われたのかもしれないわ」

「……！」

フェルダの言葉が終わらないうちに、ロメオは踵を返して階段を駆け上がり始めた。

「すみませんがお引き取りを！私はキーラを追いますので」

「待ってください、ロメオさん！俺も探します！」

エイジャが背中を掛けるが、ロメオは足を止めない。

「そうよ、あなた一人で人攫い集団を相手にするのは無理があるわ。いくら凄腕の魔道具職人といってもね、クラウドイオさん」

ロメオが階段を駆け上がる足音が止んだ。

「……クラウディオさん……?」

エイジャの声がしんと静まり返った家に響く。

「あなたが警戒してきた人攫い集団が、アタシ達の追っている相手と同じならば、相手は相当の手練よ。あなたもよく分かっているんでしょう?」

キーラちゃんを本当に取り戻したいなら、諦めてアタシ達の力を借りて頂戴」

フェルダがロメオの背中に向かって静かに告げる。

「……さすがに、あんな物を持つてくる人に、まやかしは通じませんでしたか」

ロメオの自嘲するような声が、静まり返った玄関ホールに響いた。

「うまく隠してはあるけれど、この家全体のあちこちに仕掛けられた魔術の痕跡、嫌でも分かっちゃうのよ」

「普通の魔術師なら、この家の仕掛けなど分かりはしないのに」

「あいにくと、隠そうとするものには聡い。さあ、迷っている猶予はないでしょう?一刻を争うわ」

「ど、どういうこと?ロメオさんが、探してた魔道具職人のクラウディオなの?」

先程からの急展開に付いていけずに口をあんぐりと開いたままだったベルが、ようやく言葉を口にした。

ロメオは階段の途中で、ゆっくりと振り向いた。その顔には血の気がなく、表情には焦りの色がにじみ出ている。

「……あなたの言う通りです」

そう言うと階段を降りてきてエイジャ達の前に立ち、深々と頭を下げた。

「お願いします。お力を貸して下さい。キーラを、取り戻させてください」

エイジャ達が連れてこられたのは、階段を上った二階の奥に位置するロメオの自室だった。

一階にあった客間と同じ主の部屋だとは思えないほど、必要最低限のだけが置かれた簡素な部屋だ。

ロメオは壁際に置かれた本棚に近付くと、一冊の本を手に取り、右手をかざして何かを呟いた。

「えっ……なに、これ！」

ベルが目の中の光景に驚いて声を上げる。本棚が音もなく消えてなくなり、代わりに壁に扉が現れたのだ。

「さあ、どうぞ」

ロメオは扉を開け、足早に中へ入って行く。エイジャ達も慌ててその後が続いた。

隠し部屋は、昨日訪れた路地裏の怪しい魔道具職人の部屋にそっくりだった。

壁を埋め尽くすように背の高い棚が並び、書物や何かの道具が隙間なく陳列されている。昨日会った老人の部屋と違うのは、比較的整然とそれらが並べられている点だった。

ロメオは部屋の中央に置かれた大きな机の前に立った。エイジャ達の後ろから入ってきたメイド達が、てきぱきと机の上を片付け、ロメオに指示されたものを棚から取り出して並べる。

メイド達の動きは勝手知ったるもので、普段からこの部屋に出入りして魔道具職人としてのロメオの手伝いをしているようだった。膨大な量の書物や道具がきちんと整理されているのは、彼女達の働きなのかもしれない。

「旦那様、準備ができました」  
メイドの一人がロメオに声を掛ける。  
ロメオは机に置かれた透明なガラスの筒を手を取った。よく見ると、中には糸のように細い金属の棒が差し込まれていて、その棒に貫かれる形で方位磁針の針のようなものが浮いている。

「ラスロ・トレス」

ロメオが短く詠唱すると、ガラス筒の中の針は命を与えられたようにくるくると回った後、ある一点でぴたりと動きを止めた。

「……方角は北北西。ラグースを出てますが、シアルには入っていないようですね。おそらくここから100マール程だと思います。ここから……このあたり」

そう言つてロメオは机に広げた地図を指で指し示した。

手元を覗き込んだフェルダが頷く。

「あのあたりには岩場や洞窟も多いし、そのどこかをアジトにしているのかもしれないわね。今も移動してる？」

「分かりません……でも攫われたのが夜明けよりも前だとすると、そのまま移動を続けていけば、もっと遠く離れているはず。あなたの言う通り、この辺りに留まっている可能性は高い」

フェルダはエイジャの方を振り向いた。

「エイジャ、あなたはすぐにルチアを呼びに行つて。アタシ達はこの地点に先に向かつてるわ」

「あ……はい！」

「ロメオさん、遠話の魔道具は持つてる？」

フェルダに尋ねられ、ロメオは慌てて頷いた。

「ええ、あります」

「良かった。じゃあエイジャはこれを持って行つて。ルチアと合流したら呼んでちょうだい。居場所を知らせるわ」

フェルダはいつも手首にはめているブレスレットを外し、エイジャに手渡そうとした。

普段フェルダが王都との連絡に使っているもので、遠く離れた場所にいる人間と会話ができる魔道具だ。

「あ、それなら私の物を持って行って下さい」

ロメオが口をはさみ、メイドに指示して持って来させたのは、フェルダのものによく似たブレスレットだった。

「少し細工して機能を強化してあります。その分、魔力が高くなければうまく使いこなせませんが、私よりもあなたの方が魔力が高いですから」

エイジャは頷いて、ブレスレットを受け取った。

「……ありがとうございます、じゃ、後で！」

「あ、お待ちください！」

部屋を飛び出そうとしたエイジャを、メイドの一人が呼び止めた。

「宿へ行かれるのなら、屋敷の裏手から出られた方が近道です。ご案内します」

メイドに案内されて階段を駆け下り、屋敷の奥へと進む。調理室の中を抜けると、小さな扉が現れた。

先を走っていたメイドが扉を開く。

「ありがとうございます！じゃあ」

「あ！あの……！」

メイドの脇をすり抜けたエイジャは、後ろから掛けられた声に振り向いた。

「お願いします、どうか奥様を連れ戻してくださいませ……！奥様がいらつしやらなければ、旦那様は……」

今にも泣き出しそうになっているメイドを安心させるように力強く頷くと、エイジャは宿へ向かって走り出した。

(47) 俺の事、嫌いになった？

腕をだらりと床のほうに下げてベッドに突っ伏していたルチアは、もう何度目になるのか分からない大きなため息を吐いた。

机の上に積まれた書類にはまったく手を付けていない。フェルダに急ぎの仕事があると言ったのは一応、嘘ではない。早く片付けて王都に送ってしまったわけにはいけない案件が山程ある。

しかし、激しい自己嫌悪と絶望感に頭の中を支配され、書類に目を通しても内容が入ってこない。

昨夜の事は、夢だと思いたかった。

それも、極上の酒に溺れるような、残酷で甘美な悪夢。思い出す度、苦しいほどに胸が疼く。

キーラがエイジャを訪ねて来たのには気付いていた。

こんな夜更けに男の部屋を訪ねてくるなんてどういう事だと気が気ではなかったが、その後しばらくして二人して宿を出て行くのを見て、この半刻ほどの時間では(……)おそらくルチアの心配するよ  
うな事はきつとなかっただろうと胸を撫で下ろした。

エイジャはきつとキーラをあゝの屋敷に送っていったのだろう。まったく、甘やかし過ぎだ。

気付かなかつたふりをしてやろうかとも考えたが、何があつたのかどうしても気になり、宿の外まで出てエイジャの帰りを待つ事にした。

戻ってきたエイジャは、いつもどこか様子が違った。襟元を握り締め、何か落ち着かない様子でそわそわと目を泳がせている。

キーラと部屋で何をしていたのか尋ねると、一層挙動不審になった。嫌な予感に背中が冷たくなる。なかば強引に襟元を握り締めていた



手を解き、そこに赤い鬱血痕を見た時に、自分の中で何かが切れたような気がした。

その後の事は、あまりはつきりと覚えていない。激しい嫉妬と、飢えにも似た欲望に突き動かされ、我を忘れた事は認める。

ただ、これだけは言いたい。

あのエイジャを前にして、ギリギリでこらえた自分をどうか褒めてほしい。極限の精神力だ。

思わず肌に触れると、白い首筋が闇の中でも分かるほどに紅く染まった。涙をこぼさないように必死に我慢している様子だったが、遂にたえきれずぼろぼろと零れ落ちた涙の粒が、ルチアのスイッチを押した。

力では負ける事はない。有無を言わず奪ってしまう事もできただろう。魔術で攻撃されれば話は別だが、詠唱させないように口を塞いでしまえば良い。

瀬戸際でそれを思いとどまる事ができたのは、これでエイジャを永遠に失う覚悟はできなかつたからだ。

どんなに辛く胸を焦がす日々が続いても、近くにいたい。いてほしい。

その事を思い出せたから、エイジャの手を離す事ができた。

しかし、エイジャはどう思っているだろう。……さすがに気付いただろうか。

男に想われるなど、嬉しいはずがない。もし疑いを持っているとしたら、何とかそれは誤解だと思わせなければ。

そう考える一方で、もう全てぶちまけてしまいたいという衝動が沸き上がってくるから始末におえない。

一体自分はどうなってしまったのか。課せられた使命を思えば、このような事は取るに足らないささいな事だ。それなのに、今はエイ

ジヤの事以外考えられなかった。

「ルチアッ！！開けてっ！！」

ドンドンドン！と勢い良く扉を叩く音と、聞き間違えるはずもない声を耳にして、ルチアはベッドから飛び起きた。

突然の事に頭の整理がつかないまま、切羽詰まった声とにかく扉を開ける。

声の様子から察した通り、余裕のない表情をしたエイジャがそこに立っていた。

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

「あ……」

しかしエイジャは、ルチアと目が合った途端、言葉を失って表情を一変させた。

急だったので心の準備ができていなかったルチアの方も、このエイジャの様子に戸惑って目を瞬かせる。

「何かあったのか？」

努めて普段通りに声を掛けると、エイジャは黙ったまま首を縦に振った。

「あの、あの……キーラが」

「キーラ？」

声が一段低くなってしまったのに気付き、ルチアは咳払いをしてそれを元に戻す。

「キーラがどうした？」

「人攫いに攫われたみたいなんだ。昨夜……その、俺が屋敷に送って行った後に」

「本当か」

「うん……それで……フェルダさんとベルは、ロメオさんと一緒にもう後を追って……フェルダさんが、俺はルチアを呼びに行つて

一緒に来てくれって……

あの……来てくれる？」

扉を叩いてきた時の勢いはまったくなくなり、しょんぼりと俯いている。

ようやく頭が回り始めた。

「分かった、行こう」

短い返答を返すと、エイジャはパツと顔を上げた。

「なんて顔してるんだ」

「だって……昨夜俺、ルチアをすごく怒らせちゃったのに……ごめん……結局、ルチアの力を借りないと、助け出せない……」

また泣きそうになっている。

ああ……そうか。

こういうやつだったな、エイジャは。

昨夜の自分の理不尽な態度に、エイジャもきつと怒っているだろうと思っていた。本来なら、エイジャが夜半にかつての恋人と何をしようが、誰にそれを咎められるいわれもないのだ。

それなのに、やはりエイジャは。俺が怒った理由も分からないままに、それも自分が悪いのだと思い込んでいる。

ルチアはエイジャの頭に手を置いた。ぼんぼんと柔らかく髪を撫で、自分にできる一番優しい声で話しかける。

「俺も悪かった。お前があの子に振り回されている様子だったから、つかつとまった。すまなかったな」

潤んだ瞳で見つめてくるのは、正直やめてほしい。いや、かわいいのだが、今の精神状態にはきつい。

「うっん……俺、ほんとにダメだ……。こんな、失敗ばかりで……ルチア、俺の事、嫌いになった……？」

これは我慢の限度を越えた。

頭の上に置いていた手を肩の後ろへ回し、腕の中へ引き寄せた。

「……嫌いになれたら楽なんだがな……」

一瞬だけ抱き締めて、すぐに解放する。

「えっ！？なに！？ルチア」

心の中でつぶやいたつもりが、声に出していたらしい。エイジャには聞き取れなかったようで助かった。

「すぐ出発だ。馬がいるな」

「う、うん！あつ、ちよつと待つて。フェルダさんに連絡する」

エイジャは手首のブレスレットにもう片方の手を添えて詠唱した。いつもフェルダが使っている魔道具によく似ている。

「あ……フェルダさん？」

「エイジャ？ルチアは一緒？」

ブレスレットからフェルダの声がした。

「はい。今、宿にいます。これから向かいます」

「了解。北北西へ向かってちょうだい」

エイジャとフェルダのやりとりを背中中で聞きながら、ルチアは出発の準備を進めていた。フェルダが遠話の魔道具を二つ持っているとは知らなかったが、秘密主義の奴の事だ。いまさら驚きもしない。事の経緯はフェルダ達との合流地点に向かう道で聞けば良いかと考えていたが、

「ところで、ルチアと仲直りはできた？」

ブレスレットから聞こえたフェルダの発言に、ギシリと体を強ばらせた。

「えっ！？あ、あの……」

エイジャも戸惑い、返事をためらっている。

ルチアはため息とともに近付いて、エイジャの腕を取った。

……昨夜、どうしても離す事のできなかった、細い手首。

一瞬、月光の下で見たエイジャの表情がフラッシュバックしそうになり、ブンと頭を振る。

掴んだ手を口元へ引き上げ、ブレスレットに顔を寄せた。

「余計な心配をするな、フェルダ。俺がこいつを疎む事は、絶対にない」

「はいはい、じゃ、待ってるから」

呆れたような声が聞こえて、通信が途切れた。

手首を離し、エイジャの顔を見ると、口をあけたまま目を瞬かせている。

「……さっきの答えになってるか？」

「さっきの……って……あ、」

「??ルチア、俺の事、嫌いになった……??」

「お前がこの先どんな失敗をしようが、過去にどんな過ちをおかしていようが、俺の気持ちは変わらないってことだ」

「……う」

う、ってなんだ、うって。と突っ込もうとしたが、みるみるうちに赤く染まったエイジャの頬を見て、ルチアまで喉を詰まらせてしまった。

真意は伝わっていない、それでいい。頼りになる親友だと思ってくれれば。

「さあ、いくぞ」

背中を叩くと、エイジャはやっと表情を綻ばせた。

「うん！」

(47) 俺の事、嫌いになった？ (後書き)

ぎりぎり滑り込みで9月中に二回更新できました〜!!

よろしければ感想、ランキングクリックもお願いします  
いつも励みにさせて頂いております。ありがとうございます!

(48) 隠し事のできない相手

ラグースの北西に広がるのは、自然が作り出した奇怪な形状の巨石が点在する岩石砂漠である。

「この針は、キーラに持たせている屋敷の門の鍵の場所を示しているんです。絶対に手放さないで、いつも身につけているように言っているんですが……私の言い付けを守ってくれていれば、ですけど」ガラスの筒の中に浮かぶ針がその岩石の一つを指しているのを確認し、ロメオが当惑の表情を浮かべた。

離れた場所に身を隠しながら遠巻きに様子を見ると、岩の前には男が一人立っているのが見えたが、キーラらしき女性の姿などない。

「……あの岩は、入り口なのかも。地下にアジトがあるんじゃないかな。前にちよつと身を置いてた盗賊が、同じようなアジトを使っていたの」

ベルの言葉にロメオがぎょつとしてたじろいだが、「昔の話よ、ね？」とフェルダがフォローを入れる。ベルは頷いて言葉を続けた。

「攫ってきた人達を買い手に売り渡すのって、取引の日が前もって決められてる事が多いの。月に一、二度って事もあるし、日時と場所をきつちり指定されると思う。だから攫ってきた後、買い手に売り渡すまでの場所を確保しておくのが結構大変なの」

売り買いされる側にも、する側にもなつた事のあるベルの言葉には説得力があった。

状況から、キーラを攫った集団はただの荒くれ者の集まりという類いのものではなく、職業として計画的に拉致、売買をしている組織と見て間違いなさそうだった。

ロメオは、キーラが捕われているであろう場所を凝視して歯噛みする。

フェルダのブレスレットにエイジャからの連絡が入ったのは、その

時だった。

「……というわけだから、アタシ達は彼等が来るまでここで待機ね」  
ブレスレットの通信を閉じたフェルダが、ロメオとベルを振り返る。  
「仲直りってなに？喧嘩してたっけ、あの二人」

横で話を聞いていたベルが尋ねると、フェルダはとぼけるように眉を上げた。

「ルチアが本調子じゃないと、アタシ達の命まで危なくなるでしょ」  
返事になってないんだけど！と唇を尖らせるベルを尻目に、フェルダはロメオに向き直った。

「今すぐにもキーラちゃんを助けに突っ込みたいだろうけど、ルチアが来るまでもう少し我慢してね。」

大丈夫、ああいう職業誘拐集団は売り物に傷をつけるような事はしないはずだから」  
ロメオが唇を噛む。

「……分かっています。今、俺達だけで乗り込んでも、どうにもならない事は。」

しかし、彼はそんなに腕が立つのですか？だって彼は」

「王族でしょう、って？」

フェルダが言葉を継ぐと、ロメオは頷いた。

「あの深紅の瞳を見間違えるはずはない。なぜ王族の人間がラグースにいるのか、まずそれをおかしいと思いましたがよ」

「王族っていつても、遠縁なのよ。ま、それでもこんな所にいるのはおかしいけど」

フェルダが肩をすくめる。

「剣の腕に関しては、信用していいと思うわよ。50人くらいまでの一味なら一人で始末しちゃう男だから」

さらっと吐いた一言に、ベルが「はあ！？」と素っ頓狂な声を上げた。



「何それ、嘘でしょ！？人間技じゃないわよ、それ」

「でしょ？だから色々自由が許されてるわけ」

手短かすぎる説明は、それが冗談でも何でもない事を示していた。

ベルはトープ村での馬車奪還の場面を思い返した。

あの時の事は「エイジャとの出会い」としてベル的には甘酸っぱい思い出に変わっており、他のごちゃごちゃはすでに記憶の彼方だったのだが、思い出してみると、ルチアの鮮やかに剣を振るう姿は、まるであらかじめ動きの決められた剣舞のようだった。

あつというまに一味の男達を始末してしまったのを見て、なんだあいつら弱かったんじゃない、と思っていたが……そうではなく、ルチアの方が強過ぎたという事か。たしかにあの時、ルチアはまったく息切れもしていない様子だった。

「わざわざキバライまで行って修行したからねー。かわいかったのよお、その頃は！」

フェルダが何かを思い出すように、頬に手を当てうつとりと遠くを見つめる。

「……分かりました。彼が来るのを待ちましょう」

ロメオはフェルダの様子に少し体を引かせながら、渋々頷いた。

エイジャとルチアがやってくるまで、忍耐の時間が続いた。

「……なぜ正体を隠していたか、聞いてもいいかしら？」

重苦しい空気を入れ替えるように、フェルダが口を開いた。

「だいたいの察しはついているんじゃないんですか、あなたなら」  
「そうねえ、昨日、ご自分で言うてらしたわよね。腕の良さが災いして、いつも追われていたって。そんな魔道具職人がアストニエルやキバライにいれば私の耳に入るはずだから、ラグースに来る前はシアルにいたんじゃない？」

フェルダの推測は凶星だったらしく、ロメオは視線を落として頷いた。

「……ええ、その通りです。」

クラウディオと名乗ったのは、ラグースに来てからです。裏通りで細々と魔道具職人を続けていました。追手に見つからないよう、看板も出さずに。シアルにいた頃に……随分とひどい目に会った事もあって。こそこそとまるで、鼠のように暮らしていました」

着古したローブを身に纏い、フードを深く被って、未来への展望も夢もなく、ただ息を殺すように生きる毎日。

普通の魔道具職人の手に負えない特殊な仕事を持ち込まれる事が多く、口止め料込みで大金が支払われるため、金は有り余っていたが、欲しいものなどなかった。

ある仕事の報酬として譲り受けた、廃墟のような屋敷の一室に寝泊まりし、ただいつか命が尽きるのを待つだけ。他人とほとんど口を聞かず、唯一ローブの外に見せる手も、魔道具の力で老人の手に見えるように幻視の術をかけていた。

腕は一流だが、陰気で偏屈な老人。そう周りに思わせた。

「それがなんで、今みたいになつたの？全然、別人じゃない」  
ベルが尋ねると、ロメオは口を閉ざした。

「……キーラちゃんの為、という事かしら」  
フェルダが頬杖をついたまま、ロメオの顔を伺うような眼差しを向けた。

「……本当に、隠し事のできない相手だ、あなたは」  
そう言って、ロメオは自嘲するような苦笑いをこぼした。

(48) 隠し事のできない相手(後書き)

ちよつと短めですが、一旦切りました。

次話からしばらくキーラとロメオの話になります。悪しからず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8027n/>

---

金の王 銀の姫

2011年10月10日01時26分発行